女子文壇

第五年　二月　第二號



本品は最も完全なる白毛赤毛染なり

又本品を以て赤毛を染る時は有に半ヶ年以上を保つと云ふ

奏効禮状日々多大なり

全國到る處の小間物化粧品店藥店に有り



本舗

東京市日本橋區通鹽町一番地

服部重右衛門商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇
第五年第貳號

【本欄】 (一―八)

目次

雪女



（大江原色版部）

◎自ら進んで盲目の法學士に嫁し日夜良人を慰藉せる貞女の鑑（一記者）

發行部數東洋第一の本誌大文字を見よ

婦人世界

二月一日發行　四卷二號　一冊拾五錢　郵稅一錢五厘　半年分郵稅共一圓五錢　一年分二圓五錢

◎舅を感服させたる新渡戶夫人の話（一記者）

◎私の見た千代田奧女中の生活眞相（村田一鶯）

◎十二人の子供を數育した苦心（松山棟庵）

◎弦齋夫人の料理談

◎姙婦が看護婦を選ぶ時の注意……（榊博士）

◎京都女學生の風俗……（小山生）

◎斯くの如き婦人は妻君檢定試驗に及第す……山脇房子

◎士族の娘が昔風の商家に嫁して驚いたこと……靜間千香子

◎夫婦の情愛には度合が肝要なり……村井弦齋

◎私の今日あるは母と妻と婢僕のお蔭なり……三輪田元道

◎雙生兒を產みて母の手一つで育てし實驗……與謝野晶子

◎婦人の毛髮を美しくする法……（博士岡村龍彥）

◎名流婦人十八歲當時回顧

◎新說歷史講談節婦の最期　刀水漁郎

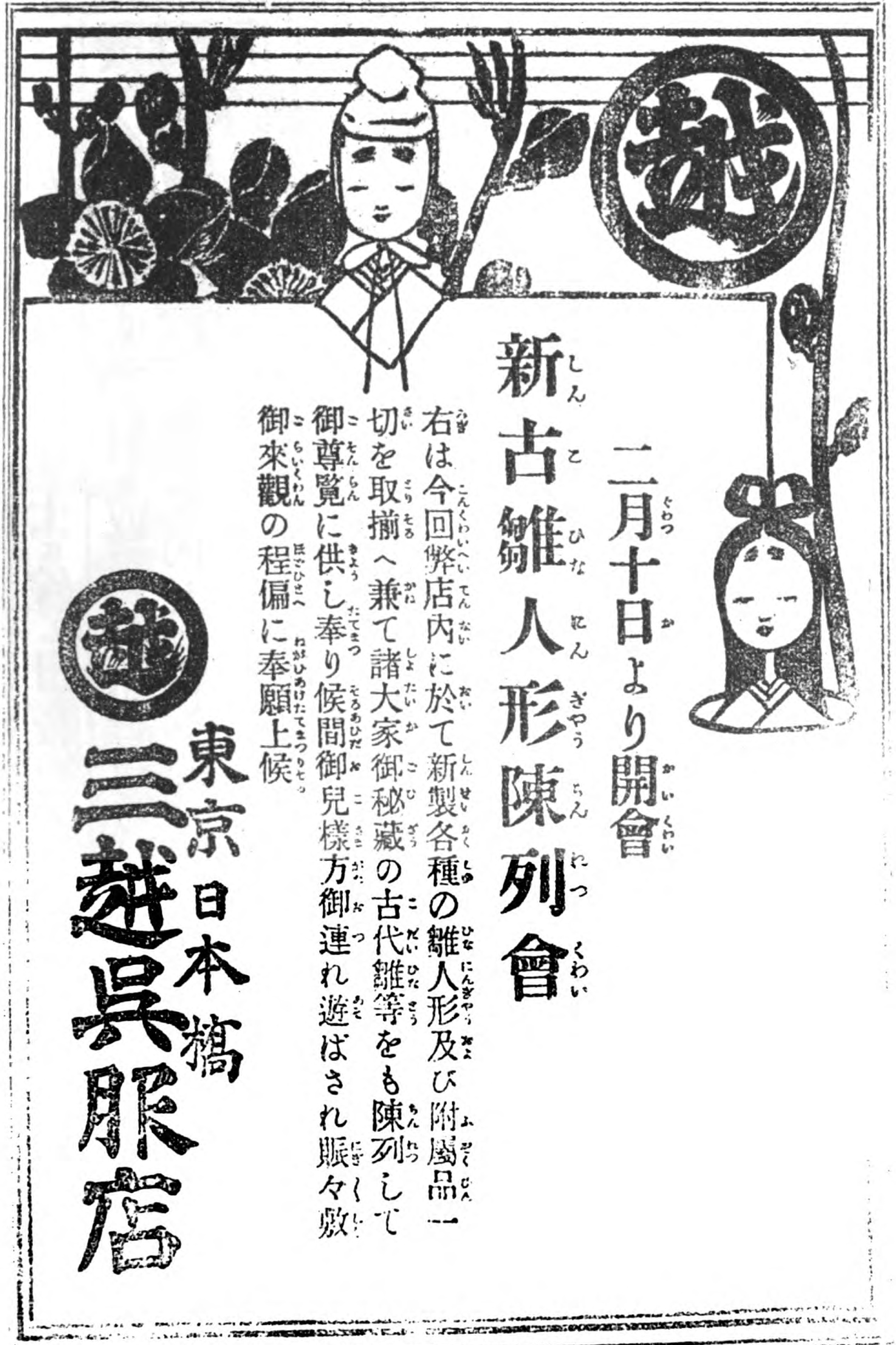
◎古今文藝談　渡邊白水

◎貴婦人新年會

◎懸賞　文藝◎笑話◎口繪◎習字◎寫眞その他

◎田舍から東京に出て來て墮落した婦人の小說的實例　東京出獄人保護所主幹　原胤昭

東京京橋南鍋町十二　實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番）賣捌全國書肆


二月十日より開會
新古雛人形陳列會
右は今回弊店内に於て新製各種の雛人形及び附屬品一切を取揃へ兼て諸大家御秘藏の古代雛等をも陳列して御尊覽に供し奉り候間御兒樣方御連れ遊ばされ賑々敷御來觀の程偏に奉願上候
東京日本橋
三越呉服店

現代の閨秀作家



與謝野晶子女史



大塚楠緒子女史



岡田八千代女史

文士の夫人



蒲原有明氏夫人



相馬御風氏夫人



水野葉舟氏夫人

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

學生座右の銘

東京高等師範學校長
孔子祭典會委員長
學習院教授東京
高等師範學校講師

文學士 嘉納治五郎君序
文學士 有馬祐政君編

孔子言行錄

時運の推移、社會の趨向は、篤學謹厚なる有馬文學士をして本書を成さしむ、文辭簡潔にして意味深長、與に大聖の音容に接するの想あり、附するに諸弟子及子思の言行錄を以てし、一々詳密なる註釋を施して立ろに領解せしむ、精神の修養に最上の資料たると共に、文字の習熟に最良の指針なり、此二方面に志ある人は必ず座右に供すべき無比の寶典なり、

全一冊

洋裝三六判總クロース
美本紙數四百八十頁
口繪孔子尊像子思顏子曾子像
正價金六拾五錢
小包料八錢

前文部次官 澤柳政太郎君序
學習院教授東京
高等師範學校講師 有馬祐政君編

孟子言行錄

曩きに孔子言行錄を著はし經籍研究上に精神修養上に偉大なる鴻益を學生間に與へたる有馬文學士は是れと同一なる主趣に依り孟子を直譯し且つ解註を加へ題して孟子言行錄として之を公にせり惟ふに孟子は文辭秀逸議論快利誠に千古の大文字なり近時の銷沈せる士氣を作興し冗煩なる文詞を矯正せんには本書の甚だ必要なるを知らん

全一冊

洋裝三六判總クロース
美本紙數六百九十四頁
口繪聖室に安置せる孟子肖像
正價金九拾錢
小包料八錢

販賣所 東京 博文館 振替貯金口座第二百四十番

鶯籠



三隅禎三郎筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

産科婦人科專門 醫學士北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◉著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◉病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

婦人病の總論◉子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◉神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◉しらちながちの病理及其根治法◉月經時の手當月經諸病の療法◉姙娠の原理、受胎すべき場合、姙婦の攝生、つわりの發生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千五六百一）笹岡省三

ちぢれもくせも もはへうけあい 二大奇法

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れで皆様の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

女髮師 東京麹町區飯田町四ノ十六 安部歌子

洋畫講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫等苟も洋畫に關する一切の洋畫に關する事を詳細に詳述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月額六錢、詳細規則無料進呈

執筆 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 畫伯 外大家十數名

繪畫講習録

新學期開始 東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月額卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆 川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 [illegible]先生 畫伯 外大家十數名

◉色白くなる秘法◉

いか程色黒き御方にても色白くなる奇法を郵券二錢封入申込の方に御知らせ申上升

東京小石川柳町 森義郎



勅題「雪中松」預選歌人



粂田元子嬢



江崎牧子夫人

（巻末記事參照）



（米國シャートル市婦人ホームの母、ミス、ファイフと其會員の最近撮影）

在米の日本婦人

ケーバ石鹼値上謹告

本品は全世界を通じて化粧品界の大立物と稱せられ今や各國如何なる片田舍と雖も愛用者を見るに至れり然る處今回本國より突然値上の電報來るに接し再三交渉の結果止を得ず



愈よ四十二年一月元旦より

壹個に付
大形　五錢
小形　參錢
の値上仕候

（理由）生活程度の進みたる爲め本國職工賃錢非常に上りたり

東洋代理店

東京市日本橋橘町二丁目

竹間商店

わが寫眞帖

（久留米）艸梅子

（神奈川）柚木とよ子



（北海道）山本たか子

（筑前）西すゑ子

（佐賀）小西愛子

木の實と餌



（東川艶子寄）



（群馬縣愛讀者寄）

會津落城（活人畫）



（神戸靜嬌女寄附）

をさな顔





第五年第貳號

明治四十二年二月一日發行

頃は二月の初なりき。杏花は盛に開きたり。柑子の木日を逐ひて黄ばめり。謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鵞絨の幟を建て、喇叭を吹きて、祭の前觸する男も、ことしは我がためにかく晴々しくいでたちしかと疑はる。ことしまでは我々の祭のまことの樂しさを知らざりき。穉かりし程は、母上我に怪我させじとて、とある街の角に停みて祭の盛を見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、「ペラッツオ、デル、ドリヤ」の廐作りの平屋根より笑ひ戯るゝ群を見ることを許されしのみ、すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず。矧や「カピトリウム」に登り、「トラステエエル」(河東の地なり、テエエル河の東岸に當れる羅馬の一部を謂ふ)に渡らんこと思ひも掛けざりき。かゝれば我がことしの祭に身を委れて、兒どもの樣なる物狂ほしき振舞せしも、無理ならぬ事ならん。唯だ怪しきは此祭我生涯の境遇を一變するに至りしとなり。されどこれも我がむかし蒔きて、久しく忘れ居たりし種の、今緑なる蔓草となりて、わが命の木に纒へるなるべし。森鷗外氏『即興詩人』より

草うるはしき岸の上に、いとうるはしき君が面
われは横へ、その髪を二つにわけてひろぐれば、
うら若草のはつ花も、はな白みてや黄金なす
みぐしの間のこゝかしこ、面映げにも覗くらむ
去年とやいはむ、今年とや年の境もみえわかぬ
けふのこの日や「春」の足、半たゆたひ、小李の
葉もなき花の白妙は雪間がくれに迷はしく
「春」住む庭の四阿屋に風の通路ひらけたり

上田敏氏

「春の貢」より



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第二　少女時代に爲さねばならぬ事

手近な一人前の人

前回に於て、人には學問の好きな人、手仕事の上手な人、其他樣々の性質もあり、富貴の家に生れた人、貧しい家の娘など種々の境遇もあり、又人によつて、それ／＼志望を異にしてゐるものでありますけれど、どの樣な性質、どの樣な望、どのやうな境遇の人であつても、まづ第一に最も手近な意味の一人前の人にならなければならないといふ譯をお話しいたしました。そうして又その手近な一人前の人といふのは、どのやうな人かと云ふとに就て、他人の補助を受けずして、最も手輕にさうして器用に、獨りて生活することの出

來る人をいふのであると申しました。

人格の土臺となること

手近な意味の一人前の——人即ち他人の補助を受ずして、最も手輕にさうして器用に獨りて生活することの出來る——といふことは、總ての人の人格の土臺となるべきもので、この事が出來てゐなかつたなら、よしその人はどのやうに富貴な身の上でありましても、始終他人の手足まとひとなつて、一生卑屈な暮し不自由な目を見ねばなりません。例ば人の妻となり母となつて家を治め、子供を育てゝゐる婦人は、夫たる男子によつて、生活するのは當　然でありますけれど、其婦人にして若しも、マサカの場合には夫の力を借らずして、自分獨りても立つて行くとの出來る人てありませんてしたならば、夫たる男子は常に妻子を顧慮することのために、いつもおもひ切つたとが出來ぬやうになります、このやうに夫の手足まとひになるやうては夫のために、氣の毒であるとはいふまでもなく、自分自身も、又そのために自ら卑屈になつて仕舞ひます女中を幾人使ふとが出來ても、自身の身のまわりのことよりして人にして貰はなければならないやうては、何事もおもふ存分には行かず、何彼につけて人知れぬ不自由を感ぜねばなりません、況んや普通の家の婦人にして、他人の力をからなければ毎日のとが充分に出來ぬやうては、自分のためにも家のためにも、非常なる不幸て御座います。すべての人がまづ手近な一人前の人にならなければならないといふのは、ザットこのやうな理由で御座いました。これよりは追々どういふ樣に勉强したならばまづその手近な一人前になれるてあらうかといふことに就て記したいとおもひます。

まづ單純なる家事を習ふべし

手近な一人前になることは、このやうに總ての人の修養の土臺となることてあります。是非ともそうしなければならないことてありますけれど、然も土臺はどこまでも土臺です。土臺だけては家になりません。

必ずその人の性質、境遇、志望などによつて、その土臺の上に種々の建築――修養――をしなければなりませぬゆゑ、出來るだけこの土臺を早く据えて仕舞はねばなりません。

さうして私は種々の點より考へ合せて、滿十五才即ち高等小學校を卒業する時分、女學校に通つてゐる娘なら其二年級を終へる頃には、御飯を炊くこと、その家々で出來る一通りの惣菜を拵へると、掃除、洗濯、張物、つぎもの、足袋靴下などのつくろひ、大人子供の單衣、袷、綿入、羽織等普通の衣類の裁縫が樂に出來てゐなければならないとおもひます。即ち滿十五才位の時には、已に手近な一人前の資格をつくりあげてゐるやうでなければ、後には段々と六ケ敷い稽古や、しなければならぬ仕事が控えて居ります故、とかく手まわり兼ねるやうになると思ひます。必要な修養に手がまわらなければ、生涯未熟者で終るより外はないとになります。

或る人には十五六位でどうしてそれだけのとが出來るだらうと、一概に思ふかもしれません。併しよくよく考へても見、又實際にあたつて見ても、洗濯、掃除の仕方や、惣菜こしらへ、普通の衣服の裁縫などは、決して他の學問やなんどのやうに六ケ敷いものではありません。昔の人のこれらのことを六ケ敷いものゝやうに云ひもし考へもしたのは、多分何事も仕來りと習慣で行つてゆく單純な世に生れて、頭を使はねばならぬことは殆んどなく、女一生の役目は、多く日々の惣菜こしらへや、衣服を縫ふこと位に限られてゐた爲めに、これ程のこともさも〳〵大事業のやうに思つたのではあるまいかと思ひます、さうして今の人（時に識者といはるゝ人々なども）までもその考をうけ繼いで、このやうな家庭の雜務は非常に六ケ敷きものであるかのやうに、若き皆樣などの耳にも入れてあるのではないかと思ひます。今日の婦人は母となつても妻となつても、又生涯獨身で暮すにしても、なか〳〵多くの責任を背負はねばなりません。さうしてその責任を果たすためには、種々の修養のいる世の中で御座いま

す惣菜こしらへや、針仕事位をさう〳〵むつかしい修養だと思ふやうては、とてもものにはなれません。單純なこれらのことは、十一、二から、十五六までの間に必ず出來るやうにしたいと共に、またどんな人々ても心懸と仕樣一つて、乾度その年頃までに出來得らるゝ筈て御座います。

まめやかに働く習慣を養なへ

多年小學校の教育に從事してゐる老練な教師は、高等小學校の三年級までの女生徒は、掃除番でも、御料理の稽古でも大層よろこんていたしますが、四年生となると、その好むことがだん〳〵感情に訴へて考へることなどの方に傾いて、器械的に働くことや、單純な稽古には興味をもたぬやうてあり、殊に補習科となると、その傾向が一層著しくなるといはれたとが御座います。長い間學校生活をしたものが、家庭に入つて主婦となりますと、考はありながら、幼い時から働きつけた人のやうに、家の中のことが巧く行かぬといふのは、決して學問より家の中の雜務が六ケ敷いからてはなく、人といふものは頭を使ふやうになればなる程、單純な仕事は面倒にうるさくなつて來るからて御座います。殊にまめやかに、身躰を動かしてはたらくことは、幼い時からその習慣をつけた人てなければ實に〳〵出來にくい事て御座います。人を使ふことの出來ない身分の人はいふまでもなく、いかに多くの人を使ひうる身分の人でも、まめに身躰の動く人は、一生の間どんなに仕合せであるかしれません。之に反して苦もなく身躰に働く習慣のつく所の年少時代に、その習慣を養ふことをしなかつた人には、中年になつてから、俄にまめにならうとしても、なか〳〵身躰の方がいふことをきいてくれず、そのためにあれこれと身邊の事務が堆積するので、始終不愉快に暮らさねばならぬとになります。

惣菜こしらへだの、洗濯だの、一通の裁縫だのといふ單純な仕事を覺えることゝ、まめに働らくくせをつけることは、是非とも少女時代になさねばならぬことてあると思ひます。

群

島崎藤村

花火が上る。

川開の夜の光景を見やうとして、群集は潮のごとくに押寄せて來て居る。兩國橋の畔は言ふに及ばず、廣小路、柳橋、濱町河岸へかけて、空地といふ空地は拍手の音や狂喜するやうな。叫聲で滿されて居る。日頃町の左右に眼を配つて、用事、買物、もしくは納涼の爲に、いそ〳〵と出歩く。人達ですら、もう羞恥も無く、外聞も忘れ、たゞ〳〵連に離れまいとして、逆上せるやうな息づかひをした。おまけに、蒸暑い夏の夜の空氣は人々の心を醉ふばかりにさせた。殆んど平素の習俗はこゝに來て忘れられたかのやうにも見へる。皆な奈何かした。男や女は互に手を引合つて歩いた。

私が二人の姪を連れて兩國橋近くへ行つたのは、九時過てあつた。其日は親類一同揃つて晝間のうちに寫眞を撮つたし、夕飯には表を開けひろげて、涼しい風の來る古簾の影で、一緒に冷麥を取寄せて食つた。河岸の種菓子屋からは使があつて、家の者はかはる〳〵見に出掛けた。信州出の子守女なぞは時々眼を圓くして歸つて來て、「まあ、東京といふところは、男と女が手を引いて歩いてる、」斯う言つて息をはずませて居た本所の大將はまた大將て、家の表の涼臺に腰を掛けて扇子をパチ〳〵言はせ乍ら、「世が世なら、傳馬の一艘も買切つて押出すのにナア、」と深い嘆聲を發して居た。

私共は、肩と肩と摩れ合ふばかりの群集の中を通り拔けて、花火のよく見える處へ出た。丁度そこは電信柱の側で、片隅には多勢動かない人が居る、一方には押しつ押されつする人達が暗い波のやうに入り亂れて居る。手を引合つた男　女は、幾組も、幾組も、私共の立つて觀て居る前を通り過ぎた。

「叔父さん、御覽なさいよ。」

と年長の姪は笑ひ乍ら、無遠慮な夫婦を指して見せた

親子と言つても可さそうな人達は相携へて歩いて行つた。

「あら、復た來てよ――ハイカラねえ。」

と言つて、年長の姪は襟を掻合せた。年少の姪は未だ田舍から出て來たばかりて、都會の風俗を蔑視むやうな眼付をして、何となく見るに堪えないといふ樣子をした。

ポン〱花火が上る。十年前には見られなかつた薄紫の煙が夏の夜の空に映る。混雜した群集の中て、私の心は遠く少年の昔へ往つた。亡くなつた叔母が一緒に斯の花火を見に來た時、私の手を握つて放さなかつたことは、長い間の疑問として殘つて居た。それは私が少年の時のことてあつた。其晩――丁度私が叔母の年頃に成つて――はじめて私は彼の時の叔母の心地を想像することが出來た。

（をはり）

無題二篇

相馬御風

○

屋根と屋根の間から、
碧玻璃のやうな冬の空が見える。
淡白い夕日に照らされた
隣の家の壁板に
蟬の脫殼が一つ殘つて居る。
屈めた足の先て
僅に板に縋りついて居る。
屋根からはポトリ、ポトリと
水の滴りが落ちる。

○

秋のポカポカする日向に、
木犀の花の甘い香を嗅ぐと、
ウツトリと夢心地になつて、
その蜜のやうな夢の底の底から、
さびしい遣瀨ない淚が眼に滲む。
いつまでも〱
その淚の味を忘れたくない

作家としての女子

夏目漱石

男女の性は自然に分賦せられて居るものではあるけれ共教育は男女の別に拘はらず同一の知識を與へる、更らに其れが職業に用ひらるゝ時は男子と異るところ無く生活を營むで行くのである。其結果此點に於いて男女のテンペラメント――性質と云はうか――が次第に同化せらるゝ傾きになつて居る樣であります。例へば彼の琴の稽古にしても、男の盲人などが習つた事も令孃が敎へられた處も變り無く同樣の音曲節奏となつて現はれる。畫は如何かと云ふと是れも矢張りさうで或は川端玉章氏に花鳥を學ぶ跡見女史に何を習ふ左樣すると其れが畫ける、敢て男女にかゝはつた事は無い尤も題材などの取り方が違ふかも知れないが、先づ女子でも男子丈けのものは畫ける。又近頃よく婦人の醫師があるがあれは如何でせう、いづれ產科婦人科とか專門の便宜はあらうけれ共、別段女らしい診察と云ふものは無い、感冒には感冒丈けの手當をするに極まつた事でありませう。

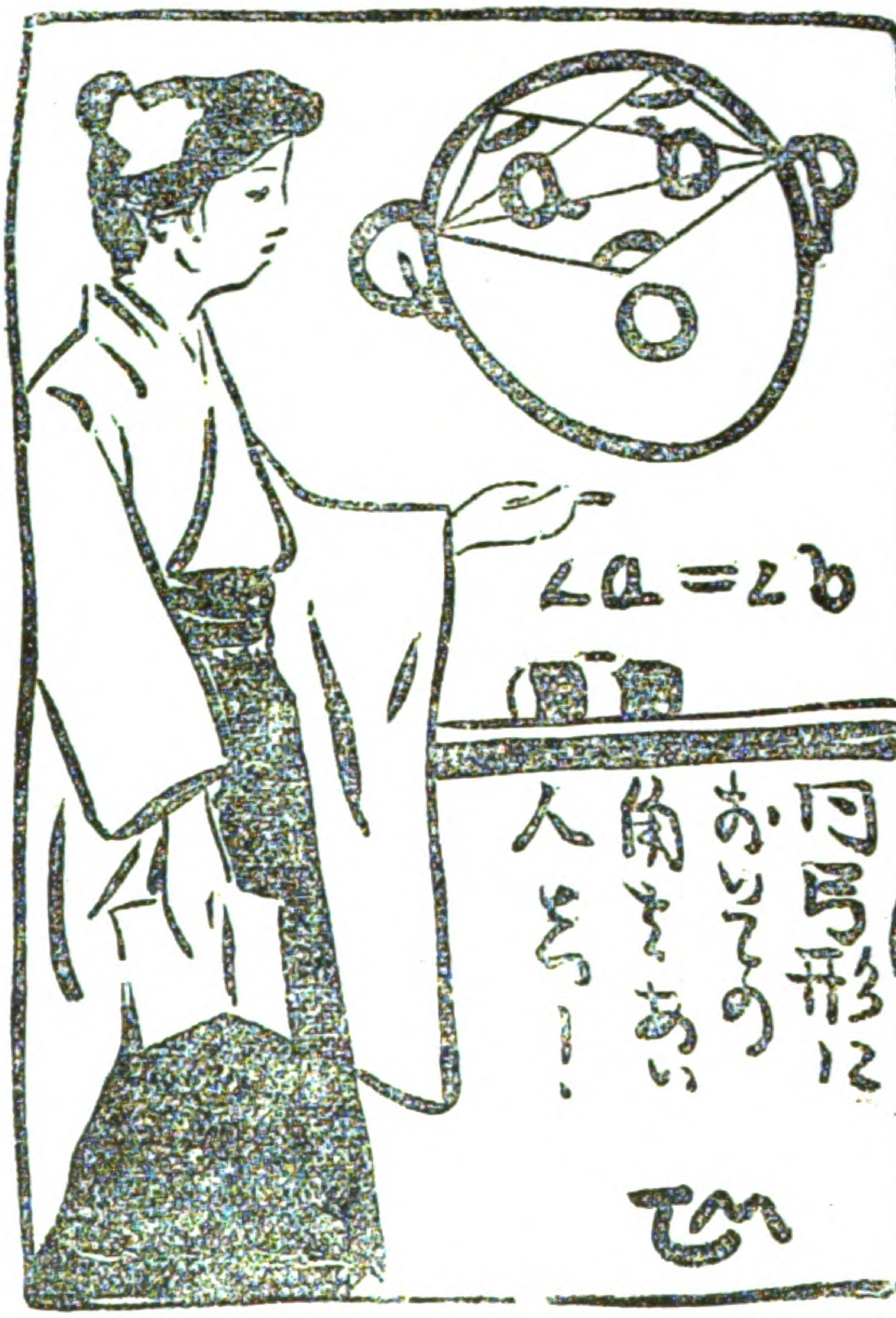
扨て婦人にして小說を職業若くは道樂として居る人があるがあれはどうかとなると、是れは多少前述のものと異つて居るが、併し亦女だから男子と同樣のものを書くべきもので無いとは云ひ得られないのは勿論である、女であつても其得意とする衣裳や髮容の細かい注意以外に或は男子の心理狀態の解剖を爲し得べき能力あるは猶ほ男子にして婦人の心理解剖を爲すに等しいものであらう。要は作品の問題で畢竟佳い作物さへ出來ればそれで宜いのである、外國ではエリオット女史の如き隨分男子以上の處まで突き進んで居る者もある。故に其作品から見て成程道かは女らしい筆致が見えて居るとか何とか云ひ得られやうけれ共、其れを逆に其女らしい處が無いから其小說は僞だとか何とか云ふ批評は加へ得られないのであります。

併かし又一方から作物と作者を分ちて什麽も恁う云

ふ甚しい事を書く様な女は、嫁にする事は困まると
か云ふのは又別て、作物の上には云ひ得られないが作
者の上には云つても差支は無い。

けれ共又他方から考ふれば作に湛んだ藝術上の我と然らざる平常の我とは別物てあつて作家は二人人格（ダブルパーソナリテー）てあるべき者だと云つた考へを持て居るかも知れない、是れも亦不當て無いと思ふのであります。

女子にして小説に筆を染むる者の出るのは勿論近代自意識に伴ふ競爭心から來たので多くは摸倣てありませう——尤も男子にだつて其れは免れないが



——要するにまだ／＼個性を發揮したものは無いのだらうと思はれる。（談話）

見た處の西洋婦人

附り世界各國の美人相

上田敏

私は唯僅かの時日を以て漫遊した丈けなので、西洋婦人に就いて深く知る丈けの交際も無かつたから、素より日本婦人との比較など云ふ事は出來ない、又比較と云ふのは今日の西洋婦人との事て、ジャンダルクと巴御前と孰れと云つた様な

のては無いのてせう。處が西洋今日の有樣にしても英米獨佛伊露各國皆異つて居る、又所謂貴婦人の階級、中等社會、一般の婦人と其れ〳〵境遇に依て相違する處もある、よし全じ境遇の婦人ても現代日本の動搖せる過渡期の其れと比較する事は不可能てある、又西洋に於ては階級に依て著しき相違があるから愈々問題が複雜になる。

一躰日本ては階級に依て婦人に影響を及ぼすと云ふ事は餘り甚しく無い樣て、爲めに知識趣味の程度等が其れ程にも懸隔して居ない、是れは畢竟成上りものが多いからて、先づ男子の方で成上つて後低い階級程度の者を娶つたと云ふ樣な關係が然らしめた點もあらうと思ふ。西洋ても身分の違ふ結婚――メザリヤンスと云ひますが――も隨分無い事もありませんが原則としては同階級の者を娶る事になつて居るので、學問の點なども上流丈けに知識が豐かに有る、日本ては成上りを敢て取て居るので身分の如何に關はらず家に資產を有するとか夫が官邊に身を寄せて居るとかすれば立派に交際社會にも出られるが西洋てはなか〳〵さうは行かない、如何に百萬の資產が有つても身分の低い人が世の中に出るまてには慈善事業の寄附をするとか何とか手段をめぐらした後て、如何に黃金萬能の世ても直ぐに役に立たない。此邊は日本婦人を論ずる者の注意點てありませう。

其れから又日本は男尊女卑て西洋は其の反對だとか能く聞く事ですが必ずしも爾う限つたものでもない。一躰今日の社會組織ては男子の方が經濟上優勢を占めて法律が保護して居るから男女同權と云ふ文字通りには行かない。唯歐洲特に獨逸民族――まア一班北歐民族かけてゞすが――が比較的女を尙ぶと云ふ丈けに過ぎないてせう、米國に於ては女が尊ばるゝ以上更らに權力を振ふと云ふのは種々の原因が有つて、或は最初殖民地て女を珍重した遺習だと云ふ說もありますが、元來獨立自尊を重んずる觀念が自然女子の地位を高めたのてあらうと思ふ。之に反しラテン民族は女が男よりもズッと低い地位を持て居る樣です、即ち佛、伊の

女は英米よりも一般日本に近い樣です、孰れが宜いかそれは分らない。が、婦人を尙ぶ事は世界の大勢となつて居るので、婦人をして單に薪水の勞を採らしむる丈けては敎育ある者の德性が滿足出來なくなつたので是れは問題て無く事實となつて居るのであります。

併し能く西洋婦人が如何だから學ばざるべからずと云つた樣な說もあるが、それは啻に此事に限らず何事にも爾か云ひ得るのてす、けれ共社會の組織――社會上の地位、經濟上の地位――を替へずして西洋婦人の或る點丈けを學ばしむると云ふ事は不可能てある、是れらは婦人問題を論ずる者の注意すべき點てありませう。例の賢母良妻てすが、それは至極結構で誰れしも愚妻惡母を望む者は無いが其意義を發揮するにしても社會の方から婦人の地位を高める事にしなければ駄目だらうと思ふ。

一躰婦人と云ふものは天人の樣なものとも云はれ惡魔の樣なものだとも云はれて居る、これは單に新聞等が戯談に云ふのては無くて、宗敎家、詩人等が云ふのてす、此善く云ふのと惡く云ふのと雙方何れも道理がある、私は婦人天人說に傾いて居るが惡魔說も亦道理がある樣に思ふ、其の何れは知らないが兎に角婦人は美くしいものだと思ふ。それは天成美くしい形を備へて居て、顏立が美しくなければ姿が佳いとか或は音聲が爽だとか擧動が優しいとか、猶ほ其れが無くとも心の美と云ふものが有る、畢竟肉躰にしろ精神にしろ美しかるべきものなんて、然らざるものは第三性に屬するものと云ふべきてある。私は此の美かるべきものと云ふ眼て以て西洋婦人に對したから自から美人が目に着きましたが、初め米國に行つて見ると隨分美人が居ました、其心的狀態は複雜だから言はない事にして、單に形式から云ひますが、米國ては新らしい美人のタイプが出來たと云て誇つて居る位てす、いかにも見る處綺麗て又氣が利いて居るが、併し何となくせゝこましき處があつて鷹揚な風を缺き、感服は出來るが心服するに至らない。英國には非常な美人は居るが其數が少なく一般に美人が無かつた、併したま〳〵貴

族か何かには實に氣品の高さ、言はゞ獵犬の麗しい樣な――さう云つた處があります。佛國の美人は顏形輪郭の美は無いが其樣子が實に佳い、其れには服裝化粧等が充分助けて居るので、又話しをして見るに宜く、萬事上は交際社會の貴婦人から下は町娘や賣子の類に至るまで意氣なところ――佛語でシックと言ふ――が有つてどうしたつて他國の眞似る事が出來ない、殊に巴里の下層社會の娘などには瀟洒としたものが多い。獨逸の美人は愛くるしく福々しい處はあるが、骨組みが岩疊な樣て、英佛等に比して何となく田舍張りなところがあつて人の眼を惹かない。伊太利も皆美人と云ふのては無い、しかし羅馬のチブル川の居酒屋の檐なぞにヌツと娘が立つて居ると丁度昔の彫刻でも見る如く、肌は淺黑く服裝は汚くとも何となく高貴の品を見出すのてある。其他神經質のロシヤ婦人熱烈の眼を持て居るスペイン婦人等、其國へは行かなかつたけれ共時々見受けたが又其れ〲に一種の特色を有して居る樣てす。

西洋は女の行動が自由て權力が強い樣てすが、結婚前の娘の時分には子供として扱はれて居る。日本て夕方海老茶袴が出廻つて居るが、那麼事は佛國邊ては無い事になつて居る、學校へ行くにも毎朝家の者が送つて行く、歸りには又迎へに行く位て、決して自由に委して居ない、其れから見ると日本の若い女が下宿して夜でもボカ〱出廻るなぞは驚くべき事てす、尤も日本でも昔しは那麼事無かつたのだが近頃恁うなつたのて、日本と云ふ國は遲れた樣な進んだ樣な妙なところに思はれました、其れと前云つた資産或は夫の位置あらば直ぐ交際社會へても出られると云ふ事、是れも進んだと云はうか兎に角自由な國であると思ひました。

（談話）

新しき意味の寫生文

高濱虛子

單に面白き事柄を寫すと云ふ丈けの事は幾らか過ぎ

去つたと思ふ。或る面白き事柄があるから其れを其儘に寫すと云ふ遣口では物足らなくなつて來た。
其處で唯目で見た事柄を其儘寫すのでは無くて如何なる目で或る事柄を見るかと云ふ事が重もな問題となつて來た。だから以前は可成面白い事柄を擇り出すと云ふ傾向であつたが、今後は平凡な事柄でも構はない、何等か或る特別な頭で物を見る、其結果を描き出すと云ふ事が問題になつた。
特別と云つた處で何も特に奇を好んだと云ふ見樣が宜いと云ふのでは無くて、透徹した頭腦で平凡なる事柄の裡にも或る深い意味を見出す樣な態度を要求するのである。如何なる出來事でも如何なる光景でも一寸見た丈けでは不透明であつて只事柄が雜然と其處に並んで居るに過ぎない、併し乍ら作者に頭腦さへあれば甲の事件と乙の事件との間に或る關係を見出し丙の人物と丁の人物との間の或る關係を見出し、初め一見して唯雜然として並べられたに過ぎなかつたものが其處に或る明らかな關係即ち意味を見出す樣になつて來る。



同じ事柄同じ人間の間に種々雜多の關係種々雜多の意味を見出す事が出來る、秀でたる頭腦の人程超凡の意味を讀み、透徹なる頭腦の人程明瞭なる

意味を讀む事が出來る。即ち今後寫生文を書くのには此秀でたる頭腦、透き徹つた頭腦を是非必要とする。之を例へて見れば初め世の中の事を只見た時に不透明な硝子の樣な感じがして居るのを磨き上げて透明にするのは作者の頭である、眼鏡の中心が取れないで形を成さないのを中心を作つて明らかに物を認る樣にするのも頭の働きである。更に卑近な例を取て云へば、此處にあなたと私とがお話しをして居ると云ふ此簡單平凡な裡にも見樣に依れば深大の意味がある。此處に蜜柑がある。卷煙草がある火鉢がある。人が三人座つてゐる、是れは只事物を排列した丈けて殆んど其處に何の關係も意味も無いけれ共透徹な頭で見た塲合には此中にも關係があり意味がある、是れを見出して書き表はすのが今後大に努むべきところであらうと思ふ。

此秀拔の見、透徹の識を以て大事件を描き大結搆を爲すのは更に後日の問題であつて目下の處は寧ろ平々凡々の裡に深い明らかな意味を見出す事が必要であらうと思ふ。（談話）

米國婦人の結婚前

博文館副支配人　山田靜三

歐米漫遊と云つても僅か六ケ月ばかりで忙しく廻つた丈の事ですから、只見て驚いたと云ふに過ぎないので、觀察とか何とか爾う云ふ餘裕は無かつた次第であります、殊に婦人に就いて特別に注意した事も無く、お話しする事もありません、が、各國を經めぐつて今更に西洋婦人の幸福を知つた次第であります。先づ街頭の勸業塲に陳列されて居るもの丶七分は女子に供給する物品で充されて居る。私の見る處では瑞典丁抹等の本邦に似た處あるを外にして、其他は英獨わけても米國に至ては女子を大切にすると云ふよりも女子を畏れて腫物にでも觸る樣に扱つて居る、例へば男子がストーブの傍に寄て話してもして居る、其處へ女子が入て來ると匆卒居住まひを正すやら隅の方へ立つやら大狼狽をやる、其處を女子は傲然として搆へ込んで

通る、食堂でも女が來ると御遠慮申上げると云ふ風に見える、是れは多分祖先が殖民當時婦人を寶物の樣に扱かつた風習が遺つて居るのだらうと云ふ事であります、悉く女を大切にする處から家庭に於ても女子教育は、深く注意を拂つて、十八歳の定齡までは親の責任として普通教育を受けさせる、それでグラムマースクールと云ふつまり尋常小學程度は男女同じ位であるが、其れ以上のハイスクール高等小學程度中學程度になると專門教育を除いては男子の數頗る減じ女學生が最も大部分を占めて居る、と云ふのは男子は獨立自由にやるが女子は親が是非とも其れ丈けの責任を盡くすところからであります。

斯く教育が普及さるゝに從つて女子の常識は頗る發達し、女子の職業の用途も亦多方面に亘つて要求さるゝのであります。私の見たところではタイプライター扱ひだのデパートメントストアの賣子なぞは悉皆女子を採用して居る、其他官廳會社商店の事務員、それからホテルにも支配人其他上層にありて責任を有つ者の外は事務員に女子を使用して居る、又ウオルサム時計會社の工場の職工も女子が多く隨分高い給料を取つて居るのがある、又個々の家に於いて或は乳母子供付なぞと云ふ職業、又ハウスキーパーと云つて家庭の財務整理を引受くる者なぞもある、皆修めた知識を應用してかゝるので家庭の子供付の如きも其知識專門の看護婦以上のが幾らもある、從て權力の強き事兩親と雖も干涉を許さない。

それから是れは或は我々外國人の眼にさう見えたのかも知れないが西洋では日本の樣な下婢や下女の型は無く、職工なり女中なりが一寸上着丈け取替え帽を正して晝食或は用達に行くところの風采は毫も普通のレディと變つたところは無い、男子に對する口の聽き樣なんかにも顏一つ赧めるでは無し、賣子が客に對する應待でも友人と話す樣にやつて居る。實際意志の強い確つかりした處があつて、旅行者にも婦人の一人旅など隨分多い、其れもテキサス地方などに三晝夜つゞきの旅にても恐れもなく億劫がりもせぬ樣子で書物な

を見て居る、讀書は前云つた工女なんかも電車に乘つて居る間にも必ず何か書物を出して目を曝らして居る。

男女の交際は無論自由なんてせうが、是れも意志の鞏固な、わけても利害の觀念の發達して居るのは驚くべきてす、結婚前それ〴〵職業に就いて居る者でも一週一度會ふ樣になつて居る、それても五年ても八年ても約婚を續け、永遠の爲めと云ふ事に重きを置いて一時の痴情より馬鹿氣た間違ひを起すなぞ云ふ事は無いさうてあります。

それは生活上の影響からてせうか、女子にして相當財産を作らない限りは結婚しない、米國て聞いた話てすが、女の持出すべきものと男の備ふべきものとチヤンと極まつてるさうで敷物や窓掛や寢床や勝手道具等は双方て備へるが、多く洗濯するもの即ち食卓用の白い麻切れとか、ナプキン、窓掛けの日覆ひ、シーツてんなものは女が持出すので隨分入用ださうてす。

結婚後は夫婦間密接て子供には冷淡てす、又教育の必要上にも依りませうが取扱が嚴格で晩は八時に必ず就眠せしめ自分達は寄席劇塲に行く、子供を連れて歩るくのは貧乏人だとしてある、恁う云ふ風だから子供は爾う多くあるべきもので無いと心得て居るらしく三人以上も子があると驚く樣です、其れは餘り多く出來ると愛の競爭者が出來ると云ふ感じがするのかも知れません。

風俗の相違は種々あり、一利一害は伴ひませうが、女子教育の盛んな事、延いて常識の豐富、意志の堅固な點なぞは學ぶべき處かと思ひます。（談話）

附記　山田氏は濵文部主大橋新太郎氏に隨行歐米漫遊を了え諸鹽原朝せられたり。

今月の本誌應募畫

選者

集まりし數も多かられば、優れしもやゝ優れしも乏しふして迷頭あまたゝびの後卒ふじて得たる數も少し。中にて北川うめ子君の技量抜群の力ありてとり〳〵に面白し。後へに佐野貞子の君の堅固あるに松尾ら子君の苛功を奏したる、賞を一人の手に擅にせざりしは幸なり。近頃畫容徒に大にして、內容之に伴はざる應募者の一惡風とも見るべきか。賞外にては立花とも子君の秋の野抔は興あるべし。加藤つたへ君の力餘りに趣たらざるは惜しむべし、寫生に怠り給ふにあらじか、願はくば心してよ、哭。

新派和歌の趣味

窪田空穂

如何にすれば短歌は上手に作れるやうに成るだらう。

此れは極めて古い問題ですが、依然として新しい問題として殘つて居ます。そして、苟くも短歌を愛好する者は、其答を得ようとして居ます。

此問題には、古くから答が與へられて居る。其れは、多く讀む事と多く作る事、此二つです。

我々は如何に思ひ惱んでも、我々の持つてゐる顔よりも、より美しく寫つた寫眞を持つ事は出來ない、美しい寫眞を欲しいと思ふならば、其れに先だつて、我々の顔から美しくするといふ必要があります。短歌は我々の心を寫したものです。我々は、優れた短歌を得ようと思ふならば、先づ顧みて、我々の心を優れた物としなくてはならない、其れより外には法は無いのです。



多く讀み多く作るといふ事は、如何にして優れた歌を得るかといふ問題に就て、最も適當な答へです。此答は、昔も當つて居た通り今も當つて居ます。誰も此れより以上の答をする事は出來ません。

併し、如何なる心懸て多く讀むか、如何なる心懸て多く作るかと

いふ、其實行の方面になると、其人々て、やり方が大分に異つて居ます。僅かの勞力で多くの結果を收める者もありますし、多くの勞力を拂つて、手を空くして歸つて來るといふ者もあります。それて、注意すべき所、爭ふべき所は此實行の方面にあるのです。

さて、多く讀むといふ事ですが、此れに就て、我々が第一に注意すべき事は、我々は優れた作を讀まなくては成らない事です。第二に注意すべき事は、夫れを良く翫味しなくては成らない事です。

優れた作の我々に及ぼす感化は大きい。優れた作と言はれる位の物は、第一の傑作として、多勢の人の胸へ、強く響く所があります、我々はさういふ作を讀むと、自分にも持つて居る情緒であつて、そして自分ては氣附かずに居たのが、其作によつて呼び覺されたやうに覺えます。即ち、眠つて居る自分といふものが眠を覺させられるのです。そして其作の與へてくれた感銘を種にして、更に自分の情緒の中に深く別け入る事が出來ます。斯ういふ順序て我々の情緒の深くされるのは、誰しも經驗して居る所でせう。優れた作の第二の條件として、我々は自分の情緒の未だ觸れた事の無い境を、はつきりと見せられます。他の人の情緒ではあるが、自分も共々其れを味つて居るやうな不思議な思をします。此れが、我々の情緒を如何に廣くするかは、誰しも經驗して居る所でせう。

此れから此所に評釋しようと思ふのは、上に言つたやうな意味の作です。我々の情緒を深くし、廣くするといふ上で、利益になると思ふ作を撰んで、評釋しようと思ひます。

特にお斷りして置くのは、斯うはいふものゝ、其れは私自がさういふ經驗を持つた作といふので、私は其れを便りにして評釋するのです。そして、評釋とは言ふものゝ、私が讀んだ時の感じを、順序なく言ふに過ぎません。つまり皆さんと一緒に歌を讀んで行つて、胸に當つた作を題にして、其時の思ひつきを述べると言ふのです。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

第一に、此雜誌の撰者である所の、與謝野晶子女史の、最近の作を讀みませう。此れは、「明星」の終刊號として出た號の中に載つて居るもの丶中の一部です。

○

逆しまに山より水の溢れこし驚きを
してわれはいだかる

女の心を歌つたものです。相契つて居る男女の間が、妙に疎々しくなつて居る。一時は、耽れて、盲のやうにも愛してくれた男が、此頃は妙に疎々しくなつて、女が一緒に居るとも思はない有様になつて居る。女は思ひ諦めて、すなほに、男の振舞ふがまゝに任せて居た。其れは、何事を、一日男は俄に打つて變つて丁度相逢つた初めの時のやうな樣子をして、女をかき抱いた、女は、餘りの事に驚き惑つて、不思議な事もあればあるものと思ひながらも、男の爲るがまゝに任せて居た。――と斯ういふ心だらうと思ひます。複雜した事柄を、何一つ言はずに、髣髴として全躰を感じさせる。瞬間の――驚きつゝも掻き抱かれたといふ瞬間の心だけを寫して、其全躰を髣髴させて居ます。此所が非凡な所です。若し普通の人が、かういふ境を寫さうと思つたならば、どんな歌を作るでせう恐く、歌にする事が出來まいと思はれます。其れを、輕やかに、餘裕を持つて言つて、しかも、言はうとする思は、殘らず言つてあるといふ感じを起させます。實に老手で、心憎いまてゝ、寧ろ不思議と言つても可い位でせう。

「逆しまに山より水の溢れこし」といふ、驚きを譬喩した言葉――何でもないやうに言つてあつて、併も適切な動かし難い所を味つて御覧なさい。水は海でこそ溢れる事もあるが山から溢れるといふ法は無い、無い事です。それを取つてある爲めに、今までとは打つて變つたといふ所が、言はずともそつくら感じられる。それに譬喩も、奇を好まず、落ちついた熟したものです其れが又好いのです。一轉して、「われはいだかる」と突込んで言つて、同時に、女のすなほな姿を、見るや

うに思はせる所、自然に見えて、しかも巧を極めて居ます。移り工合の何とも言はれぬ面白みを味つて見るべきです。

○

戀ふてふはものを奪ふにひとしきと
かねて思へる君にとられぬ

此れも女の歌で、男と相逢つて後、其戀の顚末を批評的に見て歌つたものです。

男は常々、戀といふものは、物を奪ふに等しい事だと思つて居る。——戀とは果して然ういふものであらうか、愛する者に、我を與へるといふ事では無くて、自分の方へ彼を與へさせる、強ひても與へさせる、即ち、物を奪つて來るといふやうな物てあらうか。自分には然うは思はれ無い。此戀に對する解釋が、たまたま彼方の人と爲りを、よく語つて居るのては無からうか。さう思つて疎みつゝ、自分は其男に取られてしまつた。其男の心に背く事が出來ず、其男の物となつてしまつた。——と斯ういふ意味が、言外に籠つて居るやうに思はれます。

此歌を讀むと、其二人の生涯までも窺はれるやうな氣がします。男を寫すに、其男の戀に對する解釋。——其人の內部の生活を、最も力強く語る所の物を捉へて來て居るといふのは、何等の巧てせう。一句て其人の面目が思はれます。そして其人に取られた、——さう思ひつゝ、否む事が出來ず、思ふがまゝになつてしまつたといふ女の面目も、「とられぬ」といふ一句の中に、遺憾なく語られて居ます。小說として初めて語り得る程の事、小說にして初めて感じる事の出來ると思ふほどの二人の運命、それが、此短い歌の中に窺はれるのです。驚くべき作です。

○

おどけたる一寸法師舞ひいでよ秋の
夕のてのひらの上

前の二首を小說的とも言ふならば、此れは又掛け離れた、俳諧の味を持つた作です。目新しく感じます。秋の夕、ひつそりとして物音も無い。閑寂が、何等

までも／＼續いて居るやうな氣がする。對手にする者も無くて、一人ぽつねんと坐つて居る。寂しさに似た思――寂しいとまでは突きつめない思が、ゆるやかに胸に滿ちて居る。さういふ時です、ふと、今この掌の上へ、ひよいとおどけた一寸法師が現れて來て、踊を踊つて見せたならば……と斯う思つたのです。

　さういふ心持の面白さは、銘々に味つて見るべきもので、語る事は出來ない。皆さんが靜に思ひ味つて見るべきです。『秋の夕のてのひらの上』――如何に簡潔な、そして感じの現れる句でせう。かういふ句は、得て氣が利き過ぎて、却つて厭味になりやすいものですが、さういふ憾みは少しもありません。自然に言つてあります。



○

ほこりてふ險をたのみし城ぬしの泣きたまふ日をつくりにしかな。

　此れは、其れ程感じの鋭い作ではありませんが、女史でなくては歌へない境を歌つて居ると思はせます。『ほこりてふ險をたのみし城ぬし』は、戀せざる日の處女です。まだ『物のあはれ』を知らない日の心です。處女と育つて、誰か處女のほこりの無い者がありませう。誇を持つてそれを第一の我身のたのみとして居るのです。丁度、

險阻によつて城を構へた城主の、其險阻をたのみとして居るのにも似て居ます。所が、其險阻も、必ず壞れる日が來る、其れは戀する日です。戀しては、處女の日の誇は跡もなく消えて、何の力もない者となつて、戀の前にくづをれるより外は無いのです。——如何なる處女も、一度は踏むべき大道です。

說明になりやすい材ですが、譬喩が巧に用つてあるので、さういふ感じを起させない、其所が優れて居る所です。さういふ日となつたと言はず『日をつくりにしかな』と言つてある所に、言外の意味もあれば、力もある、其邊が注意して味ふべき所でせう。

○

妹に人のさゝやく聲などを聽きつゝ
　宵は板敷に寢る

此れは男の心を歌つたもので、繪のやうな作です。

一つ家、——間の距物なども薄い家に、兄と妹と寢て居る。何れもまだ若い。宵の間の程です。妹の所へ若い男とも思はれる者が忍んで來て、ひそ〱と忍音に何か囁き合つて居る。兄の方は其れと知りながら、寢た振りをして、板敷の上に丸寢をして居る。そして自分も、やがて忍んで行かうと思ふ所を、思ひやつて居るといふのです。

さらりと、厭味なく言つてある所、『板敷』といふだけて、其家の樣子を髣髴させて居る所、巧なものだと思はせます。そして、『宵は』と言つて居る其『は』が、如何によく響いて居るでせう。其一字の爲めに、兄の心持がそつくらと出て居ます。即ち、宵の間だけは、さうして丸寢して居るが、やがて何所へか行かうと思つて居るといふ事も、明かに感じさせます。若し『宵は』の代りに『宵も』としたならば、趣の大半が消えてしまひませう。文字の働も盡して居ると思ひます。

○

踏む土に置き合せたる戀人とはなは
　だかろくわれ思はなくに

素朴な言葉、素朴な言ひ樣をしてあるのが眼に着きます。

戀人を得た時、誰しも第一に思ふのは、其遭逢の怪しさてす。昨日まて、互に知らず知られずに居た、其れが今日は、我身にもまさる最惜しい物になつて居る──其變化の怪しさを思つては、唯此地の上てひよつくりと逢つて知つたといふばかりては無い、豫めさうなるべき宿縁とても言ふべきものがあつて、當然の順序によつて斯うなつたのだと思ふ、此れは自ら起つて來る情てせう。

此歌も其れを言つて居るのてすが、立ち入つて不思議がつた事は言はない、自分よがりの厭味ぽい感激も言はない、唯さらりと、大まかに、胸に起つた第一の感情だけを言つて居る。其所が却つて面白いのてす。『踏む土に置き合せたる』──何といふ無造作に聞える言葉てせう。『はなはだかろくわれ思はなくに』──如何にも自然な言ひ樣てす。言葉の餘つた所に、如何にも安らかさがあります。一見投げ出したやうに見えて、其實一字もゆるがせにしてない、其所に讀み味ふに餘りある所があります。

○

撥に似しもの胸に來てかきたたきか
　きみだすこそくるしかりけれ

意味は言ふ程の事も無い、何物が胸に來て胸を亂すといふのてす。

さう言つてしまへば何ても無い、說明的になつて、感じも誘はない。其れも此作は、何所までも其の感じを出さうとし、且つ出して居る、其所に價値があります。

試みに、讀み味いて御覧なさい。其調子が、如何に事柄が傳へて居るてせう。調子が合つて居る。『かきたたきかきみだす』と繰返して居るのが、如何にも生きて居る、か行の音の自ら顫盪し來つて居るのも、其れを助けて居る。──實際、調子だけて感情が現れて居ます。生きた調子といふのは斯ういふので、散文ては言ひ得られない境だと思ひます。

これらを歌ひて

（ホイトマンの散文詩）

岩野泡鳴

これらを、僕、春歌ひて愛するものらの爲めに
　蒐集する。
（蓋し僕をのぞいて愛するものらとすべてそ
　の哀樂とを理解すべきものは誰れだ？
僕をのぞいて同輩等の詩人たるべきものは
　誰れだ？
蒐集して僕は庭園、乃ち、世界を遊歷するが、
　やがて諸門を過ぎ、
池のほとりに添ひ、またわづかにかち渡り、
　濕氣を恐れず、
また鐵柵に從つてだが、そこには野から取て
　來た古い石が棄られて積み重つてゐる、
（野生の花と蔦と雜草とが石の間から出
て來て石を半ば蔽ふてゐる、これらを僕
　は通り過ぎる。）
遙か、遙か森の中に、また夏後れてぶらつき、
　自分がどこに行くのか考へないうちに、
孤獨て、地のにほひを嗅ぎ、時々默然と立ち
　どまり、
獨りて僕は考へてゐたのだ、然しやがて一むれ
　が、僕を取り捲く、
僕のかたはらや後ろを歩むものもあれば、
　僕の腕または頸を抱くものもある、
渠等、死友生友の靈、渠等大きい一むれが
　集つて來るして僕はその眞中て、
蒐集し、分配し、唱歌し、僕は渠等と共にさまよ
ひ、何物かをしるしの爲めに摘み、僕のそば
　にあるものに投げる、
ここに百合を、松の枝と共に
ここに、僕のポケトから、或苔を、それは僕が
　フロリダの樫の生き木からその垂れ下つて

ゐたのを　もぎつた　物だ、
ここに　或石竹と　桂の葉を、また　一握りの紫蘇を、
また　ここに　僕が　池の　ほとりを　渡つて水から
今　抜き取つた
ものを、
『ああ、ここで　僕は
最後に　見たのだ
僕を　優しく愛し
再び歸つて　來て
またと　僕から
別れない　ものを
して　これが、ああ、
これが　この先き
同輩等の　しるし
て　あらう、この
キヤラモスの根がだ、
それを　青年等よ　互ひに交換せよ、誰れにも　それ
を　返却さすな！



また　楓の　小枝と　一團の密柑　並に栗　とをまた
枝なる　いちごと　杏の花とを、またにほひ杉を
これらを　僕は　雲なす　靈の　群れに　めぐらし、
さまよひながら、過ぎ
る　に　從つて
之にゆびさし、之
に觸れ、之を　ゆ
るく投げ、
ひとり／＼に　その
持つべきものを示
めして、それぞれ
何物かを與へるが
僕が　池の　ほとりの
水から　抜き取つ
たものそれは　僕
が　取り除けて
置き、
僕が　渡したいのは　ただ僕自身が　愛することが
出來る　通りの愛がある　ものらばかりに　だ

花言葉

(Language of Flowers.)

葉舟

昔から、ペルシャだとか、印度だとか、トルコだとかの國々では、斯う言ふ習慣がある。花が物を言ふのです。この國の人達は自分の思つてる事を、人に傳へるのに、文字で書いた手紙を送らずに、或る意味のある、花を集めて、人に送る。すると、受取つた人はそれを見て、送つた人の心を讀むのです。即ちこの國では、花に種々な意味が附いてるのです。その意味で可成自由に自分の意志が人に傳へられました。

例へば、こゝに密柑の蕾を人に送ると、「希望」と言ふ心が表はされて居る。受け取つた人達はそれを、その身に引き當てその人樣々に、その意味を解釋する。黄い花のあかしやを送ると、それは「極く秘密な戀」と言ふ心持を表はす。金盞花は絶望、向日葵は不變、恒心、ばらは美麗、美人、……と斯う言ふ風に、夫々、花には意味がある。

そして、それで持つて、巧みに自分の意志を人に傳へられる。友情も、戀も、怒りも、輕蔑も……、それは丁度言語と同じ樣に、その花一つて、双方の人々が喜愛し、同情し、怒り、なげく。

て、今、イギリス語やフランス語に、花言葉と呼ばれて傳はつて居るのは、このペルシャや、印度などで昔から用ゐられて來たものなのです。それは例の有名な十字軍の時に從軍した人達や、又は基督の生地に順禮に行つた人達が、その旅中に見聞して、持つて歸つたものに、後から、バイブルの中の古實だとか、その外の傳説などを、種々と加へて、斯ふ言ふものが出來上つたらしい。從つて、それには西洋の人の頭には傳説的に特別の印象を持つて居る樣な意味もある。花を見て、直ぐ鋭敏に心が動き、それから直ちに出來た意味では無いのが多い。

先づ、その樣な理屈は後に廻はして、それでペルシャの貴婦人達は、この事に非常な趣味を持つて居ると言ふ事である。種々な花を集めて來て、花束を作つては喜びだとか怒りだとか、戀だとか友情だとか、自分達の樣々な心持を表はす。例へば斯うである。ペルシャではチユリツプは大抵赤色の花が咲くのだが、その

花瓣の底の處がまだ黑色を帶びて居る間は、（花の開き切らない中には黑色を帶びて居る。）熱心な戀の心を表はすとされて居るので、その花を戀人から送られたとすると、其時には斯う言ふ心が表はれて居る。

「この花の樣に、私の顏はほてつて、私の心は燃えて居ます。」と、――と、まあこんな事で、互に自分の意志を表はす事が盛んに行はれて居る。

次に印度に來ると、この國では、この樣な事のオーソリチーと言つてもよい位で、この遊びが「詩歌の搖籃」として尊敬されて居る。種々の花や果實を取りまとめて、其心に思つて居る事を表はす術に至つては、アムボイナ（印度モリニーカス群島中の島）の娘達は天才を持つて居ると言つてもいゝ位です。しかし、この國の花言葉には今、イギリスなど傳つて居る、トルコ其他の諸國のものとは、多少の相違があるさうだ。

さて、次には某婦人の話に、トルコではこれを利用して、筆を取らずに、有ゆる感情を發表すると言ふ事です。更らに進んでは、トルコの婦人達は、祝事、宴席の喜びや、招待するのに手紙を書かずに、又花も用ゐずに、美しく刺繡した手巾を花の樣な形に卷いて其に夫々と花の香のする香水をふりかけて、手紙の代用をさせる、と言ふ事です。

この樣に、この花言葉は微妙な心を表はすものとして用ゐられて居ます。て、私は我々の同胞の婦人達の中にも、この遊びが起る事を希望して、こゝにイギリスで行はれて居る、花言葉を飜譯し樣と企てました。だが、この花言葉だけでは花の數も少ないし、日本では中々手に入りさうにも無いものも多い。それで私はその中から、あまり特殊のものを除き、その上に、その中には入つて居ない、日本の花も加へて見ました。

一躰この花の意味は一には、傳說に依つて出來たもの、即ち、夫々の國で古から傳つて居る種々な話、又は宗敎の敎典の中にある話、宗敎のシムボルに用ゐられたものなどに基づいて出來たものと、一つには、純粹に、その花から受けたイムプレションに基づいたものとの二つが根底になつて居る樣だ。私の新しく加へたのもこゝに基づいて、私が考へたものである。

尙ほこれについて、諸方の人々からの御注意を戴き度いものである。それによつて、一層深く考へ、廣く思ふ事が出來れば仕合であると思ふ。



花言葉

水野葉舟編

あ

あーべせだりー　能辯

あかしや（針えんじゆ）　友情

あかしやーばら色、又は白ー　優美。高雅。

あかしやー黄ー　隠し切つて居る戀。

あべーちな　輕薄。變り易い心。

あけりや　節制

あちれや、みれふほりや　戰爭（干戈を動かしての戰爭のみならず、心と心との戰ひにも用ふ。）

あぐなすかすたす　冷淡。無頓着。

ありーさむー香のあるー　美しさを通り越した艶さ。

あまりりす　誇り。怯懦。かゞやく美人

あねもね（白頭翁）　病氣。期待。一心に待つて居ました。

あねもね（園に作れるもの）　捨てられた。

あんくれつく　王權

あぽさいなむ　瞞着

紫羅襴花　愛情の束縛

にほひ紫羅襴花　不幸中の眞實

あらむ　熱心

薊　苛酷。澁酸

薊ー白ー　魔酒の香ひ

薊ー深紅ー　荒れだ心。人嫌ひする。憎人。

薊ースコットランドのー　復讐

敦盛草　氣の變り易い美人。私を說きおとして、私を導いて下さい、

蘆　やさしい。音樂

葉のさけたる蘆　粗忽

圓錐花のある蘆の束　音

花言葉

水野葉舟編

花の咲いて居る蘆　天國の秘密
茜根　讒誣
亞麻　家庭内の仕事。運命。御親切は有難く存じます。
亞麻 ―乾ける―　有利。
鳳梨　完全。
朝顔　切なる愛情。
あぢさゐ　氣の知れない。

い

命の樹（ツリー、オブ、ライフ）　老年。
イムペリヤル、モンタアク。　權力。
鳶尾　消息
鳶尾。―紫―　南國。
鳶尾。―獨乙の―　情火。焔。怒火。燃える。
糸柳（しだれ柳）　哀悼。
水松　悲嘆。
犬ばら（歐洲の野ばら）　樂と苦。
水蠟樹　少年少女。
無花果樹　論爭。
無花果　豐。
蕁麻（烈猛なる）　誹謗。
龍葵　眞實
魔法使の龍葵　妖術。魔もの。
市松模様の貝母　虐待、迫害
石道華　快活。家事をつとめる。
いちご　二枚の舌。
蛇いちご　他の戀。
銀杏　不思議。長壽。
磯草　[illegible]。

山桔梗

横瀬夜雨

寫眞

花を持てと云ふ、いやといふ。
十七八は嫁入り盛り
われ等に何の花が要らう。
たゞ撮せ。

針

つと、とれる絹針を
唇に擶つたれば、
横に筋ひいて
紅泌み出てぬ。
鏡はづかし——わが思ひ。

いてふかへし

お掃除に兄が七歳の筒袖破て
手拭をかぶつたら、
角かくし角とれたと
はと笑ふ父怡くや、
島田に結ふは好きなれど——わが髪。

月

君は十八。
秀づる眉の影添ひて
十八日となりぬれば、
月は欠けたり。三萬里
離れて空を行く星は
星ぢやない〱おれぢやもの、
いつ追ひ及う。

厄年

襦袢からまる腕は
夢をのする枕に——
とおもひては
衿に刺す針くせも
愼みて爲ずなりし——
われは十九の厄女。

美文の作方（一）

西村醉夢

一　文法と修辭學

私はこゝ暫らく續けて、毎號、美文の作り方を書くことに成りました。讀者諸姉の中には既に能文の方もあつて、今更こんな物をお讀みに成る必要のない方も有りましやうが、併し又參考になさる方々も、少くはありますまいから、極めて通俗に、極めて平易に説くとにします。

昔から文章の作り方だの、歌の詠み方だのその他色々の作法と云ふ物がありますが、これ等は重もに文法の上の問題で、修辭學の上の事ではありません。文法は文章を正しく書くことを敎へるものですが。修辭學は文章を美くしく書くことを敎へます。それ故、努ひ美文の作り方を學ばうと思ふ者は、修辭學に通じなければ成りません。

修辭學は一に美辭學とも云つて、英語の所謂レトリツクの事であります。バスコムと云ふ學者の説によると、措辭の方則を敎ふる技藝こそは、即はち修辭學であると云ひますが、私の考では技藝ではなくて、學問であります、即はち此の學問によつて、私共は何う云ふ風に詞藻を扱ふかと云ふことを研究するのであります、されば此の學問の目的は、云ふまでもなく、面白く、上手に文章を書くと云ふことで有ります。『姉君は吾を憎みて常に吾を打たれ給ひぬ』と云ふは、正しい、正しくないの爭で、即はち文法上の問題であるが、『月明らかに照り、星稀に、烏鵲南に飛ぶ』と云ふのは、美くしい、美くしくないの爭で、即はち修辭上の問題であります。若し前の文句を『吾を打ち給ひぬ』とすれば、正しい文章となり、後の文句を『月明らかに、星稀に』とすれば、美くしい文章となります。つまり、文法は正不正、誤不誤に係はり、修辭學は美不美、醜不醜に係はるものであります。

文法家は常に『文章を正しく書かねばならぬ』と耳へたての出來る程喧ましく云ひますが、修辭學者も決して之を否定しません。正しいと云ふことも亦、美くしい文章の一條件でありますが、兎もすると、文法を犧牲にして文章を美くせねばならぬ事があります、韻文とか美文とか、すべて廣い意味の『詩』では、殊の外爾う云ふ場合が多い。ウオーズオース、テニソン、その他一代の詩宗と云はれた英詩人の作には、隨分文法を沒したものがあります。早い話が日本の詩や美文にも幾何もその例がある、例せば島崎藤村さんの『正しく物に狂へりと、われを云ふらし世の人の』の如きは、嚴正な文法から云へば、主辭を賓辭の前に措かねばならぬから『世の人の何々とわれを云ふらし』と書くべきてある。然るに修辭學の方では、こんな修辭法を倒裝、又は倒置句などと名づけて、美くしい書き方の一つとしてゐます。

二　詩と美文

今更尤もらしく詩と美文乃至韻文との關係などを、事々しく說くの必要はありますまい。が、順序の上から極めて簡潔に述べることにしましやう。——一體、詩と美文、若しくは詩と韻文とを對照せしめるのは穩當てはありません。詩と云ふのは、英語のポエトリイと同義て、韻文と美文との總稱てあります。それ故、和歌ても、俳句ても、漢詩ても、新體詩ても、美文ても、小說ても、何ても美くしい形式を整へたものは、皆なこれを詩と云つて可い譯てす。

然らば詩の定義は何うてありましやう。私の考へる所によると、詩とは美思想を美形式で現はしたものだと思ひます。果して是が當れりとしたならば、詩には(一)美思想と(二)美形式の二つが要ると云ふことが明らかてあります。小學校の生徒の作文によくある『机は木にて造り讀み書きする時に用ふるものなり。』と云ふ文は、正しくはあるが、美くしくはない、こんなのは決して美思想とは申せません。これに反して『ぽとり〱机の上の落ち椿』と云へば、一寸としたことだ

が美思想と云へます。

又美形式と云ふのは、外形即はち文章の整つてゐることてあるが、美形式と云はれるのには、色々な條件があります、悉しいことは後で述べますが、茲に一例を引いて見ますならば、和歌の五七五七七や、俳句の五七五などは、詞の數を整へて思想を表現したものてあるから、それを美形式と云ふことが出來ます。然らば形式の美くしいものは、皆詩と云へるかと云ふに決して爾うてはない、同じ和歌の形式を持つてゐても『富士山の頭天頂から月が出て見渡す限り明るく成つた』とか『青い葉の白い根を持つ大根は煮いて食べれば旨しかりけり』



とか云ふ風に、内容が美思想てないものは、これを詩と云ふことが出來ません。

詩の中律格のあるものを韻文と云ひ、ないものを美文と云ひます。韻文は英語の所謂ヴァースの事て形式としては律格を具へてゐなければ成りません。韻文に反して律格のないものを散文と申しますがこれは即はち英語のプローズの事てあります。

散文の中、美思想を現はしたもの丈を、特に美文と云ふのてすから、美文は律格がないには相違ありませんが、併し詩たる以上は美くしい形式の要ることは勿論てす――分り易く申しますれば、美文は厳正な意味の律格てないまても、律格らしい形式を

具へなければ成りません。私は韻文の律格を完全律格と呼び、美文の律格を不完全律格と呼ぶことに決めました。

では、不完全律格とは何んなものかと問はれたら、一寸と返事に困りますが、一躰律格と申すものは、音の數、抑揚、反覆の三種から成り立つてゐまして、英詩、漢詩などでは、三つながら具へてゐますが、美文では、嚴正に是等を具へる必要がありません。三つながら之を具へて居れば調子の可いことは勿論ですが、其の中の二つ若しくば一つを、具へてゐる丈でも美くしく、又半分を具へてゐても尙ほ美くしく感ずるとがあります。『何となく調子の可い文章だ』と云ふのは、即はち不完全律格の一種であります。森鷗外さんの『水沫集』中の文章、田山花袋さんの紀行文の中などには、殊に調子の好い美文があります。あんなのを不完全律格と申します。

念の爲に申して置きますが、世の中で普通『美文』と呼びならしてゐるのは、一種の散文詩に限られてゐるやうですが、實は小說、俳文、紀行文、小品文、隨筆文、その他、何でも、美くしい思想を、不完全律格を具へた文章で書き現はしたものは、皆なこれを美文と云ふことが出來ます、無論用語などは、何でも構ひません、雅言を用ゐたもの丈が美文などゝ思つたら、それは大した間違であります。

文壇時言

服部嘉香

印象主義の說明

昨年の後半期には、印象主義の運動が頻りに紹介せられ、續いて我が創作界に於ても相當に優れた印象派的な作品を見るに至つた。主義としては既に充分に論議せられた事であるが、尙ほ本誌の讀者の爲めに、一應の說明をしてみやうと思ふ。

もと印象主義はフランスに於て繪畫界の革命から初まつて、小說詩歌批評の各方面に及して來た運動てある、日本に紹介せられた順序は、昨年六月『早稻田文學』に出た『獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義』(櫻井天壇氏)に於けるドイツの印象詩、同じく七月の同誌に出た『印象派の小說』(片上天弦氏)に於けるフランスの印象派小說、及び本年一月の同誌に表はれた『歐洲近代の繪畫を論ず』(島村抱月氏)に於ける主としてイギリス繪畫界の印象主義の硏究などてあつて、其の間に昨年十月『帝國文學』に出た『佛蘭西の印象派』(福永挽歌氏)と題する譯文もある。泰西に於ける印象主義の由來は詩歌小說繪畫の各方面に亘つて以上諸氏の硏究を以て十分理解する事が出來るが、更に之を寫實主義から自然主義、自然主義から印象主義と移つて來た文壇の大勢に就て考へてみると好く解る。

寫實主義は外形的に客觀の事象を有りの儘に寫すと云ふのが本來の性質て、客觀物の一線一劃をも誤らぬやうに、第一に明確眞實といふ事を目的とした。日本て云へば小杉天外氏の寫實小說の如きは、即ち人生の有りの儘の相を僞らずに寫生した此の主義の例てある併し寫實主義は其の根本の態度からして、客觀の表面は如何にも精細緻密に描寫されてはゐるものゝ、何となく其れに生命が無い、寫眞のやうなものになつて了ふ。從つて次に起つた自然主義は進んで客觀の內面的描寫を企てた。即ち有りの儘の現實の表面を書かずに一步踏み込んで其の奧に潛んでゐる生命を掴み出さうとした。人生の形式や姿容は必ずしも小說家を待たずして各自に觀察する事が出來る。作家は更に觀察を深くして人生の意義乃至は價値を探ると云つた風の、硏究的態度を取るに至つた。イプセンの問題劇、ゾラの問題小說の如きは此の主張をズッと深い處まて持つて行つた結果てある。併し未だ之ても客觀の意義とか觀念とかに執着してゐるのであつて、作品の中に十分に作者を現はす事が出來ない、印象主義は此の主觀的要求からして新しく生れて來たのである。

元來印象主義といふ名稱は十九世紀の後半期に於い

て、フランスの新派繪畫が取つた新描寫法から起つてゐる。其の起原は上掲諸氏の研究に委しく書かれてあるが、繪畫のみならず、(彫刻界に就ては昨年一月大塚伺治氏が『帝國文學』で『彫刻に於ける印象主義』といふのを書いて居られる)にもあるし、又文學の上では小說詩歌のみならず批評にも印象批評といふのがある。同じ印象主義でも其れ〳〵方面の違ふと同時に幾分か意味も違つて來るが、根本の動機は作者の製作的態度を最も自由にして、十分作者の感じ、心もちを製作物の上に表はして行かうとするのである。感じとか心もちとかは決して說明して傳へ得るものでない、幾分か描寫を暗示的にして讀む者觀る者をして靜かに味はしめねばならぬ、從つて作の對象物——人生なり自然なり——の、局部々々を精細に寫生したばかりでは到底其の目的は達せられない。先づ對象物の一見支離滅裂なやうな事物の間に共通した統一的な感じを見出す。即ち對象物をば作者の主觀で包んで了つて、中身の味ひを吸ひ取つた上で旨く其の對象物を描き表はさなければならぬ。印象派の繪を見ると、近づいて見た時はべた〳〵に繪の具を塗り付けたずらッぽいものであるが、少し距離を置いてみると、べた〳〵の彩色が全體として一つの景色となつてゐる。刷毛の粗い筆づかひてはあるが作者には十分其の景色の感じが腹に在るので、色彩は自然に統一せられて立派な景色畫が浮び出される、小說に在つても亦同じ事て、部分々々ては描寫の粗いスケッチ風のものであるが、全體として何となく心を惹かれる。朧げな一脈の心もちがあつて、暫くは讀者をして默想せしめる、繪畫では空間的であるが小說では時間的である丈の相違である。最後は、作者の心もちが對象物の心もちと一致し、更に其れが讀者の心もちと一致するのが最も傑れた作と云ふ事になる。部分々々の印象を暗示的に書いて置いて、讀み去つた後の感じが長く讀者の胸に止つて表はさうとした味ひを躰得せしむれば其れて足りるのである。

一月の『新潮』で蒲原有明氏が『印象主義の傾向』を語られた中に、例證として正宗白鳥氏の『新藥師寺』を擧

げ、長篇では田山花袋氏の『生』及び島崎藤村氏の『春』を擧げ、更に永井荷風氏の『あめりか物語』をも印象的な書き方のものとせられた。此の外に水野葉舟氏の短篇は最も印象描寫の傑れたものであらう。新年の小說では、白鳥氏の『地獄』や、藤村氏の『一夜』、それに秋聲氏の『四十女』の如きは矢張り印象主義の作物である。

さて此の新しい主觀的要求は、日本の文壇ても既に大きな勢力となつてゐるが、作者の感じ心もちを作の上に現はして行かうとするのは最も誠實なそして最上の力を盡さねばならぬ。單に空想的假作の主觀でない、眞面目な內觀的の態度を以て作に



望むといふ意味で印象主義は主觀的の文學である。前號の『個人の勝利』を參照せられん事を望む。又寫實主義、自然主義、印象主義の推移を初めに述べたもの丶其れは決して別々のものでない、云はゞ上出の表のやうなものと解釋するのが至當である

自然主義
- 前期——寫眞主義
- 後期
  - 本來自然主義
  - 印象主義

何れも空想本位の文學から、近代的な觀察本位の文學——即ち自然主義の文學——となつてからの變遷である。

詩壇の事には說き及ぼす紙數が無かつた。

（四十二年一月十一日）

作家の住居

紫火生

『不如歸』著者の武藏野生活

小說を讀むほどの者で『不如歸』を知らぬものはない、其『不如歸』の著者德富蘆花氏は何ういふ生活をして居られるかと云ふに、それが又甚だ他と違つて居る。先年ロシアの文豪トルストイを訪問に出かけたが、歸朝の後氏は都會の塵埃を避け、武藏野の中央に住居を構へた。昔の所謂武藏野よりは少し南に偏つた方角で北多摩郡粕谷と云ふ村に住んで居る。東京から行くには新宿の外れからでも、澁谷のさきからでも二里乃至三里は步かればならぬ、丘と雜木林が縱橫してゐる武藏の途を氏は時々草鞋穿で東京へ出られると云ふことだ。住居は前も後ろも田圃だが、傾斜あり、林あり、雲あり、野あり、濶然として眼界が開けてゐる、家の構えはさまで廣くもないが、此邊で硝子障子のはまつた家などは殆んど珍しい、そして家の周圍は一二町の間花畠になつてゐて、春の草花、秋の草花は素より、日本の果樹、西洋の果樹、蔬菜の類まで、苟くも地に生じて成長するものは植ゑてある、玉葱も出來れば、芋も出來る、櫻草でも、菫でも、秋はコスモス、ダリアなど色美しく咲き出てる、殊にコスモスは家を取り圍んで幾百本となく生ずるから。其盛りには、紅白の花瓣が住居を包んで漂ふてゐる。村の人は粕谷の公園と呼んで居る。恐らく此邊の村で斯んなに花を育てゝゐる人はなからう、又氏は菜食を守つてゐるから、食物は凡てわが畠から取れる、新しい果實も、瓜も食べ次第だ、野の幸に不自由はしない。其間に氏は讀書をしたり、勞働をしたり、優悠自適の生活を試みてゐる。夫人と幼き令孃は飽くまで田園生活の豐かな境界に甘んじて居られる、精神も肉體も天然に同化して、自ら健かになつてゆく。氏曰く、太陽と、土と、空氣と、時間とには思ふやうに親むことが出來て少しも不自由は感じないと、誠に然もあらうと思はれる。

島崎藤村氏の柳橋の僑居

柳橋と云へば新橋に次いて、東都では全盛を競ふ狹斜の巷、柳橋の秋には龜淸と云ふ聞えた料理屋がある、其前を通つて少し行つた處を左へ折れると、米屋の隣りの意氣な裏木戸に島崎春樹といふ名札が懸つてある、周圍には藝妓屋などが多いから始終、常磐津か何かを稽古してゐる雛妓の聲や、太鼓の音、鼓の音などが聞えてゐる。裏木戸乃ち裏門であつて、入ると庭乃ち玄關である、手狹ながら二階もある、いつも沈着た態度で主人は家の者と睦じく話などして居られる、此の暮には男子出生されたので家は愈よ賑かになつた、小說を書く時に旅行することもあり又外の靜かな場所に行つて書くこともある、信州から大久保、大久保から柳橋と、氏の住居もなかなか變化に富んでゐる、文士と云へば大抵郊

外生活か、山の手住居が多いのに氏と小山内薫氏が淺草に住んで居るのは一寸風變に感じられる。

澁谷の丘上に住む八千代女史

麻布天現寺橋で電車を降り、下澁谷の伊達跡と云ふ淋しい田舍めいた邊に洋畫家岡田三郎助氏の住居がある、此あたり家は飛々に建つて、西洋館もあれば、藁屋根もある、行き當りが火藥庫で、前が生巧舘合田清氏の住居、横が美術家岩村透氏の邸になつてゐる、枯尾花や、茅萱、熊笹が生ひ茂つて晝も淋しいやうな土地だが、氏の住居は和洋折衷の小ぢんまりとした建てぶりで、氏の夫人にして閨秀作家たる八千代女史は、此郊外生活の裡に詩想を練つてゐる、主人も夫人も一見して藝術家らしい表情が具つてゐる。今一つの愛嬌者は此頃來た女中で、玄關に案内を請へばフフンと頭も下げずに引込む樣子、如何にも田舍〳〵してゐて、年齡なら十五六であらう、何處となく繪にある田舍娘の面影そつくり、細りとした痩形で、色白く、赤い襷を掛けて竿に物干してゐる可憐な姿などを見ると、最も此家に相應しい女中だと思はしめる。

北原白秋氏と婆やの忠勤

緋の天鵞絨のやうな詩を作る北原白秋氏は、牛込の神樂坂に住んでゐる、コテ〳〵と建て込んだ家並の後ろで、家は新しい二階家、弟さんと婆やとの三人暮し、未だ學生時代のことだから交際も廣くはない、兄さんは詩が好き、弟さんは繪が好きと云ふ處へ以て、婆やなる者がなかなか能く分つた忠勤者で、我儘な坊ちやんに仕へること甚だ健實、若主人の文學熱に同情して、何がな好かれかしと祈つてゐる、氏の詩集が出るについても随分婆やは氣を揉んだと云ふ話。それで氏の住居のことだが表通りは大阪の心才橋筋のやうなごた〳〵した通りだけれど、二階から見ると、裏は崖になつてゐて、餘所の廣い庭が下に見える、そのさきに物理學校があつて、青い火や、赤い火が點されるので、一層印象的な詩想が浮ぶと云ふことだ。

小川町に住む佐々木信綱氏

神田小川町の大通りは大雜踏の巷、裏の靜かな通りに竹柏園主人佐々木信綱氏の邸宅がある、それでも縱に横に通ずる電車の響は朝夕聞えるであらう、氏は中流以上の女子を初め歌の弟子が非常に多い、氏の邸には電話があるから、電話で歌の添削をするなどは珍しくない話だ、邸の構は少し古色を帶びて居るが、應接室などは椅子卓子を以て充たされ、而も室が廣いから歌會ぐらゐは開ける、氏の人と應接する態度極めて溫和で、如何にも歌人らしい、用があつて家内の人を呼ばれる時に、卓上に具へてある馬の鈴をヂヤラン〳〵と振る、其樣自ら詩韻あり。

本號口繪

「雪女」は日本でも雪の夜に來ると謂ふ雪の精靈であつて此れは西洋の雪女である、西洋の雪女も美しいとしてある。

河岸通り

故田中久子

「港屋と言つたら、貴女のお父さんが被居つた時分には此河岸切つての材木屋なんてしたが……。」とは、毎々お稽古の往復に寂びれた其家の前を通る時、必然乳母やが話した言葉だつた。矢張私の父さんと同じ年に主人が死んでそれから八九年、私が十二の時にはもう見る影も無く寂びれて居た。三間の間口を粗い格子戸にして中へ入ると直ぐ一間の土間、上ると直ぐが細長く敷いた六疊で、其處には毎々眞鍮の火鉢が光つて居たと言ふ。私が覺えて其前を通る頃には、お天氣の快い日でも大抵格子の中に戸が下りて居た。皆の出入は格子に並むで、「港屋」と書いてある障子のはまつた勝手口からして居たらしい。

ある、何でも五月の初旬だつたと思ふ。矢張お稽古の歸途に其前を通ると、勝手の障子が開いて居て八百屋の車が降りて居た。私の乳母やと言ふのは、其頃もう六十歳近い老人で密柑の青く熟れかゝつたのが何よりも大好きだつたもんだから、何處でも八百屋の荷がをりて居ると夫となしに近寄つては「腐密柑は無いか無いか。」と探して居た。其日も夫で、小さな私の手首を握り乍ら車の方へ寄つて行くと、偶と障子の蔭から港屋のお女房さんが顔を出した。「おやまあ乳母やさん。」と挨拶する。私はよく知ら無いけれど先方では私が赤兒の時分から知つて居るのださうで、「例もお壯健で結搆です。」と乳母やを見れば直ぐから言ふ。

女房さんの出した茶へ八百屋はいんぎんか何かの青いのを一杯入れると、梶を上げて行かふとした。「腐密柑は無いね、え八百屋樣。」と、乳母やは落膽した如に立ち止まつて八百屋の後を見送つて居ると、「まあ乳母やさんお上りなさいましよ。」と暗い奥から女房さんが聲を掛ける。「へえ、また……。」「まあ宜ございますわ乳母やさん、お嬢樣も御一所だから緩然お茶でも上つてらしつて、ね乳母やさん。」板の間をがた〳〵踏んで來て乳母やの肩を引張る樣にする。「へえ又今度伺ひませうよ。」と、乳母やはそれでもまだ剛情を張つて居る。「まお茶を一つ入れましたから。」「さよてすか。」と、遂々私の手を曳いて上つた。

見ると臺所は莫迦に廣く、板の間は底氣味惡い程黑く光つて、見上げると天井板の無い屋根裏には太い梁が

恐しく横はつて居る。其廣い眞中には大きな竈が一つ、引窓から射し込む光線で磨き上げた銅の銅壺がピカピカ光つて直ぐ眼に付く。突當りが矢張黑光りの高い戸棚で、其前の板の間へ大きな古い長火鉢を据え、其前の薄縁へお女房さんが座つて居る。窓は引窓の外は皆ピツタリ閉め切つてあるので勝手の障子を閉めると急に暗い陰氣に成る。長水鉢のある所から、南に八疊の座敷を通して見通せる一寸した庭の岩の上には、赤塗の小さい稻荷樣が祭つて有つた。

「おや〳〵、お稻荷樣を此所へお移し成すつたんですか。」と乳母やが不思議相な顏をして言ふと、「へえ、先方は塀を壞しましたものですからねえ。」と、女房さんは火を吹いて居た面を上げた。「おや〳〵。」と言つて乳母やは亦其方を見る。突當りの塀が崩れて居るので直ぐ材木の少し許り積んだ納屋に續いて居る。女房さんは更紗の座蒲團を二枚疊の方へ敷いてお茶を出す。「もうお搆いなく……。」と會釋してから、乳母やは何か種々な事を談し出した。

「何有ね、もう斯麽に成つて了いましたんですから、まア故郷へ歸りますのが一番なんですけれど……。」と、煙管の吸口を袖で拭いて乳母やに渡し乍ら、「矢張老母さんが承知しないもんですからねえ。」と淋しく微笑する。「眞に私の姑も其麽でしたよ。」と乳母やは煙草をゆつたり喫つて、「今日は何方へか。」「何ですか具合が惡いつて臥つてをります。」「それはまあ。」「どうも何も彼も都合が惡く行きましてね。」「左樣ですよ、一軒の家は主人が居りませんでは、どうもねえ。」と乳母やは思ひ出した樣に、片手で私のお下げの頭を撫てゝ居る。「夫に貴女、せめて賢さへ確乎して居て吳れませばですけれど……。」「さう〳〵賢さんは居なさる所がお分りなすつた相ぢやありませんか。」と、乳母やはボンと煙管をはたいた。「分りましたのは分りましたのですけれど……老母さんの居る中は、家なんぞへ歸るものかつて言つてます相で……。」と一寸暗闇の六疊へ眼をやつた。

と、恰ど其時勝手の障子が開いて此家の娘のおちいさんが入つて來た。お千代と言ふのだけれどどうしてか誰もお千代さんと言ふ人は無い。皆おちいさん〳〵と呼んで居た。其頃十八で、色の白い二かわ目の丸くころ〳〵した娘、町中で一番美人だとの評判である。紫の風呂敷に包むだ撥を火鉢の傍へ置いて私達に挨拶した。「お稽古ですか。」と乳母やが訊く。「はあ。」と小さな

返辭をして、極りが惡いのでも無いらしいが火鉢の縁を撫でゝ居る。「よくお出來成さいますんですつてね、眞實に宜う御座います。」「お蔭樣と自分では好みませんですから、もう二三年はやらせ度いと思ひますけれど……。」と女房さんはおちいさんを見乍ら言つた。

おちいさんは默つて俯向いて居る。そして些い〳〵顏を上げてはお母さんの顏を見乍ら小さな聲で何か訊いて居たが、少し經つと「お祖母さんは。」と矢張聽き取れ無い樣な聲で訊いた。「六疊に寐てお居でだ。」「さう、もうお三味線の方ね、「蜘蛛」が上つたから今度は何にしませうつて、十二段が宜いか、犬神の方にしますか、お祖母さんに訊いておいてなさいつて。」「さうかい。」「私は何でも搆は無いから早い方が宜いつて言つたけれど、お師匠樣は又過日の樣にお祖母さんに憤られると不可からつてホヽヽ、そしてね、揭げざらいをお家でよく成さいつて。」と聲を出して笑つた。「もう其麼聲を出してさらえやしないわね。」と女房さんが小聲で言ふと、「だから可笑しいわ。」つておちいさんが又笑つた。そして二人して壁の三味線掛を見上げた。

其中に暗い室からお婆さんが出て來た。瘠せてひよろ高く少し前へのめつて居る。だらしなく成つて寢卷の前を合せ乍ら火鉢の前へ座つた。女房さんは少し避ける。「祖母やさんはお壯健で結構だ。」とゴホン〳〵咳れた咳をし乍らお茶をぐつと飲む。「えゝお蔭樣と貴女。」と言つたが、何だか乳母やは遠慮して居るらしい聲であつた。「もう私の樣に成つちやあ駄目ですよ。」と言つてはあ〳〵咽喉を鳴らして居る。そして癇の所爲か瘦亂れた白髮をピク〳〵動かして、「でもね祖母やさん、家は斯麼だし、これ（おちいさん）はまだから小供だし、私はまだ死ぬ事は出來ませんのさ。」と、女房さんを橫目で睨めるように見乍ら言つた。

私は小供心に何となく薄氣味惡く成つて來たので、乳母やを密つと突ついて歸つて來た。「乳母やさん又談しに來とくんなさい。」と、お婆さんは火鉢の前へ座つた儘首を伸ばして、案外優しい聲で言つた。

戶外へ出て、「恐いお婆さんだねえ。」と言うと、彼でも昔は長唄の上手で、每晩おちい樣のお父さんの晩酌の度に三味線を彈いては唄つたが、年齡に似ず聲が宜いので、此處らの塀の穴や格子口には一杯の人集りだつたと話した。

其後一月計り經つての事、私が女部屋で春と言ふ女中に人形の衣服か何か縫つて貰つて居る時だつた。一人

の彩と言ふのが、「港屋のおちいさんがお婿さんを貰ふんだつて鶴屋の若旦那だつてさ。」と言ふと、「否然うぢやないんですとさ、一度は定つたんだけど、愈々と成ると彼お婆さんが不承知でおやめに成つたんだつて。」「まあ、さう、厭な婆だ。」「眞實さ、おちいさんと鶴屋の若旦那とは酷く似合ふんだけど。」「眞實ね、如何してなんだらう。」「港屋ぢやあ鶴屋に大變借財が有るんだつてね、それで一時はおちいさんと鶴屋のと彼麼噂だつて有つたてせう、だから夫婦にすれば双方宜い事だし、港屋だつておちいさんをやつとけば借財の方だつて一時に如何つて事も無からうからと言ふので定めたんだつて、けどあの婆さんが愈々と成つたら、其麼他に聞えても外分が惡い、私だつて港屋の阿母だ、娘を金錢で賣つたなんて言はれて顏が立つかつてつて威張つたんだつて……。」「まあ。」「あの婆さんのお蔭て賢さん迄お嫁さんを連れて逃げ出し了つたんぢや無いか、ねえ。」「どこ迄憎らしい婆だらう。」「加之にね、おちいさんがもう何でも他人の言ひなり次第に成る娘だからね。」「さうだつてねえ。」私は傍て斯麼話を聽いく喫驚した。

夫から一週間も經た無い內、港屋ては格子に並んだ船板塀を壞し始めた。お稽古へ行く時々通ると、往來から八疊の座敷が見えて赤いお稲荷樣がポッンと寂しく殘つて居る。池のたゝきも大抵崩れ落ちて金魚の死んだのが一つ浮いて居た。

夫から毎日人足が入つて庭に續いた納屋を取り壞し、臺所の裏の高い置場も屋根をはいだ。ある日偶と通りすがりに、戸口に茫然立つて居たおちいさんを見たら極り惡さうにお叩頭をして急いで中へ入つて了つた事が有つた。背の高いお婆さんが、太儀相に口小言を言ひ乍ら放り出された材木を重さうに格子の前へ押寄せて居たのも見た。

五六日中に全然取り壞されて、只住居だけ寂しく殘つた。もうお婆さんもおちいさんも、おちいさんの弟て私位の年齡の惡戯兒の姿も見かけ無く成つた。座敷にも雨戸が二三枚隙間をあけて立てゝあつた。そして庭續きの納屋の跡には新らしく地均が出來て家を建てる鉋の音がコッ〳〵響く樣に成つた。朝早くから夕方遲く迄急がしさうに響く其音て、港屋のお婆さんの病氣は日に〳〵重つて行くと言ふ噂が立つた。

七月に入ると直ぐ、おちいさんの御婚禮があると言ふ。町の人達は驚いた。私も女中に負さつて行つて見ると、

それは港屋の筋向ふの今迄石の置場に成つて居た、バコベの澤山生えて居る空地を入つて、だら〳〵と緩く傾斜に成つた河岸に、一月計り以前に建てられた新らしい家があつた。

新らしいが狹いので家の中が全然見える。河に臨むだ六疊計りの座敷に港屋のお婆さんが蒲團を積み重ねたのへ倚り掛つて居て、臺所にはおちいさんのお母樣が忙しさうに襷掛けて働いて居た。お婿さんは、今日迄港屋の家へ只一人變らず出入をして居た福と言ふ番頭だと聞いて、春やは大きな眼をして杉々を見た。

間も無く障子が閉つておちいさんの姿は全て見え無く成つた。「何も出來無いけど女房さんが氣の毒だから。」と手傳いに行つた乳母やは歸つてから、「おちいさんよりお母さんの方が餘つ程可哀想ですよ、泣いてなすつたもの。」と頻りに言つて居た。如何したのだと理由を訊いて見たら、「何でも斯うして鶴屋に楯を突いてもう一旗擧げるんだ。」と言ふ、お婆さんの目算だ相だ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫から二週間計り經つてお婆さんは遂う〳〵死んだ。お葬式も何日濟むだか分ら無い中、女房さんは弟の方を連れて常陸の故郷へ歸つて了つたと言ふ。

おちいさんは丸髷に成つて、石置場の石の積むだ間に見える新らしい其家に福と二人で樂し相に暮して居た。私の家も間も無く移して了つたからよくは知ら無いけれど、今でも其處を通ると、何を氣にすると言ふ容子も無く石の根方のハコベラを摘むでは鷄にやつて居るおちいさんの姿をよく見ると言ふ事である。

おちいさんの先の家はもう全然壞されて大きな納屋と成り、往來の兩側とも皆材木の置場に成つて了つて居る。昔の勝手口邊りには每晚大福餅屋が屋臺を掛けて居る相だ。私は如何してか未だに其暗い臺所と其中に光つて居た銅壺とを忘れる事が出來無いのである。

此作は故田中久子孃が病中に認めて置いて、長篇なるが故に本誌にも寄せず其儘筐底に收めてあつたものを、今一篇「姉」と云ふ作と共に孃の令兄より本社に寄せられたのです、「姉」は此次の誌上に掲載します、兩篇とも世に公にして少しもはづかしくない遺稿です。(記者)

新年文壇 評判の作

▲強者（正宗白鳥）　殊更手紙體にする必要はなかつたやうに思ふ、主人公A君の性格は白鳥でなければ書けない、白鳥の作は別に讀者に受けるやうに工夫してゐるのでも何でもないが、世の中を妙にすねて見る處が一部の讀者を引きつける强い力がある、『地獄』は少し引きつけやうとする力が强すぎて香の高い花のやうで却つて嫌氣がさす『未見の人』『最初の記臆』は單純すぎる、何しろ『强者』が一番好かつた、讀了何事かを考へさせるだけでも意味のある作と云ふことが分る（中央公論）

▲白紙（田山花袋）　小説だか小品だか散文詩だか分らぬものだが、「無數の昼が空間を飛んでゐる」とか「何故？」「……」と云ふやうなことを書いてあると若い者は只むやみに面白がる、好いか惡いかは分らないが評判はとり〳〵なり（早稻田文學）

▲四十女（徳田秋聲）　先づ第一大阪言葉を此れ位ゐ自由に使ひこなす人は現今の作家の中には一寸無からう、男が放埒の身持や、四十女が落魄してゆく様子と大阪の空氣とが或る度まで適つてゐるから人物も事件も活きてくる、秋聲も元來寂しい暗い方ばかり見る作家だが、餘り説明的なものはいけない、此作は不斷の秋聲ほど秋聲の色が出て居ないけれど却つて此態度が好い、但し終を急いだ跡は確に見えるが、强ちちやんときまりをつけなくても可かつた（中央公論）

▲耽溺（小栗風葉）　是も新年の作界に一問題となつた、作家に對して好惡の念を持つのは評家の爲すべきことではなからうけれど、以前何處かで見た靑果の「崖」と云ひ此作と云ひ、作家其人の近狀を小説で報告されるやうな氣がしていけない、四五年經てから書くのは可いけれど餘り新しいと事件が事件だけに一部の人に嫌な感じをさせはすまいかと疑はれる、併し是は作る動機の問題であつて、作其物に就いては矢張新年の文壇に重きを爲すものであらう、酒と女に惑溺してゐると云ふだけで、如何にもどく〳〵しい事柄な風葉だから此れ丈け讀ませるやうに書けるのだ、外の者なら恐らく大失敗をしたらう（中央公論）

▲晩餐の後（永井荷風）　矢張佛蘭西を舞臺としたものだが、周圍の色が異ふから目新しい、全體歸朝以來の荷風の書くものは皆異つた色彩が輝いてゐるので一寸衆目を惹く、「祭の夜がたり」と云ふのは此作よりも好いと云ふことだが未だ一讀しないから分らぬ、前に出た「紅燈集」なども趣味の無いハイカラとも云ふべき好い散文だと思つた（趣味）

▲三疊と四疊半（高濱虚子）　觀察も細かい、讀んで感興の乘つてゆくやうに書いてある、書いてゐると云ふ心持を讀者から引き離すほどの力はないけれど、終まで興味を保つて讀ませる處は虚子もえらいと思ふ、此號に出た伊藤左千夫の作も注意すべきものだ。（ホトヽギス）

▲プルムウラ（森林太郎）　鷗外博士の新作戯曲である、莊嚴高淨と評すべきものであらう、此頃出版された「阿育王の逸事」と云ふ書物に此の戯曲の出所があるさうだ、印度の傳説らしい、誰が讀んでも面白いと云ふものではないが、飛離れて貴族的の題材である、事柄は優しい戀物語だが、なか〳〵複雜してゐるから注意して讀まぬと肝腎の意味を見落すであらう（スバル）

▲一夜（島崎藤村）　藤村の作も二三ヶ處に見えたが、やはり此が最も傑れて居る、ぼんやりした娘が一夜迷ひ子になつて家中大騷したことを書いてあるが、人物それ〴〵書きわけてあつて感興は充分に動く、ちやんと用意して書いてあるから隙間はない、亂れてゐない（中央公論）

of the air. The beautiful golden sun was king now. Mother Nature knew that the new king loved the babies. He would help them to grow large and strong.

She told this king where the children were, and asked him to waken them. So one bright morning, the king sends down his warm rays. They tap on the brown covers; they send the sap up into the buds. Soon Mother Nature hears calls from the cradles, "May we come out?" "Yes," says Mother Natur, "if you will wear your fur hoods. It is very cold out here." Some of the little pussies wish to go with nothing on their heads, but at last they all put on their gray pussy hoods and come out. At night it is so cold that they are very glad they wore them.

What a time they have rocking on the brown branches. Up and down, here and there, they rock in the bright sunshine. How many brothers and sisters there are!

King Sun is a good friend to them. He helps them every day to grow longer and longer. These pussies are called catkins.

て御座います．母の自然は此王が赤子を愛して下さる事をよく存じて居りますので，慥に王は，赤子の生育を助けて下さると信仰して居ました。

それて，母は王様に子供等の眠て居る場所を告げて，何卒彼等を呼び起して下さいと願ひました。王は某晴日に暖き光線を遣しますと，光線は子供等のかけて居る褐色の布団を上から叩き，甘い飲料を蕾にやりました。やがて，母は揺籃の中から「起きてもよう御座いますか」との聲をきゝ，「宜しいが，毛の帽子を冠つて入來しやい．外はなかなか寒いから」と返事を致します。

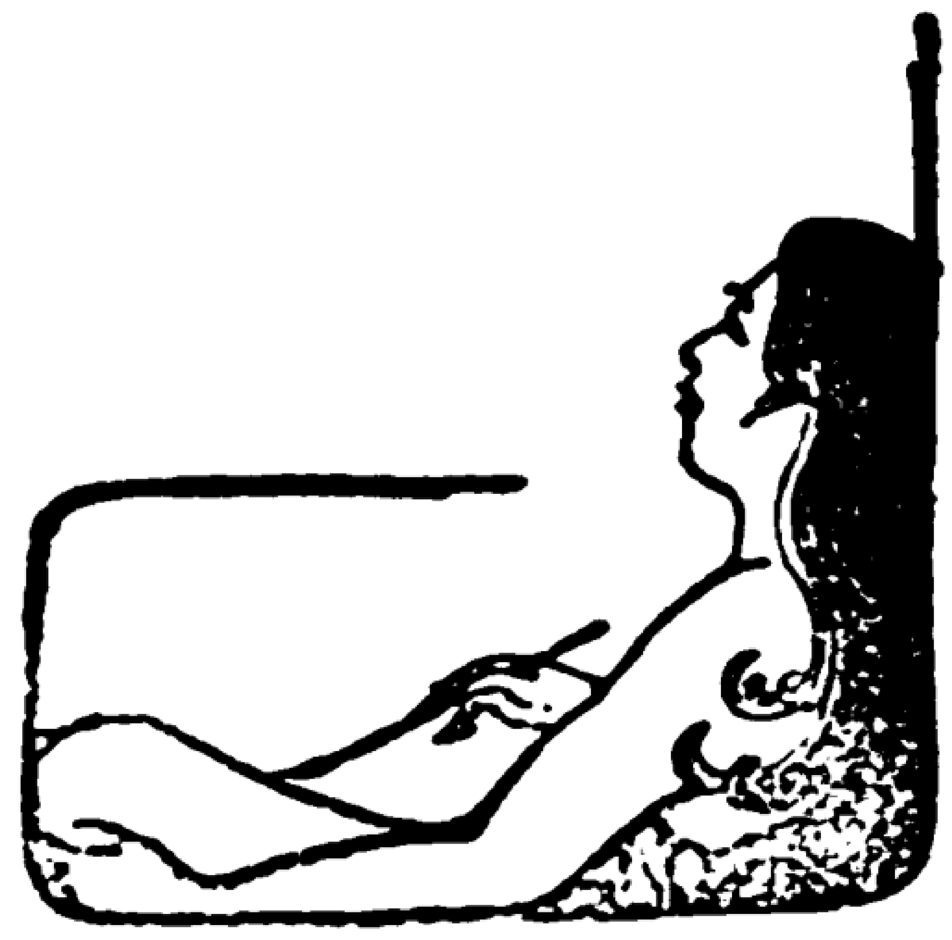
小な猫柳の中には，何も冠らずに行き度いと思ふものもありますが，御仕舞には皆灰色の猫帽をつけて出て參りました。夜中はまだ随分寒いものですから，帽子のあるので助かると思つてをります。

少しく赤じみた枝に皆集まつて，枝を搖り動かして大騒をして遊んで居ります 上や下や，此處彼處とかまわずに輝く光線を浴びて飛びはねて居ります．又何と大勢な兄弟姉妹があるのでしよう。大陽王は彼等の良き友達て，日々生長する樣に注意してくれます．此等の小猫を柔荑花と申ます。

英　文

（第五學第二回）

女子英學塾講師　河井道子



Sleep to Wake

One who never turned his back
  but marched breast forward,
Never doubted clouds would break,
Never dreamed, though right were worsted
  wrong would triumph,
Held we fall to rise,
  are baffled to fight, better,
Sleep to wake. (Browning)

眠るは醒むため

己が後を振向かで
的を目指して勇進し，
黒雲晴るゝを疑はず，
よし正義は一時屈せらるも
最後の勝利は凶邪になしと
信ずる者は稱ふなり
我等の倒るは起んため，
敗北なすは好戰のため
眠るは醒むためなりと。

Pussy Willow

All winter long Mother Nature had sent her winds to rock the babies' cradles. Back and forth they had rocked lulling the baby buds to sleep. In the fall she had tucked them up snugly and given them a warm coverlet to keep out the cold. So the baby buds had slept soundly all winter. At last it was time to awaken. Mother nature sent her March winds to rouse the little buds. There was another king

猫　柳

冬中母なる自然は風を遣して赤子の搖籃を搖らせました。風は程好く搖りまして蕾の赤子を眠らしました．母は秋子供等を心地よき寢床によく寢かしつけて，風を引かぬ様にとて暖き夜具を被けてやりましたから，其蕾は皆冬中熟睡いたしましたが，終に目覺むる時が參りましたゆゑ母は，彌生の微風に彼等を起こさせました。其處に空中の王が御座いまして，其御方は別人ならず即ち輝々々たる大陽

歌御會始

一月十八日午前十時宮中鳳凰の間に於て嘉例の歌御會始の式を行はせらる、御製御歌及び選歌等左の如し

雪中松

御製

としとしにゆきをかさねておいまつのみさをたかくもなりまさりけり

皇后宮御歌

きみかよのちよをかさねてふるゆきにいよいよたかくみゆるまつかな

東宮御歌

ふりつもるかしらのゆきそあはれなるおいきのまつはひとならねとも

同妃御歌

いとしくふりつむゆきをちよふへきまつはものともおもはさるらむ

あらたまのとしのあしたのはつゆきにまつのみとりもいろまさりけり　海軍大將大勳位功三級　威仁親王

あしたつはそらにあそひておいまつのこすゑましろにゆきふりにけり　勳一等　慰子

ゆきふかきみほりのまつはさしいてしえたのかけのみみとりなりけり　侍從長侯爵臣　實則上

しほかせにもまれもまれしそなれまつゆきはつみてもたわまさりけり　宮内大臣伯爵臣　光顯上

題者點者

ふるゆきをしのきしのきてさかえゆくまつをやひかむみよのためしに　樞密顧問官兼御歌所長男爵臣　正風上

讀師　ふりつもるゆきのしたよりみゆるかなちよのいろそふみそのゝまつ　宮中顧問官公爵臣　基弘上

發聲　ふるゆきをいたたきなからつゑつきておきなさひたるにはのまつかな　伯爵臣　重朝上

講師　めにさはるえたもかくれておいまつもふりよくみゆるけさのゆきかな　伯爵臣　實麗上

奉行　ゆたかなるとしのしるしをまつみせてけさかとまつにゆきのふりたる　御歌所參候子爵臣　利堅上

講頌　ふるゆきにまつのみとりはみえねともすかたはちよのすかたなりけり　子爵臣　行德上

講頌　あしたつのちよたのみやのまつのうへにふりつむゆきのゆたかなるかな　男爵臣　文仲上

講頌　ときはなるまつのみとりはかくさしとゆきもしつれてつもらさるらむ　男爵臣　有鄰上

講頌　のとかなるはるまつかえにふりつもるゆきおもしろきあさはらけかな　男爵臣　親雄上

奉行　かけたかきおほうちやまのまつにこそゆきのすかたはみるへかりけれ　御歌所參候臣　信行上

選歌

きみかよのいくちよこめてつもるらむこまつかはらのけさのしらゆき　帝室林野管理局技師江崎政忠妻　まき子上

ふりつもるゆきにたわまぬまつをみておいもさむさをわすれけるかな　掌侍正六位　藤原道子上

たかむらはゆきにうもれておいまつのひともとたかくみゆるにはかな　東京府士族　柴田元子上

こつかけはかへりてふかくつもりけりこすゑのゆきのしつれしつれて　鹿兒島縣士族　折田稀春上

とよとしのしるしのゆきのふりつむはまつもおもしとおもはさるらむ　新潟縣平民　外山且正上

かくしつゝちよのれさしやかたむらむゆきにうもるゝのへのわかまつ　長野縣平民　安部政太郎上

わかみつをくむやつるへのさをふれてかたえしつるるまつのしらゆき　岡山縣平民　梶村平五郎上



○暗い家（天賞）

松山市本町三　大本花代

私は今夜も例の様に帳場に坐つて帳面を調べて居た。風邪の故て頭痛がして、何をするのもうるさくて仕方がない。「おつ母さん、出金を忘れてるじやありませんか」と大きな聲を出した、勘定が合はないのだ。
「私は覺えないがねえ、きつちり合はないかい」と母が小さい顔を突き出す。「えゝ、二圓許り……」と、今一度、そろ盤をはじいて見て、「あゝ厭になつて了ふ」と自暴に筆を投げ出した。
「芳が知つてるんじやないか知ら」母が心配げに云ふ
「さうねえ、聞いて見て頂戴」
「芳、芳さん、困るじやないか今から寢てさ、出金はなかつたかい、えゝ、出金だよ」と母が炬燵てゆり起して居る。「出金？ありますよ、電燈代が二圓二十錢……」と姉の寢ぼけた聲が耳にいると、毎夜の事ながら余りの呑氣さに腹が立つて、「仕樣のない姉樣ねえ、もちつと氣をつけて呉れないと、皆私の故にして兄さんに叱られるんだわ」とこんな皮肉も言ひ度くなる。
「だつて、政子が……」と姉の言ひかけるのを、
「何がだつてだよ、子供はよく寢てる癖に、一體何時だとお思ひだ、春さんはまだ帳面をしてるじやないか」と母が宛然子供を叱る樣に言つて居る。
「えゝえゝ皆私が惡いのでせうよ、どうせ出戻りの厄介者だから、」と早泣き聲に言ひかけた時、ガラリ戸を開けて兄が歸つて來た。何時もの事で、急に何か重い物が頭の上に來た樣な氣がしたが、それでも流石に、青木綿の風呂敷つゝみを脇に狹んで、兩手を、インバネスのかくしに突つ込んだ兄の蒼い顔を見上げて、
「兄さん、集金まつて？」とにつこりして見せた。

○規定　題材凡て自由なり一人一篇を限り半紙又は罫紙に振假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

「から駄目さ」と包みを投げ出したまゝ奥へズン〳〵行つて了ふ。

此の春父に死なれて岡山で勉學中の兄を呼び戻した。母に似て、神經質の小膽な性質の上に不平――兄は學問の成績が大變可いので自分では大學迄もと望んで居た――さへ手傳つて、家族には笑顏も見せた事はない朝から晩迄、苦い顏ばかりをして居て、誰彼の別なしに叱りつける。母は又兄に氣を兼ねて（私の外に弟が二人居る）何時も不安なおど〳〵した目をして居て、御飯より好きな芝居にさへ、自分から行くとは得言はない。殊に夏の初め、郡中の方に嫁入つてた姉が



政子と言ふ當歳の女子をつれて、離縁れて歸つてきてからは、姉の至極呑氣なのに引きかへて、母は政子の泣き聲にもはら〳〵して正面には兄の顏も得見ないと言ふ風。見兼ねて、少しは兄の機嫌も好くはなろうかと、夏以來帳面と勘定は私が引受けて、今では止めるにも、止められぬ羽目になつた。けれども兄は矢張り駄目だつたが、併し私にきりは一目置いて、素氣ない迄も、母や姉に對する樣な事は無い。況して母は肩身が廣くなつたかの樣に喜こんで、足袋の洗濯一つ私にさせる事はない。そして私自身は、淺ましいと知りつゝ一種のほこりを感じて冷

やゝかな微笑さへ頰に浮ぶ。
親子三人が沈默て夕飯をすますと私は又店番をしながら、色々な事を考へ出した。
空にさへづる鳥の聲——と太い聲で唱つて步くのが、聞える。懷かしい。よく白雲の渡る五月の空を好いては運動場のあかしやの木蔭で、あれを歌つた物だと、思ふと堪らなく懷かしい。
と、不安の念がむら〳〵と身を襲ふ。立つても、坐つても居られない、今にも飛び出さなければならない樣な氣がして、此の家に居ては私の春は永久に逝つて了ふのだと思ふ。そして母や兄の犧牲になつて、暗い家に過した此の一年間が無暗と惜しい。
上京〳〵と紙一面に書き散らした。
十時が鳴ると店の戶を閉めて、奧へ行つて兄が太陽か何かを讀んでる傍へ小さくなつて坐つた。
ちよい〳〵と上目で樣子を覗つて幾度も躊躇しながら思ひきつて、言つた。
「兄さん、來年になつたら上京させて下さいな」
「何だと、……上京？」覺悟しながら私ははつと俯いたが「ハ、ア……東京で下女でもするのかい」と言ふ聲を聞くと、反抗心がむら〳〵と起つて、
「奉公するなら、宅へして上げますわ、兄さんなんかのお世話にはならないから好い」と言つて疊に突つ伏した。
「なら、宅へ奉公して吳れるがいゝじやないか、此の家を俺一人に背負はせて、如何しろと言ふんだい」と限りない憂愁を帶びた聲を聞いて私は何とはなしに、泣いて了つた。坐敷て母のすゝり泣く音がする。

（評）多少の難はあるが巧いものだ。各々が自我と云ふものを意識しながら、家とか母とか云ふものゝ爲めに餘儀無く家庭の犧牲になつてゐる、コンベンシヨンを脫しようとして脫し得られぬ此間の苦痛がヒシ〳〵と讀者の胸に迫る。選者は何故か知らぬが讀んでゐて溜らなくなつた。服部氏去り、田中氏逝せし後の我が小說欄も、未だ敢て失望するに當らざるん他の諸欄に誇る。此篇を見られたら、さぞ夜雨氏が自家の欄を一層慚愧さるゝ事だらうと思はる。當欄の諸氏よ、更に奮勵を望む！

○他事（地位）

府下東大久保二五六、河村方　水野ゆみ子

兵隊の靴跡と、馬蹄の跡とが縱橫に入亂れた戶山の原に沿ふて、源兵衞村に入らうとする埃り路の、草籔の中に一個の死屍——この死屍は昨日の夕方、柏木の方から霜解の小路を步いて來て、この草籔の傍にベタりと倒れた。髯のある汚ない顏は靑腫れに浮腫れて腎

膿炎の特症を現し、その周圍には口から吐いた汚ない物が流れてゐる。――彼は今は冷たい死屍となつて横はつてゐるが、今朝はまだ微かな息があつた。昨夕から終夜寒風に曝されたのと、曉の霜に打たれたのとで彼の身體は凍るばかりに冷え固まつて、尿毒は忽ちに腦を犯して來た。「ウー、ウー」と滅入るやうな唸りを立てて、彼は今一時間程前に死屍となつた。

と、其處へ人の足音がして、色の黑い、反歯の酒屋の若い者が通りかゝつた。その死屍を見るとペッと唾を吐いた。

「畜生ッ・・・・吃驚させやがら、乞食だな、・・・・・や、死んでる。」

氣味惡るさうに見てゐたが、好奇に堪へぬと云ふ面付て、其邊にあつた竹切て、手足を突きはじめた。暫らくすると詰らなさゝうに鼻歌を歌つて過ぎ去つてしまつた。

暫らくすると、二本線の兵卒が二人來た。

「や、乞食が死んでる。」

「うむ、死んでる珍らしいな、凍え死んだんだぜ。」

「怖ろしい面だな。」

笑ひながら、そのまゝ過ぎてしまつた。

早稻田あたりの角帽が二人、書物包とインキスタンドを持つて立止まつた。

「何んだ、乞食じやないか。」

「死んでるんだよ、君、凄い顔だな。」

「而し可愛想だな、女房はないんだらうか。」

「無論、ないだらう。」

これも暫らくして去つてしまつた。

そこへ草刈女が三人ばかりきた。

「行倒れがゐるよ。」

「乞食だよ、原の乞食が死んでるよ。」

「可厭な顔！ぞつとしたわ。」

「嘘、お前さんの顔に似てるよ。」

どつと笑つて行つてしまふ。

五六人の小學生徒が來たが、死屍を見ると怖れて一散に駈け出した。

その後に一匹のムク犬が來た。死屍の手足を嗅いてゐたが、顔の邊りをつるりと嘗めると、すたすたと逃

げた。

黒衣の僧侶が來たが、一目見ると口の中で「南無・・・・・」を唱へながら後も見ずに去つた。

續いて職工が通る、村人が過ぎる、何れも皆「詰らぬ他人の事だ」と云はぬばかりに、さつさと行つて仕舞ふ、霜解がして死屍の衣服は大分濡れて來た。巡査はまだ來ない、溫かい小春の日は、死屍と草鞍と野面に美しく照り渡つた。

（評）死といふ一大事も、第三者の目らは極めて平凡な、日常の茶飯事に過ぎぬと云ふ意味を、ポツリ／＼とした印象的の書き方で現したもの、本誌の應募小說中、從前には無かつた一つぽい氣の利いた作てある。唯小僧と云ひ、兵士と云ひ、其他學生に草刈女に、今少し死屍に對する感想の、それ／＼に特色が出なくては物足らぬやうに感ずる



（天賞）　お世辭　水戸　北川うめ子

○障子はり（人賞）

井上笹波女

午後の授業を他の職員に托して、吉野村子は校門を出た。「先生何處へ？」と袖にまつはる女生を顧みて微笑みながら。白い肩掛にくるまつた圓顏は冬の日を受けてほつと上氣して居た。

僅三丁許りの道距ではあるが、石が多いので隨分歩き惡い、村子は幾度か雪駄の前を滑らせて、漸く停車場へついた時は、もう下りの三番が構内で黑い烟を立てて居た。三番は此處ですり變へになるのだが、村子の友の西村俊子が乘つて來ると云ふ上り列車は未だ影も見へない、村子は手に持つて

居る風呂敷包を幾度か持變へた。中には俊子の好きな御所柿と、名物の煎餅、土地產の縞絹は羽織の裏にもと、それに近頃撮つた寫眞も入れてある。車窓の內と外、突差の間には顏を見る許り話も充分出來まいと、昨夜心をこめて自分の今の生活狀態などを書いた厚い手紙も添へてある。

村子はベンチを離れて、汽車の來る方を見た。三番目に逢ふ友の懷しい面ざし、黑眼勝の瞳を見張つて「まア村子さん」と云ふ口元迄もあり〱心に浮べて高鳴る胸を右手でおさへて立つた。

先月生れたと云ふ赤兒は俊子さんに似た圓顏か、まだ見ぬ其夫に似て居たとすれば興薄いがなど〱、とりとめもない事に頭をぼつとさせて居ると、直ぐ其處の鐵橋を渡る强い響がした。

「オヤ！」と村子は手早く肩掛を取つて風呂敷の下に疊み込んだ。手が忙がしく動くと共に眼も進んで來る汽車の窓を離れなかつた、笛が鳴つてガチリと云ふ音がすると長い車は止つたが、只三四人の乘降の客がある許り、窓から外を見て居た二人は皆男だつた。

これが癖で村子は首を右の方へ一寸傾げて、熱心に窓際を二回歩いたが、それらしい人は見當らなかつた。

次まで待つ心で身を引いて居ると、常も顏馴染の年若な驛夫が、「お乘りなさるんで？」「い〱え、逢ふ人があるんですが次のでせうよ」憚るやうな低い聲で云つた、「何て云ふお名前の方ですか？」「何、西村つて云ふんですが見えないから次でせうよ」と云ひきらぬうちに驛夫は物慣れた聲で、「西村さんて方はゐらつしやいまんか？」と二三の客車を流し目に見て、やがて一等室の前に突立つた。

もしやと村子は飛ぶやうに駈けて、油煙で曇つた硝子を覗き込んだ、驛夫がガチリと戶を開けると、向ふの窓際に乳母らしい縮毛と並んで赤兒をあやして居た束髮が、驚いて外を見た。瞳がぴつたり合ふて、「ア、俊子さん」と外から聲をかけると、眞向に腰掛けた八字髭いかめしいフロックコートへ子供を渡して、俊子は徐々と此方の窓際へ步を進めて無言のまゝ僅にうなづいた。

「私先刻からさがしてよ」と村子は嬉しさうにすり寄つて脊延びをしたが、急に思ひ付いたやうに、「其後お變りもなくて？、昨夜お手紙を拜見したの、今度は遠い處へゐらつしやるんですつてねえ」と人なつこい眼には淚を浮べて居た、「え〱九州へ……」と輕く窓の上

へかけた左の手には寳石入りの指環が二つ輝いて居た。
「今夜は東京へ？」となぜか村子は伏目になつて、手に持つ風呂敷を見つめたが兩手は妙に震えて、それを出さうともしなかつた。
「否、横濱へ宿る心算なの」と云ひ終らぬに笛は耳をつんざいて車は動き出した、村子は三間許りは車と共に歩を進めて何か云はうとしたが、赤兒と夫の方へ向いた俊子の後姿を見て、「ではご機嫌よう！」とそれだけ云つたが機械の響きで通じなかつたらしい。
取り殘された村子は聲を出して思ふさま泣きたかつたが、人中でまさか左樣もできなかつた。三年前病んで入院した時、日夜看護して呉れた時の俊子の心づくしと今日の冷やかさとを思ひ並べて、餘りに身の懸隔の甚だしくなつたのを悲しんだ。
淋しい野道をたどる時腕に重さを感じたので、小使の倅に逢つたを幸、柿と煎餅を袋のまゝ皆やつた、村界の土橋を渡る時には手紙と寫眞を懐から出して、ズタ／＼に引きさいて川へ流した、紅色封筒は切れ／＼になつてグル／＼と浪に倦かれて流れて行く。
寒い風に吹かれて家に歸ると、臺所に夕飯の支度をして居た母は、「うまく俊子さんに逢へたかえ？」「えゝ」と氣のない返事をした其顔を不思議さうに見た。
「お母さん、俊子さんはねえ片方の手へ寳石入の指環を二つはめてよ」「へえ、お前それが羨ましいの？」「いゝえ」と外向けた顔は淋しかつた、父は次間で障子張をして居る。
「さアお村、少し暖まつたらこれを手傳ふんだ、友達は金の指環をはめる、お前は竹の柱に茅の屋根つて云ふ家へ嫁つて障子を張るんだ、なあ」と娘の氣を兼ねるやうに云つて「ハヽヽヽ」と笑つたが、袴をぬいて其處に突立つて居た村子は、何とも答へやうともせず、障子骨の埃を指先でなぶつて居た。

（評）いつもながら此人の力ある文章には引付けられる思ひがする。而し文章や技巧の巧みな割に、讀んでシミ／＼感じさせると云ふやうな作が無い。小説を作ると思はずに、自家の懺悔、告白、さう云つた心持で飾らず偽らざる感想を筆に上せて欲しい。

【秀逸】

○二十五歳

本所　江原田鶴子

照子は、その長男の、今年四才になるのを連れて、小春日のぽか／＼温い午後を、神田の小川町通りを歩いてゐた。
夫の用で、上野まで行つた歸途である、正男には洋

服を着せて、海軍帽を被らせた、正男は照子に似て、眼のぱつちりした、可愛らしい男の子だ、母に手を曳かれ乍ら、何か飾物があつたりすると、母を其迄まで引つ張つて行つて見る。

照子は手に、正男に買つてやつた軍艦の縮本と、洋傘とを持つて、正男に言はれるとそつちの方へ歩いて行くが、心は何だか茫ッとしてゐた。そして上の空で正男に何か話しかけられると『うん〳〵』と云つてゐるか、ちつとも取止めがなかつた。

照子はもう嫁いて五年になつた、嫁いてからは余り出歩く折もなかつた、で染々と小川町の通りなぞを歩いたことは無かつたのである。小川町の通りは、照子には思ひ出てのある通りであつた。町並の家はみんな昔のまゝだけれどもそこを通る照子は、もう紫袴を穿いた、女學生の照子ではなかつた、子供を連れた、妻としての照子であつた。

足袋屋の看板や氷屋の看板が昔の通りである、それを見ると、照子の胸には、昔の記憶が何といふことなく喚び起された、友達と戯談を言ひ合つて、ふと見上げた時の看板と、今目の前にある看板と、少しも變らないのである、たゞその看板の面にはない五年といふ時が流れて、照子はもう子のある妻として夫に侍く身となつたのだ。

昔の自分が思ひ出されて、照子の胸にはのびやかな、樂しいやうな、また何となく移り行く世といふやうなことが思はれて、うら悲しいやうな氣になつた。

『母様！　あらあんな……』

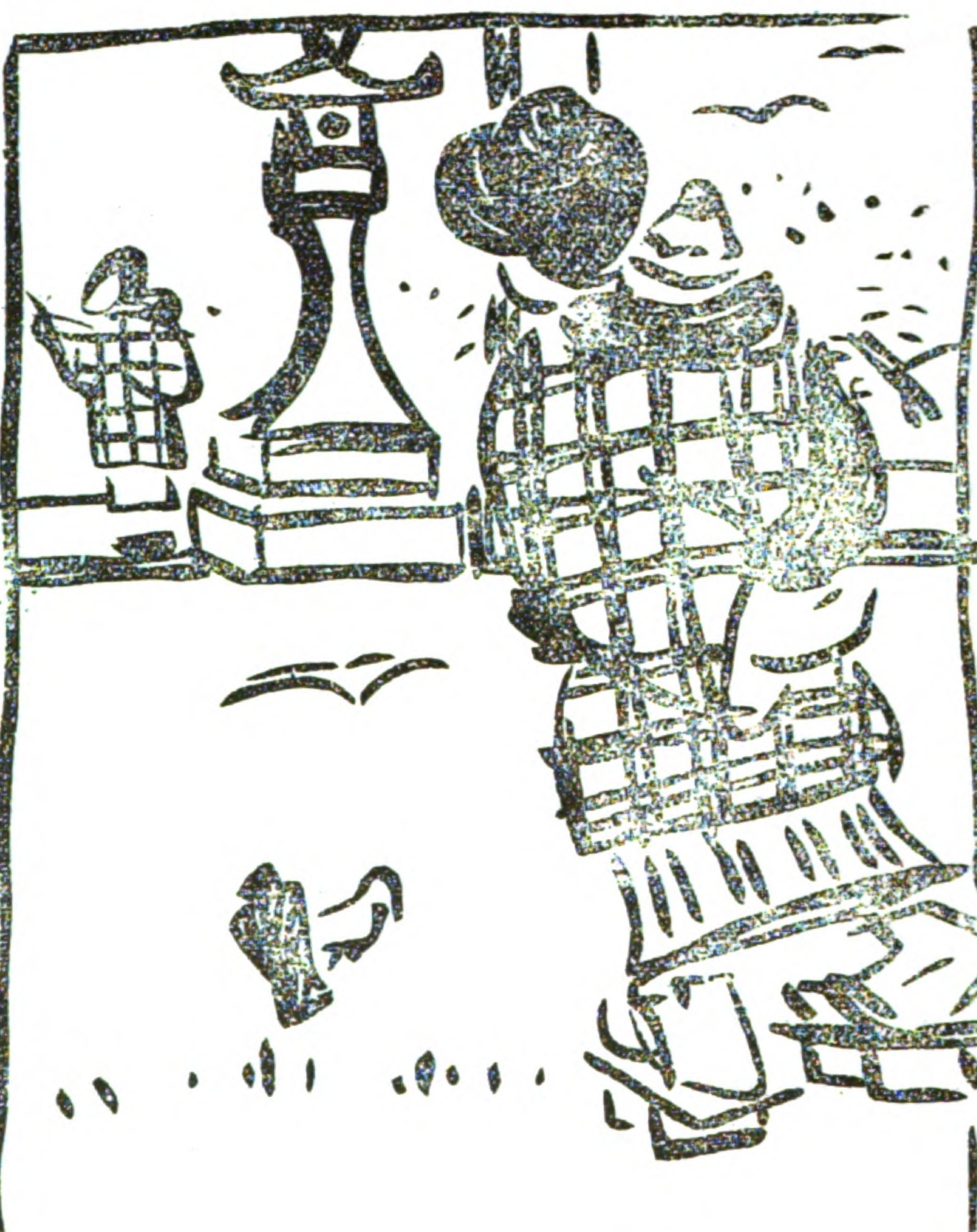
正男に袖を曳かれて、照子はハッとして我に返つた、見ると正男は繪草紙屋の前に立つて、下つた錦繪を指し、母の顔を見上げて莞爾してゐる。その愛らしい笑顔を見ると、何がなしに『私には夫がある！』と思ひ出されて、照子はほゝゑんだ、そして正男の方へ近寄つた。小春の小川町通は、ひつきりなしに、人や電車や、俥が通つてゐた。

ある洋品店があつた、その店に、大きな姿見が置いてあつた、そこを通る照子の姿がはつきり映つた、前髪を房々と取つた、あてやかな妻であつた、けれどもその中に爭はれぬ、世帯——母——といふやうな影が見えた、から穏やかな、處女ではない、苦勞といふやうな影が調和された、溫順しい顔だ、照子は兎に角、自分はもう娘ではないんだ！と思つた。そして私は二十五だ、と、その時強く思ひ出された。

『あなた山村さんぢやないんですの！』艶めいた、いくらか蓮葉な、浮いた聲に驚かされた、照子は前を見ると、見覺えのあるやうな顔が浮んでゐた、その印象がだん〳〵はつきりして來た、そしてその顔がポッツリ學校の運動場に浮んだ。

『あゝ茅野さんだ！』と思つた、これから莞爾した。

『私如何も貴方だと思つたのよ、だけどあんまり變つてゐらつしやるからね、もしか人違ひぢやないかと思つて……』



（地賞）社頭　青森　松尾千代子

茅野君子は、やゝ汗ばんだやうな、ほつとした顔をして莞爾笑つた。大變華美な姿をしてゐた、小紋の美しい色の羽織に、ショールをまとつて、顔に薄く化粧を施してゐる。呼吸をはづませたやうに莞爾笑ふ。

『どうも久濶でムいましたね、ほんとに……』

照子は意外に、たゞ君子の姿を見守つた、そしてもう子供を連れた自分の姿が羞しいやうな氣もした、

君子は可懷しさうに、それから正男を見守つて、

『これお子様、まあ……』と云つた。

照子はいくらか羞しいやうに正男の姿を見たが、

「えゝもうこんな……」

と云つた、その時、自分はもう母だ、母の役目をつとめてゐるのだ、ちつとも羞しいことはない！と、強い自覺が持ち上つた。そしてさういふ自分は何をしてゐるのだ――と、君子の姿を見た。

君子は若々しい姿だ、まだ身に責任がないやうな、放縱な、娘々した所が見えた、照子にはそれが賤しくさげすまれて見えた。

「貴女何處に？」

「私麹町に……」と照子は答へて、

「貴女は？」と反問した。

「私赤阪に……」と、やゝ頬を染める。

「何してゐらつしやるの……」

「羞しいわねえ、」と君子は笑つて、

「家庭教師！」と小さい、四邊を憚るやうな聲で言つた、非常になまめいてゐる。

「さうそれはいゝわねえ、」と亦、ぢろ〳〵見た。

「まあそれは可かつたわ……」と君子は忙しさうに言つて、「これから伺ひますわ、お處は　」と委しく聞いた、「貴女は？」と照子が言ふと、小形な名刺を出して渡した。

「それぢや、その中是非伺ひますわ！」と強く言つて、君子は向ふへ小走りに駈けて行つた。そして時計屋の店へ駈け入つた。

照子は亦正男の手を引いて歩き出したが、ふと、

「さうだ、茅野さんは私より一つ年上だ、さうすると二十六！家庭教師だなんて何だか！と、今のなまめいた態度を思ひ出して言つた。

そして身戰ひをした。

（評）文章の老熟したる點、恐らく是まで數多く書かれた人の作だらう。人の親――母と云ふ誇りはさりながら、殊更獨身の友を意味無く蔑すむのが解せぬ。今少し自家の小主觀を放れて、人生を見る態度がありたい。

○靜夜

松山市　三谷ふさ子

朝から宵の口まで吹きとうしに吹いた風はもう靜かにをさまつた。淋しさに、お美津は糸車の手を止めて障子を細くひいて、低い板廂を高いキビガラ垣の隙間から僅かに漏れる空を見上げた。吹き散らされた雲の名殘の二片三片、下弦の月の光に冴へて白銀色に浮いて居る、しばしの間、お三津はうつとりと眺め入つたまゝ、包み切れぬ歡樂の念に、胸には溫かき適度の水

を滿たした心地、瞳には、美しい夢の名殘を現に追う樣な和らかな光がみち〳〵てかゞやいた、が、ハッと我れに復めて、障子を閉めようとした時、流るゝともなしに流れ込んだ夜風のひやゝかさも、温かき血潮のめぐりに、ばら色にほてつたお美津の頬にはむしろ心地よく感ぜられた。

お美津は又絲車を廻わしはじめた。

紡績りに疲れた父は一杯傾けると直ぐ寢床を取つて今はもうグッスリと眠入つて居る。弟の新吾は村の若い者頭の家へ豊年祝の趣向を凝らしに行つて未だかへつて來ない。靜やかな初冬の夜はます〳〵闌けて、時折、簀の子天井を走るネヅミの音、お美津は嫁くまでにはどうかして之れて縞の一反なりと織つてお母さんに着せ度いもの」と絲を紡ぐに餘念もなかつたが、フト納戸の間から明りの漏れて居るのに氣が附いた、そして絲車の手を止めて耳を澄ました。サラ〳〵〳〵と衣摺れの音、活色の紅絹や空色やお納戸の反を室一パイにひろげさがした裡に物尺片手に思案顔の母の姿を思い浮べてお美津はほゝえまれた。來月の五日と云へばもう直ぐである「嫁かくせ〳〵花嫁かくせ」と村の小供等に節面白く囃されながらあの可愛らしい憲ちやんが提灯持、仲人の水車の小母さんに手を曳れてはづかしそうにうなだれて行く自分の姿、ホイヤ〳〵の掛聲勇ましく簞笥幾棹、長持何個、背の高い六さんや松爺が釵箱をかついで、長い列が丸に劍かたばみの提灯に宵闇を縫うて行隣村迄の道すがらの光景、とお美津は華やかな空想の翼を張つた。……

母のお兼は納戸の間から首さしのべてお美津を見た、絲車の手を止めて、淡い四分心のランプの灯にポーッと上氣した半面を浮かせて、頬にかゝる後れ毛をかき上げようともせず、夢見る樣にうつとりとして居る我子の美しい姿を見ては、うなづく樣にほゝゑみながら、新庄の若のお嫁だもの」と心の中に呟いた、そして又妙に身のまわりが明るくなつた樣な……女性の通有性‖虚榮心の滿足から依つて起る‖一種の誇に胸をときめかした、が一面、多年膝下で育て上げた愛娘を近い中に手離して他人の家へやらねばならぬかと、名殘を惜しむ淡い哀愁も身にそうた。同時にお美津の姉のお豊を思ひ出さずには居られなかつた。八年前、未だ小供だ〳〵と思つて居たのが親の誤り、お豊は十八であつた、村て名うての破戸者の權と駈走つたまゝ

死んだのやら生きて居るのやら一向に音沙汰もなかつたが一昨年の春、六錢切手の長つたらしい詫状が差出人田中權太郎、田中お豐兩人の名によつて舞い込んで以來、今では繁々と手紙の取りやりをやつて居る、權は戰爭でしたゝかもちけた後は堅氣になつて今では函館で相當な生活を營んで居る、お豐は今は子供の二人もあるとの事、今は幸福であるとは言ふもの丶北海物産問屋の看板をかゝげる迄五年間、遠い旅空での苦勞はどんなにあつたであらう、お兼はお美津は幸福者だと思つた、お豐をみじめな者であると思つた、そして思はずホロリとした。が、「緣喜でもない」とツッと涙を袖で拭うて口の中に「鶴龜々々」を繰りかへした。

裏口の戸をガラリと開けて新吾がかへつて來た。

「おっ母あん、美津姐未だ起きてるかい、もう寐よう、此の寒いのに、風邪でもひくと不可んぞな」

「エヽ、寐ようぞな」

お兼はそこいらを片附けて新吾に床を取つてやつて、そして自分もねまきに着かへながら

「お美津、もう寢ようぞへ」と優しく言つた。

お美津は糸車を梁にかけながら振り反へつて片頰に笑んだ。

そして三人が枕を並べて寢た。

（評）書いてある事は充らぬが、それを小說的に面白く讀ませる手腕は感心した。女とは思はれぬ筆だ。

○簡易生活

大阪　西戸政江子

一

今思ふて見れば吾れながら呆れる、然し女學校を卒業た當時は矢鱈と田園生活、簡易生活と騷いだものだつた、で平常同じ理想であつた青木さんと二人、同じあの花輪小學校へ赴任の辭令を貰つたときはどんなに喜んだであらう、朝に夕に美はしい山や森や野を眺めて天使のやうな罪のない少年少女を敎える身となつたことをどれだけ嬉んだであらう、學校は生徒が四百名ばかり男敎員が七名に女敎員は竹中と云ふ既に三十を越した人と青木さんと妾と三人であつた、

もつとも田舍と云ふもの丶町の事であるから郡役所郵便局警察署と云ふやうなものもあつて人口は二千ばかりもある一寸した小都邑であつた、その内に追々知人も出來て來る、一方には婦人達の組織した「スミレ會」の幹事の人々にも言葉を交すやうになり誰れ云ふとなく妾は文が甘いと云ふので會誌「スミレ」の編輯方

さへ依頼された、思へば一番樂しい時代であつた、かつて理想の簡易生活の味を除々と試みつゝあつた。處が僅かに三十日、赴任以來、先輩として蔭になり日向になつて吾々二人を引立てゝ呉れた竹中さんが突然辭職めて三里程離れた他校へ轉じて仕舞ふた、その別れるとき妾に向つて、

「貴女は此の學校や町が氣に入つて？」突然妙な事を云ひ出した、妾は妙だとは思ふたが別に考へるまでもなく、

「それは云ふまでもない事よ、妾の理想の土地ですもの」と答へた、

「それは貴女の買被りよ、まあ折角御用心遊ばせよ」つて別れたがその當時、妾は別に氣にも留めなかつた、

二

赴任して五ケ月は夢の間に過ぎた、妾の心的狀態に大變化が起つた、簡易生活否此の學校に教鞭をとるのが嫌になつて來た、フツト思ひ當



（入賞）きいてみて　牛込　佐野貞子

つたことがある、竹中さんと別れるとき、「それは貴女の買ひ被りよ御用心遊ばせ」と云はれたことを思ひだすともう矢も楯もたまらなくなつてその日退校の途青木さんに、

「貴女、今の學校好き？」竹中さんそのまゝの問ひやうをした、

「えゝ」餘り突然だつたので青木さんも驚いたらしい、

「妾、あのいつそ辭職めやうか知らと思ふの」と云ふと青木さんは眼を圓くして「まあ貴女突然にそんなこと仰しやつて貴女どうかなすつたの？」と云はれたが、その日はそのまゝ別れた、けれども妾は校長とも云ふものが人を侮辱するも甚しい、口惜しくて／＼仕樣がない、斷然辭職めやうかとまで思ふたが當時家事の都合もあるので獨り苦るしい胸を押さへて居た、

その次の日曜日に久し振り竹中さんが訪ねて居らし

つた、種々物語つた末に一件を殘らず話した竹中さんは、

「まあ貴女にまでどすか」

と一寸驚いたやうでしたが、「妾の云つた事、當つたでせう」と云つて「貴女の理想主義も大分終りに近づきましたね」と笑談交りに云はれたが妾にはその言葉がわかつたやうでわからなかつた、

その后、口惜しいながらも靑木さんが親切に慰めてくれるので無理に通學ふておつた、無論靑木さんには今度の出來事は一口も言はなかつた、

「貴女此の頃はどつかお惡るいの、大變顏色が惡るいのよ」と言はれた事も度々であつた、その都度打ち明けやう／＼と思ひつゝそれとは明しかねて「いゝえ」と言ふのが常であつた、

三

それから一ケ月もした或る月曜日であつた、靑木さんが突然一週間の缺勤屆を出した、まあどうなすつたのだらうとその日五時間の授業を嘘の空に終つて直ぐに靑木さんの下宿を訪ふた、

「まあ貴女どうなすつたの突然に？」

靑木さんは床に寢て居らしつた、妾を見ると「まあ」と云つた儘、手を握つてハラ／＼と淚を流した、妾はハッとしてそれとなく問ふて見ると妾しと同じ目に遇つたと泣きながら告げられた、そしてすぐに學校を辭職やうと仰しやるので、

「それては貴女の損よ、今そんな事なすつちや、人は貴女ばかり惡く云ふわ、竹中さんともよく相談しますから」

妾はお氣の毒なやら口惜しいやらで赫々した頭を無理にかゝへて、どうしやうかと、その夜、一夜まんじりともしなかつた、

翌日の新聞には「松川校長と靑木某との醜聞」と云ふのが揭載た、花輪町民は非常に激昂したけれども二十年來松川校長に恩を受けた町民は校長の非は一つも言はぬ、今度起つた事の全部を靑木さん一人の罪のやうに云ひ出して、そんなみだらな敎員は片時も此の町にはおく事が出來ないと意氣まいた、

事情を知つた妾はもう默つて居られなくなつた、もう氣も狂はんばかりになつて靑木さんを辯護した、思へば「スミレ」誌上十何頁に涉つて長文を出したのも此のときであつた、

竹中さんも訪ふた「兎に角、骨はおつて見ますが……」

り買被つては不可ません」の言葉に妾もムツとして「でもスミレ會には郡長の夫人町長の令孃など隨分有力者が居るのですから、それに事實、青木さんが可愛さうですから、それに貴女かて校長の非は御存じなのですし、たとへ青木さんが免職になつてもたゞ青木さんの潔白だと云ふことさへ町の人が知つてくれたらそれで充分なのですから」と云ふたが竹中さんは何も言はず笑つたばかりであつた、

四

赴任して僅かに九ヶ月、理想の簡易生活も嫌になつた、夢中になつて盡した事には首尾よく失敗した、妾の「スミレ」に揭げた熱烈な長論文も反て自分の除名さるゝ原因となつた、その有樣は管々しく今更云はずともである、成程竹中さんはよく云はれた、妾の買被りてあつたのだ、誰れを怨うもない、

その月の末妾はこゝえ轉校して來た、

(評)事實有りさうな事に思はれるが、弱き身を以て、濁つた社會の風波と闘ひ行く年若い女性の迫害が思遣られる。而し「理想の簡易生活」と云ふ意味が分らぬ。それに年上の竹中と云ふ女教師なぞ、今少し箇性の現しやうがありさうに思はれた。

○伯母

讃岐　みち子

來年から陰曆廢止といふので先祖代々生れて今年まで舊曆が身に泌みついて居る村の人は皆懷しい戀人にでも別れる樣な氣持で松の内に炬燵を圍んで居る、年賀にも出ない、又來る人もない、田舍は氣樂なものだ、春子は一日辛氣臭く内に籠つて居るのが嫌なので晝から大橋の伯母の家を訪ねる事にした、出掛けて見て二月の風は却々身が入てると思つた、此からが漸々事實上の冬に向はんとする曆上の春だもの、おまけに北風は眞正面に來て結び立ての髮も袂も裾も一樣に吹き捲るゝのみか田舍の凸凹道の粉砂を烟の樣にたてて目も口も開かない、内を出てから八町、只寒〳〵と思ふばつかりに他目一つせず白足袋の爪先のみを視詰てスタ〳〵と歩いて來た春子は一氣に暖味を感じた、前より小歩て村役場と豆腐屋との間をぬけるともう三間巾の新道路で砂礫が置いてある、之から五軒目の高い土藏造の家が伯母の宅なのだ、春子は手袋を取ながら横へ廻つて勝手の戸を開けた、其所には一昔も前に流行つたと思ふ太い黑天鵞絨の鼻緒のすげた中古の女下駄が脫てある、上框の障子に手をかけたが「ハテナー」と思つて手をはずして見合した、客は奧の六疊に居るらしい嫌に耳障りのする聲だと思ふ、春子は茫然として上らうともせず無論聲もかけずきよろ〳〵と勝

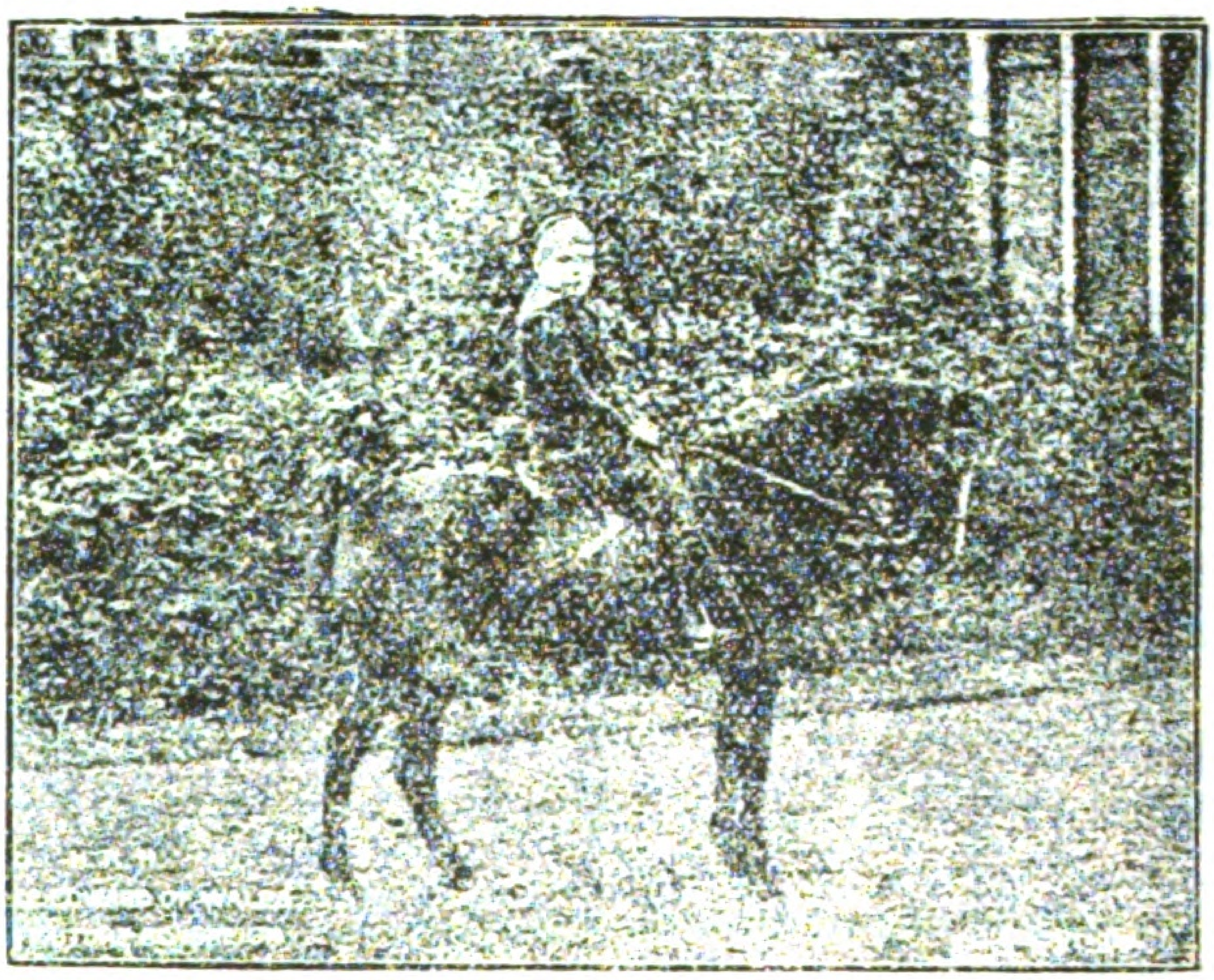
手まはりを見まはした、そして斯様な事を思ふて居る、「伯母は一人者だけに世帯まはりが小さい」と今更らしくさう感じるあの抱へて持上る位しかない水瓶、あれでも用が足りるのか知らと思ふと可笑しい程だ、と言つて又黒い煤けた天井や、荒壁に直に張りつけてある新聞紙の黄色ばんで居るのや、棚に不用の大釜が倒に伏せてあつて正宗の空壜が醤油徳利に代つて居るのやを見ると何だかかう――家の内が陰氣で淋しい――「ほんに明ても暮れても寢ても食べても只一人だ、春が來ようが、花が咲かうが、和かい一家團圍の樂しみとてはこつから先もない伯母だ」と春子はしつぼりと俯垂れた。

「まあ春さんかい寒かつたらうさあお上り、」といつの間にか伯母は障子を開けて體を半分外に及び出してる、そして又にこ〳〵と「皆丈夫で年をとつたかへ」といふ春子は先をとられて澁つたげに「伯母さんも御機嫌よう――」と可憐しいといつた眼で彼方を見上げた「お客さんですか何處から……」と聞くと伯母は眉を顰めて小聲で「山田の姉さんよ嫌味ばつかり聞かされて」と後は苦笑つて小皿に金山寺をつけて持つていた、後に從いて春子は叮嚀に兩手を下げた婆さんは目を光らして「ふん、十八になつたのかい、好い娘になつた」と見上げ見下して居たが又しても箸をとつて櫻味噌をせゝつた、伯母は何が氣に喰はんのか沈んだ振りをしてる春子は眞鍮の火箸を弄くりながら時々婆さんの方を盗み見て種々な事を考へて見る「まあ何て氣障な婆さんだらう、亡くなられた此家の伯父さんとはどこから見ても姉弟だとは思へぬ、從姉の敏さんが顔見るのも御免だといふ筈だ」と此時婆さんはぐいと茶を呑んで「なあ久米さん、好いて氣逆ひ言はうてはないが先刻から話す通り、さうまで女の子に學問さして何にしやす。敏も呼び戻して一枚からの賃縫でもさしな」と茶碗を下に置いて「馬鹿げに月何圓のかん圓のとない中仕送つて――御家老さんのお娘子じやあるまいし、お前の考がないけに先祖の財産までなくして、はいる巣まで此樣じやないか」といふのを遮ぎる樣に恨めしげに「姉さん私だとて子供じやあるまいし其位な事考へんでもないが後僅にして虻蜂とらずにするのもと心棒して居るんでござんす」と横向いてほろりとなつた、仲にたつて春子は氣をもむばかりだ、室は白けきつて三人とも默つて居る「婆さんは不興げに齒痒らしげに唐木綿の布久沙をくる〳〵と捲いて兩

端を括りもつて歸ると言ひ出した

「あゝ親の內だつて不滿らんもんじや、情なうなる、やがては先祖の位牌にまで雨露がかかるのか？」と毒舌づいて襟巻をとつて〳〵、「正月だからせめて一夜ゆつくり」と、止めるのを聞く耳もたぬといふ風にさつさと立ていた、見送出して來た伯母はぐつたりと兩手を帶の間に押入れて力なげに坐つた、そして愁げに下向いて默つて居る、春子はもう胸が一ぱいになつた、「伯母だとて此處へ來る時は十三棹もかいて持參金の百八圓も持つて來たさうだ、悠に一生食べられるものを、本當に女程損なものはない、自分だとて人妻となればどうせ一度は早かれ、遲かれ、夫に別れてこんなせち辛い目に逢ふことだらう」と思ふと不安と恐怖とが一時に胸を襲ふて來る、ふら〳〵した頭は何の思慮もなく獨身と叫んだ

（評）忖度し過ぎるか知らぬが、此作は作者が實歷から得た材ではあるまいか。言はんと欲する事ばかり多くて、筆が徒らに混亂して居る。小說を書くには今少し冷かな態度で書かなくては可けぬ。



馬上の英皇孫　（無名子寄）

○怪我

駿河　もとこ

午後四時に校門を出た芳子は、今日も亦、ひたと俯向いて考へ乍ら、忙がしい家に歸つて行く。冬の日は今にも山に落ちさうになつて、冷たい風が颯と襟を吹き、裾を披拂かせるのに、芳子の脚は餘り急がうともしない、矢張トボ〳〵と歩いてゐる。

芳子が田島姓を名乘つた迄には、短からぬ面白い經歷がある。

芳子と良人の啓三とが始めて知合つたのは、某町に開かれた慈善音樂會に於てゞあつて、今より二年前であつた。當時音樂に浮身を窶してゐた芳子と、音樂學校の助敎であつた啓三と趣味の投合したのは云ふまでもない。而して何時か二人は、堅い約束を交すに至つた。

處が啓三始め田島一家の人々は、皆堅固な基敎信徒であつた。て其の母親は、他宗の人間を家庭に入れる事は出來ぬといふを楯に——裏面には芳子に慊らなかつたので——啓三に戒告した。

然ども二人の熱烈な戀は、芳子をして日曜日毎に、五里の道を汽車で往復して、某町の敎會に出席せしめること一年有半。遂に洗禮を受けて、二人は莊嚴な結婚式を其の敎會で擧げた。

是まで漕ぎつける迄には、芳子は隨分地方教育界の惡評の中心に立つた。管理者からは嚴しく注意を受け新聞紙上では惡しざまに罵られた。『此戀は圓滿を遂げられやうか？』と芳子は屢々悶えた。が、露疚しからぬ戀！何を懼れ何を憚らう！と自らも勵し、勵されもして、遂に終迄志を高く持して挫かなかつた。啓三と聖壇に並び立つた時は『あゝ勝利者！』の聲が勇しく耳に響いた。と同時に過去の苦鬪を思ひ浮べては、今更乍ら胸を懼らせた。

斯うして芳子は田島の家庭の人と爲つたのである。然ども啓三は常に東京に在つて、甘い言葉を聽く事も云ふ事も出來なかつた。戀の成效者であるだけ、芳子は勘からぬ寂しみに悶えた。其處へ持つて來て姑は、基教信徒の樣にもなく、啓三の不在を幸にして、隨分酷く當付ける。尙ほ其上に大勢の義弟義妹の世話を一切見てやらなければならない。朝は暗い中に起き、手一つて煮炊きから掃除、後仕末まで爲て學校へ出掛ける。歸つて來れば、再夕飯の仕度にかゝる。夜も十一時過てなければ眠ることは出來ない。

此頃は既う身も心も疲れ果てゝ始終呆然してゐる。顏色も見違へる程惡くなつた。だから家では姑にグヂ〳〵してると叱られ、學校では校長に爲る事に精神が這入つて居らぬと云はれる。然ども既う芳子には、それに就て一々反省する餘裕は無つた。家に居るのも不快、學校に居るのも不快。芳子は毎日一條の通路に依つて、不快と不快との間を、トボ〳〵と孵向いて往復してゐるのだ。

這那中でも、遙に東京の良人を思ふと、一點の光明を認めて、眼が輝いたものだ。がそれも此頃ではだん〳〵薄らいて來るやうに思はれる。別に芳子から今の苦境を報じはしないが、夫にしても良人の手紙には、例も一點の慰撫の言葉が無つた。否手紙も此頃はめつたに呉れた事もない。けちな取越苦勞に過ぎなからうけれど、何日迄も斯う遠くに懸離れてゐて、此儘追々と愛情が冷めて行くのではあるまいかとも危ぶまれる。

寧そ飛出して東京へ行つて終はうかとも思ふ。

這那風に思ひ續けて、芳子は歩いてゐるのである。

夕暮の町中は殊更に忙がしさうに見える。方々の役所會社工場等から歸る連中が、ぞろ〳〵と通る。自轉車の商店の小僧等が、けたゝましく鈴を鳴して走り去る。點燈夫が馳けてゐる。哀れつぽい物賣の聲、眠む相な汽笛の音、勇ましい荷積の掛聲――。たゞ雜然として犬までが狂ひ廻つて、人の足にぶつゝかる。

其中を芳子は矢張り腑向いて、トボ〳〵と歩いた。とある横町に曲り掛けた時、『危いッ……』と頭の上で呶鳴られた。はつと芳子は顏をあげた。と直ぐ眼の先に馬の鼻面が突出た。

あッと思ふ間に、芳子はバタリ其處に倒れた。馬も續いて搔と許り其上に重つて倒れた。

一間許前に放り出された騎手が起上つた時には、既う人がゾロ〳〵と寄つて來た。

＊　＊　＊　＊

芳子の氣が付いた時は、病院らしい一室の燈火の下に寢かされてゐた。青い額に巾廣く繃帶が施されて、白い拭布の上に束髮が解け掛つてゐた。

何處を怪我したのか、軀中に痛みを感じて芳子は身動きも出來なかつた。

（評）女主人公の感想ばかり述べて來て、突然馬に敷かれたと云ふので何だか讀んでゐて狐につまゝれたやうな氣がする。同じ材料でも今少し書きかたに工夫したらと思ふ。文章は力があつて女性には珍らしい、

新體詩

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も律格も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○人生のすゑ（天賞）

長曾我部菊子

冬もすでに深い頃だつた。――。
夕暮の町のよつつぢへ、裄の萎へた
裾の綻れたきもの――
黒い着物を着た男があらはれた。
二人三人。――（朦然として眼うるみ
手はわなわなと性もなくふるへる。）
中央を。一人の愛らしき少女立ちて
何をもとむる佇立てあらう？
紅のたゞもゆる紅の帶のみ、
夜の色に染まらんとしつつ、
そまらんとしつつ。――。
人の聲は黑き地よりきれぎれに、
（横小路だらう。な。おい。）と伴らし
いのをみかへると思ふ刹那、
ヒューと一陣の木枯吹きおちて、
ガサガサと干乾びた落葉や紙屑が往
來を走る。
少女の紫綸子の袖があふられてひら
ひらする。――。
しばらくすると町の十字街頭はどこ
へか人を送りて、
猛々しい木枯があとを吹き捲る。
角の家は四軒ながら小さく閉ぢてあ
つた。

木枯の颼々と吹く宵てある、疲れ切つて人をたづねて來てたつきの道を求めようとてもするような二人の男と、紅の帶を風のなぶるがまゝにして辻に立つてる一人の女と風の聲、塵の聲四辻の家は皆小さく閉ぢてあつた、三人の運命はどうなつたか。あゝ今は徒に花鳥風月を弄ぶ時代ではない。

○指を痛めて（人賞）

遠江　岸つぎ子

動かぬ西の朽葉雲
そのまゝそこに消えければ
頰のべ寒う風吹きて
あゝほつれ髮のかきもえぬ
傷める指をいだくかな。
女の業のならはしの
我も一人に洩されば
針にはつよき性のもの
口にふくめて物も言ふ
透見の衣の胸の上に
立てても笑はしつるもの。
ぬけて辷りてくちなはの
肉深に見しおどろきや

若き少女の血の色を
紅絹に誇りて染めけれど
紫色の跡の痛ましう
身内を占めて針ぞ生く。

あゝ濕み音に虫鳴けり
さそはれて吾も聲たてむ
枯れのこりける桐一葉
そと肩打ちて地にしけば
白く卷きたる指先を
押へて眉のしめるかな
「衿にさす針くせもたしなみて爲ずなりし」
それは有心これは戀せぬ少女子ならまし。

【秀逸】

○弔詩

（田中久子の君をかなしむ）

信州　松崎よし子

「母の膝に今年の秋もすがらむ」と
古琴爪のわなゝきて
とぎるゝ曲と嗚呼きかる
木枯の音、
君がみ魂を誘しか、
花十八の彩の美の、
もゆる御胸にさまぐの
綵美しき錦絹
織れども盡きぬ丈ながら
現象も思想も秋の日の、
花やぐ寂よあゝ呪詛。
君淨樂れと祈るかな。

「田中久子死す、十八歲、病名知るべし」とは醉茗が予におくれる手書の文なりき。嗚呼田中久子死す、いつはりの人によりてかたちつくらるる僞りの世に、僞りならざるものたゞ死あり況んや童貞にして身まかりしものをや、おもふ、老殘いたつらに生きんよりは妙齡にして花と散らむには若かじ、人生何ものぞああ人生なにものぞ。

○冬の花

岩代　根本松江

去年なりき、夢にのみ見し仇花を
慕ひて哭きて、ひたぶるに、
すがらむ御手もなければか。
襖に映る影坊子、みだれ勝ちなる高島田
煩悶る息吹仄白う、暗に消え往くたまゆらを、
少女の胸に迫り來るあゝ寂しらのえ耐へじな。
今宵は吾れに夢もなく、秋の長夜はかくてぞ更けぬ。

今は人妻、君となれば
吾れは往かむ。
いばらの野べも、サハラの地へも、
ふたりの戀は、冬をも知らて咲く花の如、
愛に温くめる血汐は永久に——
活動の力與へむ。幸なる哉。
あゝ去年今年、變るは世の狀態人の上、
異らぬ情に浴しつ吾れは
今冬枯れの野面辿りぬ。

あなたはちか頃詩がへたになつたようぢや

ありませんか、どうしたのです。

○黄昏

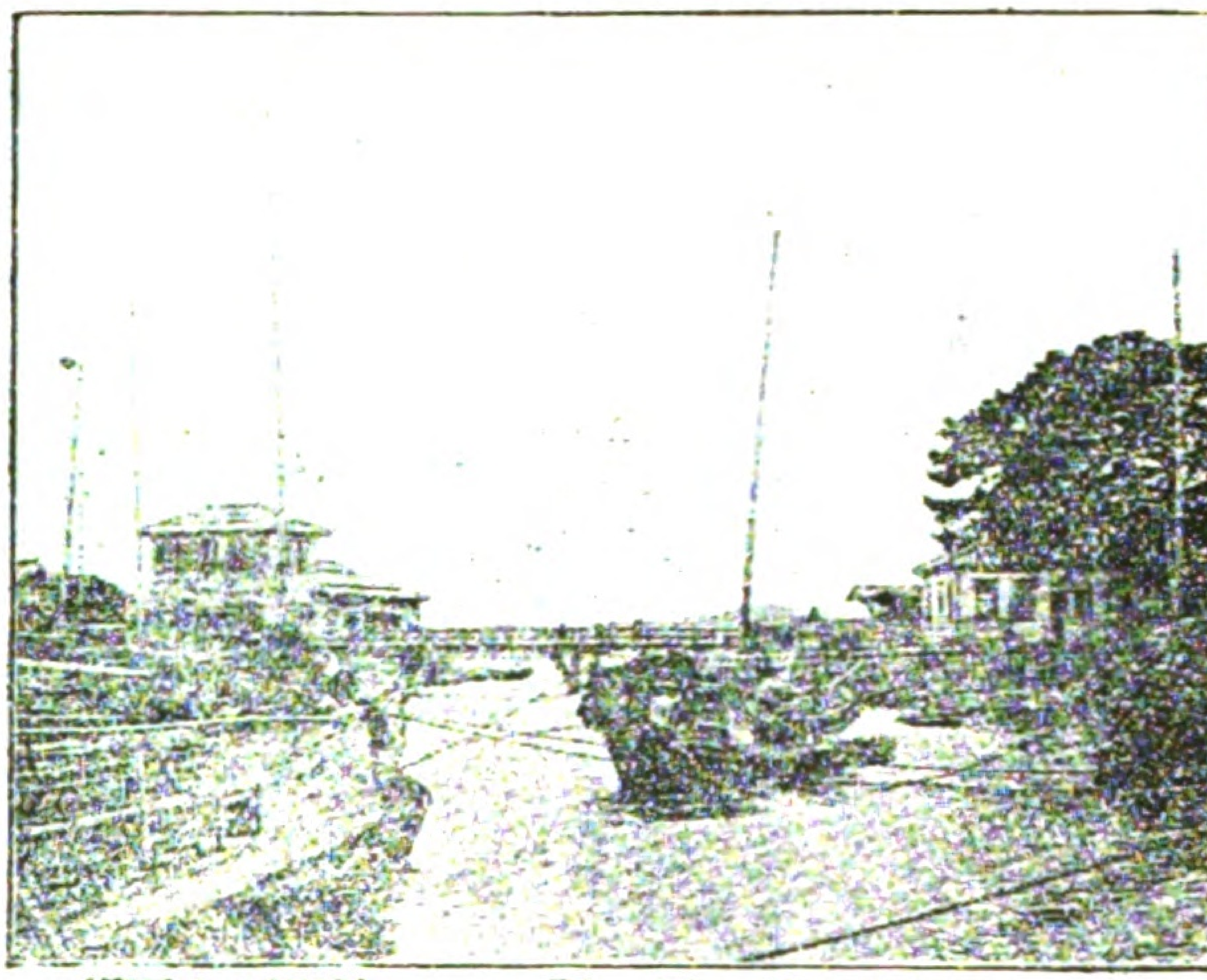
靜岡縣　富永朗子女

眞冬野を
日のおん神はみ車の
轍の音たかくきしらせて
急ぎ過ぎけり町はづれ。
眞紅なる天の帷幕の
かゞやかの夕日の園に
もろ神のむらがりあそぶ其かなかを
日の御神行く、おもかげの
あな尊しや。
重なれる雲のいくへら
むらさきに、金色の光りの輝きて
今を別れの闇に入るべく、
美し男は雲の上に立ち
みて揚げて我を招けど、
聲たてて我を呼べども
あなかなし、行程は遠く十三萬里。
急ぎ行く、日のみ車の影小さく
轍の音もなくなりぬ。

「轍の音もなくなりぬ」と歎から紳に切つてしまつては雲の上に立つてた日の紳さんも開いた口がふさがらなかつたらう。

○虞美人草

下總　小澤まゆみ子



閘津碼頭（境野とも子寄）

美くしき若き少女の、夢の香に若き
追想のもえけらし。——虞美人草咲
く園
朽ちなやむ青さを恨み、血狂ひて、
やくかなやくかな、殺活のくしき香
放ち。

燃ゆる血よ燃ゆる心よ。——たわ
わなる
焔の華と思ほゆれ。——あゝ虞美
人草。

樂欲の甘酒すゝりて虹のごと、
美酔へる姿、若き日の、もゆる心
とや——。

少女子の十八春のわが命
わかきほてりの、戀、夢よ——あ
ゝ虞美人草

まゆみ子とは世を忍ぶ假の名にして、まことは秀才文壇などに見受くる小澤紫鼓といふ男なるべし。嗚呼千葉縣一の閨秀作家無きか

〇何もの　松山市　三谷ふさ

何もの丶音としもわかず——
秋の森の木下の闇に
哀調を聞くらむおもひ
夢の香の名殘を誘ふ白銀の——
琴の空音か、縺れ合ふ——
白絹の糸か、あるはまた
常世の秋の草はらに
草の實拾ふ女の神の
うたの細音か、しめやかに
そゝぐ時雨は。

疑ひもなき女ならましかばと思ふ。

〇墓　丹波　坂根竹野

夕ぐれの墓にたちて、出來ごゝろ、
石碑見遣りぬ。石碑は雨求くらしも
干からびて、なほか細き生の根に、
犇々と喰ひ入る、灰ためる苔に纒か
れて、
死を標榜る冷たき色に、なほしも立
てり。
我は、我と我好み心に、手觸れぬ石
に、
あゝ、何の心ぞ、根深く刻み雨待ち
し、
苔はぼろ／＼、事なく落ちて、あと
羽蟻ぞ通ふ。一しきり、
せか／＼と、せか／＼と。
夕日を染に、死の岩窟へ。

藝術に石碑があつて、目を止めてそれを見た、死の色にかたどれる苔が「生の根」に喰ひ入つてるとすると、石碑は生きてたのであらうか。でも結局羽蟻が飛出したゞけでまあよかつた。

〇根なし葛　房州　高梨ちせ子

おとろへし秋の森なるわが胸よ
生命のみどり枯れはてゝ、
かのかゞやけき柘榴の實
生血漲る美き色も
絶ゆるものとは思ほえぬ
樟腦の香の希望とて
いつか消えゆき色あせぬ
しかはあれせめてかざらむ追憶の
根なしの葛よ花はなく
甘し果もなきものから
たゞ十重二十重ひた蒔きて
悲しき姿枯れがれし
樹々の面を一時の
さへ黄にぞ覆ふなぐさめ。

「蒔きて」は「卷きて」ではあるまいか、「樟腦の香の望み」とやらも虫に喰はれぬまじなひにでもなるなら兎に角、手がつけられない。

〇笑み　岐阜　藤田よし

もろ鳥はよき音惜しみ、
草花はよき香つゝみぬ、
秋風の森、野なればか、
藪中に群るゝ椋鳥、
舌鋭きは百舌鳥、ひよす、
燕は南に往にし。
雁來は紅なるものを。
葛かずら引くは誰が子ぞ。

指染むる是よ金色の、
紅にかへ君は嘗めずや、
行きずりの三人五人、
花もついぢらしければ、
流眄にたはれも見たれ、
伶人はただ微笑みて、
朝月を森に殘せど、
古衢の家並を戀うて、
猿曳の猿は笑ひぬ、
白い齒を見せて笑ひぬ、

「むらがるゝ」は「むるゝ」の間違ひとしても「雁來は紅なるものを」とは何の事だか、人が若しあなたを「藤は田なるもの」と呼んだとしたら、はいとそれでも返辭しますか、馬鹿な。

○わが涙

上毛　岩田せき子

心なる花を啄ばみ、
蕊の香あさり倦みて、
うつり去る君は啄木鳥、
空ろなる胸の野づかさ、
立てりわが魂の墳。

背き往く人をしなほも、
憎み得ぬ弱さ思へば、
おのづから涙は流る、
わが涙貴きものと、
自らの心なげけど――。

莒にむくつきの假名をふつたり、枝をへたとよんだりされるのを見ると、傑作を作つても人には信用されませんよ、

○冬の夜

和泉　藤阪　綠

下駄の音、獨言つ聲、
遠のきて、また一しきり、
ざはざはと、杜の木うなる。
黑髮の、香もかく、
くろ光る、紫檀の机、
麗はしき、金文字入の、
詩の本、小さく讀みぬ。
「われはしも、戀に悶ゆる、
世の中の、弱き女よ。」
悶ゆるも　仄醉心地、
朧なり。――と笑の冷たき。
風止みて、雨の香よす、
燈の、音のみ冴え、
冬の夜は、靜に更けぬ。

「黑髮の香ゆかし」きその主は、作者か、令妹か、細君か。「黑光る朱檀の几」あぶらだの垢だので光るのでなければ大によし。

○藻岩山

札幌　嵯峨忠子

藻岩の山の空高く
崖に枝出しゝたもの木の
月は宿らん、此枝に
鳥は老ひけん、小枝なく
紅葉、落の風に啼く
名もなき鳥の群がりて
散り來る、木の葉縫ひ遊び
鉋音、近く聞ゆれど
風の吹く音と、聞きもせず
羽の勞れも、知らぬなり
猿が掛け橋、渡りつゝ
紅葉、狩るとて登り來る
小女の群や、美わしき

熊の出つると、噂して
語りつゝ歌う、笑すけれ
南に見をろし札幌の
市の望めも、樂けれ
遙に見ゆる日本海
荒らき、浪間に白き帆の
秋の夕暮れ、急ぎ漕ぐ
やがて、陽日の傾きて
小女の群も下りて行く
紅き袴のひら〳〵と
紅葉手に持つあひらしさ

わざと原文のまゝ出して見た、札幌を「さちほろ」はまだいゝ市を「ゆっ」といふに至つては論外である、多分この人てあらう或る役所につとめてゐたが、おや父が死んだので、さらに二週間の賜暇を乞ふとて長官にあてて發した電文が『ツツスンダヌスカ カンノスカチコフ』とあつたといふ、おわかりになつた方は手をあげて。

○曒光

上野　大沼染子

香はしき海のあさ霧は
東の野をかぎろひて
ゆるやかに、夢を解く
（あゝ美しき哉）——
神秘のほのめき。
雲は三千の簇ひきゐて
幵處の山——此處の森と
屯ろしぬ、藍の空は
今こそ常樂の——
姿をつくれ。
たまゆら霧はほのに色づきて
藍の空次第にしろく
あな崇高、大古の面地に
萬象はうなだれぬ
默示ふかく
筑波根を中に取りまきし
雲は皆、しづ〳〵と
南と北に隔たりて
壯嚴の守りつくる時
（あなたうと不斷の）
曒光かゞやく

「海の霧」といへば「霧の海」とはちがはう。霧深き朝に雲の簇々たるを見るのも不思議である。築波根の筑波根らしからずたとへば淺間としても[illegible]高としても差支ないように調法ては駄目だ

「指名課題」

鳥

一

大坂　木村奈江子

八尺の
帶は重たき我身かな——。
嫁ぎて七日萬人の
美はしといふ君なれば
朝取り出す小鏡に
びんのほつれをいとひつゝ
夕つくらふ眉がねの
濃きにすぐるを愛ひつゝ
うべ冲に翥く鈍色の
雲にみなぎる寂しらは
わかき血しほにふれざらむ。

松は稀なるまさご路に
白羽の鳥の群れも居れ
そを捕ふるとかけ寄りし吾子を浪の
取りてから
汐の満干に羽輕く
浪にむつれて昨日の如
磯には鳥の返れども
あゝいとし子は今日に
來ず――

さだめと云か然ば君よ
再何故と問ふなかれ
豊けき髪にくせ見えて
母と纒はるいとし子に
袂ひかるゝ曉は
妹よ。思ひあたらむ

新たに人に嫁して眉のび頬かゞやける妹と最愛の兒を失ひて纒く帶をすら重しとするに至れる姉と、妹は姉を盡して慰めすかせど姉はたゞ日ふ、やがて母とならば思ひあたるべきと、眞情、眞詩、われ斯の人の詩を愛す。

本所　遠藤竹乃

二

雲に泌む木枯吹いて
空寒き師走月なり、



糸繰り　近江　竹村光枝

夕焼は色彩を流せど
密やかに闇は近寄る
何ならむ鳥の行くあり、
ほのぐらうなりぬる空を
寂しくも羽を羽搏きて
辰巳より戌亥へかけて

つらからむひとりの
旅は、
結びえし縁の糸を
いづこにて汝はほど
きし
悵ましの身の運命か
な
寂しらを憑する胸な
き
わが姿月にてらして
紅の花なる枕を
かいくりし夢を偲ぶ
や
あはれ、伴慕ひ求き
つゝ
あすはまた何處の里に
――「死」の影の迫り來るまで――
憩ふべくさすらひ行くか――小さき

鳥よ。
るまで新しともおぼえず、たとへば巡禮の子をあはれむが如し。

○初對面　芝　田島きみ子

御友達の宅で、初めてあつた御方、
一目見て、頼りに思はれる、
あゝ云ふ方と、末長く暮したら、
心も樂しみも、一致して
樂しい家庭が、出來るに相違ない、
が、男て御きりようのものは、心立てが惡いものだと
若しか私の思ふ方が、惡寬だつたら、
又、初對面の愛は、すぐさめると云ふが、
あの男々さわ消へて、怒る顏、怠ける心、
あゝおそろしい、……でも戀しい、
友は聞きました、「あの方は御様子に似あはず、
學校を退校されました」と、あゝいやだ、
私は人の氣のつかない男々しい方を、愛したい、

○白鳥　山梨縣　手塚　芳子

七金山にかこまれて、
七彩色の花うけて、
薫ずる水をたたえたる、
湖の眞中に春姫が、
み手をすべりし指やうかぶ、
環なしたる珊瑚島。
島の司とこのよより、
生れかはりて君すまば、
波を枕の白鳥こ、
我れはかけらん島の上。

新體詩

○靜かな日　信濃　久保田たつ子

颯々と風笑む
おごそかに
いと靜かなる日
うつら／＼夢の如
ひたはしろ思ひ出は
古の少女心に
何處よりか
風につたはりて琴の音のする
おごそかに
いと靜かなる日

○若き戀　白芙蓉

百合の香高き月の宵
椽の丸窓そとあけて
君を見つれば嬉しくも
戀はとはなる命ぞと
手をとりまして、さゝやきぬ
耻かしわれは
母にかくれて。

○春夕暮　下野　平原琴子

白雲燒けて
紅と化しぬ
四の黒髮錦姫
琴引くよ靜かに
行く黒髮のみ澄みて
夕暮の艶姿
未だ變わせぬ

白妙の春日山
夕映壯觀なれ
錦の宮高く
遠く迹遁る
四山寺の鐘
「ゴン」と響き
程立ちぬ
赤き白き美しき雲
岩谷にかくれ
月さへ渡る

○うしろ影　北海道　石川きせ子

あすよりは忍ぶらん十八年の
春の日を
明なば同じ花の
咲くものを
夢に見し若き日の
以前の姿にかへるまじ
あゝ何時誰我を
こゝまで連れ來りしか
十八年の逝く後姿ぞかなしき。

○春雨の夕　筑前　田中登與子

春雨の夕なり椽に遊べる幼子の
猫貝小貝櫻貝何にすれてか
みな投すてゝ泣き出しぬ
横さまに打ち伏して
何を泣くと兄はとへども
如何にしつると姉はとへども
堅もたて得て只しく／＼と

○義理　なく花

すまない事とは知りながら
どうしてあんな男に嫁れよう
餘と云へば情ない恨めし世
よあゝ
父生存さば斯まで一人の母を
此の世には神も佛もなくもがなと
思ひながらも香焚て
君慕ばしと丈なす髪と
眞紅燃ゆる紅き衣
おやめはからぬ黒衣に
浮世を捨て佛に入らんか
あゝされど老まさせる一人の母を
一人殘して我入らば
頼に思ふ一人子のうちたへて
池に漂ふ根無草の
風のまに／＼ゆられては
あゝ我れ一人り
浮世のちりをのかるとも
一人の母を如何にせん
あゝ我が心一つにて
悔ゆるは多き事ならめ

○昨日今日

岐阜市　篠田とみ子

或る野のはてをとぼ／＼と
われは冥府をのぞむとは
春は花咲く野ならましを
飛ぶ鳥なやむ冬の空
熱さめがてに太陽は入りて
鐘の音強う耳にひゞけば
人目色よきわくらばの

寂しきはさだめかな

○山影

上毛　岩田千代子



園の白菊いつか荒れて
所せきおち葉やれ笠
かたぶきてそゝぐ時雨も
しと／＼と寒きに傘ぐ
まばらなる窓の呉竹
つや／＼と、闇を隠せる
灰色の、遠きの山々
寂しさに仄見ゆる

○草の琴

信濃　松本恵子

さやかにすめる月影に、
蟲の聲々集まりて
秋は夜すがら手枕の
夢もつれなき草の琴。

○里　路

福井縣　速水里風

故郷の路に似たる哉。
尾花刈萱秋立ちて、
うばら薊に露置けば、
さんろならねど、
ふく笛も、
あら面白の、
賤が女の仕業や。
晩の空に、
金星きらきら、
甦眠こなたを、
見守りたもふ。
あら懐しの、
母者人や。
あら戀しや。
わが郷里。

秋の野　　青森　立花とも子

○雀

長野市　西條梅子

雀が二羽小さき影を落して

チューないてお勝手の中をあるいてる
やがて板の間に人影が出た
大きな女前掛でぬれ手拭き〳〵
シイ〳〵云ふて來た雀は驚いて
岡の物乾場に歩いた
乾場には此夏來た若い嫁子
赤い襷て襦袢乾して居る
やがてこちらむいて愛想よく
輕くおじぎしてイソ〳〵下りて行つた
襦袢からは雫がポタリポタリ
肩の邊を日がさして居る

○冬の朝　越後　佐藤浪

たとへば絹越しの吉野くず
とれの如き白妙の庭を、
ふみにじらして子雀の
飛去るはづみに、
強くゆれたる赤なるてんの、
梢の雪がはた〳〵と、

○月光　芝區　中西繁子

靜かなる月の光
草も木も枯れ果てゝ
怪鳥のむくろの如き
冬の枯野に
白銀を布く。
生のなやみ
暗黒の中に
一點白く
梅花つかふ。
天地の大氣に吸はれ
夢多き宵春き血も
沈みはてける。
あふぎ見れば
月、星は
死の色したる
天地を
靜かに回ぐり照らす。

○寺の壁　兵庫縣　辻井浪子

秋黄昏の陽のゆらぎ
落葉林を透き洩れて
寂びしく見ゆれ寺の壁。
法說く道の衰へか、
見よ殘骸のさまなして
骨あらはなる壁の態。
大慈悲光のあらはろゝ
高塔さえも朽ち果てゝ
雨淵いすなるたゝずまゐ。
風の音すさむ草の野や
ひとりすらふわが眼には
寺の壁こそはたましき。

○平和の里　和歌山　谷田峰子

屛風めぐらす裏山の、
くまどり紅く空やけて、
豐谷落ち行く麥畑、
明日の日和のたのもしき、
椿こぼるゝ川べりに、
まぐさの籠を枕して、
落ちし花びら糸にさす、
小さき妹を待てるなり、
暮るゝも知らで遊べるを、
急ぎ出てなば泣きもせん、
牛の歩みは遲かれど、
堤に近き家路なり、
牧場は兄にまかせたり、
姉は厨におはすらん、
この靜かなる黄昏を
吹き試みん箱の笛かな

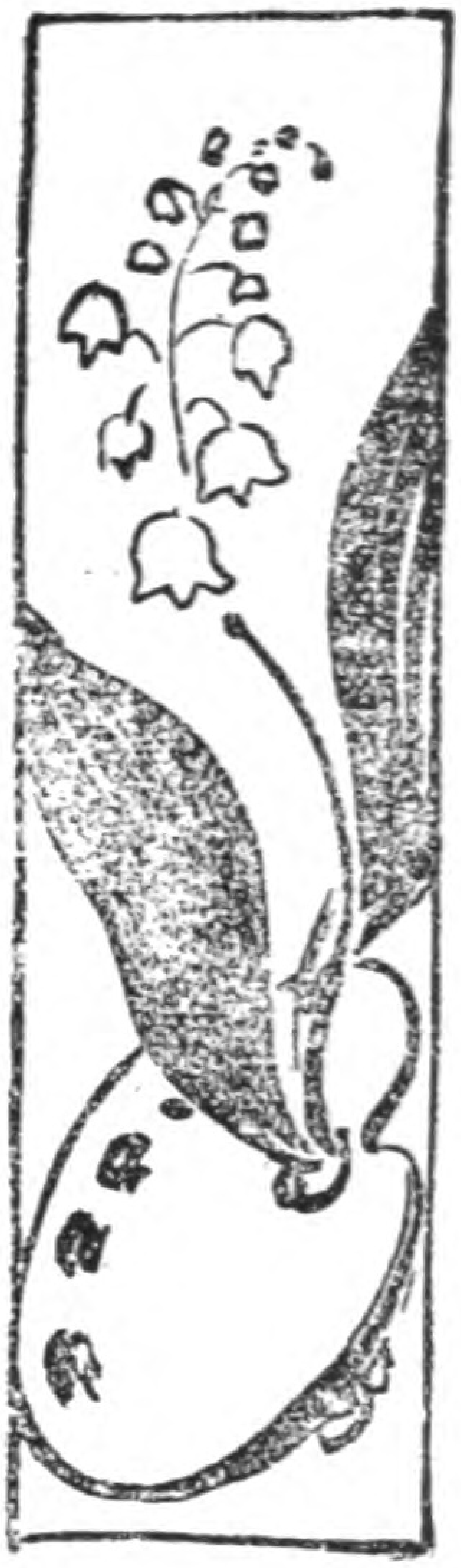
○冬の海　新潟市　吉田かほる

雪雲淒き冬の海
紫電きらめき雷鳴りて
やがて降り來る雨の音
雨に答ふる浪の音
天そゝりたつ岩が根に
逆まき狂ふ白浪の
叫喚の聲砕けては
叉寄せ返すとゞろ〳〵
男神天島に鞭打ちて
弩手に銀箭ひきしぼり
髮はおどろと振りみだし
勢ひ猛くたけ〳〵し
弦たゝいていらだてば
浪はます〳〵狂ふのみ
雨はいよ〳〵しきるのみ
暗憺として北の海

撰外課題（二月十五日〆切）

『たけくらべ』……（木村春江子　太田きし子
『よしとんぼ』……（野村桃子　根本松江子
『海燕』……（長曾我部菊子　河野まき子
『ゑぞ蟬』……山田邦枝子

美文



○規定　抒情、敘事、敘景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限乙種の賞を送呈す

○春の寒夜（天賞）

名古屋　やゑ子

園さんは手紙を書き終へた。けれど未だ机の前で、封筒と、自分の胸の想ひとを比べ乍ら、紫袱布の房をいぢつて居る。後で火鉢にかぢり付いて居た私は、ずつと部屋裡を見渡した。唐美人の掛壽と柱に掛けてある短冊掛牡丹の花の押繪。歌は「玉」不調和だと思つたけれども我慢しやう。

火があんまり宜いから、「園さん」と微聲で呼んで見た熱心に考へ込んで居る。肩から覗いて見ると大變丁寧に表書してある「園さん！」今度は大聲に脊中を叩いた「えつ。まあ喫驚したわ」と振り向く。「お暖りなさいな」と云つて「まあ奇麗な筆蹟ね」彼麽に美しく書いたのを見るのは始めてである。

「ホヽ汚ない繭からでも、美しい蝶は出るわ」謎見たいな事をいふ。「寝ませうか」「えゝ」と矢張りあたつて居る。園さんは霞も彩雲も晴れきつた、眞晝の様な面ざして。

二人が差し向ひで居ても、大變な懸隔が在るやうな。二人の間には深い／＼溝が穿たれて居るやうだ。私は込み茂つたゴッゴツの木の幹に凭りかゝつて、溝向の美しい人を見て居るやうな。

何だか辛い。いつそ去り度い。けれどあゝ此處を去つたら宿る木が無いのである。と云つて風和やかな花野の人を始終見て居なければならない。辛い／＼園さんと仲善くするのが辛い。堪らなくなつて立ち上り、其處らを片付け、二人は默つて床を敷いて寝た。

燈火を脊にして暗い方を向く。彼方に叔父様の鼾聲も聽こえて、ふと先刻の園さんの手紙を想ひ出す。誰の許だらう？もしや、ひよつとすると、あの方――へ然うぢや無いか、大變樂しさうだつたもの。

噫復、苦痛が増す。私は木に凭つて居ると云ふと、風にも當らないで宜さゝうだが冷い幹だ。暖かい光に包

まれ度いと切に思つて、ソッと燈火の方を向くとキラッと映ゆい「暗いのが私の本來の性なのだ」と落膽且あきらめて、復暗い方を向いた時、寒い夜氣、冷やかな蒲團は更に冷めたさを感じた。そして夢路に入らうと燥急つたので在る。

花やかな人と、暗い人とさしむかいになつてゐる處は甚だ好い、顏を見合してゐても、人と人とは此んなに懸隔が出來てくるものかと思はしめる、此文、此點に一層力を入れて其感情を表はしたら更に好いものが出來たであらう(評)

○血潮湧く日（増賞）

早稲田　野村光子

自分も湧き立つ青春の血潮を持て居る少女だもの美しいもの丶氣に觸れて熱い血の躍るのを覺えた事もあつた、吁々それは下界にある人の子のうら若い胸の血しほを燃え立たせる樣な春の朧夜であつた、自分は溫い優しい春風のそよぎのまにまに言ひ知れぬ氣に觸れた時、小波だに無い自分の胸に烈しく波打つ高鳴りを聞た、若しも其時に鋭利な刃を持て自分の胸を裂いたら體に熱い熱い眞紅の血潮は迸り出たであらう、老衰な人の宿らし能ぬ華やかな希望の影は胸の奥扉に籠て居たであらう、乳色厚い肉の中に熱くめぐる血しほを秘めて一人はほ丶えんだ刹那、自分の瞳には、憂や、惱みや、罪惡や、悲哀などゝ言ふ暗い影は映じなかつたさながら一片の隅だに無き紫色の空を望むやう輝やかしい瞳をさえぎる影はなかつた、否！自分の瞳には映じなかつたのだ。

たしかに自分は或るものに醉て居たのである。

丁度中春の夜だつたと思た、櫻がいつぱいに撩り咲いた其下で、木に倚て彼の人を待た時だつた、溫い血の通ふかと思はれる風がさらさらと肩から脊に垂れた私の洗髮を梳いて、そよぐ鬢の毛が頰に觸れる、組んだ手をあげて、かき撫でやふとする時、春の氣を傳えて細い音色は響ひて來た、霞を分けて來る其音、を丶、其音、自分は其音に引入れられるやふ、つと一歩すゝんで襟のあたりを直しながら月にそむけて笑んだのである、其音はせかず急がず極めてゆるやかに近よつて來る、胸の血は烈しく湧く霞のとばりはまだ閉さして其音の主を現し出さない。

春の夜の霞の中に流れ入る調はひと吹き毎に青春い血の滿ちた青年の唇から漏れるのである、音は少しなだらかでなくなつた上りの爲であらう、自分は耐え得ずに軟かひ若草を五六歩踏み返した時、霞の帷は除けられて其處に光り強い瞳をもつた人は微笑を含んで起て居たのである、其瞬間二人の魂は一つとなつて知らず何處へ拔け出て彷徨つたであらう。

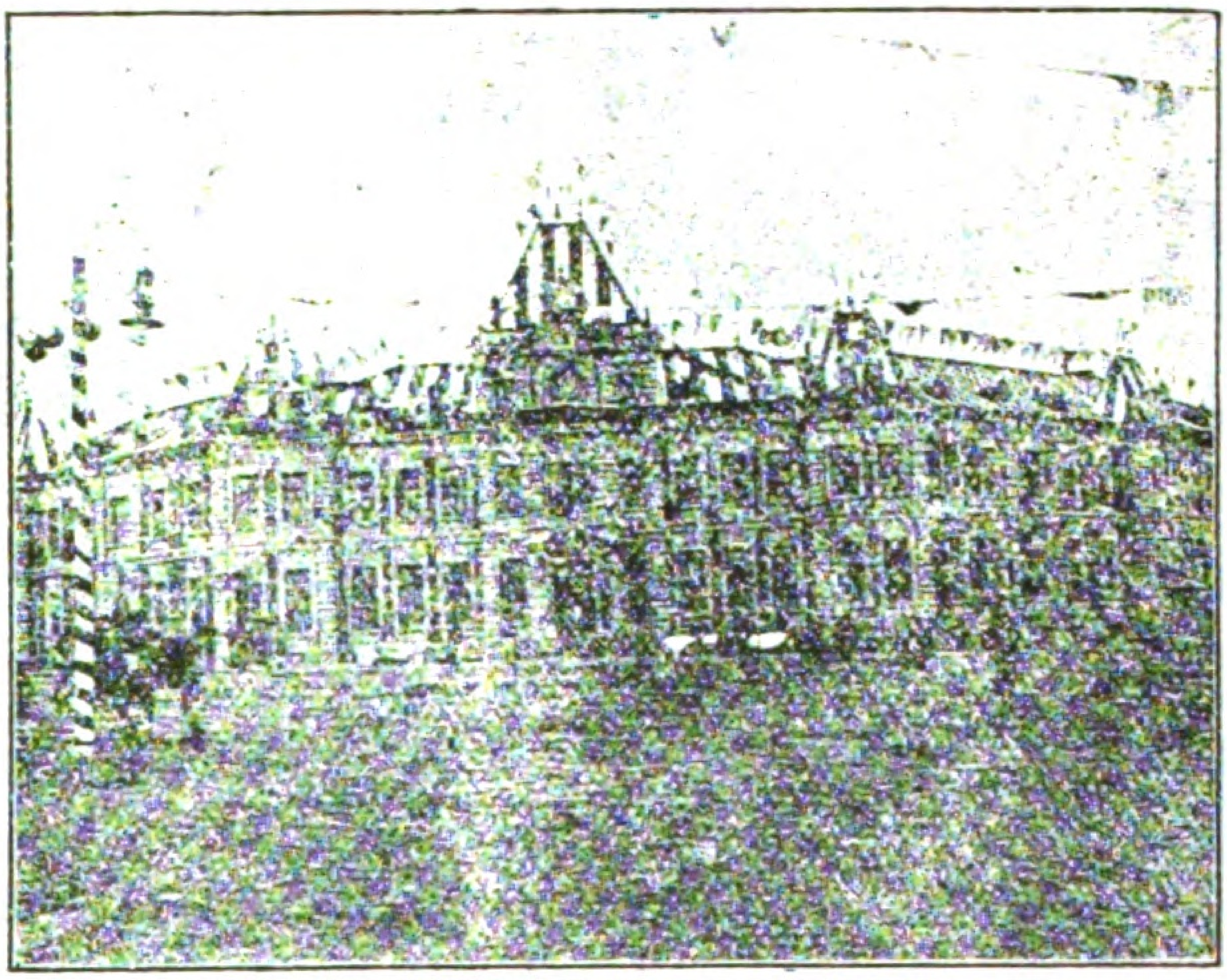
若い人は思ひ切つて若い心を持つて居られねばならぬ、此文委曲を盡くして青春の血のありたけを文字の上に注ぐ、魔力あり、恐るゝも

のは近よるな（評）

○しめかざり（人　賞）

麴町　はぎ

冬のうち何かと忙はしかりしなかを夜な夜なさいて仕立あげし小豆色矢筈銘仙の綿入に姉が殘しゆきし小紋縮緬の羽織の縫ひなほせしを羽織りて、帶はいつも晴に用ふる中形の羽二重と襦子の合せ、前かみの出加減苦心して我ながら氣に入りて結び上りぬ、いつになく濃く塗りたると心のどやかなるに、派出ぞと氣もさゝねば時色のやゝ巾ひろきをかざしぬ、いてと立いづるとき鏡に向へば美しく着がへせし人まつぞ鏡中に笑みけり。



清國大連南滿洲鐵道會社一週年紀念會祝ひ　本野子寄

去年の秋姉の嫁ぎしより我家俄に春らしうなりて幾年にもためしなかりし我春著の新調もかなひさすがに心ときめきてうれしかり、そも父に別れてより此方、子供心にもかなしき事のみにてたらはぬ勝の初春むかへたりしがことしはいかなる運のむき來れるにか姉は一躍して銀行に重きをなす人の配となり、ひいては我肩身さへもひろくて、井戸側に意地惡の評高きお作婆さへ、此頃は我にやさしき樣なるもおもひなしにや、里方あしければ何につけ苦しき事のみ多からんと常々心つかひしたまへば日頃は訪ひもせねど新年のほぎ事申すべく久々にて姉樣とよびてもみたく、そが奥樣振ひたなつかしく、やゝちまたのさまもおさまりぬる新春五日といふに、芝高輪なる姉許おとづれゆくなり。

電車を下りて數町、やがてめざす門邊につきぬ、澤田と大きくかゝれたる表札うちおほぎ今更にうれしき樣にもあり、かつはきおくれてとみには入りも得せず、門前清く掃かれて松と竹とのかざり、上には注連飾の大きなるがかざられて海老、こんぶなどみるからにめでたげなり、轟く胸をおさへ〳〵て中の口に案内乞へば利口さうなる女中いできて心得がほに通されたる一室、姉はやがて入りきましぬおちつきたる御風采、平常のさまもしのばれて、うれしさきだちてはゞかりもなく、そのよし申さばたゞ苦笑ひしたまふあれもこれもとつぎ〳〵に移りし物語りせんとすれば、それもきゝたけれども今日は少しくせはしけれ

ばまたも來よと仰せて歸りぎはに、母上に御菓子にてもとりまゐらせん料とつけたけれど、はづかしながら思ふにはまかせぬ身なり少しじみなれど掛料にとてたまはりしは縫取入の半襟二かけ、姉上のにと求めさせられしなるべし、きぶるしゆづりたくは思へど大きなる風呂敷もちて去なんは如何なるべき、何もまかせねば今しばしまちてよとしみ〴〵仰せられし、何となう氣も引き入れられてはや〳〵御暇せしが來し時の思ひとはことなりお玄關みかへりて我しらず涙さしぐまれぬ。御めには掛らざりしがさぞや氣むづかしうおはすらむ姑君の姿、さてはよはひもいたくへだてたる夫君の面わなど思ひうかべて、心ぼそかるべき姉が境遇、思ひやりまゐらするも更なり、我も追ひたてらるゝ心地、すご〳〵と注連の下くゞりぬ。

和文體なれど、文章に素養があつて、しつかりしたもの、感情もそこ〳〵に表はれて居る、此文、人に譬ふれば、ものゝ心つきし貴族の令嬢に似たり（評）

【秀逸】

○目を瞑つて

府下　水野ゆみ子

目を瞑つて、目を瞑つて――私は古い榎の切株に腰を下ろしたまゝ、消ゆるともなく、消ゑぬともない淋しい思ひに耽つた。……霜どけの朝、曉の風に吹き落されて樺、樫などの枯葉が、凍てついて、重なつて、振へばさらさらこぼるゝ古びた裏木戸をそつと――女だもの――そつと開けて、まだ霜柱のくづれもやらぬ坂みちを登つてきた小山の上で……。

考へても、考へても――それは私の胸から細い細い鈍色の糸が紡がれて、遠い遠い國へでも連らなつてゐるやうな――その糸を手くつて行くと私の身は暗い洞穴へでも落ちるやうな不安な物思ひに沈んでゐると、と、幽かな鳥の羽音に驚いて思はず空を見上げたが。はらはら肩先に黄ろい落葉が散つた。

その落葉を手に取つてまた物を思つた、この落葉が梢を離れる時、そこに大きな自然の力が働いてゐるのではあるまいか、人は虚榮と、愛と、煩瑣な生活とに疲れて、やがて「無」にかへるべき、終りの日が來た時には靜かに寢床の上で自然の力を覺知するものだと思ふと私はわが肉と、わが靈とを「無」に歸せしむる自然の力の大きなのに慄ひ戰いた。肉は冷めたく取そへる花もなく床に横はつた時、靈はいづくへ行くのか、枯れた落葉を拾つて、元の梢につぐとも、一度枯れて落ちた葉の脈には温かい血潮は通はない。

それからそれへ――さらさら梢をもれて日は温かく地の面に照つた、けれど心は淋しい。あゝ落葉！私も時が來たら……。

目を瞑つて、目を瞑つて、私は古い榎の切株に腰を下

ろして考へた。落葉は熱く手に握つたまゝて……。

才情溢れるばかり、名文と稱へることは出來るが、作者の個性は表はれてない（評）

○うつゝ

神田 英子

烈しく體がゆれたのでハッと眼からさめた。ハンカチで目角をぬぐふて物おぢするやうにそつと車内を見まわした、三十幾人うす暗い燈をあびて人品さへわからぬ様にいも虫の様になつて居る、何處からともなくもれるいびきが氣になる、窓を明けると冷い夜氣と野獸でもせまる様な汽車のひゞきとが一時に胸に入つて思はずゾッとした……ひとゝきがだん／＼遠くなるやうだと思ふとうつらうつら又眠に落ちてしまう「東京に居るよりやあ可いだらうが併し……ハッとして又首をもたげる、どうも後ろからくる聲だだれ……どんな人だらうと危く頭を曲げようとした時



お正月　三重縣　加藤つたへ

黒ずんだ、女の聲でやつていけませうか‥‥低い細い‥‥又しても首筋のむづ〳〵するのをじつとおさへて髮のひさしのかゆいのをがまんした、あなた田舍でも先生はいやなんですか‥‥話聲は小さい‥‥が二つおいた後ろあたりからくるらしい‥‥足が氷つちまつたやう。

身體を支へてついた手の指先きがしびれてしん〳〵痛む、滊車は又一ゆれゆれてその跡のひゞきは身體にしみ渡るやうだ、〻ついうと〳〵と又うつゝのゆめに入つた。

夜汽車の中の夢現に聞く人の話聲、旅は道連、世はなさけのさま〴〵な人の身の上、此んな話もあらう(評)

○切ない苦痛　　伊藤曉子

ハツキリと西向の障子にうつつてた大銀杏の影がうすれて終うのを待つて私は二階の上の物干に上ります。限りもない瓦屋根は遠く〳〵西に續いて、その果には西山の頂が紫色に打霞んで、南に連なる久萬の山々につゞき、春ならば所々の園生の色華やかに、夏ならば緑りの色も滴たるかと計り、にほやかに、今はまた黄ばみたる木の葉、骨露はなる雜木が烟突のまに〳〵、青い空に聳つ立つて居ます。紅の雲、オレンジ色の雲美しい雲色は毎日の樣に變つて居ます。高い靑い〳〵空が染布を見る樣に頭上に被さつて、その果が僅かにばら色にぼけて居る日もありますし、また病みほけた三十女の瞳の色を聯想せしめる樣な鈍色の雲が西から南にかけて、低い雲堤を築いて居る夕もあります。その眺めは日に〳〵異りますが、幾百の人の子を超然と足下に見下して、高い〳〵大空と親しみ、夢の樣に打かすむ山のあなたに晝の光と夜の光と抱いて相生む、一種云ひ現はす事の出來ない美しい光線の色を認めた時私の心は如何に動く事でせう。崇き尊きいと大なる自然の力に時をも身をも打忘れ、手にもつ衣のしつとりと露にうるほふまでも立ちつくして居るのです。ぎようさんと母に呼ばれて驚いた樣に後れ毛を淋しい風に拂はせ乍ら階段をかけ下りたのも幾度だつたかしれません。人は妙な子だと仰しやいますけれども、私はこの夕の自然によつて言葉に現せない所の慰藉を得るのてございます。

けども燈火を點じて机によつた時、やがてそれは私にとつて大なる苦痛となつて終ふのです。其慰藉を得た時の美しい感じの半分を歌つて見よう、書いて見やうとノートブツクに向いページは徒らに黑色もて埋められますけれども、十分の一もかきつくし得ないのですもの、同じく人間と生れて私よりも未だ若い方ですら立派な文章美しい詩も作られるのに私ばかりは何故に何故にかく鈍なのであらうがとそう思ふと、口惜しくて悲しくて、何時かしら涙がホロ〳〵と草色の机かけ

の上へ溢れ落ちて居るのです。おゝ、この切ない思ひ、苦しい思を何時の日にか取り去る事が出來ませう。いつくしみ深き父母君の御ひざ下に姉樣〳〵と取りすがられて何一つ不足のない私はかような幼ない苦痛を宵々に深く〳〵感じて居るのでございます。

誠に好い苦痛です、何うして大自然に同化しやう、接觸しやうと煩悶するのは藝術家が一代を徹しての苦痛であつて、此苦痛を感じないやうな人は到底藝術家の片隅にも居れないのです（野）

○淋しき人々

本所　江原田鶴子

私は、人戀しいやうな思ひが湧く時、いつでも急いで古い日記をくり披げて見る。

ある日の日記に、『淋しき人々』と題して次のやうな事が書いてあつた。

『今日も淋しき人々の一人、神田の伯母さんが來た、神田の伯母さんは一人の息子、謙さんを銀行へ勤めさして、生活をしてゐるのだ、神田の伯母さんは、もう伯父さんに死なれてから、八年になるのださうだ、壹間伯母さんの家へ行くと、いつでもしんとしてゐる、格子造りの二間々口の可成り古びた家で、それでもよく手入れがしてあるから小薩張りしてゐる。日がさゝない、いつでも薄暗い家だ、伯母さんはきつと火鉢の前て、何か直し物の縫物をしてゐる。靜かだ『今日は…』つて言ふと『ハイ』と伯母さんが返事をする。活氣のない、靜かな家で、私はそこへ這入ると、私の全身の血が急に冷えて了ふやうな氣がする。

伯母さんはよく毎日あんな所に住んで居ると思ふ。家へ來ても勢のない人だ、靜かに用事だけ話して、浮世話しを二つ三つして、さうしてぢき歸つて行つて了ふ伯母さんにはちつとも面白いことがないだらうと思はれて、仕樣がないほどそれほど淋しい人だ。

『まあお匆々さまでしたねえ…』

『いゝえ』

母が送つて出る、伯母さんは土間へ降りる、

『田鶴さんまた遊びにゐらつしやい、日曜はいつも謙が居りますから…』、謙も日曜は友達がなくつて困つて居りますから…』

『えゝありがたう、また…』

伯母さんの子に似合はない、謙さんは面白いハキハキした人だ、けれども惡い友達などと遊ばせるといけないと云つて、謙さんを日曜でもあんまり外へ出さないさうだ。若い人をそんな縛るやうな眞似をして…と私はいつてもさう思ふ、と同時に、伯母さんの心も察せられる。

『ぢや左樣なら…』

伯母さんの小さい丸髷が門の陰に消えた。淋しい人だ！と私はつく〳〵思つた。まだ私の日記には多くの淋

しき人々がゐる。

注意して書いてある、淋しい伯母さんの心もちも、態度も、或る點までは現はれてゐる、人を描いて成功に近きもの(評)

○風

麻布　赤﨑あい子

十二月の初めは草が枯れ木が枯れて、何處を見ても暗灰色の淋しい色になる。無理もない、人も死ぬんだから…。西北から空つ風が砂塵を捲いて吹く。障子を閉めて置いてさへ、盥の上に埃がたかり、私の枕元の藥瓶の置いてある盃も白く灰色にボケる。

今日も風が吹いた、今も何吹き荒んでゐる。枯葉の疎についてゐる梢にビューと必細い音を立てゝ…。妾は默つてその音を聞いてゐる。淋しい音だ、世の終局の近づいたのを知らすやうな、悲しい冷たい響だ。今丁度此の瞬間、此の哀れな悲しい響きに送られて此の世を去つて行く人が有るのではあるまいか。否、妾も遠からずその運命の悲慘な手に捉へられて行く女かも知れない。その時は矢張り此のやうな風が吹く日であり度い。妾は死ぬのが嫌だ。どうかして生きてゐたいと思ふけれども此病氣此の躰。妾はもう駄目だ。努力しても死ぬのなら妾は努力しない。死ぬその朝まで書物を讀んで努力して…と昔の人が言つたが、あれは偽りだ。偽りでなくとも氣狂ひてゐる。妾は自分で氣狂ひてはない積りだ。普通の女だと思ふ。唯肺を病んでる普通な平凡な女だと思つてゐる。

死ぬなら安かに靜かに、父と母の膝元で…そして風の吹いてる夜に…苦もなく死に度いと思ふ。

田中久子様が逝かれた。妾は悲しいと感じるよりも淋しい氣に打たれた。人の死を悲しむよりも、それによつて自分の死の近づく事を知る淋しみの心の方が强かつた。妾は自分を不幸だと思つた。

併しどうせ死ぬなら死んでもいゝ、死なゝければ何いゝけれど…。妾の心は今冷かだ。妾が死んだ時に妾が久子様について感じたやうな淋しみを感ずる人があるか知ら、有ればその人の不幸だ。

風が吹く。又風が吹く。あゝ淋しい音を立てゝ風が吹く。妾は風が好きだ。あの風の音を聞いて淋しい思ひにふけるのが堪らぬ程好きだ。

激して居るやうで激して居ない、風は好し、死を云ふは眞似ではないか(評)

○

○黑鳥

大阪　今西春江

黑い鳥だ。

何時とは知らず我胸に來て、香の實や、萌え始めし嫩の新芽を、コツ／＼と荒して廻る。

逐はうとしても身體がすくんで、どうしても逐へない石をひろつてバッと投げると、重々しい羽音を立てゝ

ちよつと舞ひ上るが、急いで下りて來てコッコッとやる

あッまたつゝいた!!

あつまたつゝいた!!!

シッ〳〵逃げないか〳〵。逐つて見たが中々逃げない。

其內身體が萎えて行た――。

○

黒い鳥だ。――荒すにまかす外は無い――

○

四邊は暗い。

山にある寺から續いた、千本の松並木を提灯が一つ、ブラ〳〵行く。

色は赤い。

悠うしたのが怪談を生むのぢやなからうか。

○

風が吹く〳〵――。

私は昨夜の暗い夢をたどる。すると涙が頬を傳ふ。ホロ〳〵とこぼるゝ。左樣たゞホロ〳〵とこぼるゝ。

頬が冷えて居るからだらう。涙は熱い。

○

雨が降る――。

何か知らア嬉れしい。

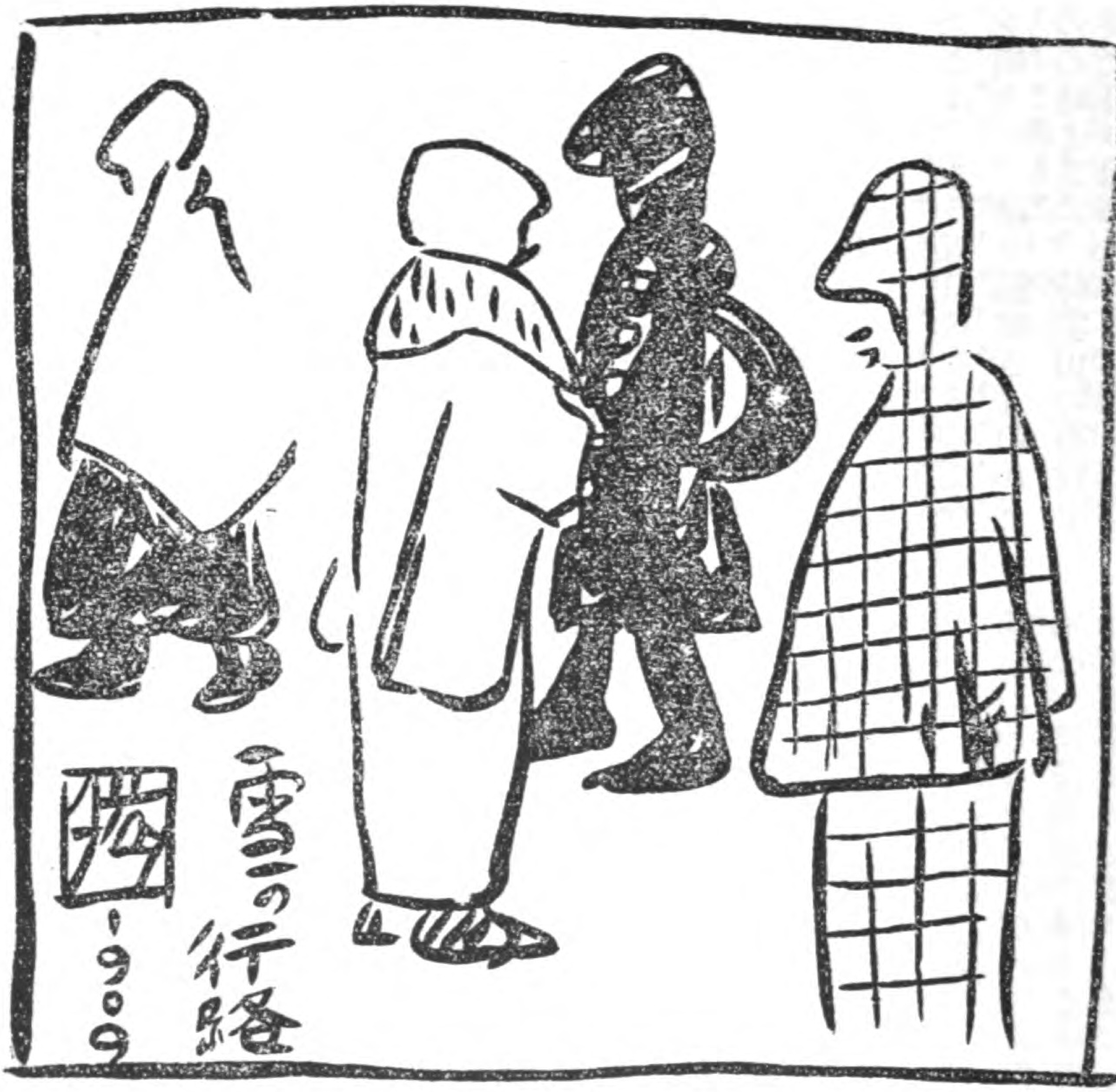
悠うむしやうに笑ひたい。胸がぞく〳〵する。頭は靜かである。けれども胸が堪らない。

美くしい兒は、こんな日に生るゝのぢやなからうか。

○

眞夜中だ。

暴風が吹く。ゴヲウ〳〵と荒るゝ音は、魔の鼓のやうだ。雨戸は絶えずバタ〳〵と鳴る。折々は木の裂けたやうな音がする。ヒユウ〳〵と、



雪の行路　小襟　鈴木とみ子

幾千萬の笛を吹くやうな音もする。
怨靈のたゝりか、拗ね者の呪咀か?。
天地が滅亡するやうだ。

○

白い顏だ。
鼻も見えない眼も見えない。たゞボヲウツと白い顏が每夕向ふ岸の家から覗く。
向ふ岸は遊廓だ。顏の出る家はお茶屋だ。そこて其顏の形は、夕每に變るやうに思ふ。
遊廓——茶屋——白い顏——何だか胸を引き締められるやうだ。

所謂散文詩式のもの、始めと終りの一章が佳し(評)

○待乳山

淺草 布留川 まさ子

雨上りの好い天氣、あまり寒くもなくほんのりとうす曇り太陽は照らなくとも、うすい日陰は表の障子に映つて心地よい、待乳山の森には葉は一枚もなく、梢ばかりて鴉やら雀やらが、面白そうに遊んて居る、好いお天氣てす。

先達結つてもらつた銀杏返は、もう五日になるので今日は島田に結つてもらう積りて、裏の髮結さんのかどに立つたけれどあまりの心地よさに、待乳山の石段を登つて、聖天宮の境内賽錢箱の前にて、お辭儀をしてあちこちを見れば、それは〳〵結構な日和、白斑茶斑の鳩は幾羽ともなく、樹々の間を嬉しそうに、渡り鳥は幾百羽ともなく群り飛び、甲音走つた鳶の鳴く聲は遠い彼方、向島の空より引いて、枯枝に止まつたのが二羽、何となく心持がよい、隅田川の眺め靑々とした漣を刻み靜かに進む竹屋の渡し舟、お客は七人、櫓を押す舟も通る、小蒸氣も通る、妾は一帆掛けた舟が見ゆるぞへ」の唄が偲ばれて、幾度ともなく、此の唄をくり返し、髮を結ふことを忘れて居た。不圖氣が付いて神殿を見ますと、お若い娘樣が頻りに神前に叩頭いて居る、何かお願いてもあるらしい、髮は島田て黃八丈の綿入、黑縮緬の三つ紋の羽織、顏は見へないけれ共、どうやら藝者らしい、おーいや、藝者のお詣りする神樣、藝者の結ふた島田、妾し急にいやな氣になつたので、直ぐに待乳山を降りて、髮も結はないで宅にかへりました。折角の好いお天氣に折角晴々した胸も擾されて此の日一日中、いやな氣がしました。

あのあたりの景色も好く描かれ、藝妓のお詣りも眞なるべく、遂になつて髮結はずに歸つたのも眞でせう、此文、文は熟れないが行末見込あり(評)

○高原の冬

靜岡 根岸鐐子

霙もよいの十二月初めの黃昏、松本の停車塲を出た列車は、信濃高原の限りない黃色い野を一直線に上田に向つて走つてゐる。
灰色がゝつた空は低う垂れて、信濃特有の赤城颪が、

上田直行の私等の列車を縦に吹きまくつた。さうして列車が高遠を右に見て、千曲の支流を距つて間もなき頃から冷たい雨がしと／＼と降り出した。

白壁の村や、枯れた雑木の林や、水のない小川――茅屋のいた／＼しい程さびしい風物の轉々と移り行つて列車はとある雑木林の傍を掠めるやうにして通つた、枯れ切つた落葉ははら／＼と鐵路に散つて、亂れて空しい梢の間から、寒い／＼赤城颪が列車に當る。――上野を今朝七時に發つた列車は夜半、直江津に着くのだらう。

裏日本海岸のさびれた故郷の町――冬の日の短い、此の風の吹き荒るゝ音をいかに寒う聞いたこともあつたらうか、私は病て歸る此の道、この冬、――泣きたいやうな思がひし／＼と胸をうつ――深い考に沈んでベットに横たはつた。



お客樣　青森　山田照子

信濃高原の夕日はとつぷりと暮れて、近くは赤城、遠く連なる山々も暮れの幕に包まれて、淋しい雨に降り込められた信濃高原は、刻一刻と暮れる冷たい雨と共に――廣寞たる野の一端から、あやめの色に包まれ、眼界の届く限り漠として眞の闇、只、上田の町の灯影が微かに目に這入る。

淡い、シグナルの灯が段々微かになつて、列車は闇を縫ふて走つてゐる。

雨はいつか止んで、淡い北斗星が空にしばたゝいた、たゞ一つのみ――轟々と耳をさへぎる鐵車の響き、列車は今松本と上田の間の闇を破つて走つてゐる。

私はいつかうつら／＼とした――

汽車と云ふ心持を始終持つて書いてある處が好い（評）

○凩

京都　春日桃牛

鈍色雲の多い、冬の空を凩が轟ッと鳴つて吹く地上を

からくと病葉が舞ふて行く。

椽側の障子の破れを繕ふて居ると、家の内で話聲がする。

(今頃嬰兒は如何なつて居るやらふ。)

(……)

(何れ一度は如何な豪い人でも死なんならん。)

(……)

障子を開けると、佛壇の前に、机の上に花立に樒が一本、土器に燈心が灯つて、新しい木の匂墨の匂がする位牌にお供養菓子等を供へて、釣り線香が香烟を不斷吐いて、室内は芳ばしい薫りがする。

一昨日埋めた、生後五ヶ月で逝つた季弟は、時雨する寒い今頃を……噫土の中は冷からふ。

表の間には氈通が敷き詰めて、今にも散りさうな柳が花臺の上の青磁の瓶に、人よりも草木に深し秋の色、短冊が掛けてある。

母は針箱を引寄せて綿入を縫ふて居る。側で弟は母の命で御詠歌をうつす。

炬燵に東枕で、亡弟の直ぐ上二歳が頰を眞赤にして熟睡してゐる。

熟柿色の護膜管、乳豆は弟の唇を離れて、硝子瓶には呑みさしのミルクが未だ少し殘つて居る。

四五日前あの乳豆を咬へて、チユく吸ふて居つたのに。能く似た、そして肥え太つた、大きな寢顏である眞四角に繕ふた紙片に、時雨催の冷たい眞晝の風が觸れる。椽の下の古い馬尻には湯棺の湯がとつてある。

卷線香からは、悠々と紫烟が立ち昇つて、白い灰が溜まつて崩れて居る。

觀察が細かい(評)

○月波を仰ぎて

下總　小澤　まゆみ子

利根河畔の秋は更けました。枯蘆そよぐ夕の風は日ごとに冷たくなつてきました。月波の山は河をへだてゝほゝけすゝきの影から、うす紫のその姿が見えますが私の心は何となく沈みがちです。なぜでせうか、碧瑠璃の空や、穗のみのりや、あまき葡萄の滴りや何かに皆さまは秋はたのし、と申しますが、私はどうしても寂しうてなりません。私は何時も夕暮になると乾度利根のほとりに立ちます。銀絲のやうな美くしい流れが西より東へと流れてゐる。——あゝ私は此川が好きです。黄色になつた白楊の樹立の影に佇んで、靜かに流れを見つめてゐますと、美くしい日の閃きと遠笛のやうな微かな水の音が、何となく胸に浸みます。

そして自分の乳の下の血潮と波のひゞきと、まぎれては幽かになるかと思ふと。また一ときはたかく、自分を襲ふてくるやうにも聞えるのです。

熟としてゐますと、兄のことや母のことや、戀人のことや、お友達のことや、うれしかつたこと、かなしかつたこと、——それらがこんがらがつて五色の絲のやうに目の前にちらついてきます。しまいには自分の前途などを考へだします。もうかうなると胸は亂れに亂れて、何を思ふてゐるやら分らなくなります。堪らなくなつてくると白楊の根方へつゝ伏しましたまゝ泣きに泣きます。つまり華かな少女時代の過ぎさつてしまふ時を思ふと、もうたゞ哀しくつて／＼なりませんてさんざ泣いた上、抱いてゐた「二十八宿」を開いて讀むのです。

此瞬間、私は譯もなく北の空のみがなつかしくなつてきて思はず夜雨先生のみ名を幾度か呼ぶのです。

眞情哀切（評）

○知らぬ人　　播磨　内藤松圃

知らぬ人は我が車窓の前に立つた、背の高い輪廓の正しい人で醫學校の制服制帽を着けて居る。つか／＼と寄つて來て勢よく戸を開けて「此方　——」と振り返つた、四十格合の法衣を着けた坊樣が一寸會釋して私の前へ這入つた、知らぬ人は其の儘ぴしやりと戸を閉めて外に立つて居る。

私は坊樣と知らぬ人とを見比べた、少しも調和して居ない、けれど知らぬ人は坊樣に對して少からず敬意を表はして居る、或ひは先生じやないかしらと思つた。

驛夫が忙し相に往來して居る、知らぬ人は「何うか彼地へお着きになつたら直ぐお手紙を……」と言つた、坊樣は「ハーきつと。」と言つて窓から頭を出した。何だか大變別れが惜し相てある、汽笛がヒユル／＼と鳴つた、坊樣はつと立つて上半身を窓外に出した、知らぬ人は帽子を取つて「君。成功を祈る」と力の籠つた聲て言つた、坊樣は「有りがたう…左樣なら」と感謝に堪へない樣に言つた。汽車は動き出した。

私は知らぬ人を見た、「左樣なら」と言ひながら此方を見て帽子を振つて居る、目には涙を一つぱいためて。

知らぬ人は一寸私の顏を見た、さうして又「さよなら」と坊樣に言つた、坊樣も又「さよなら」と言ひながらハンカチを振つた、速力が段々增して來る、私は窓の外へ頭をつき出して見た、知らぬ人は此方へ走つて來ながら帽子を振つて居る、坊樣も力一つぱいのり出してハンカチフを振つて居る。私も何だかさよならと云ひたい樣な氣持ちがした。

知らない人は到々見えなく成つた、私は窓の中へ頸を入れた、坊樣はあーと言つて腰を掛けた、

其れから此方へ私は大阪驛を通る毎に彼の人を思ひ出す、今頃は何處に何うして居られるだらうと。

知らぬ人と云ふのが思ひ着きてあつた（評）

○土さし　　岐阜　篠田とみ子

どこから始めよう、と兄樣が仰有ると、父樣はすさをほぐし乍ら、一寸小首を上げて、そうさなあ暖かい處からやつちよくれ、とこう仰有る、それもよからうと云ひ乍ら梯子を持つて北からやろかと云ひ乍ら、さあ南部からさいてくれと仰有るので、はい〳〵一寸待つて頂戴ッと强う云つて、色が黑うなるて手拭冠らなゝらんからと小聲に云ひ〳〵兩手で中央から兩方へ手拭をしごいて、一寸上げて繪を見ると、山があつて電柱に燕が二つとまつてる圖だから、西の方を向つてあの家二つとると、この繪そつくりだと思ひ乍ら、鐵道線路の方を見返つたら、雜誌の口繪にでもありそうな人が踏切の垣の前にぶらりとして身動きもしない、衣物と同じの羽織、紺染だ中柄の、白縮緬の兵兒帯を前の左脇で一つ結んで捻じかつてある、餘り黑くはないゴロンゴロン下駄矢張り白緒だが桐か山桐か栗かそりや分らぬ、幾つ位だろう廿八九髮も當世にときわけて半面光つて居る、右手をふところへ七分入れて何を考へ込でゐられるしら、何ぼ天氣がいゝとてあんな風のふく所に、あゝ今日は日曜日だわ今起きたのだらう十時位だらうが……花ちやん、えゝ、えゝだ無いよ早く土をくれんかいと早口に仰有る、はと力ある大きな返事をして土さし竹を持つと太陽の當つてた處丈暖かい、右手の柱の際からぬり始めなさる、兄樣の影法師が非常に面白い下の方向きなさると頭が半分しきやない、それに兄樣のなさる通りに眞似る覺束なげに、よう見や私の影もうつゝてる、べた〳〵やると音は一つでも影も矢張りぺた〳〵叩く、姉さん冠りの手拭に氣がつくと影法師見ては不意に亞呆らしうなつて來た、けれども午前中は仕方が無い辛棒せねばならぬ事がある、欠伸をした息に無情な涙がほろりと迄は行かないが眼ふちについたので、拭き乍ら胴體をかしげて右足を一寸あげて踏切の方を見たけれど、桑の病葉がひら〳〵する丈、さつきの人は居なかつた。

壁塗の土さしてあらうが、詳しく景色の出て居る處があるかと思ふと、略しすぎた處があつて、全體に引しまらない（評）

〇十九

北海道　石川喜世子

もうお正月もくる、此月がすめば私はいやだつて十九にならなければならないんですもの。十九と云へば今までの樣に、彼地此地と遊び廻つても居られぬ、お母樣はそんなにいやならお餅を食べないて、寢て居りなさいと、けれどいくら私がお餅を食べないから今年も十八と云ひました處で、誰が〳〵聞入れませう、やはり十九、其位なら人一倍お餅も食べ、何時ものお正月の樣にそれ、おひはでかるた取りといくらでも遊びますけれど、あゝおとな、おとな、私の胸から青春の血が消え逝くのではないてせうか、もう來年から御料理もしたり皆の着物も縫つたりしなけりやならないつて、

今から皆に云はれますものなんだかこう、自分で、家でも持つた樣な氣がしてあゝ年月はいや、どして此んなにいやなんてせう、私月日を夢に過したから、そうだ、時には夢がない、春夏秋冬一つもむだはない、一日一時もそれ〳〵にいそぐ事もなくおこたる事もなく、それなのに私は今まで皆夢であつた何時の間に十八になつたか知らと思つたらもう明くれば十九、まあ私はこうゆふ事を思ふ樣になつたのも夢の間、實に時の力の强いのには驚かれる。

○冬日讀書　　三河　鳥居房子

何處の屋根にも白綿をまだらに敷いた樣に、霜が澤山降つたと妹が申しますので、明障子を打開けて見ると眞實に澤山だわ、一寸雪かと疑はれるくらいこんなに降るんだもの寒いのも無利はないわ、噫、哀れあの大根も霜にこゞえて、葉もうなだれ、實にいたわしき姿となつた、何處かで子守等が「朝の日の出を待ち兼ねる」と聲をそろへて唱ふのが微かに聞ゆる、斯る日には太陽が一等戀しひと、窓より半分身體を延ばして東の空を仰いだ時、あな嬉しや雄々しき日の神は榮光眩ゆき黄金の衣纏ひ給いて、悠々と、森の間よりお顔を出し給ひき、幾條の金箭銀箭は瑠璃盤の如き空を辷つて、西の屋根の輝されたと見る内に、霜はとけて瓦にうるみを生じた



農夫　　青森　立花とも子

嬉しや〳〵今日も好天氣と天を仰いだ折柄、にくらしや西の方より墨を流した如き、黑雲舞ひ出てゝ、破竹の强ほひで東の方へ押寄せたと思ふ間もなく、太陽をおほいてしまつた、空は一面に灰色となり、風はぷふ〳〵と吹き廻るので、哀れ木の葉は親なる梢を別れて何處かへ吹き飛ばされてしまつた、今にも雪かあられか降る樣な景色となつた。

噫、斯る日には書齋に入りて女子文壇でも、ひもとこふと讀みもて行くに、どの文章も〳〵巧みに作られてあるので面白、其内とりわけ感じ入つたのは田中樣の小說一人限り實用文では石渡樣の繪師なる叔父へ、實に、皆々樣どうしてこんなに巧に作くられるのであらう、どんな鍵を手にしていられるのであらう、私羨しいわ短文でさへ作れないんだもの、噫、ふがいない愚なる者とひし〳〵身にしみた耳のあたりで誰かゞ嘲ける樣にじん〳〵する、是から勉强しよう一寸の暇にも、格言に「精神一到何事か成らざらん」とある故に一心に勉强したら少しは作れる樣になるであらう、噫勉め勵まうと潮の如くむねにわき出てた。障子にぽち〳〵音がするので見れば早や時雨がさら〳〵と降つて居る。

○藪こうじ　日本橋　華子

一昨日母樣と、宿を出てまつすぐに釣橋の方へ行つた歸りに大きなかしの木の生ひかぶさつて居る、小さなお宮の前に出た。後に川が流れて居る。水車が引きつける樣な、音を立てゝ、名のしれぬ小鳥が鳴いて居るお宮の前に可愛らしい藪こうじが、たくさんはえて居る。こんな靜かな所に此宮の惠みを受けて生ひ立つて行くか、と思ふと羨ましくなつた。赤い實がいかにもしほらしいので、五本ばかりぬいて歸つて、赤い土鉢に植ゑて机の上に置いた。翌日水をやらう、と思つたらあのつやのよかつた實は、しなびて居る。悲しくなつた。あゝ宮に元のまゝで居たら、必とこんなになりはしまひに。あゝ許してよ。」お宮へかへそうと思つてそつと袖へ入れて、家を出た。行きあふ人が袖をみて私をにらめて、行く。どん〳〵かけだしてやつとお宮へ來た。木が茂つて居るのでうすぐらゐ。何だかお宮の中でゴト〳〵する。神樣がおこつて居らつしやるのではなからうか。植ゑて居る手がぶる〳〵とふるへている。やう〳〵うゑてしまつた。水をやらねばならぬどうしたらいゝだろか。川がある。ひくい石垣を一生懸命で下りて川の石の上に立つた。腰をかゞめるとたん、あつと思ふ中に紅のハンカチーフは、流れてしまつた。水を手にすくつて途中迄くると、なくなつてしまつた。今度は口にふくんだ。水をやつてほつとしたもうゴト〳〵しない。之て枯れねばよいが。「こうじよ私は枯そうと思つてとつたのではない。つや〳〵しい實に引きつけられてしまつた。どうぞ許して枯れずにもつと〳〵美しい、實を結んでおくれ、もうとりはしない。あした少さいお前に相當した垣を作つて上げやう。」お宮を拜し許しを乞ふた。かしの木がザワ〳〵ゆれて居る。小鳥は鳴かぬ。

家庭日記



○米と麥（天賞）

京都市　春日桃牛

十二月十日、木曜、晴。

母に命ぜられて、妾は麥を五合、水を張つた桶に浸ける。米の箱から、白氣た五合桝を取出して、麥を計る。米を見て麥を眺めると、濃い黄色に見えるし、麥を見て米を眺めると、蒼白く見える。

五合桝と一合桝とを比較すると、如何も一合桝が一見すると、外見が割合多量這入る樣に思はれる。それで愚な事ではあるが、一合桝で計つて、五合桝に入れて見ると、同量てあつた。それても、理屈と實地とは分明つたが、神經の加減か矢張、一合桝が比較的多量に這入る樣に見える。

米の粉が附着して。白氣た五合桝を、水に濡さぬ樣にした。濡らすと、白米の神聖が汚される樣に思はれたから。

此人何を書いてもうまい、諸嬢よ油斷したまふな（評）

○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○雪の日（地賞）

れむろ　よし枝

歸つて丁度一週間、はじめて大陽が出た、屋根の雪はボツ〳〵とけだした、洗濯してゐたら急に雪がふりだした、けれどやはり大陽は照つてゐる、おもしろい天氣だ、一時頃から本ぶりになつた、大した風じやないとおばさんはいはれるけど、東京にはこんな風はめつたに吹かないとおもふ、こんな大きな體がふきとばされそうだもの、弟らはさぞこまるだろうとおもひながら足袋をぬつてゐると、末の弟がなきながら歸つてきた手も足も冷へて氷の樣、上の二人は三時半頃一緒に歸る、中なる茂夫はこの寒さにも元氣よく只今とかけいる、と末の唯夫はおかへり、僕ね歸りにころんでね手

と足とがいたくて〱、泣いて歸つたんだぜとさも手柄かほに話すのでみんな失笑す、そら明ちやんもころんでないたの、信兄さんもころんで泣いたんだよ、まあ信ちやんがころんで泣いたの、十二にもなつて、といへば「だつてね」ともう涙ぐんで後がいへない、すると茂夫は傍から「あのね僕らが學校出た時は丁度雪が止んでたんでせう、だから早く歸ろうつていふのに兄さんがいふ事きかすに學校がきれいだから踏くんだつてみながら歩いたの、それから石につまづいてころんだのよそいでね足から血が出だしたのでね、兄さんが泣きだしたんさ、足がいたいつていふから、かわいそうだから僕がおぶつてやろうつていふのにいやだなんて、いふ事きかないんだもの、折角ひとがおぶつてやらうつていふのに、と不平がほ。

茂夫さんが一番えらかつたのねといへば、そうとも僕西郷だもの、性勇壯におはしけりだから、性勇壯におはしけり……とつけひげしてよろこんでゐる。信夫はおば樣に傷口を洗つて泣き乍ら、痛い〱と泣き聲、と茂夫はまだ泣いてるのかえ、弱いなあ、兄さんは性弱虫におはしけりだといへば、末なる弟僕はといふ、明ちやんかえ……明ちやんは性泣きむしにおはしけりだ、昨日なんか學校で草履がみえないつてもうないてるんだもの、だつて僕泣き虫じやないよつて辯護してゐるが、やがておやつをつくと信夫は名をかき茂夫はストーブなぞにあたるのは勇壯でないつて、體操をはじめ、明夫はおもちやの汽車をならべて遊んでゐる。

文章も此れだけ思ふやうに書けたら面白からう(評)

○母の病ひ（入賞）

神奈川　須　美　子

左の符ばかり見てゐると、右のアルトを間違へる、四つの符を三度に見なければならない、大汗かいて復つてゐると「す美〱」とお呼びになる、驚いて覺めて「ハーイ」と云つて目を開くと、あたりは眞暗、立つて仕度を始めると恰度弘法山の鐘がボーンと打出す數へて見ると五時急いでランプをつけて勝手に行つてお米を灑ぐとて手を入れた時の冷たさ、ツンと頭にまでしみ渡る、二度三度となると何でもなくなる、今朝もご飯をたき乍ら思ふ、どうぞ早く母さんに癒つて戴かなければ困る、毎朝こうしてご飯を仕掛て置いてお薬物の事をしたり、別に母さんの食物をこしらへてからお辨當をつめて髮を結ぶ、荷物をそろへて學校に行くのは樂でない、と一生懸命で仕度をして、漸々食事にする終つて

汚れた物を隅に置いて、すぐ髪を結んで登校の用意をすると、カラ／＼と足音がして裏の婆やがやつて來た、そこらの事を頼んで出て行く、亦例の愚痴が出てくる、こんなせわしい思ひをして學校に來るより、一層の事一月なりと休んで仕舞た方がよいお父さんが急しくても行けと仰言るから仕方がないが、英語の時間が一番いやだ、先生に出來ませんと云ふのが……いつのまに來て仕舞た、亦つまらなく五時間も終つた、歸途に意地惡の佐原さんが、「貴女なぜ此頃沈んで被居るの」て自分の顏を見乍ら、默つてゐやうと思つたが、事情を話すと、「そう御氣の毒ね」て、空吹いてゐる私は話したのがくやしかつた急いて歸つて來ると、二時半母さんの樣子は別段變りがない、そつと吐息して自分の部屋に行つて、どつと坐つて亦祈りました無邪氣な弟の唱歌をうたひながら友達二三人連れて來て、庭で體操を一二とやつて居る、立つておはつを皆なにやつて夕餉の仕度にかゝる二人だから、朝よりは餘程樂です、夕飯がすむと母さんに小說を讀んで上げて、それで始めて、役が終る、こうして母さんの爲に祈つては寢るのである。

健氣なお孃樣、母君の滿足想ふべし（評）



韓國官妓の舞（牧田しづ子）

【秀逸】

○落葉取り

茨城縣　荒木やなぎ子

十二月三日、晴、西風そよ吹く、大なる籠を負ふて得意の唄を歌ふて姉さんは足早く五六丁を霜に跡つけて先に行つた。木の葉は敷いた樣に落てある、其の葉その葉に霜は深い、姉さんと焚火して語ること一時間餘用意の道具にてかき集めはじめた。日は餘程昇つた梢に置きし霜は雫となつて落る　いつの間にか鵙は尾を動して前や後と飛び廻つて餌を拾つてゐる、餌を拾うとけたゝましく鳴きて伴侶を迎ひるのであるらしい。

天をあふいでも木の葉の一片だになく栗虫の繭のみ木

枯に吹かれてある。木々の間に枝振りのよい枯れはてた一本の木がある。立ち止つてしみじみ見れば萩てある。今は人目にふれることはあるまいと思ふて寂しく一人り萩を手に取つた。

落葉かきなどは詩にも文にも多く作るが大抵は嘘だ、之れは眞實（評）

○水くみ日記

北見　涌田ひて

下女が國元へ歸る今年始めていらした姉樣に願ふのも氣の毒と思つて、うつかりすると滑る足をふみしめて、ギーと鎖を引いた。同時にどうしたはずみか、手が「ベタッ」と凍りついた「アヽ痛」と思はず手を離した高い音を立てゝ、釣瓶は下へ落ちた。「どしたの秀ちやん」と、云ふ聲がするので後を向いた。足袋はだしの姉樣「ホッ」と安心したような顏で「今ねあんまり高い音がしたのでもしや滑つて落ちたんてないかと、飛んてきたのよ、よかつたわねー」と、ホヽと笑ひながら内へ入る、姉樣有難うと感謝す。

四日

昨夜の吹雪で、井戸側は雪の山、水くむまへに雪を取つた。冷たい。「かわきましたよ」と母樣が炬燵へ干しといた手袋を下さる、暖いのを兩手にはめて、昨日と同じキー〱と音を立てゝ。「御苦勞さまですねー」と、友の花さん、私の前を小走りに行かれた。破布着て、マガレットに結んだ後姿を手を動かしながらじつと見つめ。た振り向きなさる、ニッコリ笑を浮べて、辻を曲られた。ぼた〱と、雪が降つて來たが、もう一桶と思つて急いてくむ、着物も髮もまつしろ「大前髮の老人が出來たと」兄樣の憎まれ口。

いゝわ〱何ぼ云ふてもと云ひながら、姉樣に雪を拂つて戴く、さつき濡らした前掛が凍つて板のよう雫が「つらゝ」になつて居る。大阪に居られる大姉さんに御知らせしたら、何と御思ひ遊ばすだろう。まさか之程とは信じなさるまい。二日つゞけての水くみずいぶん冷たかつた。

如何にも冷たさう、家庭日記の特色あるもの（評）

○妻の一日

本郷　千代子

十一月十五日晴。寒い風が吹く、垣一重のお隣の庭から銀杏の葉が頻に散つて來る、夫は例の通り八時頃から御出勤遊ばす。十時、久し振て髮結を呼ぶ、形が大きいのてなか〱重い、お勝手の棚へ打付けて豊に笑はれた。もう縫物も終へたし、退屈なので造花を始める、三時頃迄は、楓が一枚と豆菊が二輪、美くしう出來上つた、花籠へさして座敷の床の間へかける、狹い部屋に晩秋の淋しさがあらはれた、何となく趣がある。

夕食の仕度に掛らうとする處へ水戸のお父樣がお出てになつた。お珍らしい事、恰度一年振だ、流石お年がお年丈にお髮が大分白くなつて居る、それでもお達者なのが何より嬉しい「千代も大きくなつたな」と仰る、まア厭な事、いつ迄も子供だと思つて、お伽話を聞かしてやらうと云はぬ計りの事を仰る。この頭がお見えにならんのか知らと一人ておかしくなつた。間もなく夫がお歸りになる、其中に御酒が始まる御話が出る、お二人共夢中になつていらつしやる、妾も嬉しさに遂つりこまれてお仲間入をする。急に寒くなつたのに氣がついて、時計を見るともう一時。さア妾は心配になつた、お父樣が折角久し振て、婿と娘とを前へおいて愉快そうに話をしていらつしやる。それをむげに止めさせるのも子たるべき妾の仕業では無い、そうかと云つて、夫は明日大事な勤を持つていらつしやる御身、餘り夜更しをして明日のお勤にさはる樣な事をさせるのも妻たるべき妾の本意では無い、こゝをどうかお氣にさはらぬ樣、止めさせる工夫は有るまいかと、父を思ひ夫を思ひ、いろ〳〵考へた末「もう大分お寒くなつて來ましたから、お床へは入つて御話遊ばした方がお樂て宜しいてせう」と思ひ切つて云ふと「そうだな、それぢやそうし樣」と譯もなく仰る、まアよかつたとホツト息をつく、豐はもう先へ寢せてあるので妾が床を延べる、お二人共御酒の勢ひて、床へ入ると間もなく高鼾。父と夫と枕を並べて溫かそうに寢てお出てのを見て、あゝ妾は仕合な者！百萬の富をつんだとて、此幸福は得られまいとしみじみ思つた。



奥樣　北海道　大槻なほ子

妻としては見て好い日記（評）

○そのまゝの日記

牛込　平塚白百合

十一月三日。妹や弟は團子坂へ菊見にいつてかへつてから大さわぎ、季の妹はわからぬ舌て、姉ちやま樣の下からきれいなお姫樣がズーと出てくるのなどと話してくれる。夕飯過ぎて一寸兄樣に英語を伺ひに上るとお部屋て弟が二人しきりと何か言ひ合つてゐるそうと

きくと、清さんが武田信玄がゑらいといふと勇さんが謙信だといふので兄さまがとう〳〵何とかいつてなだめてしまつた。どうしてそんなことが始まつたのと聞くと團子坂で見て來たのだといふ。母様にお話するとやつぱり男の子は見る所が違ふねと仰せられた。

五日。木曾の山中よりとやさしいお手つきて露様から紅葉を二葉入れて下すつた。恰度造花の最中なのでビロードを切つてこれをお手本に一生懸命になつて染める、自然の色とはどうしてもかなわないけれどもどうやら似て出來たので三葉ばかりあの濃い黒髪にかざされるのを思ひ浮べながらお送り申した、

八日。日曜なので兄様と弟と私と四人で郊外散歩に出た。お辨當は何處で開きましようと兄さまに伺ふとバックがよくなくつてはせつかくのもうまくないよとおつしやる。

夕日が山の端に入る頃やう〳〵渡をこゑると薄黒ずんでゆく山陰の村は落葉をたくのであろう白い煙がくゆりのぼるのが淋しい秋といふ氣を人の心にゑりつけるやうでしらず〳〵涙がこぼれた。

（評）すつきりと垢抜がしてゐる

○殘り惜しい日記　ゆかり子

まあよいお天氣だ事丁度小春日和の様だ。お部屋の六疊で琴さんは機織り私しは裁縫……おしごとの下にそつと女子文壇忍ばせて置て……『ほんとに何時迄も〳〵もねー二人がかうして機を織つたりお仕事したり樂しう暮し度いわ』……とは私し等二人の繰り言『琴さんもう十時よお下りなさいなさつきの續きを讀みますから』……面白い最中に母さまがひよつこり文壇を隠す間も無かつた……『お前達は二人さへ寄ればいつも之だものお仕事なんかちつとも出來はしない……ほんとに一枚の袷衣に幾日かかる事かねー』云ひ〳〵母屋の方に入らした。お小言頂いてしぶ〳〵琴さんは立上り私しは針を運ばす……琴さんが『しかられても二人で居度いわねー』私し胸が迫つて返事が出來無かつた。お晝飯の時西京の伯父さんからお手紙が來た私しの胸は妙に波立つた。『ゆかさんとの祝儀來年三月頃との事で有つたが達也も丁度歸る事なり正月早々に繰り上げては如何……至急返事が聞き度い』との事、いよ〳〵私しの運命も迫つたかとうれしさ三分に悲しさ七分。四時過ぎ吉江さんがお寄んなさつた。今お歸りがけだつて……さう〳〵明日は日曜日だもの學校を退いてから日曜の來るのが早く成つた様な氣がする事……海老茶のお袴召してさつさとお歸りなさるお後姿をしみ〳〵と見送つた。仝し年ながら彼の方はまだ氣樂な先生様、それに私しは早や娘時代も今一と月かと思へば殘り惜しい様だ。夜平井の叔父様が話しにお出てなさつた。いつもながら此方の長居には閉口す

るとう〳〵十二時迄も

○買　物　　　仙臺市　北郷照子

十一月廿一日。昨夜の大風の名殘とも覺しき冷風の折々に吹きくれど、空には曇り氣更になき好天氣なり。朝餉すまし、例の如く同室の岡部樣、高木樣達とつれ立ちて、買物にと校門を出づ。未だ朝の間の事なれば、昇校の學生、役所にといそぐ腰辨連中、近在より出て來りし八百屋、魚屋、肥桶をのせゆく荷馬車等、引きもきらず往來して中々の雜沓、一通りならぬ步き難さを忍びつ、漸やく大町に出でて用を辨じぬ。

歸途、三番町を通れば、お魚好の岡部樣、「あそこに大きい烏賊があるわ」としきりに魚店を眺め給ふ。高木樣と我れは、其れに隣れる菓物店に並み居る柿の美事さに、眼引かるれど、あまりに人通りの繁くて、買ふもはづかしく、名殘惜しうも步を運ばせつ、ふとみれば、二三間先なる四つ角の右より、柿の籠を荷へる人つと出て丶向ふへ折れし、其れに二三步後れて、左より烏賊賣る人出で丶又向ふへ曲り行きしに、そゞろ可笑しう覺えて、三たり一時に笑ひたりき。

寄宿舍に歸りてみれば、早や十一時近く、臺所にては晝餉の仕度にとりかゝりしとみへて、燒肴のにほひは階上なる我が室にまで漂ひ來る。

○門出の日記　　　大阪　楠　正子

十月十七日。晴、明朝愈々出發と定めた、思へばあとの月の十六日職を辭して丁度一ヶ月間徒食した宅ではあれこれと支度に取込んで居る、わたしはお晝前から近處や親類へ挨拶に巡つて來た、父上は四時過ぎ役所から歸られ叔父上も見へた、母樣のお情けで風呂を焚いて貰つて入浴した湯加減のいゝので、ヅンブリと沈んで四方を見廻して居ると妙な氣がしてもの悲しくなつた、日は暮れ果て丶窓の外はいやに暗らく湯殿の洋燈は物憂氣に細く輝きジイ〳〵と油を吸ふ音が聞こへる、あゝ今宵この入浴が暫しの別れ？送別の風呂か、そして何時かへるであらうか、そのときはどんな身形て母上に見えどんな氣でこの溫い風呂に浴するであらう？それまで母上は無事で居られこの風呂もこの儘であるであらうかと樣々に未來を想像して居た、折から、ア丶お姉さんはまだ風呂よ。と愛らしい今年五つになる妹の喜代ちやんは叫んだのでわたしは思はず飛びあがつた。着物をつけて居ると時計は七時を報じた、夕餉を濟ませて叔母樣の處へ出懸けた。

煌々と輝く星もなんとなく物悲しく草葉にすだく虫の音もいと悲しげに別れ惜むかの如く見るもの聞くものにつけ只悲しさ增すのみ。祖母樣はお待ち兼であつた刻むセコンドは夜の更けるを告げ離別をはやめた、さらばと暇乞したそのときは祖母樣は泣かれた叔母樣も泣かれわたしも一滴の淚を禁じ得なかつた、會者定離

の世の中兼ねて一度はこの悲しさに逢ふものと覺悟せしも今更せまき妾の胸はくるしき思ひに亂れてせきくる涙數滴…名殘の數々は涙に語らせ悄然と見送る顏に涙見返すわたくしも又涙にて門に出た、片破れ月の影寒く夜は寂寞を守つて居た。

○耻かしき日記　上總　渡邊なか子

十一月十八日晴れ、洗面食事を濟まして母樣と並むでお裁縫する、私の縫ふのは妹のメレンスの綿入れ、母樣は兄樣のお羽織縫ふ、母樣は嫁いてからの一家の主婦たるべき者の心得に付き諄々と訓言して下さる、母樣と並んでお裁縫するといつも斯うだ、初めの内は厭な顏して叱れた事もあるけど、此の頃は母樣のお情けがしみ〳〵と身に泌みる…晩餐の料理は久に(下女)に手傳はせて私が作つた、をかずは鳥の田毎煮に私の好きな薩摩芋のフライ、蓮根の呼物てあつた支度にと立つ時母樣が「久によく敎へておやりなさいよ」とお注意だけど氣がきかないから癪に障る、御用で外出して被有つた父樣も御歸宅遊ばし、親子五人て團欒の夕餉、父樣より料理が善く出來たと御賞めの御話し、母樣は料理の事敎へて下さる、夕飯後はあどけない妹や弟のお話しに一家笑ふ。

十一月十九日晴れ、起床後する事例の通り、十時頃叔父樣被有る…父母樣と三人は奥て密談して被有る私は叔父樣への御馳走を料理して居ると母樣が「榮子や鳥渡お出で」つて御呼びなさるから、ハテ怪しなと思ひながら行つて御用を伺ふと、母樣が「先日話しておいたのは此のお方だが……」つて一葉の寫眞を目の前に出された……顏がハッとなり動悸が打つて下た打つ向いたから善くは分らないけど唯洋裝姿てゐたをはおぼへてゐる。

○會計日記　備後　井上年子

十二月一日。芳子の着物を買ふ。代二圓三十五錢也。○福呉服店にて、但代金年末勘定の約束。河内屋より一升二十五錢の醬油五升持來る。前の醬油五升代一圓二十錢を支拂ふ。

二日。炭一俵三十五錢にて買ふ。前月より二錢高し。夜芝居へ行き八十九錢使ふ。

三日。○○堂より原稿料二十圓送り來る。佐藤へ五圓拂ふ。利子五錢也。米屋より上米一斗持來る。代一圓七十五錢也。前の分一圓七十八錢。合計三圓五十三錢支拂ふ。

四日。○福へ旦那樣の羽織を注文す。價格十二圓六十錢にて、但二十日受取の約束。芳子の下駄を買ふ。代十八錢五厘。支拂濟。

五日。○島書店へ書籍代合計三圓二十錢支拂ふ。魚屋來る。小魚三尾三十錢にて買ふ。但年末拂の約束。

六日。上田樣へ御見舞を差上げる。菓子折代三十五錢

也。支拂濟。新聞代五十錢を拂ふ。

○樂かりし日曜　土佐　節女

十二月六日朝とく起きて畑に出ると野菜は眞白な霜を被つて重たげに見える植物とはいへどんなに寒いであらかふと思つてそと霜をはらつてやると、頭を上げてうれしそうにして居る、それを見るや滿足して、内に入り、弟妹のねむがるのをかはいそうとは思ひながらゆり起し、朝餉をすましたのは入時今日は日曜のことゝて、母のせらるゝことを皆引きうけ何くれと立ち働き終つてから椽側の暖い所へ縫物をもち出して手を運び始める、妹の側に來て「ねちやんあたいのおべゝ早く縫つてちようだいお正月に着るのだからといふ、こんなにいはれると何だかかはいくつて一生懸命にして夕方仕上げ着せて見た、其時の妹の顔は繪にも言葉にもあらはすことが出來ぬ、夜に入り木枯は吹きすさべど室内はへだてなくまとゐした其心て、寒さも何もわすれて餘念なく一日の樂しかつたことを語り合ふ程に、時は遠慮なく進んで、はや十時といふになる皆おどろきさつと床に入り夢路をたどりぬ。



日なた　水戸　北川うめ子

和歌

與謝野晶子選



○規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は沒書とす丙種の賞を送呈す

○（天賞）　長野縣下伊那郡上郷村飯沼　櫛原たづ子

水色の一重の衣を枝にかけその松が根に望の夜を寝む

○（地賞）　伊豫　井上いち子

母われを七つ子と云ふ君われを少女とよべりいづれまことぞ

○（人賞）　越前吉田郡開發　竹下濱尾

こほる風身にしみ吹きぬやせにてしわれを枯れたる木かとおもへる

【秀逸】

○　松本市　伊藤民子

うつくしき髷と髷とはつとよりて耳ちかしけり春の夜のまち

○　讃岐　子松さと

うつむけばかなしみあふれあをむけばねそれより來るいかがして居む

○　讃岐　育江子

よくいぶりけぶたかりりもえからを集めて強ひてたくとしたれば

○　大阪　淺田たつ

星もなき闇の海路に青き灯と赤き灯見せて船二つ行く

○　上毛　柳澤もと子

朝々や胸をしぬけて我夢の君がかげ去ぬ巣の鳥に似て

○　長崎市　坂梨はつね

悲しみの色にぬれたる人のごと果實の頬は日に向ひ居ぬ

○　德島縣　金原富美子

白ばらのつぼみひらきて懐かしき香を焚きぬ君まつ夕

○　大阪市　柴野いし子

冷やかにまたゝく青き灯のもとに倦まづも君をおもへりわれは

○　福岡縣　赤田壽美子

閨にあればうと〳〵おもひ起きぬればなほつめ〳〵と物思ふかな

○　近江　竹村みつえ

七人の男の中にわが妻も物語る夜や春雨の音

○　小倉　赤田すみれ

廣前の錦のみとにはら〳〵と散ればうつくし春の淡雪

○　越後　佐藤浪子

魂まよふ暗きみ國のありとせば分きて少女は死をば怖れね

○
鳴呼胸はちゞに砕けてひろごりてむかしに歸り君とひにゆく
麹町　牧野嵐水

○
我心君をおもふとおもはぬと戰かふ如しいづれや勝む
徳島縣　西野花菱

○
長閑なる霞こめたる野の中に少女ぞ一人物思ひする
府下　小黒しゅん子

○
思ふこと歌に成らずして磯の月君住む嶋にかたぶきそめぬ
栃木縣　大塚渓流子

○
さびしさをさては戀を梭として織らばやいかに私の落髪
京城　小林よし枝

○
わが香爐朝の床には薫陸を夜は薔薇を濡髪にたく
下谷　岡田はん子

○
日もすがら夜もすがら海ひたひたとなる
高松市　信子

○
蜜蜂は君がみ胸の大甕の蜜あふるゝを嗅ぎて居るらし
下総　とよ子

○
君により教へらるゝは聖より道聴くごとくねむたくもなし
信濃　吉川たみ子

○
春の野にしばし雲井のやどすてゝおりて來こやよ小さき星よ
京城　夢守

○
遠山のみねの松原打越ゆる人ひとりづゝかすみゆく哉
岡山縣　岡藤おき

○
冬の月銀杏樹の下に見え云ふ子の黒髪を寒く照しぬ
長野市　西條うめ子

○
声の湖や鴨飼ふ家の二つ三つ秋の夕を時雨て暮ぬ
備中　林芙美子

○
村雨のあとなく晴れて庭の萩光るは月の雫なるらむ
北米　合屋るり花

○
明日來なはなきて別れん君と我せめて今宵の夜よ永かれな
本郷　相樂きみ子

○
きみといふこひしきみ名をいくたびかまさごにうつす潮よする朝
若狭　山田緋葉

○
春の野に鳴く鶯を友としてわか菜摘むなり里の少女等
長野　津國喜枝子

○
うち霞む川邊の柳糸たれてなびく庭にも春風ぞ吹く
千葉縣　宇井花月

○
ともすれば胸の柔土崩れきてゆるがんとはす若き心よ
讃岐　道子

○
今日も猶屍に似たる現し身をわれとかゝへて痩えむものか
駿河　齋藤みれ子

○
鈴蘭や沼じりの家は紫のもやにつつまれたそがれにけり
駿河　片平靨子

○
むらすゝきみたるゝ中をうなだれて歎き人すぎぬ日のおつるとき
明石　落葉子

○
山の端は朝日を受けて蘇生へり眠る裾野をあざけるごとし
三河　鈴木まゆみ

○
花の咲く野邊の小川にたゝずみぬ山紺青に水すめる時
大阪　赤松久子

○
軒の端のつららを照らす月影も共に氷らんけふの寒むさに
北海道　山本たか子

○
上毛　須藤あさ子

雨なふりそ風なふきそと祈るなれ君が門出にあたる其の日を
○　大阪　西戸政江子
淋しさにえたえず寒き月によりてたゞよふ雲を君とも思ふ
○　上野　大沼素女子
枯葦のそよぎの中に舟一つ吾れと同じき運命には居る
○　愛知　成田石子
なんとなくたゞなんとなく胸騒ぐ秋の夕を門に立ちて見る
○　香川縣　藤村すがえ
君が代の春の夜あけぬひんがしにほのほの見ゆる住の江の松
○　石川縣　島崎春子
手植なる白菊咲きぬ亡き君も此の世の今日の花をしのばむ
○　岐阜縣　中村さわ子
焔々と吾が胸を燒く戀の火もついに冷たき君に消されつ
○　兵庫縣　菅原よしゑ
小羊に鞭を加へて何氣なき君を知りし日あまりにをそき
○　磐城　佐藤靜代
きのふより君戀そめてこの夜たゞ空なる月をあふぎ見る哉
○　奈良縣　黒田湖月
我胸の海靜かなるうらゝ日に帆かけて來る大船を見し
○　兵庫　杉山春翠
昨戀ひし君をし得たり今日よりはわれ新らしき生涯に入る
○　淡路　加藤菊子
我春はとくつきれかし徒らに運命の神のむちにうたるゝ
○　埼玉縣　岩田あをば
春立ては胸裡にかけし琴の緒を我まだしらぬよろこびに彈く
○　群馬縣　藤橋君代
一葉散り二葉ちり行く暮秋に冬よぶ雁の聲そつめたき
○　大和　中村すえ子
少女らの羽子つく音にさそはれてとしの初日を仰ぎみるかな
○　仙臺市　白ばら子
雪ならば解けもせましを君戀ふるこゝろの凝りをさていかにせむ
○　伊勢　田中とき子
嵯峨の家春月さしぬ紅梅に玉つゞりけるいさかゝかの雪
○　肥後　うれひ子
ゆら〳〵と大阿蘇の煙立ち上る肥後ぞ昔は火の國としぬ
○　長門　田中華子
空わたる小さき雲のうするゝにつれて遠くもなりゆくこゝろ
○　山梨縣　手塚芳子
春風よさらばはぐくめ我胸に君が植ゑたる二葉戀草
○　日向國　近藤ゑい
美しく水底さへももみぢして鴛鴦遊ぶ影の靜けさ
○　京都　[illegible]子
寂寥になれし身ながらむしの音に涙こぼしぬ月すめる夜半
○　長崎縣　中村靜枝
木々の葉はにしきの色になりにけりこゝろして吹け秋の山風
○　安房　内木美代子
夕の野御手にもたれて歌もなく涙もあらず君と立つかな
○　埼玉　川野三代
春かすみ立ちかくす野邊のおちこちにまた消えやらで殘る白雪
○　下谷　小川とも子
さなきだに昔しのばるる夕まぐれ鐘のひゞきとなく鹿の聲
○　美濃　早川すみれ子
まろ窓に鳥のかげさす春の日にきこりが斧の音も長閑し
○　岡山市　玉澤安子
屠蘇汲みて祝ふまとゐに鶯の聲もきこえて嬉しかりけり
○　栃木縣　谷田貝まさ
風あらき曠野を北に大鷲の夕日をぬひて天かけりゆく
○　橫濱市　倉持峰女
君がため幸多かれと所かな涙にもろきまごゝろをもて
○　大阪市　中野喜代子
冬の暮淋しき風の寺町を只小走りに少女子は行く
○　大[illegible]子

日よ出づなわが世にせむと自妙の神おりたゝす雪の世を見る
○　大阪　月溪
夜の雨は捕はれ人の罪を悔ひ泣く淋しさのこゑに似て降る
○　牛込　高橋そと子
そち向きに沈くべおはず黒髪よゆらかば春の月にのめかむ
○　下谷　荒千代子
うたげするむしろに侍べりしとやかにうつむきたりし日もありにしを
○　岩代　露花
折り〳〵はあやしき鳥の聲すなり苔滑らかに迫るやまみち
○　兵庫縣　關野しづゑ
いひもえずはかりも知らぬ天見ればいよ〳〵低き人のこゝろか
○　大阪市　土橋仙花
なき友と歌がたりせし夢さめてきくにさびしき木魚の音よ
○　兵庫縣　祥子
書にうみて東の小窓そとあけぬいとゞさびしき冬の夜の月
○　丹波　坂根竹野
かなしき音今日もかなてつ何方にか地上に立ちて聞く人あると
○　豐後　螢子
種々に花は變りて咲くなれどわが胸の内開く時なし
○　柴田かれ
此の里を吹く春風も寒ければ梅も遲れて咲き出るかな
○　中島利子
秋たけぬわが姉うせし板屋川川邊の蘆に霜白うして
○　下谷　細谷鋭子
冬枯の荒野の中に一人たちゆく道まよふこゝちす我は
○　門司　鈴木靜枝
いやしきに情隔つるものならば咲かじわが家の築地のすみれ
○　石狩　細貝藤枝
雲の峰動かぬ海に眞白なる帆舟たゞよふ砂熱き日よ
○　小草子
冬の日や姉はとつぎのいそぎにとひ絹白ぎぬたちませる哉

○　岩代　菅野やい子
麓にして山路にかかるたびびとの上に吹きまく一面のさくら
○　山形縣　大瀧くしは
十八の少女といへど山がひの底に生ひたり蘚苔花に似ぬ
○　秋田縣　加藤うん子
亡き母の佛はわります山寺の鐘聞くときぞ悲かりける
○　三河　宮田梅子
賤が家の一木二木の梢よりくれないそむる秋の色かな
○　岡山縣　松かげ子
松が枝に降り積む雪は來ん春の君のみ榮えのしるしとぞ見ゆ
○　大分縣　本田一枝
冬たけて吹く風の身にしむ夜亡き母偲ぶ山の邊の家
○　上總　高濱霞女
我こゝろ君し知らずば天地はいとひろからむいぶせき思ひ
○　房州　知世子
さびしさは君を戀ふるにすくはれて君を戀ふるに寂しさをしる
○　和泉　金田香雲子
我が胸にきえてありけるほのほの火又燃へ出てぬ君知りてより
○　埼玉縣　尾花子
わが家ののきの白梅咲きそめぬこゝにも春の神はきまして
○　上野　直子
君を戀ふ心はつひにつゝみえて三尋の文を今日たてまつる
○　あけぼ
京の路甄なる人の數知れずありとしおもふ春のともし火
○　下野　宮田いち
あたゝかきえんに衣ぬふ手をとめてきゝ入りにけりかなりやのこえ
○　大阪　鹿島あや子
天上の花の香ゆらぐ心地して君と語りぬ梅さく園に
○　長野縣　岩波むら子
川千鳥淋しく啼きて朝霧の晴れ間〳〵を舟下るなり
○　茨城縣　中山愛花子

たゞ一人久しくすめる山里の夢はいかにか世にかようらん
安房　川名松子
○
語りつき云ひつき置きて後の世に止めおかまし今日の恨を
北薩　とし女
○
美はしう小女の胸に咲く花を錺もてとるとれらふ人ある
岩代　川名直子
○
今の日の夕日はやがていたつらに人を呪ふがごとく沈みぬ
羽前　紫陽花
○
夢なりしと知りし刹那のよろこびをかすかに覺えまた夢に入る
信濃　山本操
○
弟も殿上人の心地して宴にありぬ三月三日
熊本縣　彩雲女
○
刈り終へし稲田の面を野鼠のちよろゝと行きてゆくへしらずも
下總　櫻井榮女
○
みだれふす白萩小徑露わけて友の御墓をたづねつるかな
婦美子
○
ゆくりなく君が門邊をすぎぬれば琴の音きこゆ春の月ある
信濃　くれなゐ
○
おぼろにも彿人の胸に立つさまにも雲の中ゆく人よ
遠江　岸とみ子
○
或る時は二人薬屋に薬うちて人の榮を笑まむとも云ふ
麻布　なく花
○
ふと思ふ去年の今日は彼の君とともにかたりしたのしき日なり
美濃　岩崎牧子
○
たまはりし菊の蒔繪の杯に君が代祝ひうたうたひけり
美濃　早川すみれ子
○
いとゞしくくらき冥路にさ迷ひて人は得行かじな泣きそと云ふ
伊賀　山村龍子
○
大天地殘るくまなく春立ちて隱者が門も蕗の花咲く
三重縣　川原みさを
○
寂し夜や閉戸に落つる樫の實の物思ひをる胸を打つ哉
遠江　小林とし子
○
朝霧の靜に晴れて里川の主なき舟に梅の花散る
靜岡縣　植田清子
○
昨日より今日の日の出のあたゝかさ春くるらしき鶯の聲
香川縣　百惠
○
秋の野のしゞまを渡る夕暮の鐘きく如き我さだめかな
徳島縣　岡本さかえ
○
世の人にさらでも遠き山里に獨り淋しく夕時雨すぐ
平戸　伊知子
○
千本の松の間にある月に更けし遊びと知りし夜半かな
美濃　村井かれ
○
玉しきの都の春の夜の雨にこわき心の弧にあひにけり
佐賀縣　東島たか
○
ひらひらと散るもみぢ葉を手に受けて眞白の紙にのせたまひけり
京都　堀尾露子
○
蹈鞴草椽に鞠つく妹の歌ものどかに春ゝ風吹く
羽後　三浦ふみえ
○
よりそひて立てば鸚鵡に名を呼ばれ頬あからめし頃わすられず
伊豆　山下しぐれ
○
鈍衣の若き尼君鉦ならす御經寂しくうぐひすのなく
伊豆　堀井りゑ子
○
茅葺の山の麓の我が家に初日はさしぬ海の遠より
大坂府　寺部君子
○
さひしらの秋風ふきて死を思ひ人戀ふこゝろ石とはめぬる
相模　山本文枝
○
力なき冬の日脚はかたぶきて落葉渦卷く木枯の風
播磨　内藤松園
○
妹がひとりごちつゝ雛祭み軒端にはそき桃の日の雨
濱田　小松原德子
○
あなうれし君がたまひし撫子のしほまぬほどに夜は明けにけり
美濃　牧叢美惠子
○

小さなる嘘にうつろ虚ゝ世をあじきなくみし少女はゆきぬ
○上毛　岩田千代子

母逝きて泣きつくしたる孤兒は照る月を見ぬうつけ心地に
○和歌山　楢本貞

我罪の世に生れ出て二十年の晩秋の鐘野に立て聞く
○宴惠女

夢の中に見しその人のかげ延ひ木の葉散る野をあるき見しかな
○備後　井上年子

彼の君のたよりのなきゝ友泣きし朝より強き誇を覺えぬ
○奈良　中富よしみ

落日に長き影ひきとぼ／＼とゆくもさびしやうらぶれの子よ
○大阪　時子

大空に星照り地には花咲きて笑し人は少女子にして
○芝區　あや子

くれなゐの色のあやある夕空はうらめる人にすこしふさはず
○石狩　里見まつの

一ひらの此寫絵のなかりせばいかでか君の面影を見む
○奈良　上田笑子

花に泣き琴のしらべに袖しぼるなを袖ぬらす夜半の月かげ
○神戸市　東川艷子

古きゑのさまにも似たり須まのうら松原つゞきゆきのあけぼの
○大阪　百田ちさと

夜の路靄をかづきて來給ひぬされはつれなく云ひもかれつる
○京城　三室英子

うすき少き夢の様なる虹たちてひな罌粟の花蕾ひらきぬ
○常陸　秋山欣子

もゝよろづ天の煌星落ち咲くと霜に光ある菊をおもひぬ
○東京　江森美

鶯の初音も清き朝晴の庭に薫れる梅の床しさ
○三重　福島初子

白川の關所をこゆる黄昏の車にちりぬ山ざくら花
○[illegible]前　浮草子

秘ごゝろ涙と共にあかさばやきみが御衣のしととあるまで
○北海道　河合嘉子

つれづれを慰めんとて妹は琴をかなでぬ七日病むわれ
○遠江　長岡芳子

吹きすさむ風の身にしむ霜の夜にたれのすさみか琴の音のする
○韓國　三室梅子

哀しくも夕日の色の室にみちて戀につかれし人は眠りぬ
○長野縣　村子

のり合の姫はいづれの御方かしるよしもなく舟はつきけり
○群馬　杏花

胸の野の暗愁の雲をよこぎりて何地去にけん羽黒き鳥
○丹後　宮川たけ子

花召せと君があきのふ白菊のあたひ尋ねてさびしくゑみぬ
○滋賀　若井きくゑ

わが心白鳩となり天翔り遠居る母を訪づれし夢
○茨城縣　逸村たけ子

君見れば高鳴ぞもゆる若き血は君こひしより失ひつれど
○越後　五十嵐文子

秋ふかき野邊はものかわもゝくさの花見るにこそ君がふり袖
○美濃　倍島小枝子

兎飼ふ京のいなかのをば戀し緋桃白桃さきてよき家
○明石　伴とき子

高野山貧女か上けし一燈の古きにふりぬ春の夜の雨
○静岡市　根岸欽子

むらさきの薫る息する女神等のいませるさまに島は霧ふる
○静岡縣　清子

夕もやに君の御姿きゑし時胸にうつりぬあわき物影
○千葉　北田信子

澄月に鹿の聲さへくはゝりてあはれ淋しき秋の山里
○静岡縣　脊木静山

美しき日脚はすでに傾きて遠くに見えぬ下嵯峨の山
千葉　長谷川文江
○
何となくもの淋しげの冬の夜に嵐吹くなり大澤の里
鳥取市　五百重子
○
二十より山にこもりて香油の香しらずと云ひぬいとこの君は
千葉縣　吉井光子
○
八重一重黄菊白菊咲きまぜて十歩の庭は錦してけり
伊豫　賤子
○
思ひ出てゝ秋絞りぬ夕野路を傀たれ行きし人の俤
青森縣　竹野秋子
○
人こふる心の憂ひほのぼのとあけそめにけり日ゝ落つる暁
宮城　柴田文子
○
二月はおほいとさむし梅の花雪より白く咲き初めにけり
岩代　忘れ草
○
此おもひかなたのむれにひゞけよと天に向ひて白き息吹く
岡山縣　石川貴志子
○
山里の更けし折戸に只一人眺めて惜しき秋の夜の月
山口縣　深山鶯
○
君ル戀ひ思ひなやみて戸に立てば音冷やかに秋風吹きぬ
福井縣　やまざと
○
尾を振りて犬は籾糠を舐めて居ぬ古の則を堅く守る君
江津　中村松雨
○
やつれ毛を撫て立てながら夕ぐれのまちにいてくる一群の子よ
相模　小林英子
○
うきことの多かる世かなかへりみる十八年は涙の少女
日本橋　升家米子
○
咲初てふ影ふと夕べ被ひきて胸のよき花色あせ初めぬ
大阪　田中れん子
○
わが魂は寛にさそはれて一千里我をはなれぬかなしき夕
大阪市　波奈子
○
なきつゝもひれもてきしる機關こそ我が幸うすき響に似る

○
きさらぎの天つ御空に月ありて寒き夜半にも笛ふきてきぬ
信濃　こてふ
○
耳抑へ聞かじと思ふ吾が齢重なる夜半のさげふりのおと
青森市　しめじ
○
春雨や小山の下の汀より彩り初める緑の姿を
群馬　津ほみ
○
糸くれど繰れどはてなき思出のつきんともせず君戀ふる日は
上毛　岩田せき子
○
春風ははてな衒らひて頬笑める町の少女のいくたりに吹く
千葉縣　相川みよ
○
風白き夕べ母よぶ思ひしてそと出て見つる夏の小川よ
下總　菅澤しげ子
○
わが君のやさ手に持てる傘の上におりてはとくる春の淡雪
沼津　入代美代子
○
遠き祖の供養するなり菊の香に精舍めきたる長月の家
新潟市　吉田愛比
○
わがよれる柱も寒き夕暮に白雲消えしあとをながむる
茨城縣　鴻巣櫻子
○
落葉やく煙りの末の塔の上に白雲なびく神無月かな
下野　鶴久江
○
藪竹の露降る中に雀來て千代の初音は遠く響きぬ
伊豫　宮花信代
○
走れども猶追ひきたるおさましき影をおそれて白日を忌む
讃岐　福家こゆき
○
淋しさに雁のゆくへをながむればむかしのゆめのおもはるゝかな
大阪　片山千波
○
いとかたく冷えこほりたる胸の戸のほとりにたえず火をたきにくる
伊勢　小貝よれ子
○
いつしかに軒の玉水音たえぬ靜に夜の雪やふるらむ
新潟　山内みさほ子
○
丹後　吉田せき子

朝夕に化粧の水をすてにける處より咲きぬなでしこの花　神戸　山口さい子

◯

眞木に一葉とゞめぬ冬は來ぬたゞ時をりは雪か葉とみむ　赤坂　海老澤よし子

◯

筑波峰の麓は霞に包まれて常陸國原春の夜明けぬ　廣島　大久保三春

◯

待ち侘びし君が玉章手にとりて泣きしは哀れ曉のゆめ　甲斐　平山つま子

◯

わが庭の銀杏の大木落葉して晴れたる夜半に星の花さく　臺北　三上たけ子

◯

間違くも樂しく待ちし文なるに今日の言葉の悲しきものか　下總　荒露子

◯

灰ながめ榾火ながめてわが思ひさめん日想ひ涙ながしぬ　伊賀　山村さゆり

◯

十年まへ逝きにし乳母と君とのみ思ひこの日も悲しうくれぬ　若狹　山田小浪子

◯

情てふつよき綱もて四尺餘の身をばくゝりぬこの現世は　甲府　手塚靜子

◯

嶽潮はみなぎろふなり我胸のひそめる舟子君に楫とれ　美濃　村井かれ

◯

野も山も川の上さへ露ふりて夢のやうなり有明の村　沼津　中村あい子

◯

胸をいる矢に胸を押あてゝ日頃のなやみ燒きつくしみん　沼津　渡邊とよ

◯

白萩のまどにより添ひ歌かきし昔ながらの月の夜かな　田舍少女

◯

白鷺の立てる汀も暮れそめて流るゝ雲も黑ずみにけり　上總　てる子

◯

み手とりて夕逍遙もしてなまし赤城の峯の夕榮すれば　陸前　佐々木榮子

◯

薔薇散る夕の端居にわが母と膝を並べて昔をきゝぬ

◯

夕燒の雲輝やけき秋山や紅葉まちりに山茶花のちる　伊豫　曉子

◯

萩の花慰め兼れてわけ行けは外山の邊に衣打つ音す　横濱　右屋信子

◯

たとふればやみ路にうすき青玉の光にも似る我思ひかな　備後　井上年子

◯

高殿にかなつる琴もむしの音と悲曲ときこゆ秋の夜なれば　長野縣　古畑よし美

◯

ふれも見て少女に熱き血はなしと云ひ給ふ子をこの日見まつる　神田　上野巨

◯

琵琶法師かたる平家の一曲や夜はしづかにしぐれふるかな　和歌山　加藤夏子

◯

秋風のそよふくにはのやれがきにかなりゆかしぎ白ぎくの花　沼津　渡邊とよ

◯

紅牡丹かゞやく見れば伊勢の國二見の浦にのぼる日想ふ。　下野　てつ子

◯

足屈め戸ぼそに一人うかゞひの息するさまにわれは世に居ぬ　伊豫　芳枝子

◯

花も見じ月も眺めじひたぶるに君のほゝ笑み見まく欲りすれ　伊勢國　大原しづ子

◯

今朝かへし單衣の掻のうれしきに又降りて見ぬ背戸の庭　香川縣　長尾峰子

◯

柚ひとの斧うつ音も絶えはてゝ時鳥なく夕月夜かな　京橋　埋木

◯

下加茂や松吹く風は靜まりて傾ふく月に川千鳥なく　京橋　細川榮子

◯

越え行かば龍田姫にも逢ひぬべしもみじもえたつ山の下道　四谷區　桝崎佐喜子

新論文



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸孃が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○裁縫と趣味　（地賞）

海棠女

私は小學校時代には非常に裁縫が厭ひで御座いましたそれが今は全く反對で非常に好きに成りました、なぜ好きになつたか。どう云ふ動機で好きになつたかと云ふ理窟は少しも分りません、自然に趣味が出來たからで御座いませう。どうしても裁縫のやうな綿密なものは趣味を作らなければ進歩はむつかしいと思ひます、が、裁縫に趣味を持つと云ふことは年少では中々にむつかしい事で御座います、然兎に角何かを念を入れて仕立ます、あゝ綺麗に出來た。又仕立曠がしたと思ふ時、其處や此處を觸つて見ます、こちらの止めは善いがあちらのは惡い、彼樣にしたら善く成るのだなと研究心を起しますと其時面白味が起るのだらうと思ひます。だから嫌と云ふ心をおさへ忍耐して研究心を起す事が必用だらうと思ひます。

又應用と云ふ事に心を向けたならば趣味を作る一に成りませう、例へば女袴を學びましたならば雛形を作てお雛さんにはかして見るとか、西洋前掛を習つたならば之も一つお雛さんを拵えて、着せて樂しむとかしたならば少しは面白味が出來やうかと思ひます、少し趣味が附ましたらもう大丈夫てす、何しても仕上を見るのが樂しくなります。裁縫の趣味は立派な三枚重や目も目映いやうな帶などばかりでなく、木綿着でも破れたものに敷しをあてゝも趣味はあるのです、私がいつか幼い時のメリヤスの帶に敷しをあてゝ、前わさで、破れて居ました故、腹合帶のやうに兩方を縫て、仕立ましたら見變る程善く成ました、是を妹にさした時は、何とも云へぬ嬉しさで御座いました、私が彼帶をしめて居た頃は破る計てあつたのに、今はあんなに仕立る事が出來る、彼頃はあの樣な面白い事が有た、あの樣な遊びをして居た、と裁縫以外に何とも云へぬ嬉しい又なつかしい感を起し

ました、是は全く裁縫の賜で御座います、此裁縫の趣味は女子の授かつた特權で男子にはどうしてお味ふことは出來ません、どんな勇壯な軍人でも博學な文士でも到底まねする事は出來ません、誠に天つ神より受けた、大切な女子の天職で御座います、故に女子はどうしても此裁縫の道を發揮さし、他の藝術におとらぬやうに進歩さすべき義務が御座います、

裁縫の趣味は十歳許りの雛さん弄ぶ子でも目鏡をかけて足袋につぎあてるお婆さんでも、味ふ事が出來進歩をはかる事も出來る誠に結構な物で御座います、故に女は趣味を以て愉快に事にあたり美事に發達せしめ男子をして垂涎せしむる程にありたいものと思ひます。

近頃稀な氣焔です而も眞實を失はなかつたのは大に宜ろしい（評）

〇折にふれて（入賞）

播磨　內藤松爾

夕暮私は鷄に飼をやつて居てふと思つた。

お米をまいてやると一羽の雄鷄が他の鷄に喰べさすまいと足を上げて蹴り嘴を以て啄きまして他の雛を追ひ廻つて居る、右へまくと右へ左へまくと左へ來て他の雛を追ふ、實に一羽で他のものを無茶にしてしまふ、其れて居て自分は十分に喰べて居るかといふと左樣てない、他を追ふのにかゝつてしまつて居る、他の鷄は追はれて逃げながら隅の方でおとなしく喰べて居る、終ひには雄鷄が追つて居る間に他の鷄が大方喰べてしまつた、私は獨で馬鹿な鷄だなと思つた、けれど考へて見ると人間も同じだ、自分が人よりもより多く得樣より偉くならう、より名譽を得やうと何れ丈け東奔西走して居るか分らない、中には丁度此の鷄の樣に他を落しても自己を上せんと隨分裏面には見苦しい謀をして居る人もある、此方に好い所がある彼方に良い口があると西へ行き東へ走り結局何も得ないで蒼くなる人も澤山ある、私は今鷄の樣を見て笑つたけれどもし人間がして居る事を高くから見おろしたならば如何に哀れに見惡い事であらうと思つた、

少しの事を笑ひ泣き憎み怒り妬み爭ひあらゆる醜態を演じて萬物の長と誇り而かも明日の運命も知らない、天上にある神の此の樣を見られたら如何に哀れにはしたない者と笑はれる事であらう、

私は世に不完全な人間と生れて到底も完全な事は望むて得られない事でありますが、反省の上にも反省し修養の上にも修養して笑はれるとを一度でもより少なくしなければならぬと思つた。

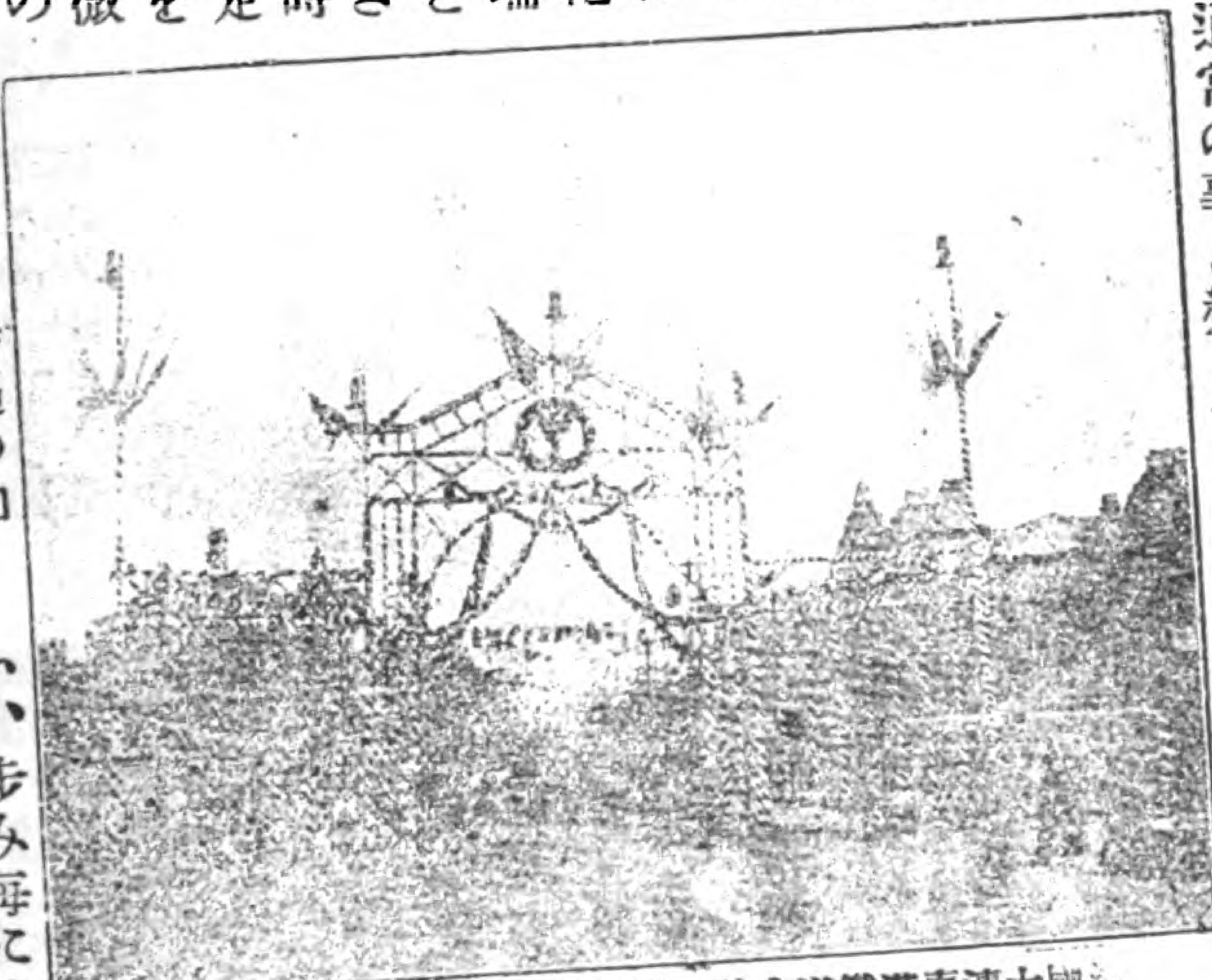
老練（評）

〇唱歌【秀逸】

遠江　岸とみ子

快活なる唱歌は庖廚に美味を與ふと云つた人は眞に快

活なる唱歌の偉力を知覺した者と名づけてよいでせう私共難事に處する時、其の成否を疑つて懊惱するのを止めて、一とたび快活なる聲を唇頭に湛えて一曲の愛歌を歌つたならば、至難の事も忽ち通常の事と變じて、格別の苦も知ず成し遂げる事も出來るのは之れ私共常に實驗する所てございますかの過劇の力業に從へる勞働者を御覧なさい、何れも快活なる聲を揚げて高らかに唄ひそして勞苦を輕減して居るではありませんか、若し彼等に嚴命して謠ふ事を禁じたならば、多分半日ならずして力萎えもう駄目」と絕叫の聲を聞くだらうと思ひます瑞典には「シンギング、ミルカー」と云ふ奇妙な職業があるさうでございます、これは牛乳を搾取する時に微妙な聲を出して唱歌するの定業であつて、比較的多額の給料を受けつゝあるのみでなく、最も微妙な音聲の者であれば牛乳業者の競つて雇入れるのでございます、從つて其の待遇の如きは實に他國人の夢想だになし得ないと云ふとです。何故唱歌搾乳者が斯く好遇せられるかと云へば、他てもありません、母牛が妙へなる歌聲のために心に快感を生じてよく五分の一以上の乳を增し得られるからです、ものゝあはれもわきまへぬ動物かと思はるゝ牛でさへ搾乳者の吟唱を聞いてはかやうに其の心情を慰めしむるではありませんか。


清國大連南滿鐵道會社一週年紀念祝ひ　本野子寄

西人曰く「好調の音樂は羊の發育をして盛ならしむ」――と。遠き青山の漣波、且つ消え且つ現はるゝ一帶の白水、さては一と度翔り白雲に影を沒して、麗日かゞやく蒼天の庭に囀る雲雀も何れ詩魂を動さぬものはないとは云ふものゝ、若し白楊けぶる河畔に牧童の鄙びた絕調を聞いたならば誰か田園の趣味の富貴權勢にもまして樂しきを思はないものがありませうか。非情かと見らるゝ羊の身にも妙へなる牧童の歌を聞いては感ずるふしもあるのでありませう。幾孕の暮雲天の半ばを抹して百鳥塒に急ぐの時、振鈴の音靜に、峠を緩かに駄馬の降りて行くのをご覧なさい、歩み毎にさゝやかな鈴の音がするので馬はよく重荷を忍び長い旅に堪ふるのでございます。荒きなりはひのみに暮らせる動物すら斯の如く鈴音に其の心情を慰めるではありませんか。夫れ牛といひ羊と云ひ、馬

と云ひ妙音を聞いてかやうに其の情を慰むること實に大きいのです、况して世間の父母たるものが、若し此點に心を用ゐ徒らに玩具にのみ金を投ずることなく快活な唱歌によつて、愛兒の心を樂しましむることに氣が附くならば其及ぼす所の善果、眞に思ひ半ばに過ぐるでありませう。

快活な吟唱はかく人にあつても獸にあつても其の心情を慰め精力を鼓舞し處世の勞苦を輕減する事眞に甚大であります、之れを以て人生の福音と呼て妨げないでございませう。

議論の筋は通て居ますが餘り理窟つぽく出られたのが遺憾に思はれます斯様な題はわけて趣味深く書く方が宜いのです（評）

○剽竊家攻擊諸孃へ

兵庫縣　橘　きみ子

他人の文章を剽竊して惡いといふ事は皆さん御承知でせうが、剽竊してよいといふ事は、御存じありますまい私は、田舍の不束者ですが、剽竊するのは、大變よいといふ事を、知つて居ます。だから、剽竊しやうと思はれる御方は、幾らなと、剽竊しなさい。攻擊する人がありますれば、訥辯ながら私が、其辯解はして上げますから。

かういふと、皆さんは私を、剽竊家だ、不都合な者だ、と云はれるか知りませんが、實際、私は十四歲の昔から、十七歲の今に至るまで、人樣の苦心を剽竊した覺えはありませず、又今後もやらうといふ樣な、氣はないのですが、何だか、剽竊するのは、好きです。皆さん、やつて御覽なさい、他の雜誌の、天賞位を剽竊すると必ず地賞か、人賞かが、當りますよ。

然う、此廣い世界に、それを見る人の目は、幾等あると思ひなさるか、直ぐ發覺致します、發覺した其時は、世間へ對して、何と致しなさるか、是をよく考へて剽竊しなさい。

よし又、剽竊して都合よく、人の目につかなかつたとしても、自分は剽竊した事を知つて居ますから、自分の良心が、自分を責める事はどうでせう。實際二三年は壽命が縮みますよ。自分の天命を害つてまで、一圓や二圓の賞が得たいですか。金と生命とどちらが大切でせう。

金錢を盜むのが、盜賊ならば、文章を剽竊するのも、盜賊ではありませんか。物品を盜んで、法律上の罪人ならば、文章を竊めば、道德上の罪人で、罪は寧ろ此方が重いです。之もよく〳〵考へて剽竊して下さい。

是等を、熟考なさつても、まだ剽竊しなさる御方は、到底此世で、心を改むる事の出來ない人です。前世から剽竊家と極まつて居る方です。こんな人に、幾ら剽竊すな、自分で創作しなさい、といつたつて、馬の耳に風

とやら、一向利目のない人て、勝手になさるが宜いじやありませんか。皆さん、之からはもう、剽窃家攻撃はよして、剽窃家稱揚と、致したならどうでせう。實際剽窃家は記者樣及び我々を輕蔑して居るのです、侮辱して居るのです。

驚くべき大反語づくめの諷刺文選者も是れから駿尾に付して此大膽な男氣を敢てする剽窃家先生に對し敬意を表しませう（評）

○我心

（十八號の論文醜女をみて）　野の花

あゝ紫子樣私は貴女の御說をみて泣きました、同情も



田舍　武藏込谷紫宵女

いたしました私も貴女とよく似てます、威張るやうてすが顏こそ醜いが學業に於ては、人に劣らないつもりです。しかし學問は少し位てきなくても標緻のよい人は幸福てす、私等醜女はどんなに辛いでせう。

私共の方ては何か式のある時は來賓がございます、其折に貴賓の接待員はいつも成績のよい美しい人てす、あゝ其時に私よりも數等落ちる人ても標緻がよいため其席へ出ますが、私は、私はそこへは出られません、之が弱い女として泣かずに居られませうか！實に醜女程悲しい辛いものはないて

せう！

けれど私は失望しません菜子様よ貴女も落膽遊ばすないくら輕薄な今の世とても、會には濃鶴台のやうな人があるてせう、よしやないにしても、婦人の天職はつくせなくとも、婦人として社會につくすべき事は、神聖なる教育者又は文學者或は慈善事業、看護婦等いくらも手を擧げて招いてるではありませんか。是等は醜女でも果せる立派な仕事です。貴女は文學をお好みとのと、好きこそもの丶上手なれ、もと〳〵成績がよいのてすからどうぞ斯道を深く御研究なされて、世の人のため社會の爲め立派なる著述をなさるやう祈つてます。私も何か社會のために盡くさうと勉强してます、兎に角躰の續く限り力の及ぶ限り努めて德を磨き、心を美しくしたなら何事ても成功しないとはないてせう或は反つて美しい人よりも幸福になるとがございませう。

人の容貌は精神修養に依て美しくもなり醜くもなります、修養が品性となり品性の調和が風丰に現はれてノーブルな天使の様な姿になるのです、尤もそれは世間て所謂美人即ち白拍子美女即美てはありますまいけれども……（評）

○厭な人

由加里子

女の束髮に男の分け髮これ等を世の人はハイカラさんと云ふ。此頃私しの村の若い男は皆此ハイカラ風に吹き倒されてしまつた。洋服着たり靴をはいたりする樣な人ならばまだしも身には尻切れ襦袢に竹の子笠かむつてわらぢ履き草刈りに行く様な境偶て居てチツクで頭をてこ〳〵光らし少し長く成つたのを大切さうにして風に吹かれて亂されまいと小首傾けながら肥料持ちなんかして居る風のおかしさ面の惡さ側の見る目も恥かしい。それのみか手を見れば節呉れ立つた恐ろしい程大きな指にはめられた銀の指輪が泣いて居る、ちよつと出の夜遊びに迄ニツケルの時計なんかきらつかせて氣狂の樣な大聲て譯も無い事を唸りまはる。今年十五の酒屋の樽拾ひ迄が此爲躰て得々然たりとは實に未來の程も推し計られて心細く涙がこぼれるあゝこれが戰勝國の青年て有らうか――と云つて私しの悲しむのが無理て有らうか。

○四季

愛媛縣　松村さみだれ

人に心がある事は解つて居ます。そして四季にも亦心と云ふ程てはありませんが確かに似通た筋があります春は如何てす。丁度人が初戀の甘いのに醉つて居る樣な時てす。樂しいのです、そしてそろ〳〵心が燃え出します。夏は人が初戀から進んで最早夢中になつた樣てあります。心が燃え盛つて居て水を持て行た所が仲々消えませぬ。戀も此所が頂上てす之からは下り坂てす。秋は人が失戀して淋しい樣てあります。いやに沈んでまかり違つたならば自殺もしかねまじい樣てす、吹く

凩は人に吹く秋風でせう、時折の時雨は悲しの涙であります。此時が一番大切であります。暗黒、光明、の兩道の別れる所であります。

冬は光明世界に進んだ樣であります。よし煩悶からは出たとは云へ元の人ではありません、氣がシッかり落ついて凛然として居ます。折から降る白い物は有りし昔を忍ぶ思出でありませう。

眞闇な、一寸先も見えぬ所を限無い速力で我乍ら驚く速力を以て限ない闇い何のやうな樣かも見えぬ道を何所迄も／＼進て行く、之が暗黒世界の道行であります。人と云ふのは何時迄も此旅行を續けるので決して天國などはありませんと思ひます。又時‥‥四季も永久に大陽のある限り續くのであります。

四季の心を說くところも杜撰、無論荷が勝過ぎた題なれど、凡べてあまり無造作の解案に過ぎ意味少なし（評）

○何故歌を作るか

大阪　百田ちさと

私は歌が好きです、私が好きと云ふのは新派の歌で、特に人生と云ふ所に基點を置た歌がすきです。私は實際——今悶へてゐる、深い／＼谷底にでも落ちたやうな心地で、人生と云ふことに悶へてゐる、鳥渡の間も忘れることの出來ぬこの二字、——私は幾度か之れを現さうとした、具躰的に我心を書いてみやうとしました、そして第二の自己と云ふものを作つて、それを冷かに見やうとしたのです、しかし、それは未だ十六才の少女の私にとつては重荷に過ぎました、いたづらに思ふのみで、それだけの胸は眞實私には無いと知りました——しかし、と云つて私は徒らに思ふのみにては到底滿足が出來ません、私が短歌を選んだのはそこなのです、私は歌に第二の私を得やうと勵んでゐます、それ以外私は歌をつくる態度に變つた所を持ちません。

言ふところ徹底せざる憾あれ共自我を打出さんとする態度の眞なるを喜ぶ（評）

○郷土文學

備後　井上年子

若し本誌の投書家中に、將來文學を職業として立たうと云ふ樣な目的の方があれば、夫れは大なる誤りです速に斷念なさいと私は忠告する。何故かと云へば文學は決して職業とす可き者ではないからである。自己の作物を賣らんとするのは、既に自分の節操を賣らんとするのと同じ事であると云ふた人さへある位で、詩歌文章は決して營利思想を以て作る可きものでは無い。それが職業として居れば止むなくパンと代へればならぬ。いや止むなく代へる位なら未だよいけれど、遂にはパンを得る爲めに筆を執る樣に成る。するともう其の作物は死んで居る。無論そんな卑しい根性で書いた文章に、何うして眞價が認められやう。見得を飾る輕薄な文章で根底も何も無い。只巧に文字をあやつゝて、讀者を瞞着しようとして居る野心が眼にうつるのみである。

作物は何うしても野心をはなれねば不可ぬ。野心をはなれると云へば、たとへば此文章を作つて何うしようと云ふ樣な考へを持たずに　專心一意作つた文章を云ふのである。

私は非常に郷土文學を尊重する。職業の傍一つ作つて心を慰めようと云ふ樣な考へで出來た、詩歌文章を好むのである。こんな作物は、或は見得や技巧に置いては、例の實物的文章に劣るかも知らぬが、其眞情に於ては恐らく彼等の遠く及ぶ所であるまい。

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○ふたつの鐘（地賞）

信濃　太田喜志子

寝て居ます、遠くの人に近よらうともがいて／＼夢も見ないに今日も暮れ！
三尺にあいた唐紙、思ののがれる薄あかり。
細目して、また閉ぢて——。
昨夜、夜にげを仕たと云ふ、お夏母子のとりざたを、くど／＼と話す、隣りの婆や。
其の口裂けろ、
生活に困つて、にげたてはないか、たゞ私いろ／＼がきこえるけれど、
無口のお夏と一人子のおたかとが、
哀れな姿が見へるばか、思ふばか、この夕ぐれをどんな思で居るだらう。
うるさく亂れる髪を、よけて、ねがへりすると
二ッ寺から、鐘が一時に鳴りだした
片方は高く、片方は少し低く、どこかやさしく、
私の胸には二ッの鐘が、——二ッ心にひゞひて——。
二ッの鐘は、話をして居るの、
高い音の方は、あの親子を、この世から暗い國に追ひやらう、追ひやらうと云ひ、低い方は、
いゝえ／＼むごらしい情けない、そんな事はおよしなさいと止めて居るの。
びんばう故、人にうとまれ、しじう青い顔して居た
あの親子、夜にまぎれて、コソリコソリとこの村を立ちのいて、どこにみよりがあるでせう
お夏はもと「すて子」だと云ふに、
あゝ私、——何ともわけのわからぬ、ものに迫られて、このまゝ消えて仕まひたくなりました
——二ッのかねは——
だれとだれの、胸にひゞいて……。
もう／＼暗く——あゝ風の音。

（評）二つの鐘が二つの心に響いたのは甚だ好い、夜逃した親子のことは詩として此中に加へなかつた方が好かつたかもしれぬ、それから今一つ、作者は強て調子づけやうとしてゐるが、之は餘り工夫しない方が可い

○面（人賞）

長門長府村木永方　田中華子

ボヲボヲボヽヽと
ともし火が消えさう。

机や本の影が
天井にゆれる。
細い幽かな息をして
私は床の中にゐる。
てうど土の中に眠つてる
地虫のやう。
ふつと灯火は消えて了つて
あたりは眞暗になつた。
と、冷やかに笑ふた面が並んで
眼の前を往來する。
あゝ面、面、面――

内容の充實は疑はしいが態は得て居る、此才好く養へよ(評)

【秀逸】

○星一つ　信濃　胡蝶

美しいあの星一つ欲しい、光るあの星一つ欲しい、愛らしいあの星一つ欲しい、妾の髪にかざしたならどんなに美麗でせう、妾の指輪にしたらどんなに光るでせう、妾の瞳に代へたならどんなに可愛くなるでせう、美しいあの星一つ欲しい、光るあの星一つ欲しい、愛らしいあの星一つ欲しい、美しいあの星一つ、光るあの星一つ、愛らしいあの星一つ、妾に與へて呉れる神樣は無いのか知ら――左樣だお月樣に賴むで見樣お月樣々々、あなたのお傍の美しい星一つ妾に頂戴なお月樣々々あなたのお傍に光つて居る星一つ、頂戴なお月樣々々、あなたの傍の可愛星一つ、妾に頂戴なお月樣がにつこり笑つた時、星が可愛い瞳を瞬いた時惡魔の樣な黑雲が、兩手を開いて月と星を隱して了つた。

幼い散文詩だが、之れは又之れで一家の風格があつて、なか／＼面白い、お側噺か何かの中に入れると好からう(評)

○夜　靜岡縣　清子

時計、おやみなくさち／＼いつて居る。更けた、犬の聲も聞えなくなつた。虫の音もしない、淋しい雨の音ばかり、耳元で何か……「だれ……」ふりあふぐ、だれでもない、おかしいどうしたろう、やつぱりうそかしら、本をひらいて見る、あれ／＼またあんなに……くらい森で「だれ……花さん、花さん……」ぱつと開いた目、やつぱり私は机の上、花さんは、花さんはあゝ遠い。

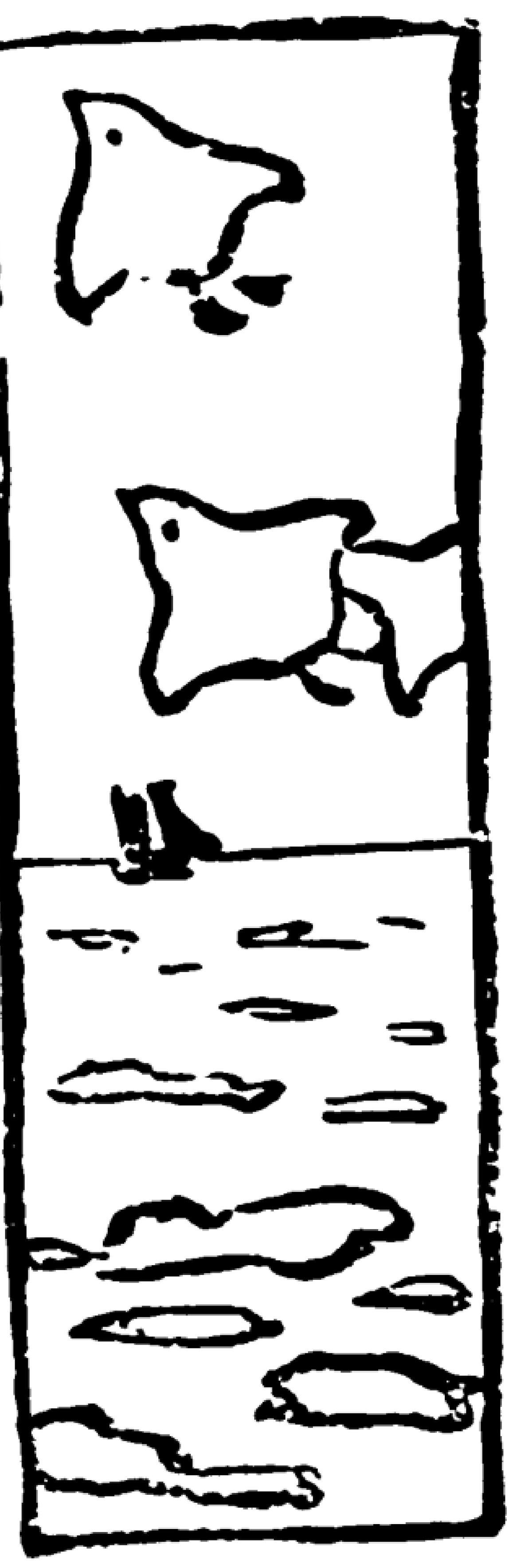
空想的であつて、情は動いてゐる(評)

○秋晴　若狹　津田春子

ぽか／＼と暖い空を
蜘蛛のゐが
日に輝いて居る
遙の野路には
ほけ薄が風になびいて
ピカ／＼と白い
光を放つ
野には麥まく人だらう
小さくチラリホラリ
鍬のみがキラ／＼と
雲一つ
南の方へとんで行く

短文

中村文學士選



○澁柿（天賞）

京都市烏丸前 吾妻橋鱗坂村方　春日　とき

甘い柿を其儘にして置くと、間も無く腐るが、澁柿は熟する迄保ちます、徒に世の無情を嘆くは愚、生まれて死ぬ、故に價値がある、空しく無意義の時を消すよりも寧ろ、短く共價値ある、生活を遂げ度い者です、路傍の石は永久に啞てはありませんか。

結句味ふべし。

○ものゝ音（地賞）

群馬縣　杏花

おぼろ〳〵の塔の背には小鼓を、ワイヲリンは百合の香高き森の小流で、笛は零れかゝる、眞萩葛萩の露の玉を、桔梗色のも裾にはらひながら冷たい月光をあびて。お琴は何時でもよいが紫陽花に白雨の亂るゝ時が一番だと思ふ。そして三味は雷雨の日に。

○規定　短くして氣の利いた文章を募る十六字詰七行以内凡て振假名つきへがきは許さず一人一章に限ること賞は内規な送呈す

けにさもこそ。

○蚊（人賞）

若狭小濱町玉前一番地　楠本うき子

今朝は大そう冷えます、針持つ氷の樣な手を一寸休めて火に暖める、障子に蚊が二つ、夏の間は私等をいくら苦しめたか知れぬに今は飛ぶ事が出來ず縮んで居ます憎らしかつた蚊ながら今は可愛想て、止まつて居る其下へそつと火鉢を置いてやりました。

やさしき心、たふとし、うれし。

【秀逸】

○風呂屋

茨城縣　逸村　竹子

月が明るく差し込んで居る。蓋をとると白い湯氣がポーッと立ち昇る。中へ白い肌をスーッと入れると奇麗なお湯がヒタ〳〵と浮み上る。頸迄トップリ潜り、顏を照らす月を見上げて思はず身慄いした。浮けた白い手拭の縮と字があり〳〵よめる。肩は月光にぬれて光り。湯氣は絶えず昇つてる。

清興。

○私の好

秋田縣　園　子

春は花見が好き、夏は川邊で凉むのが好き、秋は取つても取らなくとも

茸狩が好きて、冬はたゞ炬燵の上て書物を見るのが一番好きてす。

同感。

○冬

京都　向井　光子

鎮守の森が裸躰になつて、小川の水が、かれ、麥がまかれて、猪が澤山とれ、私の手に、凍傷が出來ると、冬の神様は狭い此村の天地てほゝゑんていらつしやるのてす。

麥がのびると春の神が。

○私の願ひ

高知　よし子

私は一生老孃て、女學校が卒業だら、愛らしい神聖な神の子の様な小學生徒を、未來の楠公や東郷大將に敎へ導く、然て年老つたら、静様の女の子と清様の男の子を貰つて、自分の家を次がせる。私は清い流や木の間に渡る風の音を友として餘生を送りたい。

協ふや否や。

○雪ちやん

近江　竹村　光枝

私の着物を逢ふて居ると、妹《四つになる雪ちやん》が來て『姉さん其着物着て何處へ行くの』と言ふ『お嫁によ』『そう、妾も行きたい』『えゝあなたお嫁に行つて何うするの』とわざと訊いて見た『あの――鬼ごッこして遊ぶのよ』とニッコリ。

御本人の覺悟は?

○テーブル掛

牛込　平塚白百合

一昨日文壇の光に當撰した賞品が着たので、さあ何色だらうオリーブか赤かと大さわぎしながらあけに掛るオリーブなら兄様さねとおつしやるほぐして見ると赤なのてホット一息、先お正月の私の机は此の赤いテーブル掛に装はれるのてあります。

そして來る人毎に「これはれ……

○さびた針

廣島　國信貴美子

「これを御覧、いくら苦心したつてさびた針では衣は縫へないてせう、女と云ふものは是と全じことて心がさびて居たら何の役にも立たないのてすよ。」とお母さんは申されました。

謹聽。

○正午

若狭　山田　小濱

野寺の晝いと靜か、庭一面に古い小筵を敷いてまゆあまた干してある。隅に主じ顏の緋牡丹は日をあびて花も燃えさう。黄色の胡蝶は羽も休めもせず田圃の方へ行く。眠さうな三毛猫は竹椽に横たはつて幾度か目を見張つてる。たゞ動くものは眞白な雲の南を差いて。

兩の瞼がとろ／＼と。

〇虫の墓

駿河　山梨芳江

「可哀相にね姉さん來年はまた生れて來るの？」「あゝそうして乾度この築山へ出て啼くのよ其時はまた兄さんに捕つて頂くわね」美しい姉妹の間には小さな籠が二つ空は碧んで池の底には白う晝の月が映つてゐる。二人はいま鈴虫の墓を築いてゐる。

虫は二人を怨んでゐるとも知らで。

〇弟の守

和泉　藤阪　綠

桃が咲いたらまたまたお出て
よむぎ團子の馳走する。

春のぽかぽかと暖い日が、椽の半を浸して、謙ちやんの五分刈頭から、圓い顏が美くしい。餘り暇なので、椽の桟目を數へてゐると、こんな歌が聞えた。弟の目が覺めた。

守歌で兩の肩をゆすぶる。

〇紅葉

德島縣　紫　濃子

「何してぞ。早う汲んでお出」かまの下たきつけて居るお母さんに叱られた。てもまあ、昨夜の間に流れついた美しい紅葉が、狹い水吸みばに一面。杓子つける所も無いのです。

詩趣汪溢。



スケッチ　牛込　佐野貞子

〇女の思出

讃岐　遠宮とめ子

娘盛りのときは早く嫁になりたいと思ふ、嫁して見れば何につけても、娘の樣な氣樂な事は一時もない故、娘のときが戀しいと思ふ、そして子供の三人も出來て見れば、花嫁の節がよいと思ひ、かうして老いて行く次第に若いときが思ひ出されるのであらう。

そして、扨て死んだらば？

〇手

上越　大木しげ子

私しの手は農夫の手、毎日鍬を掴むも此手、御飯をたべるも此手、歌や文を作るも此手、穢い時にも綺麗な時にも使ふ此手。

大切におしなさい、

〇秘密の注文

きよの

女學世界さへ讀んでると、他の女學雜誌も文學誌誌も見るの必要がない。と始終いつていらしつた京子さ

ん昨日終日私の家で女子文壇を見て歸られたが早速コッソリ注文したといふ事を私も其妹さんから聞きました。

これ、女學世界と文壇との特色の差異！

○女の春

岩代　根本松江

呑氣な處女時代は過ぎ去て、花嫁の香の在るうちは、好きな道とて、琴や詩筆に親んでも居られるけれど。胸あらはに、乳含くまする頃となつては、琴は納やの隅に、筆は折られて、火に投げられ樣、女の春は短いものと、始て悟つた。

春も趣味あり、夏も趣味あるものぞ、

○私の心

岐阜　篠田とみ子

私の心は實に忙がしいので御座います、眼さへ覺めれば身うちの事から他人樣の事迄も、扨ては其日のお稽古の事から、本も讀みたし、お友達でも出れば話して居度く、折には戀人の上も想はにやならずあゝ樂よと思ふのはほんの浴後の一眠りでございます。

さても御忙しい事哉、

○初美さんと私

松山　ぎよう子

有がたいと陰では泣いても面と向ひ合つてはお禮も云はず、哀れだつらからうと思つても同情の言葉も云はぬ。手紙のやりとりも月に一回あるやなし、それも一寸見には冷淡らしい事ばかり書いて、それで居て二人の仲は水と魚、夜毎の夢にも通ふのです。

それは結構！

○いち好き

熊本市　江添ちじ子

お湯をすまして、お化粧を終へて、着物を着替へて、そして掃き清めた書齋の鏡の樣な机に整然と向ひ、兩手をついて、除かに／＼物を考へるのが私はいち番好きです。

私も。

○口惜い日

岐阜縣　藤田芳子

ぽか／＼と温かな足指の霜燒がしきりとかゆい日、妾は綿入を是非今日中に仕上ようと逃げ出す樣に運ぶ針の手元を初冬の短い日足が小股でちよこ／＼忙しく追ひ掛ける。

これも御飯をおしや……と母の聲。

○芳ちやん

三重縣　川原みさを

芳ちやん今年三つ、可愛い眞盛りです、妾が芳ちやんをお風呂に入れてやらうと思つたら、熱いからいやだと駄々をこねるんです、それで桶に一杯水をうめてやつたら、ぬるいといつて、喜んではいりました。

大人にもあり。

○鈴の音

紀伊　勢以子

村はづれの橋の上に立つ、日は既に落ちて、枯芦を渡る風が寒い、と鈴の音がして、五六頭の牛を一人の男が牽いて來か丶つたが、橋の袂を左に折れて行つて了つた、あ丶屠牛場へ通ふ道だ、私は見えずなりゆく牛の群を見送つた、鈴の音が幽に……幽に、もう聽えない。

やがて夜の幕が垂れた。

○口惜しまぎれに

門司　二宮和歌子

御坐敷には藤色縮緬の三枚重ねやら薄色模様の羽二重やら、それは皆姉さんのお嫁支度だもの母様はそれを敬子姉さんに着さして見ては「立派な事々」とニコニコ顏。私口惜しいこんな事なら姉様なんか無い方がまし人の知らぬ樣に衣桁に掛つてた三枚重ねのにそつと手垢付けて置いたわ。

この時頭に二本の角が……。

○何故か知ら

播磨　内藤　松園

手紙を出す時は何日でも未だ色々有るけれど又お目にか丶つてと書く、逢つて見ると何故かしらどちらも沈默つて仕舞つてお話が有り相で出て來ない、時々妙に瞳が出會う、窮屈て仕方がない樣で而かも何日迄も別れたくない。

許嫁の間柄。

○釋迦ヶ岳

靜岡　中島　利子

放課後何十の天使を送り出すと共に廣い校庭に出て、必と仰ぎ見る釋迦岳の遠望。雨の日の外はつきりと現れて居る其の形、どう見てもお釋迦樣の仰向其儘、私は其柔和な面相に依て一日の煩を慰藉するのである。折柄撞出す意安寺の鐘、暮靄を破つて餘音長く。

私もあこがれた一人でした。

○無邪氣

大阪　土橋　仙花

今年五つの君ちやんお腹が痛いと云うて今まで可憐そうに泣きしきつてゐたが種々の手當て快つたがお姉さんの優しい手に抱かれたま丶何時か眠つてしまつた顏のあどけないことよ、見れば赤い袂から青い金柑二つこぼれてる。

手は紅葉の樣。

○滿足

靜岡市　鈴木佐知子

雨が降れば自分に同情して呉れて――と思ひ鳥が鳴けば自分を慰めて呉れると思ひ蟲の聲を聞けば、我が友が――と思つてゐますから些とも淋しい事はないわ。とは病床に藥と相親しむでゐる私の友、秋子さんのお言葉です。私お哀愁でなりませ

ん。

大なる慰安。

○冬の夜

長野縣　岩波むら子

凩がヒューと物凄い音を立てゝ通つた、枯葉がバラ〳〵と廂を打つ空には青白い樣な星が二つ三つ瞬いて居る。淋しい、淋しい、いやな晩だ、と思ふと亦一しきり木枯の音、時計は最う九時少しすぎた、下りの終列車が今し裏り田圃を貫いて、此寒い〳〵冬の空を馳せて居る。

ランプ油がジリ〳〵いひだす。

○淋しき教員室

尾張　秋月

私の通勤してゐる、小學校、朝登校して挨拶をする、そして椅子に掛るもうそれで終日、話一つすると云ふ事もなく、笑ふ事など、一年も奉職して居ますが、ほんの數回に過ぎません。授業が濟めば勝手に家へ歸るのですその淋しい事私は實に不愉快でなりません。

兒童も氣の毒。

○文壇を開く

井上いち子

私は出來もせぬのに大變投書がしたいので一つ二つづゝ出して居るのです。さて文壇が參りますと、それを樂しみに自分の出した欄を一番に開き、若しやと思ひ後の方から探ねるのであります、其時手がふるへ胸がおどります、一度見ると胸撫て下して除に空を眺めます。

そして又見つめるのでせう。

○私の村

岡山縣　貴志子

私しが、六七歳の頃には、自轉車が通るのを、一人車だと云つて、目づらし層に見て居りました、私の村も、今は人家が七十個にふえ駐在所も、役場も郵便局も、小學校も、あります、旅宿も七軒になりました、又本年の春からは、前の街道を馬車が毎日、通ふて居ります、此の道も、兵士が運動する爲めに、一間半廣がる層でございます。

村落なほ然り。

○いつも思ふ事

長野市　西條うめ子

それ黑き蝶は、煩悶して死せし人の化身であるとか、然らば自分は黑き蝶を澤山集めて、これを養ひ、あたりの寂しい音のしない晩一息ハートへ吹き懸けて、そして其さゝやきを聞いて小說を作つたならばと。

面白い空想。

○悲しい聲

熊本市　近野春子

「汽車は出て行く烟は殘る……」。光の淡い月の晩です。いつになく、しんみりした調子で、一種人の胸に泌み込む樣な花樣の聲。花樣の一人の兄樣が、今朝朝鮮に出發れましたのです。多分花樣は、充滿涙を眼にためていなさるのだらう。

○思ひ出

下野 毅 久江

黄昏を、銀杏の落葉雨とふる中に、ひとりたたずんで、山幾重野を幾里東へ隔てた、はるかの空を見やつた時。……あはれに淋しい思ひが湧いて、涙は冷い頬をぬらした。せつな、盛つて目に亡き人の俤がまぼろしの様に現はれた。

○詩

周防 太田美妙子

皆さん、詩と云ふ者はどんなものでしやうか、眞實艶を歌ふ者が詩でしようか、いや／＼決して其んな者は詩ではないと思ひます、而らば詩とはどんなのでしようか。宗敎や哲學の美くしい體にきれいな詞の衣を着けたものが即ち詩と云ふ者であらうと思ひます、もし詩の衣をはいだなれば必ず宗敎の骨や哲學の體が現はれるのです。

○ポプラ

神戸市 おちば子

「あの白楊の葉が皆なくなつたら、私等は歸鄉することが出來るのですよ」と御病氣の友さんと青葉の影を歩きつゝ、口ぐせの様にいつて居たが、友さんは私を殘して、葉が黃色くなつた時に、御病氣が直つてかへられた。今は私一人で裸になつた白楊の梢を見て居ます。

○母様

安藝 手島まさ子

下女を使つて下男を置いて。お嫁様で暮した時分一人でちやんと規律を立てゝ物品を仕舞つて置きなさい、そうすれば暗闇でも取りに行かれるから」と母様が仰つた、其時は何とも思はなかつたが嫁の身となつて初めて。思ひ當つた、噫、親のいけんと茄子の花は千に一つのあだがないとは、よくいつたものだ。

○厄年

上越 みのぶ女

凩荒ぶ冬の日の夕暮れ、今日しも少し快い妾は椽側に腰掛け思ひにふけつた。だん／＼暮れ行く空の様にあの黒い雲が日を掩ふ様に。妾はこれつきり、逝くのではないでせうか。妾は今年十九の厄年ですもの。

○文明

若狭 汐汀女

後瀬や好い山杉の木が多い、と唄われた後瀬山の杉の老樹を軍港の用材にと今年の春からどし／＼きりだした、昨日も今日も覺あらそひて村人は、わい／＼言つてる、あゝ遂だ自然を破壞してゆく恐ろしい文明といふ惡魔はこんな山奥にまで入つてきた。

○作家の年齢

文子

文章でも何でも閨秀作家の作をよんで其作家の年が自分よりも上だと分ると自分もまあしつかり修發して彼の年までにあんなにならうと思ひ自分よりも下だと此位の人でさへ斯う作れるのに作れない自分は才がないからだと失望する。

○花嫁

二葉女

夜は余程更けて人通りも切れ／＼になつて來た突然どこからかけたたましい聲で「花嫁だ」といふ聲に我先へと門へ出ましたら早花嫁の周圍には人山を築いて切に顏の評をしてゐる私は今にあんなに見られたり言はれるのかと思ふとヘッと胸が躍つた。

○待ち遠い

信州 芳子

春の光を身一杯浴びて椽に腰かけた丸髷姿麗しい赤子を抱きつゝ「オヽ大きうなつた定ちやんと美しい頬にキッスした。早く御歸宅な。可愛く御覧に入れたい思ひは一日千秋。

○小春日和

備中 戸田梢風

今日は好天氣である。昨日迄の様な寒い風も吹かず、ホンノリと、暖てある、今日が眞の小春日和とかであらう。コチ／＼と響く時計の音も、向ふの森で、ヒーヨ／＼と啼くヒヨ鳥の聲も、なんとなう靜である。

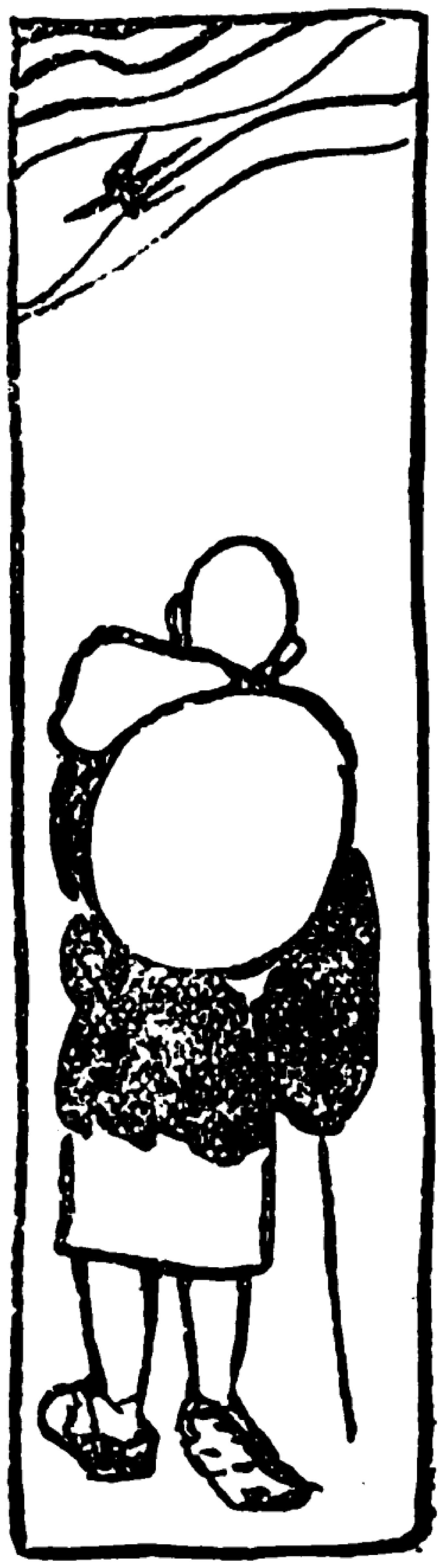
○秋の景色

伊勢 富井磯子

麗かに晴れ渡つた小春日和に、秋の七草などゝ己がじし色を爭つて咲き亂れ、小さき蜻蛉は之に戯れて居る。近く望めば四方の山々、紅葉の姿を裝ひて美しく、遠く望めば伊勢海の波靜かに眞帆片帆の姿。あゝ面白き秋の景色。

俳句

内藤鳴雪選



○（天賞）

桃の宴太刀とりて舞ふ局かな　和泉　藤阪綠

○（地賞）

戀衣重たき冬となりにけり　信濃　松本惠子

○（人賞）

鶯の巣に雫せよ春の雪　福井　野坂靜子

【逸秀】

峰入や鶯を聞く笠の上　羽後　三浦ふみえ
勝ち駒の嘶き遠し時雨空　伊勢　小貝よね女
秋逝きて葉の蝶とばぬ栗林　新潟　山田みさほ
若水や常には持たぬ手桶哉　下谷　小川友子
寒月やおりたつ鳩の羽光る　福井　野坂靜子
反古燒いて春まつ庵のあるじかな　喜　恵子
月さへて案山子に戰ぐ嵐かな　神戸　山口さい子
夜を寒み我影踏みて戻りけり　京都　伊予柳月子

○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽窃になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

傘さして銀杏拾ふ時雨かな　神戸　大原ひさ子
ひとしきり子の泣く聲や秋のくれ　陸中　關光さは子
白菊の根本あたりや虫の聲　陸中　佐藤いし子
人絶えて街のひろさや枯柳　神戸　鐘江藤子
おぼろ夜や水田にうつる松の影　菊子
紅猪口の水な捨てけり春の雪　神戸　溪子
芋蔓の這ひてゐる道や露深し　岐阜　林東霞
朝月夜若菜に風もなき野哉　武藏　込谷紫宵女
冬の日や人影淡く暮て行く　上總　北野よし子
積藁に犬を寐させつ春の鷺　讃岐　子松さと
田の水の落ち合ふ音や冬の月　千葉縣　吉井光子
髪洗ふ二人の妹や春の水　福井縣　やまざと
寒菊に接待風呂の設けかな　島取市　上山八重子
消えのこる明燈淡し霜の朝　仙臺市　北郷照子
ざくざくと霜柱踏むや江のほとり　青森縣　竹野秋子
あるが中にみめ秀でたる蘿かな　大坂市　はな子
枯木炊く爐火の燃りつ春の夢　府下　小森たけ子
大岩の崩れ落ちたり霧の谷　大坂市　家野いしの
江戸城の堀の水澄む小春かな　麹町　牧野嵐水
なた豆のやせて存する小春かな　豐前　赤田すみ子
殘月のきら〱寒むき光り哉　下總　相川みよ
火をいれて夜の鶯と睦みけり　日本橋　松岡千代子
冬ごもり腹中の吟盡きにけり　讃岐　福家こゆき

寒梅の香ひに酔ひし小鳥かな　吾妻仙女
初冬の日和續きや菜畑　上毛　きよ子
初冬の澁柿釣りし軒端かな　群馬縣　飯島花恋子
秋風に吹き倒されぬ床の花　上總　秋葉美也子
櫻咲くや尼が小庭に炭團干す　滋賀縣　若井きくえ
何人となく登りて見たし春の山　大和　我深紫哉
友松の秋に春の雪ちら〳〵　上總　石渡敬子
名月や鼎の篝火更けて居る　上總　北村花汝
忍を打つ雨蕭々と秋暮るゝ　千葉　北田信吾
萱の音もせわしく冬の風が吹く　静岡縣　青木郁山
初秋の一夜や露の玉と散る　三重縣　福島初子
餅つきや湯氣の中から雞の聲　愛媛縣　松村さみだれ
泣いた顔笑らうた顔や歳の暮　愛知縣　谷口しん
梅白く灘ある山の夜わけたり　常陸　秋山欣子
眼覺むれば反古散りぬ春の風　京城　三室英子
荷車の後押して行く春の人　大阪　百田ちさと
學窓に謡聞ゆる冬至哉　神戸市　東川照子
花買りて歸るさ春の月寒し　丹後　宮川たけ子
寒大根干して月見る藁屋かな　福岡市　田中登典子
妹して辻占買や春の宵　播磨　幸露子
鳥止むる濁酒の酔や冬の朝　京橋　白すみれ
化粧せる老女おはして冬の月　函館　ふぢ子
老僧の大呼び立つや冬木立　伊賀　山村龍子
舟工場に寒き焚火や今朝の霜　長崎市　天ヶ瀬良子
きさらぎや夕日が丘に梅一木　大坂　天花
さら〳〵と野に一筋や春の水　矢名
同じ人同じ話や冬ごもり　北海道　山田鈴子
猟銃の音聞くときや霜の降る　山口縣　寺内伊勢子
破硯磨しに寒月宵しぬり机　奈良縣　中富よしみ
詩に痩せて春の寒さを探たりけり　芝　あや子
寒梅や高瑠に似たる庭の石　東京　小夜千鳥

あちこちのこがらしになく夕鴉　鹿島縣　岡本さかえ
野も山もたゞ一色に秋の行　奈良縣　稲西田鶴子
雲晴れて金剛山に夕日かな　群馬縣　岩田うはら
月落ちて更け行く風の芒原　千葉縣　川名松子
春雨に雉子濡れつゝまどひ飛ぶ　下野　瀧澤秀子
しばらくは窓の人となる摘菜哉　信濃　山本㐂
辻占の聲や吹雪に途切れけり　札幌　蛭暁治子
よき人のあくびを隠す扇かな　下總　櫻井榮子
月出て一島に寒し鴨の聲　札幌　莉花
詩人とて泣きし乙女や冬の月　札幌　光子
黒塗の馬車に乗せたり春の人　横須賀　齋藤松代子
麥まくや夕日は落ちて日和雲　若狭　津田汐汀子
月と梅寒き障子も一重かな　栃木縣　谷田貝哲子
かけ稲の向ふに塔の九輪かな　明石　落葉子
籠の虫逃げたと弟泣きにけり　福岡縣　辻本愛子
小春日や笑き人遊ぶ蜜柑山　和泉　金田香雲子
冬の夜の藥の香高し爐のほとり　京都　向井光子
すてられし小猫は瘠て春の雪　千葉縣　金井敏子
船頭の妻とならばや春の海　安房　高梨知世子
詩人病む窓もあるらむ村時雨　上總　霞女
薄の穂のなにやら招く枯野原　大分縣　本田一枝子
雲はれと月の野路の紅葉哉　岩代　菅野やい子
一室の姉弟住ひて夜寒かな　青森縣　馬場ちよ子
夏の夜や詩人うかれて笛を吹く。　秋田縣　加藤うん子
菊さけて寺の月たゝく女哉　佐賀　東しま子
若草や鹿踊る赤鳥居　羽後　荻原露子
小羊の蹄の跡や董さく　秋田縣　三浦小よし
星一つ照す隈なき霜夜哉　茨城縣　中山けい子
春の灯に背きて姉が頭痛哉　麻布　吉田俊子
遠村はかすみて暮れぬ夕時雨　備中　林婦美子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○子守り學級（地賞）

北多摩　春子

私の學校は、北多摩の片ほとりに、あります。毎日放課後には、子守り學級が、開かれます、私は其子守りの、受持ちであります、三十二人許り參ります、讀本、算術、修身、唱歌の四科を、授けます、讀本などを齊唱させますと背の子供も、一所になつて、唱て居りますの、子供の方が、早く覺えるくらいです。唱歌の時などは、殊に喜んで、まはらぬ舌て、歌ひます、期せずして、幼稚園を兼ねて、ゐる樣な、ものです。

○敎へ子（人賞）

ゆかり子

今年十三の正義は尋常三年生て三年の間引き續きての我が敎へ子てある身長は級中第一それに眼と口とが馬鹿に大きくて『先生僕の事を人が蛙だつて云ひます』とさい〳〵私しに訴へて來る。算術も讀方もさつぱり出來ない、一時間中三年來の古机の隅の方ておとなしくかしこまつて居る。それかつて運動時間には見違へる程活々して來てまけず劣らず能く飛びまはる。私しは之をお客さんと云つて居る。所が不思議此頃になつて此隅の方の古机から偶には九九の一聲も聞へる樣に成て來た。又赤い丸もちよこ〳〵見え出した。かうして正義は次第に人らしい人に成て行くては有るまいかと思ふと云ひ知らず嬉しくてあゝ益々此子の爲めに幸あれかしと祈るのてある。

○頭をポカン

三河　鈴木けい子

不成績な兒童の母親が授業を參觀せられたのでここぞと思つてその子に『二つと三つはいくつ』と問をかけました。その子は知らんので母親はツカ〳〵とやつて來て『五ツ位の事を知らんかツ！』と頭をポカン。並居る兒童は悉く目をみはつた。

○女教師

備中　原　ふつ子

妾を女だと思つて非常に高等科の三四年の、生徒がからかつて、何にやかや、とひかけますが、妾しは其時は、しりません〳〵との一本やりに云ひますと、知らぬても敎師が出來るのだらうかと云つてゐます、然し敎へてよい時は知つてます事は何んでも敎へる性ですか、どうしても女の敎員は生徒に馬鹿にされます。

○校訓

愛媛縣　佐渡　せい

「今日も今日もと油斷なく一心に自分の務を盡さればならぬ、早くれて早く起き遲れず來て早く歸り、よくさらへてよく手傳ひ身なりと行儀を正しくし、心からなる言葉を使ひ何事にもつゞまやかなる生徒こそ我が校のよい生徒てあるこれは每朝一同が唱へる校訓てあります、この時六十八人の生徒の心にはこの言葉より外何物もないのてあります、

○淋しい顏

鳥取市　五百　重子

我が敎へ子に獨りていつも淋しい顏して居る子があります、新任の私は不思議て堪らず、富さんは病氣てすかと他の生徒に聞きますと新平民だからと申しました、ア、士農工商以外だつたは昔の事、今は等しく皇國の臣民だもの從來の陋習を破らねばならぬと戒めましたが、此の生徒が茶の湯を學びたいと云ふので學校囑託の老師に話すと、「どうもこれ斗りは」と斷られきした、ア、私何と此の子に傳へませう。

餘興

火（課題）



○規定　每號課題を出して諸嬢の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

○高野の灯（天賞）

紀伊　勢以子

高野山奥の院の燈籠堂には、長者の萬燈、貧者の一燈と云つて、澤山の灯火が點されてゐます。晝も夜も番僧がついて、油が盡きようとすると注し、灯が消えようとすると燈心をかき立てゝ、大師入寂後今日に至るまで、未だ一度も消えた例が無いとの事てす。見た所普通の灯火に變りはないが、當初の一點火が幾百十年を經た今日にまて、消えずにゐると思ふと、そこに人をして一種何とも知れぬ感を惹起さしむるものがあります。

意味深長火の中の最も神秘なるもの

○炭やく火（地賞）

秩父　近藤登久子

私の住むて居る處は山里てすから冬になると、あちらこちらに炭やく竈の火が見へます。木枯吹く夕べ雨戸を引く爲め椽側に出て、この火を見る度に、何とも云へない寂しい〳〵思ひが胸に浮びます。

此上淋しい火はなからう

○妻待火（人賞）

沖繩　はつね

私は默想するのが好きて、夕暮の迫る向ふの森を見つめて居ると乳母は何と思てか、孃樣又あれ妻待火がと森の茂みをさす。成程一つの青火が上に、下に、消えたり、現れたり環になつたりする、妻待火とは、昔あの森かげに仲の善い夫婦暮しの者が居て、誰れ一人、羨まぬ者はない程てあつたのを、心が狂つたのか其女は夫を捨て逃げ出し、殘された男は待つて、待つて待ちあぐみ終に火となつてしまひ、女と見れば何處迄も追かけるとの言ひ傳へ、乳母は追まわされたと寢物語に聞されては嬉しがつて居たもので今年七十の乳母は、なぐさめるつもりてあらふ。

場所と云ひ、傳說と云ひ、奇怪なることが却つて詩情を惹く

【秀逸】

○二分心の明り

美濃　酒井とみ子

折角都會へ嫁らした姉樣は都合有つて今は良人と共に其古郷の姑樣の家

で暮して居るのです。其家は山家で夜ランプなぞ燈す家は無く昔の儘の行燈ばかりだそうです。そして資産家と言はれる樣な家が漸く村の祭りの夜に、二分心ランプを燃してさも明るいと言つた樣子で居るそうです妾輝やくランプの元で讀書などする妾は姉樣が御氣の毒です。

○強い印象

信濃　こてふ

火！火焰！私の胸に深い〳〵印象を與へた火があります。信州でも殊に製絲業の盛な諏訪湖畔の岡谷の製絲場を見た時です、數知れない澤山の製絲を取る蒸氣の其元、機關室を見た其時です。大きな〳〵竈の前に工夫が居て、時間を見ては石炭を入れる其口を明けた時！室内から工夫、私達の顏まで眞赤になつて、そして竈の中の色は……。其凄い樣は——、とても小さい形容では及びません。私の胸には其色、其樣が深く殘つて居ますけれども……。

○誘蛾燈

福井縣　やまさと

妾の地方では八月の第二螟虫の發生期になりますと、毎夜野原には澤山な誘蛾燈がともされまして、まるで螢の出盛りのやうに其美觀と申しましたら、未だ見ぬ筑紫の不知火とても是に越した事は、無からうと思ひます。然し翌朝になつて見ますと、一つの誘蛾燈の中にも、美しい火を慕つて、下には油交りの惡る水のあるのも知らずに來て、慘たらしい死やうをした蝶が、二三百程もあります。

○燈火臺

越後　飛鳥女

他の間毎は勿論、洋燈でムい升が。夕食後一家團欒の許には、明けて八十六の祖父の主張で依然古い、家傳來の源油の燈火臺、古手拭を引き割いて輕く繩にしたのを心にともし升源油は私の內に有物で一寸經濟の樣ですが、其の寶側近く居れば鼻面は油煙で煤け、着物や蓆迄自然穢なく成り升。けれど私は斯んな風變りの燈火が電燈より好きで。殊に吹雪の夜抔大圍爐裏にドシ〳〵薪を燃き、祖父は腹あぶりし乍此燈火臺の事や源油の始めて草生水山に見付かつた時の極く昔物語を致し升、と私は昔のおもかげ樣々想像して宛ら、仙郷へでも入つた氣がします。

○佐渡の燈火

越後　佐藤浪子

此夏濱へ避暑に參りました時、漁舟に乘つて半里の町へ買物に行きました、味淋、お菓子種々な品をつみのせて舟は徐ろに磯をこぎ出しました「やあ——佐渡の燈臺が見える」「火が」と悦ちやんと善さんが騷ぎ立て

る、私もじつと注意すると、成程浪のまに〳〵チラ〳〵と光る、マアー――奇麗、ヤアかくれた、アラア光つてよ、舟中は大賑かてす。

〇火の性

青山　清子

幼な心の記憶に、私は、祖母からよく次の様な事を申されました、お前が物を云ふたり、用事をする様は剣尖が強くてピカピカと、ほんに稲光りの様だ」と、祖母世を去つてから十年後の今日、大掃除に古い文庫の中から見出した三世相を、何の考へも持たずに　くつて見ましたらば私は、火の性、まあしかも、稲妻の火とありました、

〇淋しき燈火

上田　光子

暗の夜に、海邊に立つて、燈臺を眺むる時と、夜行列車の動く度に、天井の灯が、パツパツとなる時と、城外を通ると、向ふから兵卒が、黒と白との山形印の、手提提灯を持て、歩み來るのに出合ふ時と、夜半夢覺めて行燈の灯が黒くなつたり、赤くなつたりするのを見る時と、船先に、薄暗い光を照して、ギイギイこぐ、櫓の音を殘して、行くのとが身の固く成程淋しく感じます。

〇四分の一

上野　大沼　染子

私は毎日十二時間づゝ、大陽の光りて働いて居りますが、夜になると一つの燈火があるために三時間だけ餘分に働く事が出來ます、それてすから、此の一つの小さな燈火が、自分一人のためには、丁度太陽の四分の一だけ働いて居るのです、

〇髮を燒く

邦子

昨年の今頃てした寒いのてお火鉢にすりよつて温まつて居ゝの何時か白河夜舟…チヾと云ふのに目が覺めたモスの前掛の上は毛がパラ〳〵ハツト思つて見たらピンの皮を少し燒いて居ました今てはぐる〳〵まきにすると眞中にピンと立つて結ぶ度におかしくて堪まりませんけれどまだ誰れにも秘して居ます

〇田舍の爐

本郷　千代子

妾の故郷は常陸の極く山の中、冬になると毎晩三尺四方の爐の廻りへ、家中の者が八九人ズラリと並んて盛んに話しをする、傍には山から拾つて來た焚木が山の様、貸本入らずだから少しも惜しげが無い、どん〳〵と燃す其温かい事何とも云はれない、此様にして居た妾は今年始めて東京へ來た、少し許りの炭火へいくら獅りついて居たつて温かくも何ともない、今に凍え死にてもしやしまいかといつも思ふ。

〇埋火

四谷　櫻子

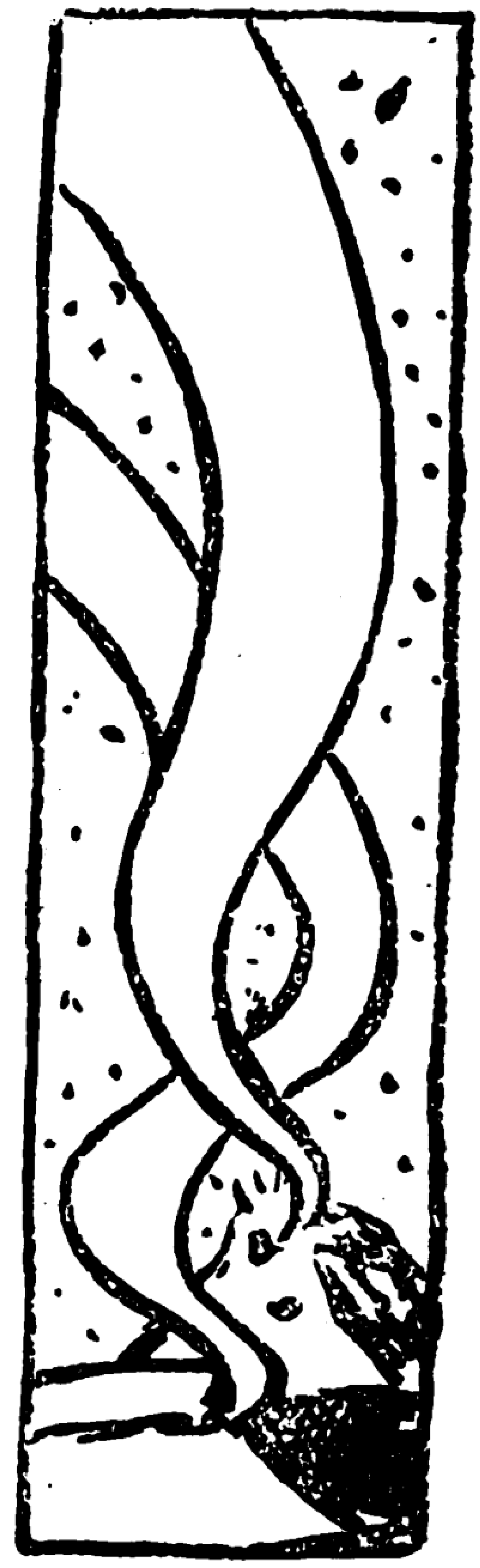
私の家ては父のやかましので、こたつも何も致しませんから、お床はいつも冷えきつてゐます。それて寢にはいるのがいやて〳〵どうしても抱へこんだ火鉢のもとが離れにくゝ、も少し〳〵と埋火なかき起しながら、その火が螢の様になるまてあたつて、あたつて、螢がとう〳〵消えてしまふと詮方なく、やつと立つてお床へはいりますの。

〇戀の炎

府下　よし枝

青春男女の戀にもだへる燃がどこまでもあてゆくか、今の處ては江戸の花と言はれた火事よりも火のてが盛になつて居ゝ様消火栓も蒸汽ポンプも稍の寂寞な秋の暮の案山子のそれの様、そろ〳〵用心の支度をしないと類燒しますぞおゝ危險〳〵あつちにもこつちにも死んだの生きたのと早く御用心〳〵。

新歌謡



○規定　古來の俗謡の形式を取りて専ら優美洒脱なる作を歓迎す野卑猥雑なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は罫紙に認むること丙種の賞を送呈すべし

○（地賞）　丹後峰山字吳服　吉田せき子

青い芝生に紫絹の蒲團着て寝る菫姫

優しい、美しい、女らしい、合せて好い

○（人賞）　神戸市多聞通四丁目五二　野瀬悦子

音は松風響きは灘の鐘は岬に明け渡る

技巧の妙

【秀逸】

○　伊豫　井上いち子

二丁はなれて稲刈る君を稲を刈りつゝ眺めます

○　下谷　小川とも子

私しや島田に始めて結ふたてはすまいとて風ひいた

○　松山　芙蓉

枕時計のチクタク〳〵と人の命をきざむ音

○　若狹　汐汀女

若狹寒いよ稲干してゐる小手を霰にうたれます

○　岐阜縣　甲斐川すゞへ

木曾ゝ流れは長いといへどもとをたゞせば谷間から

○　大阪　西戸政江子

ならば見せたや都の人に三里四方の密柑畑

○　本郷　千代子

老いた母樣麓に御座る山が曇れば氣もくもる

○　若狹　山田小濱子

とりいれ最中は本讀む暇もないが冬中まる休み

○　羽後　三浦ふみゑ

日和山下蝶々のやうに酒田女の花見づれ

○　下總　菅沼しげ子

母と寝た夜の夢から醒めりや東京淋びしい小夜時雨

○　西谷　銀波

庭の櫻が咲いたら出すと云ふた手紙はまだ着かぬ

○富士と筑波のあひだの空をつるが舞ひます九重の　山口縣　椰夏美奈子

○書簡が首かたむけた今は其名の思案橋　茨城縣　長谷川ひろ子

○貴火の國今でも吐くよ肥後の阿蘇山火も煙も　肥後　桑原

○行つて見たいと思ふた東京今はふるさと戀しゆなる　越中　水野しげ

○鉄は戀しや白日の夢に君の幻追ふて行く　大阪　中野喜代子

○春を待ち〳〵簞笥の中で妹の振り袖長〳〵と　横須賀　登喜子

○花のお江戸もよかろうけれど私しや野がよい山がよい　本郷　相樂きみ子

○人は火鉢で北風知らぬ私しや銀すき水の中　牛込　平塚白百合

○ばら〳〵並木な虚無僧が二人むかし繪に見る東海道　新潟　岸初子

○待ちに待つたる嫁入時がなぜにこんなに耻しい　三河　鈴木けい

○つらい悲しい涙を呑まにや嬉し涙は酒かぬもの　千葉縣　宇井花月

○どうせ咲いたる花なら一度散るは自然の春の暮　兵庫　杉山春翠

○春のしるしは向ふの山に桃や櫻の紅霞　美濃　青木しづ

○直に返事を此の巻紙に書てほしさに餘し切　宮城　佐藤勝代

○早くなれ〳〵十八の春に私御嫁になるときよ　宮城　遠宮とめ

○小春日和のしづかな野なば霞がくる〳〵まわりだす　静岡縣　富永朋子女

○谷の氷柱は次第に痩せて梅の蕾が日に太る　大阪市　鹿島あや子

○私や房州館山育ち色の黒いも無理はない　下谷　鐵子

○雪は積つて今夜は月だ何をやつたらよかろうな　青森縣　馬場ちよ子

○病んで寝る身も鶯鳴けば梅がちら〳〵目に寫る　岐阜縣　藤田芳子

○星はきらめくたとへて云へば戀にかゞやく目の光　熊本市　近野春子

○枝に積つた雪かきのけてそつと息吹く梅の花　東京　多美子

○月をふんだり星數へたり苦勞で仕上た此稻穗　千葉町　山田ふみ子

○帶に着物に肩掛までも買ふて貰ふたよ初晴着　備後　藤野とし子

○空は灰色よごれた中を白い粉雪がとんで來る　青森縣　竹野秋子

○下女が炊事になきそな朝も奥の炬燵は笑ひ聲　徳島縣　西野花菱

○花の世界に生れて嬉し四季の眺めもとり〳〵に　大阪　天花

○風よ吹け〳〵雪積む枝に吹けば梅やら櫻やら　丹後　宮川たけ子

○お目にかけたや都の人に二尺程ある此つらら　伊賀　山村龍子

○寒い筈だよ火鉢の炭火埋めたばかりに雪が積む　備後　井上年子

○わたしの心はいつとけるやら厚い氷も融けたのに　北見　酒田ひで

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の書信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る卷紙を用ゆべからず乙種の賞を送呈す

○芋堀りの愉快（地　賞）

伊豆　山下しぐれ

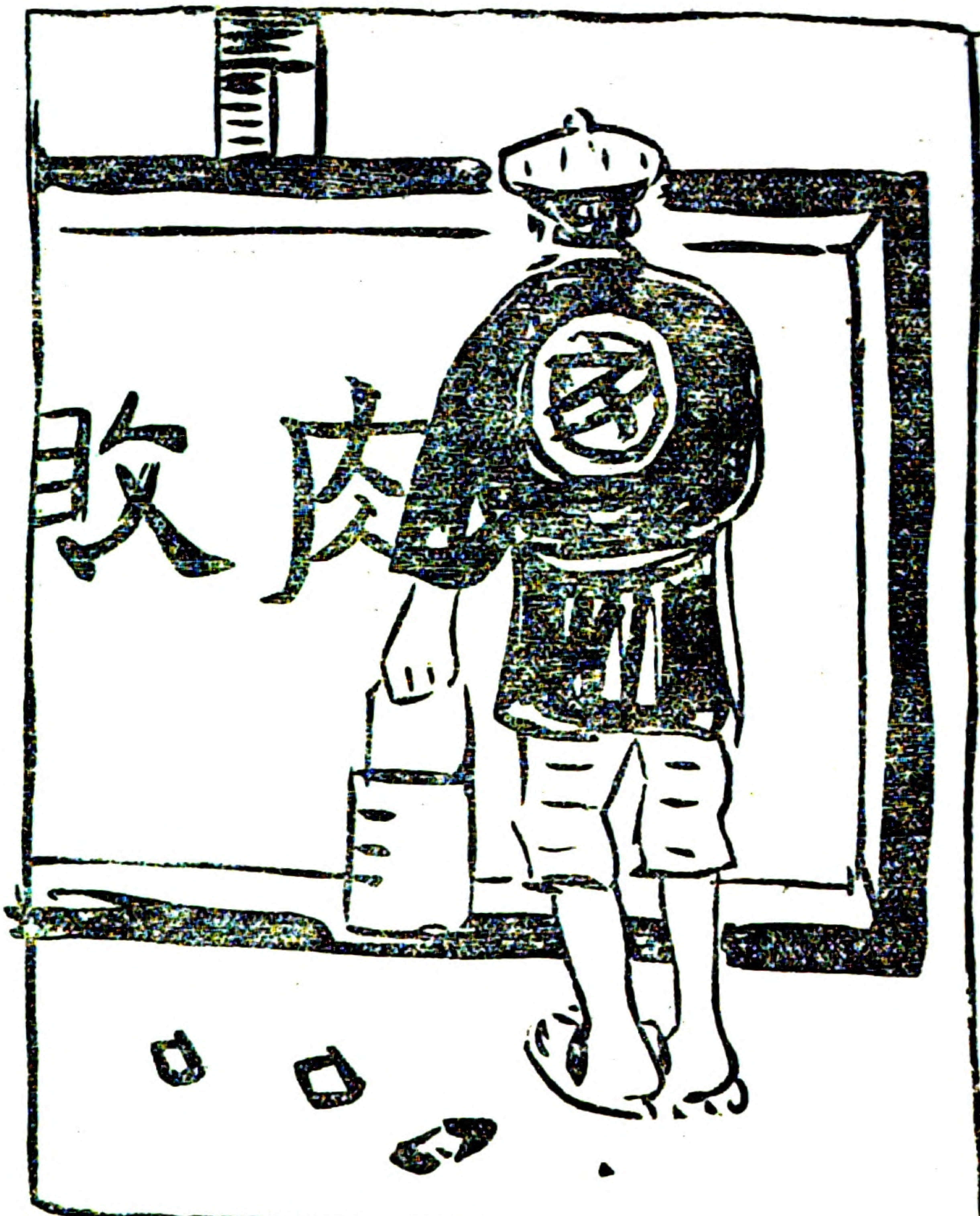
都の秋は如何にて候哉、里の秋は山々の紅葉の濃く成り行くと、稲葉の黄ばむと、夕吹く風の冷に成り行くとによりて、日一日と深く成り増さりて候、昨日今日稲刈さては麥蒔等中々に忙しう御座候、夜は唐臼の音夢の如く響き來りて、悠長なる臼挽歌の折々雑るも中々に興多く候、又芋煮る音のごと〳〵として豆殻を焚く香の鼻をせゝり申候、夫につけても思出し候は芋堀りの愉快なる事にて候、霜の降らざる中にと父が動議を持出して早速昨日堀る事に相成私も手傳いたし候。晴れた日の雲もなき空に、透き通る如き駒のいなゝきそは兄上が引きもて行く吾が家の馬にて候よ、脊には小さき弟の打微笑みて坐し居り候、小川に添ふたる幾つかの芋畑、岸には秋の草花の遅れたるが小さき花をつけ居り、片側の雑木山の櫟楢のやゝ色づきたる、そが中に交りて紅葉の一際赤きと黄紅燃ゆる許りの櫨の二株三株美しきも見受候、芋の葉に置く霜のさても潔くも候哉、蔓を切りて一堀り堀ると彼方此方より親芋子芋、丸き長きぞろ〳〵と私も御一所に、ちよいと私も御仲間にといひたげに出てきたり候、蔓を取るは私の役、堀るは父の役にて弟は俵に入れる役兄は馬にて家に運ぶにて候、家に歸れば庭は芋の山を築き居り申候、川一つ隔てゝ御許様の母上様、陸稲扱きて入らせられ候ひし、いつも〳〵御丈夫にて御幸福に候、休の時に御許様の御話も承り候、さらてだに昨日今日も御手紙差上げんと思ひ居り候折柄とて、つまらなき事取あつめ申送り候、御笑ひ下されてよ、

趣味深き材料を迫まらず書いたのが宜しい、「川一つ隔てゝ御許様の母上様云々」一節景あり情有る文字（評）

○小姑となつた妹より姉へ（人　賞）

大阪　西戸政江子

姉さん此頃は妾ほんとにつまらないわ、姉さんは御存じないけれど義姉さんが居らしつてからは、兄さまがすつかり御變りなすつてよ「文さん〳〵」つてあれほど今までやさしく云つて可愛がつて下すつた兄さまが、此の頃はもう散歩にもつれていつて呉れないし、今まてよく買つて下すつたリボンなんかも義姉さんばつかりに買つてお遣りなさるの、妾が一寸義姉さんに用事をたのんでも直き怒い顔なさるの、それにお母様まで、兄さまや義姉さんの御ひいきなすつて、でも無理云つては不可けないつて、でも妾無理なんか一寸も云はないの、いつも義姉さんの方が意地惡なのよ、昨夜も義姉さんが余り奇麗な白粉瓶を持つていらしつたので「これ頂戴な」つて云ふたらこれはまだあるから上げられないつてそれをお母さんが茶の間て聞いておいてなすつて「文なぜ義姉さんに物なんかねだるんです」と怒られました、余り口惜しいので涙が出たわ、この前の日



ペンキ屋　戸水　北川うめ子

曜なんかでも義姉さんの御友達だとかで三人見えましてかるたをとつて面白さうに戯いでいらしつたの、それに妾は仲間に入れて呉れないの、お母さんからは出てはいけないつて仰しやつたけれど義姉さんさへ何とか仰しやつて下すつたら御仲間入が出來たのですものみんな義姉さんが意地惡なのよ、今日お掃除のとき、兄さんに女學校の卒業證書やお茶の免許狀なんか自漫に見せて居るの、姉さんが證書や免許狀なんかたくさんありますわね、妾それを義姉さんに見せてやりたかつたわ、もうおたよりにするのは姉さんだけよ、たび〳〵御手紙下さいな、今度はいつ頃、御歸りなさるの。

書簡文中の自然派とでも言ひませうか、兎に角眞相歷々たるところは殆んど小說のやうに面白いです、しかし『みんな義姉さんが意地惡るなのよ』なぞ言つては人格のおたしなみにもかゝはりませう、姉さんからどんな返事があるか……さて六づかしい人生です。(評)

【秀逸】

○火災の狀況を報ず

熊本市　近野春子

早速の御見舞狀有難う存じます、可成損害もありましたが、御蔭で一同無事ですから、何より先づ御安心下さいまし、もう大略は、新聞で御承知でしやうが、一時は仲々の騷ぎでした。何を云つても、近年にない大火、殊に目貫の場所でしたからね。

丁度其晩は、空には星が瞬いて、南風が烈しう吹いてゐました。早くから店を閉ぢて、弟のお友達が二三人來て、ワイ〳〵云つてますと、突然表を大聲に叫んで人が馳けて行きました。後で思ひ合せると、之が大騷動の序開きなんでした。引續いてドヤ〳〵と、口々に火事だ〳〵と云つて馳けて行くのです。ハッと思つて表に出て見ますと、どうでしよう、霧島屋あたりは、もう眞赤なんです。火の粉は高く空を流れる、ポンポ〳〵物の爆聲が烈しう聞えます。妾は顏から水でも被せられた樣で、膝がガタ〳〵して口が利けません。然て三ヶ所ばかりで半鐘が鳴り出しまして、まだ宵の口の事とて、人も追々馳け付けます。消防隊も五組程參つて、必死になりましたけど、不幸にして折柄の强風に、アレ〳〵と云ふ間もなく、先隣の島田屋まで、ほんの一時の間に一面の火の海となり、天も焦げるばかりです。サア大變ソレ道具と、多人數の事で、一時の混雜と心配とは、どうか御察し下さいまし。でも幸に島田屋で止みました。大店ばかりの全燒が十八軒でした。恐ろしかつた夜が明けると、如何にも廣々とした燒跡から、燻つてる余烟は所々に慘ましう立ち上つて居ました、殊に憐れと思つたのは、燒き出された人々が、半ば狂亂したり、又はガッカリして、氣も心も消

え失せたと云ふ風に、ウロ〳〵して、道具などを調べてるのでした。そう云へば、最初の妾の周章て方も耻かしい程ですわ。いつも豪い事ばかり云つても、まさかの時には、何の役にも立ちませんでね、古箱一つ提げてウロ〳〵してましたとさホヽヽヽヽ。

まだ色々道具も片付けねばなりませんから、先は取り敢ず御禮まで。

鯱鉾老樣、道具片付前にこれだけやつてのけるのが出來るのだから驚くの外無い(評)

○明日の歸鄕を妹へ

本鄕　千代子

多歌さん！明朝の一番で行きますよ、ホヽヽ、餘り突然て吃驚したでせう？眼を圓くしてお出でのが此處に居てもよく見えてよ、妾だつて餘り急なので、夢ぢやないかしらと思ふ程よ。

それはね、昨夜兄樣といろ〳〵お話の末「綾夫もゝう大きくなつたし、お母樣に見せに行き度いわ」つて何心なく云つたの、スルトね「そうだな、お前も恰度二年振だし、一ッ思ひ切つて行つて來たらどうだ」つて仰るの、妾串談仰るのぢやないかしらと思つて念を押すと「誰が噓なんぞ云ふものか、本當だ」つて仰るんでせう、まア妾は嬉しくつて〳〵。　もう遲いのに行李をかつぎ出すやら、着物を引張り出すやら大騷ぎ始めたので「未だ明日一日あるぢやないか、早過ぎる」つて笑はれたけど、妾どうしてもジッとして居られないので、とう〳〵二時頃迄起きて居て、あれもこれもつて皆行李へつめ込んぢまつたの、寢たは寢たけども何だかいろ〳〵な事が胸に浮んで來て、一人で笑つて見たり、しやべつて見たり、とう〳〵昨夜は少とも眠らずにしまつたの、それでもゝう今朝は珍らしく六時に起き出して、今此手紙を書いて居る處なの、兄樣はね「これからいつも家へ行つて來いつて歎かしてやらうそうすると早く起きるから」つて惡口仰るのよ、でもいふは何を云はれたつて少とも腹が立たないわ、おかしいものね、多歌さん！綾夫はもうよく笑ふのよ、クリ〳〵と肥つてねホントに可愛いの、明日は此間多歌さんから戴いた雪帽子を被せて行きますよ、何れが一番よく似合ふの、此子のお祖父樣、お祖母樣や、少さい叔父樣や可愛い叔母樣達が大勢居て、どんなに可愛がつて下さるだらうと思ふと、自分が久し振で歸る嬉しさよりも、綾夫を見せに行くのが何より樂しみよ。オヤもう八時よ、これからおみやげを買ひに出かけるの、いつものよ何でせう？まア明日を樂しみに待つて居て頂戴な、思つてる事を皆書いてしまい度いけど明日の十時にはもう逢はれるのですもの、惜しいから殘しておきますわ、此手紙を讀んで「お母樣！」とお部屋へかけ込む多歌さんの嬉しそうな樣子が、あり〳〵

と浮んで來てよ、あ！明日の十時、嬉しいわね、今夜もまたキット眠られやしないわ、お母樣に宜しくね。

いかにも嬉れしさうなソワ〳〵した樣子が見えて居ります（評）

○京の乳母

羽後　菊池りう子

朝、紅に染めた縫ひかけの綿入の裏がまだ乾かないのてお針の先がつかへて…………。一寸筆をとりました、お變りないの、餘り便りがないので心配してます。此方はね、此頃、霰と木の葉の雨で、植込みの中の父樣のお書齋ね、そこが私の掃除の役目なので、毎日五度も六度もはくけどね、いてふや柏、楓の葉杯でお廊下が布をしいた樣に美麗にちらばるの、お父樣はあの通り塵一葉落てもお氣にめさないのでせう。だから楓が一葉ちつてゝも柳子、とおよびになるので中々忙しくつてお針もはかどらないの、それに此頃は毎日お洗濯に忙しくつて。此地てはね、あの皂角子の莢で洗ふの。門前に澤山の皂角子の木があつてね、それが冬近くになつて葉が皆おちて長い實が風の吹く度がら〳〵ゆれて落るのをまつてお洗濯を初めるので、日あしは短いそれに夏と違つて乾きが遲い、眞に困るの、それでも幼い時から乳母やが氣をつけてくれたので私は姉樣より誰より上手だつて皆樣にほめられるのよ。眞に乳母や、私は今更感謝しますよ。京都を忘れたかつて………。どうしてまあ私が京都を忘られ樣――。加茂の流に產湯をとつて、其源に小女となつた私だもの、毎朝あの流をくんで顏を洗つたつけね、懷しいわ！乳母やは今もあの流で顏を洗つてるの。乳母やはあの、海を見た事がないんだつてね、あら〳〵汐の音が聞えてよ。此頃になると鱈つてお魚が澤山とれるの來いといつたつて駄目だわね……。寫眞はどうしたの、私いくらまつたかオホヽ、約束してから二年になつてよ。私も天長節にとつたから送ります。又村中に見せに廻つてはいや。お前の嫌ひな束髮はよして前髮をとつて桃割にしました。此着物も帶も獨りで縫つたの、今度自分の物は大凡獨りで出來るから安心して頂戴。其代りに乳母やの寫眞も今度こそ是非々々侍てますよ。さよなら

相變らず流暢遒逸、しかし『感謝しますよ』だの『其源に少女となつた私だもの』なぞは京の乳母やが困るかも知れません（評）

○嫁くとて都なる從兄の許に

ゆかり子

嫁くべき日はいよ〳〵今週土曜日と決定いたされ候、今日此頃のゆかが胸中只々御察し給はり度候かつては無邪氣なる夢物語りに夜を更し又はゆかさんお前の望はと問はれて靜かな湖の上を兄さんと二人歩つて見度いわと云つて笑はれし事も候ひし此六歳今は美しき小切れの數々所せまきまでに取り亂され申候あゝ之ぞ身に付けて嫁くべき人こそ賤身に果報持てる者ぞやとの母上の御言葉も仲々に恨めしく都の空火の香なき下宿の窓に頰ぅ寫る兄上の御俤偲びては實に斷腸の思ひぞ致し候此期に及び候て只一日御目に掛り度くは山々ながら何事も皆ままならぬ浮世とあきらめ申候今日より四日目の夕此文御手許にとどく時こそは再び踏らじと誓ひて我家立ち出づる時と存じ候兄樣何卒其時はゆかが一生の御願ひに

候へば「ゆかさん私しも遠慮無くお前よりもつと〳〵立派な妻をもつ私にお前も無事で良い妻に成つて呉れ」と只一言夕の月に御ささやき下され度さすれば私しも月を仰いで安心して嫁くべく候申上度き事の数々も今は早や胸迫り之にて筆留め申候返す〴〵も時分柄御身御大切に御勉強の程祈り〳〵参らせ候

○故郷の妹に　東京　多美子

八重様御写真拝見致しましてよ、四年ぶりで御目にかゝつた様なものね、ほんとにいゝ奥様に御成りだ事ね、そうして正ちやんの可愛い事、つひ此の頃までリボンよ簪よと母様を困らせて居た八重様が……まるで夢の様、私など年をとる筈ですね、もう八重様が御母様に御成りなのですもの、八重様は田舎〳〵と御云ひだけれど立派に取れてますわ少しも東京と違ひはしませんよ髷の恰好だつてよう御座んすわ、ちつとも田舎風ぢやないから御安心なさいよ、正ちやんもう少しは御口がきけて? あの蕾の様な御口から母ちやんと呼れたらどんなでしよう。今朝も夫がね「ほんとに御前は意気地がない、八重様の方が彼から御見だ實に豪い」って申しますの、で私「よ御座んすよ私の代りに妹に大勢生んでもらつて私が一人もらつて育てますわと申しましたの。れ八重様大勢あれば、一人ぐらゐ下さるわね。母様初孫でどんなに、可愛いがつてゝしようね、申迄もありませんが、大事にかけて御育てなさいね、御約束の小包今送りました、八重様まだ赤い手絡御掛けだろうと思つて二つ程入れました、前のは正ちやんのよ皆様によろしく



行路の人　水戸　北川うめ子

○梅見に友を誘ふ　京都　堀尾ゆき子

おい〳〵寒さ薄らぎ吹く風ものどかに覚え候様に彼處の梅もほころび初め候よし承り候へばいともかしこき今日の紀元節を幸ひ天氣も殊の外うるはしく候まゝ學校の式相濟み次第東山邊の梅林をそゞろ歩き致し度存じ候御つれには田中様藤野様等みな御許様御存じの方ばかりゆゑ御いとまもあらせられ候はゞ御同道ねがひ度御都合伺上候

お伽噺

巖谷小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑俗説を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以内凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○兎の耳長（天賞）

大阪　植村あき子

天津御空星の御國を支配きます、月姫樣のお住居なる桂の宮に、年久しく御奉公を致して居りました兎の耳長は、一度下界の古郷へ立ち歸りまして、懷かしいお父樣やお母樣のお顏を見度いと存じましたから、什うか暫くの間お暇を賜はります樣にとのお願を、月姫樣にきこえ上げました。

月姫樣は、耳長が日頃忠實やかに働きました御褒美として、直ぐに此申出をお許し遊ばしまして、澤山の寶物を下されました上に耳長をお召し出て遊ばして仰せますには、お前は、是迄よく忠義に仕えましたから、お前の願を許しました、お前は家へ歸りまして、お父樣やお母樣をお喜ばせ申しましたら、復早く立ち戻り元の樣に御奉公を仕て下さい、夫に就いては、お前にお約束を仕て於かねばならぬ事が有ります、凡て天上のことは淸く尊いもので有りますから、お前は夫を罪に充ち〴〵た下界の人に決してお話仕ては成りません若し此お約束を守りませんなれば、お前は神樣のお咎を受けて、モー再び天上へ歸る事が叶ひませんから、克く氣をお付けなさいと、お敎へに成りました。

耳長は、月姫樣の御親切なお敎へを頂き、數多き星座のお司方にも御挨拶を申上げ、やがて桂の宮を立ち出てまして、靑赤黃や柑緑、藍色さては紫の色鮮かに彩られました虹の長橋を渡り越え、絕えて久しく懷かしき古里の國へと歸りつきまして、お父樣やお母樣のお目にかゝりました。

丁度其頃此國の學者たちは、天上の樣子を知り度いと思ひまして色々苦心をして居りました時て御座いまし

たから耳長が星の國から參りましたのを幸のことゝ存じまして、何んでも耳長から天上のお話を聞き度いものと考へましたから是等の賢者達が集まり、耳長を御招内して、盛んな歡迎會を催しろい〳〵と耳長をもてなしまし上た、什うか天上のお話が聞き度いと申しました。

耳長は、恁麼怖しい工が有りませうとは夢にも存じませず、生れまして初めて立派な學者達から丁寧に取り扱はれましたのが嬉しう御座いました爲に、不圖、月姫樣の敎を忘れ、星の國の樣子や桂の宮の有樣を悉かりお話して仕舞ひました。すると、あら思不議！今迄



の大きな聲は、何時の間にか出なくなり、口は見る見る中に三つに裂けて仕舞ひ、モー天上に立ちかへる事の叶はぬ身となりましたのを心付きまして、後悔いたしましたが、何の甲斐も御座いませんでした。其時から耳長は永遠に、地球の國に住まねば成らぬ運命となりましたが、星の輝き月の光り清く澄み渡ります夕暮には、桂の宮の事など思ひ出てられますに付けても、什うか今一度星の御國に參りまして、自分の罪のお許を月姫樣にお願ひ申し、元のまゝなる身躰に成り度いものと思ひつゝ、野のはて山の奥までも彷徨ひながら、一度消えましては

二度とかゝりませぬ、桂の宮へ通ふ虹の橋を見出し度いものと致して居ります。

（評）文辭幽婉何となく古文の物語をよむ心地がいたします、但しお伽噺としては果して此の筆法が適するか否かは問題でせう。

○狐の話（通信）

福岡縣　しみづ

或森の中に一疋の狐が居ました。皆樣は存じの通り、狐は大變狡猾ので人がすきません、時は丁度春で長閑な日影に花は笑ひ鳥は歌ひどんなに心の沈んだ人でもつい外に出て見たいといふ頃です。狐はだら〱と棲家を出て里の方へやつて來てとある家の門側まで來ました。ふと内をのぞいて見ますと、折から咲き揃つた櫻が吹き來る風に靡々と奇麗に掃き清められた庭に散つて居ます。其下に雪の樣な兎が如何にも樂しそうに落ちて居る花瓣を一寸嗅てはピョン〱と飛んで居ますそこへ十計の可愛らしい坊チャンが出て來てヤー兎が出て居る、サー御馳走をやるよといつて柔そうな草を澤山持つて來てやりました。兎はおいしそうに夫を喰べて居ます。狐は我を忘れておゝ庭の方へはいつて行きました。坊チャンは夫を見つけて、ヤー狐が來たよと大聲に云ひますと强そうな下男が木の棒を持つて此狐の奴がどこからはいつて來たのだといつて追ひ掛けましたので狐はびつくりして命から〱山へ歸りました。そしてつく〱考ふれば考ふる程自分の身が嫉てたまりません。兎は幸福な者だほんとに羨しい。同じ獸であり乍ら自分はなぜあんなに人から嫌はれるのだろう。あゝどうかして兎になりたいと其日は其まゝ寢みました。翌日眼を覺して見ますと之れは驚くじゃありませんか、今迄焦茶色して居た毛は純白になつて太い尻尾は失なつてゐます。狐は急いで近くの水溜りへいつて自分の姿を寫して見ますと耳は長く眼は赤く立派な白兎となつて居ます。さあ狐は嬉しくてたまりません之ならきつと人も可愛がつて呉れるに違いないといそ〱として里へ參りますと、途中に一疋の犬が居まして、やあゝ、兎が來たぞそれ捕へろといつて飛かゝらうとしました。狐の兎は泣聲出して、私は決して惡戯は致しません何卒通して下さいといひますけれども犬は聞ません、何だ兎を通す樣じや乃公の役目が勤まらんぐづ〱いはずと覺悟をしろといひ乍ら又飛かゝりますので、狐の兎は泣乍ら一生懸命山へ逃げ込ました、もう犬も追ひかけて來ませんので何か餌はないかと野原へ出ましたところが、菫蒲公英蓮華草などが

時を得顔に咲いて居る其中を、黄や白の蝶がいかにも嬉しさうに遊んでゐます。狐は又考へました、あゝ、あの蝶になつて花を友達に遊んだらどんなに樂しからうもう、兎なんか嫌だどうかして蝶になりたいと思ひ乍ら日が暮れたので其儘花野の中に寢入つてしまひました冷やりとした風が顔に當つたのでふと目をさますと早東の空が明るくなつて折からさし出る旭にうつつて露持つ花の美くしさ、狐はうつとりとして其景色を眺めて居ますと後の方から、オヤ揚葉さんお早う、あなたのお衣服の奇麗なこと、さあいらつしやい、一所に舞いませうと優しい聲が聞えたのでふりかへつて見ると黄蝶が菫に止つて此方を見てゐます。狐は呆れてだまつて居ますと黄蝶は笑ひ乍ら、まあ、揚葉さんまだ夢が覺ませんかさあいらつしやいよといはれて氣がつくと自分は何時かきれいな揚葉蝶になつてゐるので大喜びです。急に元氣な聲を出して、おゝ黄蝶さんお早う、さあ遊びませうといひ乍ら一つ二つ羽ばたきすると躰が自然に浮き上つて參りますので愉快で〳〵たまりません。黄蝶や白蝶の間に交つて西へ東へ遊び廻りましたが其面白さ、狐はもつと早く蝶になつてをればよかつたと思ひました。其中に日が暮れましたので其日は皆の蝶と一所に花の上に休みましたところが外の蝶とは違つて狐の蝶は大變羽が美くしいのでよく外の者の目につきます、そして皆が、まあ奇麗な蝶だといつてほめますので狐は乘氣になつて翌日は外の蝶と共に里の方へ行きました。ところが道端の畝から一羽の雀が出て來ました。外の蝶は雀の恐いことを知つて居ますので、そら雀が來たといつて逃げましたが狐の蝶は何雀がと思つて平氣で飛んでゐましたら雀は其風を見て己れ一つゝきぞといつて飛びかゝつて大事な羽をくわえました。狐の蝶は今更の樣に驚いて、あれ、誰か助けてと呼びますと、そこへ通りかゝつた美くしいお孃樣が、まあ惡らしい雀といつて持つて居られた洋傘で雀を追はれたので雀は蝶を放して逃げて行きました。お孃樣は蝶を手にのせて、可愛想に、さあ早く意地惡の鳥の來ぬ中にお歸りよといつて花の上に放してやりました。蝶はほつと息をついてゐると此度は惡戯さうな男の子が來て、や！蝶が居るぞ之は害虫だそれ殺してやれと竹切で叩かうとしますので蝶は驚いてとび上り痛い羽を動して森の我家へ歸りましたが、雀からつゝかれた羽が痛んで仕樣が有ません狐の蝶はほろ〳〵泣き乍ら、あゝ蝶なんか嫌だあんな小さな雀に

さへいぢめられてほんとにつまらないもう〳〵兎も嫌蝶も嫌矢張元の狐が好いどうかして狐に返りたいといつてゐました。翌日目をさまして見ますといつの間にか自分の姿が元の狐になつてゐますので狐は大そう喜んで是から決して他の者を羨みませんでしたから一生樂しく暮しましたといふ事です。

(評)思ふに小學教科書の紙の變り易き男などから思ひ付かれたのでせう併しなか〳〵よくかけて居ます。

○熊と子供(入賞)

北海道　翠子

北海道の山奥に、一疋の牝熊が住んで居りました。今年の春月毛と、云ふ可愛らしい、子を産んで大層大切にして、育てゝ居つたが或日月毛を連れて、穴を出ましたそして、クルミや、コクワ等を、取つて食べながら、遊んで居りました、小春日が照つて誠に、必持の宜い日でしたので思はず、親は晝寢をして月毛許は、面白がつて遊んで、居りました。其から暫くすると、鳥が啼いて森の中が喧ましくなつたので女熊は眼を覺すと、さあ大變！日は西に落ちかゝつて、居るに月毛の、姿は見えません……月毛ヤアイ！！と何度呼んでも答が無いので大層がつかりして泣て居りました、所へお辨と云ふ狐が、參りまして、「熊さん〳〵何を泣いて、居るの」と、やさしく尋ねました熊はお辨が、慰めて呉れるのでオイ〳〵泣ながら、今までの事を談しますと、辨狐は、ポンと手を打つて「あゝ其は此山の下の、五作ドンが今月毛ちやんに似た子を搶いて行くのを、見たが決して、心配なさるな」

彼の人は正直な方だから、殺たり等はしない其より此樣にしたら、如何だらう面白いと思ふがと熊の耳に口を當て、申ますと熊もニツコリ笑つて何分宜しく」と頼みました。

ました、女熊は辨狐に、御馳走してやらうと思つて、小川の流に、來まして淺瀬に、座つて魚の上つて來るのを、今か〳〵と待つて居りました。平な水がムクムク動たと思ふより早く其鋭どい爪で水を一打したかと思ふと、手には大鮭がピン〳〵はねて、居りました。其を陸の方へ投げ上げ……て又引懸けて……此樣云ふ風にして、三疋許り撈いて自分の穴へ踊りました、そして入口まで行くと、聞馴れない、人の子の泣く聲が、聞えますので勇んで入つて、行きますと、辨狐は子供を抱いてコン〳〵コン〳〵と面白い歌を歌つてすかして居りました。

「まあお辨さん有がたうドレどんな赤ん坊！と、見ますと丸々肥つた可愛らしい、男子でしたので餘り可愛いので毛のムシヤ〳〵の面でほゝづりしました、子供は尚更キヤツキヤツと泣き立てますから、二疋はほとほと弱りましたが、別に名案もありません、色々考へた末辨狐は可愛らしい子守に化けました、すると子供は泣き止みました其晩は先の鮭で歌つたり踊つたりししてお祝のお酒盛をして喜びました。熊雄と、名づけられたのも此時です、其から熊ちやんは段々馴れて牝熊の處へでも平氣で、抱こする樣になり果は、月毛の飲み餘しのお乳まで飲むで居りました、熊ちやんは人質に取られ乍も二疋に可愛がられる許か外の獸や鳥に迄、人間の子と云ふので面白がつてお友達になつて遊んで呉ますから少しも不自由なく樂しく、暮して居りました。そして鳥や獸や虫や、花の言葉もよく覺え、誠に利口な子になりました。此樣にして居る中に早くも六年は過ぎて恰ど人質に、取られた日となりました、熊雄は、七つの秋を迎へたので



はあちやん　青森　松尾千代子

す牝熊も大分老いて昔の熊ではありません、如何しても月毛に、後を立てさせなければならん樣に、なりましたので熊雄を呼んて、六年前の今日をくはしく、語つてさて來年はお前も學校へ、行かなくてはならないのだと、云ふと熊雄も大層驚きまして、ては一目でも生みの、親に會たいと、申ますと其ては連れてつてやるから、月毛を返して呉れる樣にと云ふ約束をして、辨狐と三人て、山を下りて、五作の家へ參りました、此方ては今日は子供の失くなつた日てすからお寺さんを、招んてお吊ひを、して居た時てしたのにヒヨッコリ熊に乘つて歸つて、來ましたのてす、からもう家中大騷ぎ、夢かと許り喜んて迎へました、熊雄が五人の兄弟と手に手を、握つた時の心持は如何てしたてせう!!さて月毛も今迄見世物熊となつて居たのてしたが、昔別れた母に會つて是も大喜びて昔の古穴へ歸つて、山の中は平和だ樂しいと母にすがつて喜びました、とさ」

（評）これ丈は北海道の口碑を基として綴られたものてせう、一寸之迄に類の少い所が面白いてす。

【秀　逸】

○星の世界

岡山縣　奥山千代野

むかし或片田舎にお光と言ふ大層怠惰者の親不孝者がありました、それは〱兩親の言はれる事はもとより先生の言われる事ても聞きませず、只何もしないて家にばかりごろ〱と轉つて遊んて居ました、

昔の事てすからお父さんやお母さんは皆大きな籠を背負つて山へ柴刈りに行くのてす、或日の事お光のお母さんはお光を呼んて「お前毎日そんなに家にばかり轉つて居ては不可いから今日はお母さんと一緒に山へ行くのてすよ」と優しく言ひました、すると怠惰者のお光は「妾厭てすからお母さん一人行つておいてよ」など丶失禮な事ばかり言ひまして緣側に寢轉んだまゝ一寸も行きません、お母さんは又「行くのてすよ、行かなければ不可せんよ」と言ひましたが、やはり行きません、傍て見て居ましたお父さんは餘りの事に叱つて「山へ行かぬと家から追つ拂ふぞ」と迄言ひました、お光は家に居てもお父さんの叱言が五月蠅ものてすから厭々ながら籠を背負つてお母さんの後へついて行きました、山の半腹位登りますとお光はもう大儀て大儀てたまりません、直に其處等へ籠を投げ出して自分は一人松の根に腰を下して「あゝ厭な事、何故こんなに苦勞をせなければならないのだらうと呟きながら考へて

居ます、幾ら考へて見ましても苦勞をまぬかれるよい工夫はありませぬ只「此の世に居らねばこんなに苦勞をせなくてもよいのに」とつく〲此の世が厭になつて來ました、お光はこう思ひながら、じつと其邊を見廻しますと美しい小鳥が澤山、さも樂しそうに枝から枝へと飛び廻つて遊んで居ます、お光は之を見ると直ぐもう小鳥が羨しくて羨ましくてなりません「妾も何故小鳥に生れなかつたのだらう、小鳥に生ればこんなに苦勞をせなくてもよいものに」と立派な人間に生れながら不自由な身の小鳥を羨んで獨言を言つて居ます其内に日も早やとつぷりと暮れて向ふの山の上には二つ三つ星がきらめいて居ます、お光はお父さんやお母さんが必配して待つて居られるにもかゝわらず未だ歸ろうともしないで又々あの星を見て星が羨ましくなりました「あゝ妾もあのお星樣の國へ生れて居ればよかつたに」と言ひながら羨ましそうに星を見て居ます、すると此時、遥か横手の暗い森の中から何かばさ〲と羽ばたきさせたかと思ひますと不意にお光の前へ來て突然お光をつかんで上へ上へと登つて行きました、やがて斯のお星樣の國へつきますと「さあ、お前苦勞がしたくなければお前の望み通り小鳥にして星の世界へ置いてやるから、もう之限り歸られぬぞ」と言つたまゝお光を小鳥に化かして星の世界へ押投り出しました、此お光を星の世界へ連れて來たものは何かわかりませんが何しろお光が餘り怠惰者でありましたから之を懲る爲め此星の世界へ連れて來たのです、小鳥に化かされたお光は來て見て驚いたの驚かぬのと言つたらありません、何處を見ても山に木一本もありませず野には草一つもありませず美しい花もなければ樂しく囀る鳥も居なかつたので御座います、お光が「お父さんやお母さんの言われる事をよく聞いて居ればよかつた」にと氣がついた時は早や遲くありまして、とう〲獨法師になつて下界を見下しては泣く樣な身の上となりました、

樂は苦の種、苦は樂の種とか申すでしよう、お光の如きは怠惰者で苦を厭がつて樂をして居ましたから、あんなに苦をせねばならぬ樣になつたのです。

（評）敎訓的お伽噺としてやゝ見るに足る。筆致無邪氣

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○京都（地賞）

山口縣豐浦郡長府村字印内　木村千代子（十五歳）

おゝ京都それは私が十年の間住んでいたなつかしき地てす、春のあした嵐山の櫻を思ひ、月の夕べ東山をすぎゆく雁を思ひ、一日として京都をあこがれなかつた日はございませんたしか五つか六つの頃てした、春の始めのあたゝかい日お祖母樣につれられて御所に遊びました時、おほりに落ちかけてお祖母樣に助けられたこともございます、又お友達と金閣寺に行つて、夕日に、はゆる紅葉を賞したこともございます。すぎにし、私の歴史をかんがへますと賀茂川、銀閣寺と夢の如く幻の如くうつすりうかんでまゐります。そのなつかしいしたはしき京都に今年の四月には行くのです。私は早く四月の來らんことをまつております。山紫に水明らかなる京都はいかなる姿を以て私を迎へるてありませうか

少しおとなびて居ます（評）

○雪

若狹　津田たき子（十四歳）

雪がふる、となりのいんきよさんは、こたつにもぐり込んで念佛を唱へてゐられる、門を見ると、六十位の車引が走つて行く、妾は思ふた雪のつめたさは同じだけれど之を感じる人は同じてないと

○俳句

大阪　金田千代（十四歳）

お正月二十日鼠を捉えけり
寒い日に山から猿が飛んで來た
椽さきや鶯籠に日があたる

○

岩代　ふみよ（十三歳）

解けてゆくつらゝ惜んで折りにけり

○

下野　山岡はな（十四歳）

春の夜の月が上つた森の上
枯れた葉の風に舞ひけり空高く

○

山城　たか女（十四歳）

塔も見え櫻も見えて橋の上

○女子文壇の新年號

神奈川　小林英子（十五歳）

創刊こゝに第五年
紙面はひろくゆた〳〵と
愛讀諸孃の美しき
新體詩やら美文やら
情けも厚き記者樣の
評まづいとも丁寧に
口繪の寫眞はつきりと
誌友の皆樣にこ〳〵と
姿を笑ますもの計り
笑まずになれぬものばかり

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞品四種

○闇中の犬（地賞）

京橋區南傳馬町三ノ一角金堂方　白すみれ

或日私の愛犬を連れて友人の宅へ參りました、犬は友の愛犬の傍へ繋いて、妾は室て遊びました、踊りは夜になつたので大急ぎ、だが中々犬が歩きません、妾は腹が立つて打〳〵して歸宅しました、翌日見たら、友人の飼犬てすもの、大笑ひ……。

○廊下（人賞）

備後　井上年子

横町の金さんと云へば誰れても知つて居る程有名な口上手な人てした。或日學校て演說會があつたので參りますと、廊下て金さんと、バツタリ過つたのです。すると金さんが『オヤお嬢樣今日はどちらへ』と云ふのです。妾は可笑くて返事も出來ませんてした。

○わさびの料理

大阪　吉川しげ見

母、「しげちやんわさびをすつて頂戴これもネヤはりお料理のお稽古だから」

繁「はい、武やすり鉢持つて來て」

お武「お孃さん女學校てはわさびをすり鉢てするのてすか、

○小使帳

沼津町　落葉

妹に小使帳をあたえて之れにはいつたのは入の部へつけて出は出の部へつけるのだと敎えました月末に調べてやりましたら親類の兄からゴム毬を二ツ買つていたゞいたのを見よりゴムまり二ツ入りとつけてあつたので一同大笑ひ致しました。

○ないといつても

仙臺市　白ばら子

每年鴨を下さる家へ遊びに行つたら……今年はないから、とても上げられぬと切りに詫びを云ふて居る所へ五つになる坊チヤンが「ないといふてもここにある」と障子の破れまから鴨の首を出した奥さんの顏はみる〳〵火の樣になつた

○ビール

大阪府　寺部君子

山出しの下女に、ビールを注がしめた、すると「お、强い泡」と言つて泡丈ぱいと庭へ捨て父の前へ出した倘と見た父は「何んだ」と言つて、下女の顏を見る、下女は變な顏して「惡る御座りますか。」

○ふうせん

大阪市　上住ゆり子

今まで奥の炬燵て座繼をして居たお祖母さんが臺所へ出て來た。ふと見ると祖母さんの首筋のところに赤い玉がフツフツとして居るので後へまはつて見ればゴムふうせんが帶に結びつけてあつた。としちやんはスヤスヤとよく寢て居る。

○恍けて

岐阜縣　中村澤子

農家の下女、或夜馬屋の二階に寢てゐたが、突然夜中に眼をさまし「アレエ旦那樣大變て……私の寢間へ馬が來ました」、「ソリヤ大變だ」主人は驚いて、はね起き、トン〳〵二階へ上らんとするに、下女の慌てゝ「アレ旦那樣三階ぢやない二階て〳〵……」、「何だと馬鹿ッソリヤ馬屋の中だッ」。下女は二度ビックリ、四方を見廻すとこは如何にいつの間に馬屋の中へ落ちてゐた

○サルスベリー

沼津　吉原ふじ子

下女「此の木をなぜサルスベリと申すのてしやう

主人「其れは英語てサルスベリーと云ふので日本語ては百日紅と云ふのだよ。

女子健康顧問



○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず藥書差支なし

女醫　鷲山彌生　擔任

○差支へなきか　私は腸が持病ですがいつも月經時はことにシク／＼と下腹がいたみます。が別に差支へありませんか(哀女)

『答』　月經時には一般下腹部に充血を來たすものなれば腸の弱き人などは多く痛み易きものです故に成可安靜に且つ懐爐にてもいれ置くやうになさればよいのです

○毛生液　毛生液は効能があるものですか。(下谷の薄毛女)

『答』　毛生藥にも色々種類がありますが普通の賣藥などは先づ効能なきものと御考へなされば間違がありません最も毛根のある所なれば相當の藥液を塗擦すれば幾分濃くする事が出來ます

○不治の病か　私は四五年前から癲癇病にかゝつていたく困つて居ります、人に聞くとこの病のみは療らぬといふことでありますが誠にさうでせうか(眷子)

『答』　癲癇は容易に治し難き病氣です併し二ヶ年も藥用を怠らず持續して治癒せし例もありますれば務めて服藥なさるのが肝要です

○鼻汗　私はたへず鼻に汗が出て冬になると赤味を帶びてこまります。これを治する法はありませんか(越後奨人。大和、夏子)

『答』　鼻の皮膚を冷水にて毎朝毎夕十分間位殉擦なされば効能があります

○丈を高くする法　本年十八歳身丈低し、何卒高くなる方法お教へ下さい。(百合子)

『答』　此答は度々此欄に掲げました通り先天性に低き身の丈を人爲的に延ばすと云ふは現在醫術の程度にては行はれ難きものですが日頃反身になる運動を心懸け滋養に富むだ食物を食し臥る時には體を充分延長させるやうな方法は比較的効があります

○ドモリ　私は四五年前にドモル子供の口まねいたしましたら、それから少しづゝドモり出して、今に治らぬて困ります。ドモリを治す藥はありませんか(渡邊操)

『答』　吃音は藥にて治癒する事は出來ませんが伊澤修二なる先生が吃音矯正術なる方法を實施し居られます御質問の如く後天性に習慣より來る吃音なれば此方法にて必ず治ると思はれます

○多血質、縮れ毛　私は少し道などあるくとすぐ顔がほてつて、汗が流れます。これも多血の爲でしやうか、若しさうとすればいくらか人爲的に減ずる法はありませんか。(上州又、ちゞれ毛は直き療法がありますか。蝶子)

『答』　御説の如く多血質の爲でしよう日頃野菜類及び菓物類を多く食し肉食はなるべく少量に取る樣心がけらるべし
縮毛は瓦を焼き之を厚き布切に包み衣服に火のしをかける樣に毛髪を摩擦すれば幾分効があります

○口唇の爛れ　私は唇の隅が爛れて困ります。よき療法はありませんか又血を減ずる藥があらばお教へ下さい。(多血女)

『答』　口唇の角が爛れる原因は種々ありますが多分胃病より來りたる樣に思はれます故に成るべく食物を減ぜられ食鹽水にて毎食後に含糸に

鹹を續けらるべし然る時は自然に血液も減じ口角の爛れるのも治ります

○近眼

私は本と近眼でありませんのに、ふと友の近眼鏡を借りてかけますとはつきり見えましたので、夫れから二十度のを用ひて居りますが、只今から眼鏡をよしても元の通りになりましやうか。何卒御教を願ひます。(憂慮女)

『答』近眼鏡をかけて遠方の物が明瞭に見へしは前々より近眼にてあられしも知らずに過されしと思はれます故に假令近眼鏡を廢せらるゝも正視眼に復する事は出來ません然れ共近眼の度を進める恐れがありますから專門醫に度を合せて貰はれるのが安全です

○口中の臭氣

私は夏になりますと口が臭くなつて仕方がありません。虫齒は奥から二番目で指の先がは入る位の穴があります、中から時々土のやうな血の塊が出ます、臭いのはこのためでしやうか又腹の中からでしやうか、臭氣の止る法をお教へ下さい。(困る女)

『答』口中の惡臭は胃病にも因り齲齒よりも來り又頰の骨の中に病氣ありても來るものですが質問の趣にては齲齒が原因の樣に思はれます。故に齒科醫に付き充分齒の治療を御受けなさるのが良ひです其儘になされては單に臭氣のみならず病氣を起こし、大事になります。

○赤顏

私は常々顏が赤色で、冬期になると紫紅色になり、日に一度づゝ眞赤にほてつて、誠に見惡くあります、何かよき療法をお敎へ下さい。(愛知、尙子)

『答』御年令がわかりませんが十七八なれば頰の赤きのは却て宜しひのです廿歳位になれば自然になほります

○月經時になると

私は每月月經時になると腰より下腹へかけて痛み、足がしびれ冷熱をかんぢ頭痛がして氣がうつ〳〵して物にあき安くなつて困ります。何病氣でありませう。(栃木、煩悶女)

『答』多分子宮の位置が屈曲つてゐる樣に思はれます故に專門醫の治療を受けらるゝのが肝要です

○月經の前後

私は月經前十四五日より乳房に痛みを感じ三四日前になりては步行も活潑には出來ず、體操の時困ります、閉止と共に痛は去ります。三四年前より白下帶が下り、四月前より一層はげしくなり牛乳のかたまり樣のものと化しました、四五年捨て置てよろしいでしやうか、不姙の原因となりますか。(北海の十八歲女)

『答』子宮內膜炎と云ふ御病氣の樣です之は永らく放置する時は實質炎なるものを起し易く隨て不姙の原因となります御獨身なれば結婚前に入院治療を受けらるゝ樣御すゝめします

○神經瘦削

進行性聽神經瘦削は全快いたしますか。(札幌、病女)

『答』神經瘦削は何れの神經に來るも治する見込はありません

○腫物が出來る

私は昨年の春から今年の春まで藥を呑んで居りましたが、その間たへず腫物が出來て未だになほりません。そのあとが黑くなつて困りますが、これは藥を呑んだためでしやうか。(大阪、朝顏女)

『答』藥を服用した爲に「ニキビ」の出來る樣の事はありません症氣に罹る時は新陳代謝が變りて來ますから出來易いものです之は身體の肥立と同時に癒りますされば時期を御待ちなされ

○隆鼻術に就て

(一)隆鼻術の名醫、施術中の日數、どの位まで高くなるものにや。(心配女)(二)隆鼻術に用ゆる藥名、及び價、何處の賣藥店にもありや、お敎へ下され度候。(困る女)(三)私は性來鼻が低くて困ります。隆鼻術に使用する藥名、賣店、價等お敎へ下され度

又二千倍の昇汞水は證人なくして賣りますか。

（愛讀者（四）隆鼻術は先天的に低き者には効なきか、又手術後本に還りたり、害などの怖れなきか。（不知火の田舍女）

『答』四名の質問に對し一度に御答します隆鼻術は素人に出來るものではありません隨而藥品等を教ゆる必要はありません該術は一回の手術に依り目的を達し最も立派なる鼻が出來るものでありますれば目下盛んに行はれて居りますが最近の説に依れば隆鼻術施行後三ケ年以上を經過する時は藥液を注入せし部の皮膚に水泡を發し漸次崩潰する事を實驗せし人ありと聞きたれば今一二年の經過を見て後多數の實驗にて無害と認むる迄御見合せ相成ろ方安全てす附り昇汞水は何倍にても醫師の處方がなければ賣りません

○寢小便　おはづかしいお話してすが私は今年十七になりますが未だ時々寢小便をいたします、何いう理由てすか、御藥を教へ下さい（片山里の紅葉）

『答』寢小便は内服にては容易に効は有ませんが腰椎に注射をなし癒ろ例は澤山ありますこれは熟練なろ醫師に御依頼なさるが良ひのてす

○眼の養生　私は夜は十二時頃まて、朝も隨分早く起きますので眼が非常に勞れますが眼の養生は如何したらばよろしくありますか。（上毛の孤獨女）

『答』睡眠不足の爲に眼の疲勞を來すものてありますれば毎晩六時間以上の睡眠時間を御取りなされ其上尚疲勞止まざれば眼に病氣あるものと考へ一應眼科醫の診斷を受けらるべし

○下劑を用ひずに　私の母は二三年前から通じが惡くて困つて居ります。下劑を呑めば次の日は少しばかりあるのですが、下劑を用ひなひて毎日あるやうになるにはどうすればよろしいかお教へ下さい。（千葉親を思ふ少女）

『答』毎朝々飯前に「コップ」一杯の水の中に一匙の食鹽を溶かし飲用さるべし斯の如く一ケ月も續け効なき時は腸胃若くは子宮に故障あるのてす

○にきび　私は二三年前よりニキビが出來て今年などは膿をもつて實に困りました如何いふわけて出來るのてしやうか。その療法をお教へ下さい。（十七才女）

『答』にきびは皮脂腺より排出する脂肪の腺内に沈着して出來るものなればなるべく充分に排出し得る樣毎日三回位硼酸石鹼にて顔を御洗ひなされ脂食物を節する樣心懸けらる可し

○わきが　（一）わきがの根治劑と、療法とをお教へ下さい（山家の未婚女）（二）三年前にわきがうつりまして、未だに治りませんが如何すれば治りますか。（病女）

『答』腋臭は度々揭げたる通り根治策はありませんが塗布藥にて臭氣は止ります　されども此惱には一切藥液療法は御教示しません　又口中の臭氣は毎食後食鹽水にて含嗽なさるのが良ひです

○月經、トラホーム　私は初めて經があつてから今にいたつても未だ日がきまりませんが差支ありませんか。又トラホームを少し病ひまして、二重まぶちのが片方だけ一重になりましたが月日のたつ内には元の通りになりますかお教へ下さい。（若松女）

『答』月經は初經後二十才位迄は正規通りになくも差支ありませんトラホームが全く癒えし後なれば月を經ろに從つて元に復しますが瘢痕にても遺せしなれば治りません

○月經停滯　十六才より今までに五回、常に青き鼻汁いて、時々出血する事あり、平生顔色の惡しきはこの故なりや。（大和心配女）

『答』鼻に病氣のある爲貧血し居られ隨而月經も不秩序なるものです故に先づ鼻の療治を

專門家に御依賴なさるべし

○髮が拔ける　私は年中髮が拔けて困ります、ぬけぬ法がありましたらお敎へを願ひます。（衣女）

『答』　毛髮の拔けるは營養不良と神經衰弱とより來るものなればなるべく精神を安靜に保ち充分滋養分に富む食物をとらるべし

○シワ　私は冬になると手にシワが出來て誠に困ります、如何したら出來ないてしやう（一少女）

『答』　脂肪に富む食物を食す樣心懸けスコツト乳果なる賣藥を滋藥に用ひらるれば脂肪の分泌多くなり隨つて「シワ」が伸びます

○たむし　何故出來るか、療法を敎へて下さい。（病女）

『答』　一種の皮膚病てす皮膚科の治療をうけらる可し

○痩せすぎ　私は性來やせすぎてゝ困ります、すこしても肥える法はありませんか。（みつえ）

『答』　痩せ居るのは其原因種々ありますが神經過敏の人に最も多いのてす、故に肥滿とするには可及的精神を安らかに保ち肉食と草食とを適宜に混じ、規律的に食物を取らるゝ樣心懸け、又早起の習慣を養成さるべし

○赤毛　私は毛髮赤く、眉毛薄くありますが濃くする法はありませんか。染めるには何て染めますか。又海岸故鹽水にて皮膚が荒れますが、何をつたらよいてしやう、リスリンをつけると黑くなりますか（無學生）

『答』　天性赤き色を黑くするは困難てありますが幸ひ海岸の御住居なれば魚類の如き滋養物を澤山食せらるれば毛髮に光澤も出て又幾分濃くなります油は可成香氣のなき眞性の椿の油の如きものを毎朝くせなほしの後に御つけなされ染るには矢張白髮染と全じものにて宜ひのてす皮膚のあれは「リスリン」を三倍に解き塗布なされ決して色を黑くする等の恐はありません

擴張豫告

今まで本欄は頁數に制限ありて充分の應答も致しかねましたが、次號よりは漸次擴張の方針を取り、更に

産科婦人科專門　醫學士　北畠孝夫先生

に依囑して詳しい應答を願ふことになりました。質問の多くなる丈け紙數も追々增加して行く積りです、質問の原稿締切は毎月一日といたします、而して其分の應答を翌月一日發行の紙上て必ず發表いたします。質問は成るべく産科婦人科のことと及び婦人の衛生上の疑問は何ても御遠慮なくお尋ね下さい、何のお手數もいりません、但し質問は半紙又はハガキに成るべく詳しく要領を得るやうに書いて下さい、勿論住所本名は記さずとも匿名ても差支はないのてす、原稿の端には「衛生問答」と書添えることを忘れないやうに願ひます、なほ本欄に就いて疑問のある方は記者に問合せて下さればお答いたします、豫め擴張の豫告をいたして置きます

誌友倶樂部



○規定　本欄は誌友諸孃の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

年賀の御禮

新年早々年賀の意を表して、特に本社に葉書を賜はつた愛讀諸孃は澤山てございました、或は舶來、或は私製の美しい繪葉書を寄せられた方もあり、或は自作の和歌俳句の類を書いてあつたのもあります、孰れも本社の隆盛と記者の健在を祝されたのは有り難う存じます、今紙面の都合て一々其お言葉を紹介する餘地の無いことを殘念に思ひますけれど諸孃の諒察を乞ふことゝして單に其芳名を左に列擧して謝意を表し、併せて愛讀諸孃のいや榮えに榮え、其幸福と健康を祈ります（記者一同敬白）

京都市、中谷とみ子。上毛、秋田登代子。奈良市、佐野ふさ子。常陸、赤崎可代子。和歌山、橋本貞子。千葉、北田信子。北村花枝子。和泉、金田よし子。長野、下枝よし子。山口縣、岩崎ちか子。越後、山田はぎの。廣島、賀川みずゑ。新潟、志賀いつ子。高知、山内志津子。埼玉、近藤とく子。新潟、丸山たけ子。武藏、船津ゆかり。大阪、愛讀女。早瀨美野。大阪、平尾とき子。京都、岩淵國子。秋田、三浦ふみゑ。越後、秀子。神奈川、石井芳子。相模、鍋田美代子。茨城、田村波津子。熊本、平岡はつ子。甲斐、やす子。熊本、有働いせ子。岩代、根本喜代子。岩田はま子。岡山市、小林霽子。水戸市、北村花友子。姫路、田村よね子。大阪、長野悦子。福岡縣、熊谷つね子。越後、佐藤葭子。信濃、丸山峰尾。北海道、伊藤きん子。佐渡島、宗原美津子。大坂、梅村愛子。根本松江子。横濱、鈴木まつ子。山城、八田文子。越後、飛島女。小倉、三宅敏子。福岡、藤原政子。伯耆、竹本春江子。中山道江子。宮崎縣、仁高金二郎。深川、佐々本京子。下谷、太田樂子。若狹、澤田あい子。大阪、西戸政江子。茨城縣、黑津とよ子。大阪、土橋仙花。岩代、菅野やい子。山口、千代子。森輝子。大阪、生田房子。大沼素女子。下野、藤田常子。青森、西谷きし子。大阪府下、寺部岩子。美濃、中村さは子。福井、片山千里子。岐阜、山本政子。信濃、きし子。千葉、とし子。大阪、奥村きよ子。備中、森島いさを。岩手、藤根しげゑ。神戸、浦上政子。英領被南、山口蝶子。熊本市、峽よし子。上毛、白露子。奈良、中富よしみ。山口縣、兼常文子。神奈川、篠原皆子。兵庫、橋きみ子。廣島、手島まさ子。愛知、成田いし子。千葉、渡邊なか子。山口、青根よし子。岐阜、篠田とみ子。京橋、小林喜代子。大阪、日高とよ子。大阪、鈴木ふさ子。麴町、今川ひさし。牛込、野村光子。横濱、天野きん子。京都、藤村たくゑ。三河、永田舞鶴子。茨城、秋山欣子。大阪、高田藤子。神奈川、辻村とよ子。青森、きゑ子。上毛、大積千代子。島根、漆谷清子。香川縣、綠葉散史。滋賀、磨志緒。青森、昭水白梅子。函館、大場義子。信濃、濱しづゑ。岩手、館坂くに子。長野、岩波むら子。筑後、鶴見靜代子。越中、佐々木てふ子。佐賀、田中美枝子。名古屋。八重子。越中、佐々木薦子。福井、北利子。和歌山、谷田峰子。京都、金田つれ子。岩代、松井ます子。鳥取、神谷智榮子。松崎よし子。青森、野坂八重子。伊豫、井上いち子。山口、貞弘美和子。大分、立川悌。尾張、本多訴詩。土佐、牧野たき子。京都、磐田甫子。土佐、中平初子。本郷、平島すま子。京都、綿引古都子。陸前、八崎りん子。岩代、千代子。四谷、味方こう子。京都、高田圓二郎。大阪、茂谷利子。駿河、高野榮三郎。函館、山田邦枝。土佐、宮内ゆき子。後志、鈴木梅子。旭川、山本たか子。島根、りう子。釧路、北川悦子。神田、荒木さだ子。神田、西條うめ子。信濃、久保田たつ子。信濃、吉江白整女。淡路、加藤菊子。伊勢、河村富子。岡山縣 桐本悦子。佐賀縣、交野小萩。熊本、近野春子。廣島、原田操子。山口縣、吉田美代子。大津、近藤きく子。京城、峽貞子。常陸、田村かれ子。須崎せい子。臺北、稗貫美津子。北海道、加藤八重子。貞子。弘崎、長尾きよ子。信濃、小林美喜代。播磨、内藤松園女。江添ちゞ子。

安房、阿部きん子。京城、ゆかり子。陸前、沼倉ふく子。千葉、市原まつ子。土佐、高橋綾子。沖繩、井之口かれ子。山形、河原榮子。千葉、長谷川文江。下總、長谷川ひろ子。下野、稲口たに子。甲斐春子。栃木縣、渦川俊子。釧路、石川きせ子。靜子。日向、甲斐玉うた子。信濃、池田とし子。茨城、中川幸世。靜岡、永井清子。高畑てる子。仮達、美代子。菊子。紀伊、大家玖慶子。石渡敏子。韓國、淵野女。

交際を望む

○一藝ある方に　義太夫、長唄、清元、琴、ヴァイオリン、踊、など、何れにしろ一藝あるお方と御交際の上互に敎へこつこ致したくあります、御承知の方は御手紙て御しらせ下さいませ（芝新堀町十七不動堂内、まさ子）

○繪葉書六百枚　皆様妾の許に繪葉書帖まだ一度もつかつた事のない極新らしいのが弐拾册ばかりございますからお好みの方は各種新小說と交換下さい若し皆様の小說が高價てーたら外に繪葉書なも上げます。何妾等三人の許にございまする繪葉書、紀念、水サイ、内國美人、佛國製。プロマイド美人、内外景色、英國タック社製等其外六百枚ばかりございますのてこれも新小說と交換下さいませ先着七名様には見ぐるしき妾等三人の寫眞な上げます（佐賀縣小城町麗子町田尻殿内女子園藝會内田尻貞子森本美代子永坂由子）

○妹に代りて　北米の合屋岐子様に、愚妹富美子事は病氣のため遂に黃泉の客となりました。御慰藉の御葉書に接したのが終焉前二十分の時てした。もう其時は微かに目を開けて暫く見つめて居りましたが、涙は瀧の如く頰をつたひ、頻りに感謝に堪えないもの丶如くてした、かくして御葉書なしつかと手に握つたまゝ妹は遂に歸らぬ眠りにつきました、生前のいろ〳〵の御厚情、妹にかわりて御禮申上げます、（北海道根室キナトイシ高橋生）

○郡會の様子　郡會地の皆様私はれえ賑しい處の様子が知り度てすよ、極眞面目に御報導下さる方はありませんか、不束ながら私も草深い處をお知らせ致ます（廣島縣賀茂郡仁方町手島まさ子）

○追悼の意　最も若い閨秀作家として、本誌唯一の天才とたゝへられて居られました、田中久子様は去る十一月三日遂に此世を去られたそうてすが、皆様此際記者様にお願ひして、勞を取つて頂いて、全國の志ある誌友諸孃から何か募つて、其英靈を慰る爲め何か贈物なしては何うてせう。御賛成の諸孃は本誌て其旨を發表して下さい。（備後府中𨻶紺屋町井上年子）

○懇話會　愛讀者の懇話會の様なものを開きたいぢやありませんか御賛成の方は聯合して記者様にお願ひしたい事れ（北一番町二十二松木方白ばら子）

○布哇より　私は米國に旅行しておりましたが其の旅行も終り再び布哇に歸りましたから前の様に寫眞や、レターやポスカードの交換な希望致します（米領布哇國マウイ・ワイルクエ・イース國會日本人部主任酒井）

○學校の繪葉書　妾は日本全國學校の繪葉書を集めたいのですが皆様の内に御持ち合せある御方は是非送つて下され御禮には我が校の繪葉書及東金名所繪葉書を必ず御送り致します（千葉縣山武郡東金町田間小川喜八方愛子）

○職業學校　親愛なる誌友の皆様神田一ッ橋通町の共立女子職業學校の內容御存じの方はどうぞくわしく御知らぬ下さいませ御禮はきつと致します（下谷區西町十四番地村上方睿枝）

○諸兄諸姉様より澤山年賀狀頂きましたが處番の

東京、京都　大阪

不明のと混雜まぎれにて返禮もれもあります乍失禮此紙上なかりて厚く御禮仕ます（大阪松崎町一丁目濱側丸山まつ方岡本靜江）○皆々様妾に小說本なら何ても宜しいてすから御惠み下さるお方はありますまいか、禮は相當に御返し申します亦一時的は御免永久に御手紙の交換を願ます（京橋大鋸町十一富士子）○妾今度左の處へ住居して居りますので何卒誌友の姉上様へ御知らせをなして下さいな御たのみいたしますよ手紙繪葉書あみ物の御交換のほどなのよ（大阪市北區北野太融寺町一八〇九、松井光代子）○お姉上様達のお寫眞や名所繪端書つ編物を送りて下さいすれば妾も送ります（大阪府泉北郡上條村大字尾井千原奥野慶子）○私はまだ此地をはなれた事もありません何か珍らしい繪葉書送つて下さい京都名所にて御禮致します、（京都市富小路通佛光寺下ル清水たれ）○上毛の紫城さま早速御返事下すつて有難う私れあなたの夏小袖とあれ

とが是非見たくて失禮をもかへり見ず御願ひしたの處がもう他のお友達にお上げして仕まつたんてすつてねあゝも少し私の手紙が早く屆いたならよかつたのにねえほんとに殘念てしたわ私もいろ〳〵面白いのや何か澤山持つておりますからいづれ調べて皆さんに御知らせ申しお互に取換て頂きませうれ先は御禮かた〳〵右まて（東京。古村すゞ子）○妾は世界の郵券を集めつゝする妾と同趣味なる男女の皆樣と御交際をも願ひ度又葉書の交換をも願ひます（東京本郷駒込曙十一平島すま）○諸孃よ私は至つて淺學のものにてとても御諸孃樣とは肩を共にすることが出來ませんがどうぞ御見捨なく御寫眞や御玉章の交際を願ひます（牛込區市ヶ谷佐内坂町三八十山方佐藤いつ子）○記者や愛讀者の皆さま私はこれから出來るだけ勉强して一生けん命に投書致しますからよろしく御引立下さい又先日出ておりました習字の事は大てんせいてすよ大坂の方よ御手紙下さい（南品川淺間臺岩田せい子）○私は山奥より出て來た極く不束者て上京來絕ず本誌の購讀者てす御蔭を以て讀者諸姉の新らしき思想に幾分か染つた樣な誇りがします。同時にまた今後永へに御交際せられん事を諸孃に願ひ上げます（牛込區矢來町一丁目乙六十三番地小野方塚原けん子）○長野の文子樣、大阪の時子樣、京橋の村上樣、御ハガキ有難う、尙皆々樣、何卒御交際下さい御返事は差上ます、（神田ニコライ下東紅梅町二伊原方松下稻子）○諸姉上樣よ年始狀や色々の雑誌など御送り下さいまして有り難う、妾は冬休中に歸國致して居りましたものてお禮致しかれました、どうぞ悪しからず、お惠み下さる方は必ず住所を明細にお知らせ下さいれ、相かはらず雑誌やお寫眞の交換を、妾は先日程左記の所に轉居致しましたから宜しく（東京市本郷區新花町三十六番地富田樣方渡邊喬子）○諸姉樣よ私は學校生活と云ふことを知らない賤しい者てありますが女子文壇は昨年から愛讀して居りまして皆樣のお作を拜見して樂しんて居りますが二月號からへたながら和歌俳句など投書しますからどうぞ宜敷ねがいます又私は勞働して居る者てすけれ共何卒諸孃樣繪葉書なり御玉章なり交際して下さいませんか（東京市四ッ谷片町三五齋藤方味方こう子）

東京より西

○妾は繪の稽古がしたいのてす誌友の姉樣方の内に肉筆の繪はがきを送つて下さる御方が御座いましたら何卒御傳へ下さい妾も自筆の繪はがきて、きつと返事は致します。御親切な御方なら寫眞ても、編物も、いとひませんお禮は神かけて致します。（大分縣北海部郡四浦村字狩床佐藤しげ）○今後御交際を御願ひ致します寫眞雜誌交換エハガキ玉章の交際を御願申上ます寫眞御送り下されし人には浪子の歌外の實に長い歌を見て差上ますわ雜誌お送りて下されし人にも又雜誌も送て上ます（備中小田郡矢掛町江木實枝）○昨日今日夜を吹きつのる木枯の響き亡國の民の聲かとも思はれて淋しさ一層胸に迫る折から故山にまします皆樣の御情深き御誼に接せし妾のうれしさ厚く〳〵御禮申上候此れを御緣に永久に御交際願上ます（韓國鎭南浦東三ノ三番、五島涙子）○皆樣よ私も一昨年以來本誌の愛讀者となつて居りますが片田舍の事とて語ろに友なく實に淋しく日を送つて居ますてどうか繪葉書や玉章の御交換を永久に御ねがい申します（兵庫縣城崎郡港村氣北村宮代初枝子）○私は淋しい〳〵形の野原の海岸に一年をさすらひの身となつて過しました今年も相變らず御文通を願ひます（三河國寶飯郡形原小學校內今井初子）○誌友の皆樣方よ私は今年から御交際を願ひたいと存じますから何卒御姉樣方の御寫眞や御玉章など御惠み下さい私も御送り致します（岡山市浪華町佐々木きよ內みゆき子）○皆樣早速御手紙下さいまして有り難う悲しいことには今度私は皆樣と御交際する事の出來ない樣になりましたこれも或る都合からてす記者樣はじめ皆樣としばしの御別れ致します一寸至急御知らせを致します（熊本縣師範學校女子部內赤星みほ子）○諸孃樣に御交際を御願ひ致しましたら御返事を下被なひ方も御送り致しましたに取ばなしの方も有誠に悲しく思ひますわ何卒永久に御交際被下御方御文を御惠み下被必ず御返事差上ますから（橫濱元五、二〇九、川住方、今井華子）○誌友の諸姉君樣よ妾は片田舍に住む不束者てすが一人ぼちて寂しうございますから何卒幾久しく玉章や繪葉書の交換を御願ひ致します（靜岡縣磐田郡天龍村上岡田鈴木曉子）○御なつかしき誌友の姉樣方よ妾は浪荒き遠江灘に面す月岡てふ淋しき里に住む不束者てすが御心あらば繪端書や玉章御寫眞を御惠み下さいませ前着お二人のかたへは妾の寫眞に縣內名所繪端書を添へて御返禮いたします（靜岡縣小笠郡中內田村月岡赤堀むら子）○誌友諸姉上樣よ妾は片山里に住む不束者て御座います先月より女子文壇の愛讀の仲間入をしたの

てすが何ぐ信愛し給ふ御心からは玉腕な永久に美しなる繪葉書は決して望みません（山口縣都濃郡富田村岩崎ちか子）○私は當地の高等女學校の・年生て到つてふつゝかな者てすが若し皆樣の中に此のふつゝかな私を姉妹と思召し下さる方がありましたら永久に御交際願ひますけれど私は大變字が下手てすから其御つもりて私上手の方には御返事が出せませんわ（高知縣土佐郡一宮村薊野擧田よし子）○信實ある誌友の諸姉樣ゝ私は波風荒き八潮路に翼ひろげて大鵬の今や翔らん姿して南にむかふ土佐國に住む不束者てすが永久に繪葉書や御玉章の御交換を御願ひ申します（土佐國高岡郡越知町高橋綾子）○繪葉書なり玉章の交換を又雜誌の交換も御玉章を送て下さつた方には其以上の御返禮は乾度致します又私しの地方へ御出の時は寄て下さい（靜岡縣引佐郡都田村新木區玉雲寺前鈴木さくえ子）○神田の田中英子樣萬深い田舍に住んて居る私の樣な者が、此樣な事申すのはほんとに失禮てすけれど、私なんだかおなつかしくて、おなつかしくて、再び田中久子樣にお逢ひ申したような心地が致しまして一月號の御作をくりかへしくりかへし拜見致しました。どうか久子樣のように振つて下さい。（高知縣土佐郡一宮村薊野擧田よし子）○改まりたる年の御よろこび松竹のいろ變らず目出度御とし迎へさせられいと〳〵喜ばしく存じ上候次に私事事なう年むかへ候まゝ他事ながら御安心下され度倚今年も何變らず御交際の程ひとへに願ひ上げ〳〵（難波壽子）○妾は女子文壇の愛讀者て常に諸姉妹樣方の立派な文を見る度に羨ましくてなりません

どうか妾にも文なと思ひますが悲しい事には出來ませんが、改めて諸姉樣方の繪葉書の交換か玉章の御交換を願ひたふ御座ります、何卒御送り下さいませ（遠江小笠郡六鄕村長岡芳子）○私はアメリカの兄さんからもらつた美くしい米國繪葉書が數十枚たまりましたからおやさしい姉樣方と交換致したうございますどうぞ御遠慮なくお申込下さい。又九州中國東北地方の諸姉樣東宮行啓の紀念繪葉書を御交換下さい德島縣のなすぐ送ります。（德島縣勝浦郡八多村瀾みれ子）○越後信濃尾張の誌友の御方へ先月都の空を後に見て遠く距て故鄕に淋く文壇を友として居ますから不束ながら永遠に妹と思て御交際な給はれよ御地の事柄を御知下さい（周防國熊毛郡田布施村御藏戸一六〇廣中立枝）○誌友の皆樣わたしはわけはこゝてはいひませんが「不幸なる身」淋しき人々の一人なのです眞に杖とも柱ともなる方と心の中の御話がしたいのです、もし同じ境遇同じ御心の方がおありてしたら誌上て御住所をおしらせ下さい――東京橫濱――の方なればその內にはおあい申すこともてきるだろうから、なをよろしいのです、しかし男の方と似而非の方とは絕體に御ことはりいたします（橫濱の正女）○皆樣御交際を願ひます親密なる……（山口縣玖珂郡賀見畑村木村球子）○繪葉書なり御玉章の交換願升妾はこんな田舍に淋しく月日を送て居者てす夫して寫眞小說女子文壇は澤山有り升故御交換下されたし田舍暮しの妾しても御返事は必ず致升（靜岡縣引佐郡都田村新木區玉雲寺前鈴木さくえ子）○諸姉樣よ御手紙や繪はがき下され有がとう御返事は差出す筈の

處餘り多數てすから自筆て書けませんから誌上にて御返事以後は宜しく御交際下さい（奈良縣初瀨町大字日河山口信枝子）○マーチても長唄ても何てもいゝてすから面白い音譜がありましたら交換して下さいませんか又澁谷の柳雪樣昨年十二月號の本誌のあなたの短文にありました「秋の夜」「湖上の夜歎」と云ふ歌を教へて下さいませんてせうか（京城永樂町三ノ二〇立花方三室英子）○私突然こんな所へ來ましたの……東京に居た時には、多くの諸姉樣から御手紙など下さいましてありがたうございました、都合がありましてありがたうご さいました都合がありましてしばらく交際を中止しますから惡しからず（韓國京城にて三室梅子）○賢明なる姉上樣よ久數御無音致した先づ新な年に。變りまして御目出度う御座います不束者てすが。何卒御交際して下さいませ。（靜岡縣磐田郡岩田村寺谷永井淸子）○皆樣御交際下さいまし御返事は必ずいたします、（靜岡縣引佐郡宮口町內鈴木桂助方鈴木すみれ子）（○皆樣美はしい繪葉書な交換して頂載（韓國京城本町四丁目二〇辰子）○おけまして御目出度う、どうか今年も相變らず（土佐、梶原しげ子）○諸姉樣、どうぞ以後御交際を願ひます（靜岡縣引佐郡都田村都田鈴木作太郎方竹內なみ子）○諸姉樣私は姉も妹もない淋しい身の上てすの、冷めたい情の下に冷えこゞるわらはの心をあたゝめて下さる厚い御情のある眞に姉とも妹ともゆるされる御方と御交際がいたしたくあります、（長崎縣立佐世保病院內落葉子）○本誌愛讀の諸姉樣、私はやつとのとて心にみつ樣ないゝ友達を得ました、名前は女子文壇とい

ふのよ全たくうれしいは、以後どうぞよろしく御交際を願ひます（東京府下四多摩郡羽村下田よれ子）○お情け深き姉上樣方、片田舎に獨り淋しう日を送つてゐる私に何卒おめぐみ深きお交際を願ひます。千葉縣の方は私の故郷故猶さらお願ひたします。（靜岡市水落町二ノ二四根岸樣方中村りよう）○皆樣わたしは未だ年若な少女ですの、どうぞいつまでも御交はり下さい（廣島縣高田郡可愛村秋田國枝子）○皆樣相かはらずれがひます（高知縣安藝郡井三口村梶原しげい）○私は極く山間の寒村に淋しく朝に炭燒く煙た望み夕に妻戀ひ鳴く鹿の聲をきゝて暮す哀れな私の住居どうぞ皆樣御情ある御手紙下さいまし返事は細かくきつと差上げます（美濃惠那郡福岡村新田富長屋方藤田芳子）○本誌愛讀の諸嬢樣妾はれ、山又山の谷底の淋しい一軒屋の不幸ものです、何卒給葉書御玉章頂戴なお返しきつと致しますわ。（備後國比婆郡田森村本田露子）

●●●●●
東京より來

○誌友の皆々樣葉書の御交際をれがひます御交際下さるかたはかならず御返禮致します一時的でなく永久にれがひます（岩代耶麻郡喜多方島坂方こま子）○誌友の諸嬢樣よ神聖なる交際を絵葉書にて願ひます何人樣に拘はらず寫眞の交換も願ひます岐度返禮致します（石川縣鳳至郡七浦村字皆月茶木ゆう子）○文壇愛讀の姉上樣妾は習志野の一隅に住む淺學のものですあわれと思つて給葉書玉章などを御惠み下さい御禮はきつといたしよす（千葉縣大和田局區内睦村吉橋吉福時子）○諸姉樣よ無事で御目出度う謹んで御祝申上ます末長く玉章や絵ハガキ等の御交際を願ます又雜誌もネーどーか御禮は必ず（栃木縣那須郡伊王野下町沼井方藤田常子）○今年一月發行の女子文壇寫眞内伊杞の杉本富美子さんと花岡テルさんの二人の所を知らせて下さい何卒御交際を願ひ申します（富山縣西礪波郡西明寺二七○七石黒岩助）○なつかしき誌友の君達よ永久に親密の御交際を願ひます土地絵葉書の御交換もれ（新潟縣中蒲原郡新津町志賀いす子）○皆樣私は以後手紙其地の交かんはだん然やめましたから惡しからず（岡本き美枝）○記者樣を初め皆々樣御目出たうござります御慕しき皆々樣御手紙の御交際を願ひます（栃木縣下都賀郡小山町上町小林八重子）○諸姉上樣末長く御交際を願ひます私は絵葉書が三度の食よりも好きなんで有りますから今度よりどし／＼交換を御願ひます（千葉縣東葛飾郡福田村三ケ尾内藤秀子）○御懐しき誌友の皆々樣何卒玉章絵葉書の交換を永久にして下さいな切に御願致ます御返事は必らず當地風景の絵葉書て差上ます終りに皆樣の御健康を所る（北海道札幌區大通り四八丁目一番地早崎良子）○草の家秀蘭樣花の東京御返り下さいまして有がたう御坐いました早速御禮申上くべきはづの處御住所不明の爲差上げられません何卒早く御知らせ下され度御願ひ申上げます（越後蒲原郡井戸場山田はぎの）○妾は憐れなもの貝殻のたよりのみを樂みにして居ります何卒寫眞やゑはがき御玉章の交換を永久に願ひます（青森縣三戸郡八戸町字三日町米田としみ）○吾も未だ寒さ身にしみ渡る今日此頃、諸嬢樣方には何の御障りもなく誠に喜ばしい至りです絵葉書の交換も盛に願ひますよ（安房國安房郡田原村字太尾岡部けん子）○妾は始めてお目にかゝりますが下手の熱心でございましてなか／＼はげんでゐるのです、みなさんご交際を願ひまする（下總古河町二丁目長谷川やなぎ）○私の樣な者をとやかく仰せ下るゝのは誠に身にしみて嬉しうございますが私の家庭は厳格で知らぬ男子の方から御手紙を頂きましても御返しする事は出來ません。父母に申しましたら、だから投書はよせと叱られました、私投書をよすならも一何も慰藉はなくなるのですから何卒私を哀とお思召して今後御手紙を下さらぬ樣にお願ひ致します。又他の姉樣方、私は今拙い運命に弄ばれて・・・・。御返しはお許し遊せ（羽後菊池柳子）○妾僅かの小説で本誌第四卷第十八號の本欄へ諸嬢と交換の旨載せましたら本誌發行と共に諸嬢方の申込み、妾まことに驚いてよ、十日ばかりの間に八十七本の玉章「今尚日々三本づゝあり」先着者は幸ひお望みがないましても元より少數なる小説ゆゑあまれく差上げる譯には行かず其旨返信差げましたが中に日附印の爲め住所不明と鉛筆の爲め文面不了解とは遺憾にも差上げる事が出來ません、さぞ／＼お怒りの事は猶更にも御詫いたしますからどうぞ／＼おゆるし遊ばして頂戴私い本欄をお借り申して取あへずお詫びまて（常陸國笠間町在大淵ゆはな子）○妾は奧州の一山三百文と云ふ極片田舎の不爽の者てすが何卒誌友の諸姉樣方よ御見捨てなく御交際を願ますして、妾等地方の姉樣方よ誌友を登山して投書を澤山する事は如何でありますか妾は雅號を窓花と習ひますから御見知りを願上ます（岩代安達和木澤和田對馬代根本富代子）○私

は今月から本誌購讀者となりました皆樣宜しく御交際の程を願ひますよ私は同胞がないのですから皆樣が戀しくつて何卒寫眞や繪葉書を送つて頂戴な乾度返禮致しますよ（磐城國内郷村入山第三坑糧食部鈴木時子）○なつかしき姉さんよ、私は若松の里の片田舍に住む一の女子文壇愛讀者ですよ、以後行末長くお見捨て賜ふなよきつとれ―文の御交際をお願ひますわ‥‥（岩代若松市内六日町一二一番地齋藤三史）○あれ姉さん妾は編物や寫眞や繪葉書や小說本雜誌等の御交換を遊ばせよ、男の方でも女の方でもいゝわあら〳〵かしこ（福島縣若松市中六日町宮原樣にて神戶梅子）○誌友の諸嬢樣よ妾も田舍の愛讀者ですから繪はがきや古雜誌の交換を願ひます返書は直に出しますよ（若狹大飯郡本鄕上下町日還堂内瀨春子投）○記者樣お願ひですから此事を太田樣迄お傳へ下さい。黃紫姉さま私は石狩の小さい町に住む、いつも御作を拜見して懷しむ者の一人でございます。御同情の故ですが誌上の誰方よりも貴女のお名が嬉しいのです―私には―、今迄は皆さまのを拜見するばかりでしたから、今年から私も、投書しやうと思ひ、失禮ですが黃紫姉樣の一端にても、似たいと思ひまして、小黃紫と名づけました、御承諾もえずに‥‥。どうぞやつかいな妹を拾つたと思召して、おゆるし下さい、ですが、投書はしましても、誌上にのるは何時の日ですか。萬一、此少さい名をつけた時に、此事を思ひ出して下さいな。お願ひですから。（石狩小黃紫）○敬愛なる記者樣御始め誌友皆樣には御すこやかにて御加年遊ばされし御事とはるかに祝し奉らせ候。御本年も相變らず御交りの程願ひ上候（埼玉縣秩父郡三田川村近藤登久子）○誌友の姉樣方よ私は片山里に住む淺學のものでございますがどうぞ永久變りなく玉章レターの御交換下さいなどなたでもきつと御返事さし上ますはさよなら（千葉縣印旛郡佐倉町内鏑木榎田咲子）○誌友姉樣方私當地の高等女學校へ通つて居りますのどうぞ御うるはしい御手紙やエハガキの交際を願ひます 小樽稻穗町廣田志津）○皆樣ほんとうにお寒いのね大寄ると障ると寒い〳〵て持ちきりですわ。お變りなくつてどうぞ末長く御交際や繪葉書の交換をお願ひ申ます（上野碓氷郡九十九村大字小日向小板橋靜江子）○誌友の皆々樣よ愚なる妾をもお見捨なく御交際をたれ玉へ御繪葉書等の交換お願ひます「松本名勝繪葉書一組入用のお方は御自製の品物を送つて下さい「八枚一組進呈致します必ず御婦人にかぎりますお寫眞も交換お願ひます男子の方はおことはりです（松本市上横田町二、四四四川上惠子）○御寒さの段皆々樣御變り有りませんか御伺ひ申上升私は上毛赤城のふもとに淋しく本誌を友として居るものです御情ある御方は永久に玉章なりエハガキなり御送り下さい、もし送つて下さいました御方には私宅で作りました果實を御禮として御送りします（群馬縣勢多郡粕川村字膳須藤淺子）○記者樣初め諸姉樣御變りはありませんか（北海道旭川一條通り山本たか子、○御なつかしき皆樣私はなさけある信實の友と御交際致したいと思ひます何卒愚な私をあはれと思召て末長く御交際下さる方あらば一日も早く玉章エハガキを御惠み下さい御返事はきつといたします（上毛群馬縣山田郡大間々町二丁目安藤さとる子）○海外のお方に海外におはすお方にどーぞおん地の御狀況をお知らせをねがひますわ、私も及ばずながら母國の模樣をお知らせ申しますわ（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤文子）○誌友の姉さん方私ね、孤獨の淋しさに趣味あるゑはがき編物の交換をねがひますわ、私は繪葉書狂ですから種類はどんなのでも澤山あるの！使用未使用なんでもいとひませんから、どーぞ花々しく御交換をおねがひよ、御返しは怠りませんわ、男の方でも未使用に限り交換致します、文學雜誌御交換もお願ひよ（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤文子）○女子文壇の皆々樣、私は故鄕を遠きとつ國の空に、淚多く暮して居る、さすらひのひとり身なので御座います、本年九月、本誌愛讀者の一人となつて、未だひと言の御挨拶も申しませんでしたが、今後宜しく御交際下さいます、四十一年十一月廿五日（マニラにて、西村ふみ子）○妾は女子文壇の諸姉樣の習字を蒐集したいのよ、お志のある御方は交換して下さいませんか、字體は隨意で御座います。終りに何々學校卒業とか、何々學校何年級とかを必ず書いて下さいませ。（新潟縣中魚沼郡水澤村、村山德正方令朗子）○誌上の皆樣何卒御交際を―御返事は神かけて‥‥（茨城縣稻敷郡牛久村野島多賀子）○誌友の皆樣わたしは草深き田舍に住むもので每日女子文壇を友として青い淋しい森の中の家に月日を送つて居ります、御慈愛ふかき皆樣あはれとお思召して御交際を願ひます（青森縣三戶郡三戶町下組町六十五須貝すが子）○末長く御交はりを願ひます、先着十名の方に

わたし手製のシナリをさしあげます 但し男子の方は御ことはり申します（羽後平鹿郡角間川町本町五百富田よし子）○おなつかしの姉さんよ、繪葉書交換して頂戴な、きつとね、此頃北海道、さむくつてよ、私しれ、いやになりましわ、御手紙下さつたら情況知らせませう（北海道樺戸郡浦臼村字黄臼内小西ふみ子）○妾しの友は女子文壇の他はありませんのよ、ですから女子文壇と誌友の御姉様方よ、永久繪葉書玉章等の御交換を願ひます（茨城縣猿島郡岡郷村稲宮七死水柳子）○賢明なる誌友の皆様私は片山里に住む不束ものですが今後永く〳〵御交際を願ひます（岩代安達郡渋澤村大字和田字永作根本艶乃）○おなつかしき本誌の諸賢さまよ、私は一夜〳〵を淋しく山村の暗き森の家にて暮すものです、ぜひ繪葉書、寫眞、玉章其他いろ〳〵のものゝ御交換をして下さいまし（群馬縣多野郡美九里大字三本木二六好子）○私はこの頃讀者になつたばかり、よく〳〵の世間見ずですが妹とおもつて末永く御交際を願ひます（山形縣ちう子）○私は本號より誌友の一人となりました、何卒末長く御交際下さい（下野鹿沼吾妻町井上徳蔵方井上飛江子）○あけましてお目出度う、誌友の皆様わたくしは毎日學校に通つて居ります、御返事はいたしますから御交はりを願ひます（千葉縣佐倉町高科才子）○諸姉上様方よ御國の名勝繪葉書交換を願ひますよ但し未使用のもの（羽前南置賜郡南村小山田清野もと子）○私は繪を畫く事が好て毎日繪を習いて居りますから御望の方は申越下さいませ 又不調法の歌玉章並又め手ほどき 裁縫及び 編物手ほどき 婦人世界女學世界女子文壇少女界其他いろ〳〵本が不用です露營の夢と美人繪葉書送つて下さつた方に必ず〳〵御送り申す（北海道天鹽國留萌町北耙念通り三十五番地佐賀入直子）

品物交換

○・・・・地方の方に　地方の御方に御願致します何ぞ御當地の產物を御送り下さいませんか御禮はかならず致します（下谷三輪町六十一細谷鏡子）

○・・・・郵便切手　目下私の手許に内外郵便切手百枚許り御座いますが御望みのお方へ差上げませう尤も同種類のものも澤山あります兎に角一番早く御申込みのお方に差上げませう（仙臺市北六番町一九二原霜峯）

○・・・・寫眞二十七枚　諸姉上様よ編物寫眞エハガキ書の御交換を願ひます私には當地風景と美人エハガキ五百枚ばかりと私しの寫眞二十七枚と其外編物色々小說は十八册ありますから御入用の御方は上等エハガキなり小說寫眞を下さいな（秋田縣河邊郡新富町字愛宕町上の坂藤島さき子）

○皆様方の内に名種草花の種子、お持ちの方は送つて下さいませお禮には雜誌小說繪葉書等にて致します倂妾の許にて草花種子苗いろ〳〵ございますから交換してもよろしゆうございます園藝同好の皆様御交際下さいませ（佐賀縣小城郡小城町田尻貞子）○懐しい皆様よ、妾寫眞大好きて、淋しい日などは誌友面影でも見ますと何んとなく氣が落着く様な心地がします、されば賞讃様、わが心思し召し給はゞ一枚の御寫眞御送り下さりませ、返禮は當地名所の繪葉書で致します（千葉縣君津郡駒山村奥畑高濱春枝）○誌友の皆様、珍らしき編物美しい栞おん惠み下さいな、私も拙きながら上げますわ、寫眞も皆さんの爲に と澤山寫してありますから、どうぞお交換みれがひますわ、私も本誌の敎へを受けて居るものですから決して〳〵不神聖な事は致しませんわ、男子の方は堅くお斷り申します（秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梨澤ふみ子）○二個のハーモニカをおゆづり致します御入用のお方に、ゆづります（鹿兒島縣谷山町四十一、松永優花）○妾のバイオリンか洋琴と他の品物と交換して下さいませんか。其れから編物か何にか御送り下さる方には女學世界か女子文壇を差し上げます。其外東京電車めぐり 水族館唱歌、球庭唱歌、小學校敎科書の唱歌等持つて居りますて御望みのお方に差し上げます（美濃國大垣町竪酒井とみ子）○愛讀者諸姉方妾寫眞と編物が大好よ交換して下さいな送つて下された御方には妾の寫眞と繪葉書と編物の書籍とて返禮します（新潟縣中魚沼郡水澤村新宮村山德正方潮子）○御情の深き誌友諸姉上様よ私は寫眞は大層趣味があゝ様に思ひます何とぞ皆様の中に御寫眞御持の御方は御送り下されませんか御禮には和歌の油入りの繪葉書一組八枚を差上ます先着六名の御方には妾の見苦しいのな御添致します（和歌山縣海草郡紀伊村島居德造方邦子）○風景寫眞交換私しは地方須磨、舞子、明石、市內其他風俗寫眞小板よりカビネ板迄色々持て居りますが諸國の風景、風俗、山岳、河流、野外など

の種類のものと交換して下さいませんか、又未使用の風景繪葉書の交換もおねがひ致します、(神戸市栢通四丁目九十七番地東川艶子)○皆様のお中で美しい、眩突がございましたら妾の、美人寫眞數枚か若しくば美しい相當の繪葉書と交換して頂戴ね(千葉縣君津郡駒山村高濱春子)○情ぶかい誌友の皆樣どしぞ御交際下さいお頼みします妾は寫眞が一番好きなのよ續々お送りを願ます先着七名まては妾の寫眞を添て必ずお返しします其の他は外の物で必ずよ(大分縣速見郡東山香村小原見七二本田一枝)○私は極く田舎の貧家の娘ですが幼い時より親に別れ年老ひた祖父母に育てられまして何一つ世間の事や婦人の道は存知ませず何時も淋しい月日を送つて居ります何卒御慈愛深き諸姉樣方の中で哀と御思し召す方入被しやいますから編物や和歌の交換を願ひます(陸奥國八方町下組丁五十八名久井ふみ)○誌友の皆様如何なる草花にてもよろしゆございますから妾等のと交換して下さいたとへ一種の種子でも交換致しますから何とぞ種子か苗を送り下さい(佐賀縣小城町姪子町田尻殿方女子園藝會内田尻良子森本美代子永田由子)○戀しき誌友の御姉樣何卒寫眞の御交際を願ます御返禮には名物なる絹ハンカチを以て必ずれ羞づかしながら妾の手織のもの(福島縣岩代國伊達郡育木村字堀米三浦ます子)○誌友の諸姉上樣に末永く繪はがき玉章寫眞の御交換を願ます御返事は屹度いたします(名古屋市南區熱田町新富阪六四菊田花子)○誌友の皆樣よ妾は北海の山里に獨り侘しく暮して居るものです、何卒一時的でなく永久に玉章、繪葉書、あみもの、寫眞、押し花、新聞などの交換を願ひます、お返事は屹度いたします(北海道夕張郡登川村炭山市街地第三區冀通り及川兵太郎方伊藤公美子)○親愛なる友よ以後寫眞やリボンの御交換を願ひます(下野平沼町久保町伊勢彦黒川つる子)○諸姉樣、あみ物や、寫眞繪葉書の交換して下さいな、先着八名の方には八景の繪葉書を添へて御返禮いたします(近江滋賀[illegible]坂東村藤田源之助方藤田しげ子)○皆様の御寫眞や、絹ハンカチーフ、地質よき二寸巾のリボン(一尺以上色は十七八歳位)上等の繪葉書三葉、造花術新書、摘み細工新書、ヴワイオリン、ハーモニカーなどお持ちの方は私の新小說、萬は樂、塔上の犯罪、最新女子書簡文、又手製の摘み細工、編物、雜誌など、御交換下さい造花、摘み細工の書、ヴワイオリン、ハーモニカなどお送下さつた方にはわたしの寫眞と繪葉書を添へて御返しします(三重縣鈴鹿郡関町新所福島はつ子)

圖書換讀

○小說と詩集　妾の手許に不如歸、天地有情、金色夜叉、乳姉妹、己が罪、寒風戀風などが不用になつて居りますから夏子、不如歸の歌、金色夜叉の歌、天うつ浪、藤村詩集其他の詩集絹しぼりと御交換下さいまし。(徳島縣勝浦郡八多村湖峯子)

○編物と書物　左の書を、お美しいひぢつき栞りボンえはがき(三枚位)かお寫眞等を下さつた方に限り申込順に依り一部づゝ上げます、但し他の方に發送費の時は其旨御返信致します、先着九名に私の寫眞を添へて、戀や戀、不如歸、二人女王、寒風戀風、文學入門、戀衣、婦人の情力、淡湖、乙女の操、怨の戀、薄命の美人、その他小說雜誌色々ありますわ、(秋田縣山本郡藤琴村太良鑛山梅澤すみれ子)

○露件の出版　姉樣方のおうちで露件の(出版)御持でお座いましたら御ゆづり下さいましな、私の持つて居る本と交換してもよろしうお座います、とうぞ下谷までお知らせ下さいまし(東京市京橋區因幡町十六五十嵐方臼井花子)

○雜誌入用　四十一年八月より十二月迄の女學世界、全じく十一月、十二月の婦人世界の二種の内、一冊でもよろしゆうございます、どんなにいたんで居てもいゝのでおります、御不用のお方がいらつしやいますならば、左記宛に御送り下さい、相當の御禮は必ず致します、先づは御願ひ迄(鹿兒島市鍛冶屋町四一松永優花子)

○誌友の皆樣私の許に美文大觀、國文の資料、婦人の修養、土佐日記、新體女子書翰文、美文スケッチ、數學辭書、女子はがき文、新約全書、讃美歌(英譯)ハーモニカ、外に少女界、女學世界、女子文壇。　婦人世界など不用になつて居ますから皆樣のヴアイオリンの譜、坂先生の習字帖、百海、詩集などと交換して下さい(長崎縣下縣郡嚴原天道磯佐伯ひで子)○諸姉さまの内に小說の古いのが御入用の方は下名へ御知らせ下さい御送しますどうか／＼女の人に限り御願ひ申ます情深い姉樣方どーかうつしゑを送つて頂戴遊上しますかられ(備中小田郡矢城町江木實枝子)○壇友諸姉、世界パノラマ、山光水色花暦千歎萬紅

時事繪葉書此の中にて御所持の分一枚にても二枚にても御送付下さいな、御返葉は（紀念繪葉書風景上等外國製）趣味ある繪葉書にて御返葉いたします（神奈川縣藤澤町堀内普子）○皆さんよ私の許に樋戀録、萬山河、鶏頭、歸郷記、郷土柳子の話、四星籍、女子習字用文、美文製作法、日本文學全書（一二三）新體文範、短文軌範、其他數冊不用になつていますから皆さんの何か面白い本と御交換を願ひます御のぞみの御方は下名迄て一寸御知らせを願ひます其の他私には女子文壇文藝倶樂部日本少年等三十冊ばかりありますから御のぞみの御方は絹しなり、ひぢつき、又は御寫眞等何れにても御惠の方には必ず送ります（秋田縣仙北郡藤木村藤木川越もり子）○本誌愛讀の諸嬢よ私には左の雜誌が不用になつて居り升から諸嬢のリボンにて御申込み下さい先着十名に限り米艦歡迎キヂン繪葉書をそえて差上升但し男子は絕對的不可、江見水蔭氏の小說花守、不如歸の歌、ホトトギス、女鑑、女學世界、文藝倶樂部、婦人世界、少女世界、日本少年、女子文壇其他數十册御座いますからお返禮は必ず致す（神田區三河町二ノ十四田畑様方露葉子）○私の許に少女界、日本家庭、少女世界、少年世界、文藝倶樂部等有りますから皆々様のシチリ寫眞を交換下さいませんか（芝區愛宕町四ノ一岩井房子）○皆様妾は波荒らき銚子の海邊に淋しく暮して居る者てすが九月から文壇の愛讀者になりました。て妾の手元に（冒險怪文庫新海底旅行。夜の女界。社界各面女心解剖。戀の一年有半。大阪榮華物語秋冬二部。其の外。ハイカラ令孃。戀か夢か。夏子。濱子。など色々な雜誌が有りますから誌友の皆様の内にて（乳姉妹）（コブシ）（青春）（呪はれたる女）（天打つ波）お持ちの方は何れても一部てもよろしいから御交換下さい先着三名様には銚子名勝。繪葉書と妾の寫眞添へて送ります必ず僞りは申しません（下總銚子町川向へ東下村梵波管澤田鶴子）○諸嬢様の内に金色夜叉か青春か思出の記露子か他の小說御持の御方は私の手許の不如歸か女學世界か少女世界か鳳子かと御交換して下さいませ（京都市佛光寺寓小路西入齋藤定）○妾の博文館發行の中等學生明治時代論說記事各文範新撰支那國史三同國文問答日本小歷史及讀書作文辭典白蓮白菊斷巖絕壁笹川の日本之將來、諸姉様の言海辭林大町の文集紀行文民友社の國民叢書何なりとも其他文芸の書物と交換して下さい（隱岐國西郷西町九七吉岡なか）○御姉様方の御中に、小公子、不如歸、己が罪、女夫波、乳姉妹、金色夜叉御不用の方はどうぞ御惠み下さいれ御禮には御姓名を英語て入れた名刺入を御送り致します（先着二名）外四名へも美しい名刺入を御送り致しますから名刺を一枚頂戴れ又しなりのよろしい方にはしなりを送ります（岡山市上石井鹽見内秋山菊子）

記者と讀者

○私は未だほんとの十七にもならないものてすそして作る力も何も持たないものなのてす、けれどごく少さい頃から本が大變好きて一日も本なくしてすごす事はてきないのてす、そしていつも何だか作つてみたくて仕方がなく私のかいたものが印刷してあるのをみたく常に欲してゐるのてす、そんなに文學がすきなのてすが文章はよつぽど下手て成績も感心したものてはありませんかつた、てすから御社へ投書しようと思つた事は幾度てありましたらう、がしかし思ばはづかしくつてやめました此頃いろんな事を考へたり餘り何かにつけて感ずるものてすから別紙にあるやうなのをかきました、そして一度試に出してみようと思ひましたので投書してみました、て記者様、私は賞あるが爲めに出すのてなく私のものが印刷されてあるのがみたくてたまらなくて出したのてすから紙數の都合がつきますならば後の方にてものせてそして先生のお考へを書いていたゞきたうございます、文學にあこがる拙き少女の心をあはれと思さば切なるこの願ひをきゝ入れ給へ。（京都、一少女）記者曰、熱心はお言葉に溢れてゐます、必ず有數の投稿家におなりなさるてせう、自分の作が印刷されてみたいと願ふのは誰しもの情て、賞など欲しいと言ふ以上の熱望てせう、何しろ幾萬の方々がそれを見るのてすから、作つたものに取つては嬉しいわけてす、御もつともだと思ひます、それから序に注意いたしますが、此原稿につゞけて「こゝろ」と云ふ文章が書いてありますが、此れは矢張美文なら美文として別の紙に書いて投稿なさつた方が宜しいてせう、誌友倶樂部とか記者に宛てた手紙とかに紛れてしまふといけませんから）○妾しは田舍に產れましたので。地方小學校しか遂ませぬて、不幸にして女學へも入るとか出來ませぬとてしたされど記者様のお陰とも申ますが文壇に諸姉上方の美文論文小說

て昨來以來學問なさしてもらいました。人さまのまれなりとも存じまして鬧紙の作は初めてなのですが。何卒お直しの上文壇上にお掲け下されますれば實に嬉しく存ます（福井縣秀眞喬子）（記者曰、斯ふ云ふ秘類の手紙は幾百通となく參りますが、何れも大抵同じやうで一々は掲げませんが それを見るにつけても記者は諸嬢方が初めの投稿をするにも挨拶を忘れずにいろ〳〵言はれるのがなつかしく、鮐人のやうにも思はないのでございます）○記者様にお尋れいたします、登謀本部で出來た地圖で周防長門の二ヶ國分ら送料共何程で求められますか、又凡そ一枚が何程位いたしますか尋れいたします（山口縣深山谿）（記者曰、参謀本部の地圖は一枚入錢か九錢の定價でした、郵稅は勿論二錢です）○記者様に伺ひます、女で煙草が御飯より好きの人が煙草を止めやうとするのは如何したらいゝでせう、此の觀て敎へて下さい願ひます（下總古河比呂子）（記者曰、サアそれは困りました寧ろ御飯をよして煙草ばかり二三日喫んて居ると何うなるでせう、そこて改心が出來なれけばいたし方がないと云ふものです）○記者様私は未だ十四歳の女てすが讀書と作文が非常に好きてありますす。それて女子文壇は十一の時から愛讀して居りまして此様に字の下手なのもかまわずに投書して居るのであります。此小學校を卒業したら、宅に居て澤山投稿しますから其の時はどうぞよろしく御願ひ申上ます（熊本縣鹿本郡三姿村佐々木みち子）（記者曰、何うぞ學校時代は能く勉强して下さい卒業しても不自由のないやうに）○鍋島てつ子さんに例へば此の二月、五に締切つた原稿は四月一日發行の紙上に掲載されるので、凡て然う云ふ順になつてゐます○諸嬢、大井松江さんに、御地に愛讀者會を催ふさうとの思召、記者は勿論大贊成てす○越後、心配子さんに、原稿紙は神田東松下町四十七愛文堂に賣て居ます、からお問合せなさい○以下の諸嬢より問合せやら御挨拶やら參りましたけれど一々お答は申しません能く拜承しました深川、京子。京都、竹村まき子。德國、一少女。千葉、石井きぬ子。開庭女。岡山、九鬼よし子。神田、水口ふじ子。北海道。越智ますみ。石渡敬子。初枝子。四山すゞ子。香川、森以宸代子。竹子。水口志津子。ひとし子。大家久諸江。越後、横山文枝。栃木、小林八重子。青森、つきしろ子。佐藤かつ子。信濃、宍さがし女。四多殿、よれ子。赤蜻子。下野、井上龜江。山形、ちう子。深川、長谷川せん子。伊豫、浮草。北海道、薇子。羽前、橋本いつ子。藤村たく江。田村孝壽子。白梅女。とか子。澁谷、ふゆ子。福田たか子。福岡、玉谷邦子。新潟、高岡さを子。北の國、すみえ。俊江。深川、村瀬ひさ子。濱邊、上田光子。秀子。以上（記者）

讀者通信

○越後より　越後は雪國名高い處てす本年はあまり無ようてす例年ならば火桶の上て雛などすつたものてすが本年はまだそんな事はなりませんが硯の水だけは氷つて困りますのよ（貞子）

○京城より　お目出たう御座います、今年のお正月は大變あつたかでありました今までにこんなあつたかい事はなかつたつて「よぼ」たちが申して居ます、ホヽ「よぼ」つて御わかりになりますか、朝鮮語なの、朝鮮人一般の男子を京城の日本人は「よぼ」と呼んて居ますのよ（ちゑ）

▲盛んに讀者通信を請ふ▼

個人消息

○秋山欣子　郷里の常陸石岡に住むことゝなれり友人の方にお知らせします

○黑田しげ子　昨年七月の誌友面影に出たる遠江黑田しげ子孃は十一月十五日病死せり行年十八歳、妹りき子孃は十四歳にて村の小學に通學中、住所は靜岡縣小笠郡中田村なれば篤志の方は慰問されたし（同村清子報）

○高木霞子　上總の高瀬霞子は高瀨春枝と改名せり

問合せ

○尾崎ふく子様　貴女は今尚に御寄してすか姉妹の契まて結んだ仲てすがお便りを待つてゐます私は立敎女學校の三年に學んてゐますから御安心下さい（京橋區南槇町一番地岡本英枝子）

○松尾いく子様　青森縣三戸の方てございます御所が分りませんから本欄て伺ひます（上毛本町郵便區内伏島直子）

○初澤さく子様　本誌小說三面記者作者初澤きく子様は眞壁郡若柳村の方てありませんか伺ひます（常陸下館町那賀子）

雜報

婦人界消息

○梨本宮妃御發程　梨本宮妃殿下には御豫定の通り御見學を兼れて御滯佛中の宮殿下と歐米御漫遊の筈にて十三日午前十時新橋發にて横濱に向はせられました。殿下には御洋裝の上に濃鼠色の外套を召させ御隨行の櫻井工學博士夫人と共に停車場に成らせ遊ばすと停車場には伏見大將宮殿下、閑院中將宮殿下、久邇宮、北白川宮、朝香宮各殿下各宮妃殿下華族文武官以下約六百名のお見送りがありました、横濱まで御令伴の妃殿下外數十名と共に折柄の吹雪の中を右手に濃緑色の洋傘を翳し左手に御裳高く褰げさせ甲斐々々しく埠頭に歩を運ばせ給ひ賀茂丸に御乘船に成りました、船は正午十二時吹雪の海を蹴て壯ある航程に上りました。

○明治女學校の廢校　東京府下巣鴨にある明治女學校は我國で最も古き私立女學校で最初の創設者木村鐙子氏の逝去に次ぎ女學雜誌等にて有名な巖本善治氏專ら經營し多年基督教主義の下に幾多の才媛淑女を養成しましたが其後巖本氏の手を離れ後任呉久美子女史其他頻りに盡力せられたが校長の病氣や種々の困難で維持の道なく今回廢校の運命に陷つたさうです、仝校は前後廿年間に大塚文學博士夫人楠緒子、佐々木信綱夫人雪子、羽仁もと子、岸本柳子、野上八重子の閨秀作家其他名家夫人の才媛を出した學校であるのに惜しみても餘りある事です。

○世界の美人投票　昨年北米市俄古市のトリビユーン新聞社といふのが世界の新聞社に委囑して世界一の美人投票を行なつた事があつて、日本では時事新報が代表しましたが、此程發表したる結果は左の通りです、是れで見ると日本の末弘ひろ子孃(現野津夫人)は第六位です。

△第一位 北米合衆國マクエライト、フンー孃△第二位 加奈太バイオレツト、フツド孃△第三位 瑞典國ゼーン、ランドストム孃△第四位 英吉利アイビー、リリアン、クローズ孃△第五位 西班牙セーリダ、ドナ、ハース孃△第六位日本末弘ひろ子孃△第七位 諾威ケート、ホーウキント△第八位 蘇格蘭ネツチー、チヤドツク孃△第九位 アイルランドダビン、ホワー夫人

○奈良女子高等師範學校　は愈々來る四月開校と確定、追々專修科、研究科、選科等を增設し保姆養成所等も附設する筈になつて定員は三百名ですが、今回の分は各科生徒廿五名宛合計七十五名を入學せしむる由であります。

文科　倫理、教育學、國語漢文、地理、歴史音樂、體操

理科　倫理、教育學、外國語、數學、物理、化學、博物、音樂、體操

技藝科　倫理、教育學、外國語、物理及化學家事、裁縫及手藝、圖畫及圖案、音樂體操

○杜伯令孃來遊の風説　露國の貴族文豪てあつて今は農民生活をなして居るトルストイ伯は來五月頃其愛孃を我邦に來遊せしむべしとの事てあります、豫て度々風説のあつた令息の漫遊と一緒かも知れません。

各夫人の遊藝

▲佐竹侯爵夫人　は德大寺侯爵の三女で祚子(卅八)と云ひ入輿後六男一女の子福者である嗜好は和歌、茶道、挿花等で何の道にも優れて居るとの評判高いが殊に茶と花は千松庵の高弟で其道の名人に數へらる。

▲内藤賴輔子夫人　は故大河内輝聲子の二女で桂子(廿七)と云ひ御茶の水女學校出身で和歌と書道に達し佐々木信綱氏門下拔群の好成績のある夫人である。

▲眞田幸正伯夫人　は松平賴永子の長女で澄子(卅八)と云ひ華族女學校出身で御子さんが三人ある嗜好は繪畫、音樂で繪畫は竹村耕靄女史が毎週一回參邸し琴は上田萬鶴惠女史に學

んて居る。

▲秋元興朝子夫人　は故南部利剛伯の三女て宗子(四十四)と云ひ 母は水戸烈公の女の明子とて有名な賢婦人てある夫人は 和歌を明子夫人に英語をテニンケ氏に琴を山勢松韻に學び 殊に其技に優れて熱心てあるが 神田婦人會の會長として良人の子爵と共に社會事業に盡力 される

▲津輕行雅子夫人　は津輕承昭伯の 長女て理喜子(二十五)と云明治 才媛の一人と稱へらる良人子爵ほ八ッ年下て未法科大學生なので夫人も今猶は學門技藝を研究して居るが 天性の多能多藝て齋藤達氏に漢詩を鏑久子 駿正臣に和歌を中林清淑及び南香女史水澤繊子に 繪畵を丸島藤子に琴を學んて居るが何れとして 成績の好く無いものは無いと云ふ

▲溝口直正伯夫人　は故分部光員氏の 長女て久爾子(五十)と云ひ和歌を寺田政成氏に 茶を佐藤雄琢氏に學んて居るが一殊に歌道に達して居る其の近作の一つと云ふに

よそながら聞くものとけし萬代に
吹きもつたへん庭の松風

▲細川護成侯夫人　は戸田氏共伯の 長女て孝子(廿三)と云ひ殊の外和歌と園藝を 嗜んて歌の師は跡見花蹊女史と池邊義象氏 二三年前からは根岸澄江女史を迎へて詠草の數も 多い倦めば花壇に水を注ぎ咲き微る草花の出來映に 心を慰めて居る

▲小笠原長幹伯夫人　は阿部正桓伯の長女て貞子(廿二)と云ひ卅八年四月入輿後 二女を擧げた暇ある毎の樂みは琴と繪畵て中にも 琴は山登萬和の高弟て其の奥儀に入り 丹青は根岸の狩野某の門て頗る見事なるものてあると云ふ

▲大久保忠一子夫人　は故本宗宗武子の五女て名は峰子(卅一)子爵との間に 三男三女を持つて居る謠曲に能樂が何よりの好みて 觀世濟靡氏の高弟●田某が師匠を勤め家庭の 務めの暇には 裳 袴のトントンと足踏の音も輕く 能樂の稽古に餘念も無い

華族の夫人及び令孃達は如何なるものが 好きか如何なる生活をして居らるゝか 聞くがまゝを書いて見やう

▲山内侯爵夫人　は伏見宮貞愛親王第一女禎子姫てあるが目下佛國に在りて 巴里の閑靜なる處に一家を借受け 良人豐景氏と共に歐洲的生活をして居らるゝ夫人の嗜好は 音樂と語學て音樂は曾て琴を山田流の馬場美勢子に 洋樂を奥好儀に學ばれたが巴里に行つてからは 同地て有名な教師を得てヒヤノ、バイオリンを修め 餘程上達した又語學は日本にてウホルフ夫人に 佛國語を學んだが渡航後之を實地に應用し 近時大に熟達したる由にて巴里ては交際社會の花 と敬はれて居らるゝ

▲大河内子爵夫人　は德川慶喜公の 第八女て國子と云ひ良人輝耕子に嫁したのは 三十四年の五月て未だ子がないので今猶 佐々木信綱氏に通學し和歌及び和文を修め 熊谷直彥馬杉背畹の二氏に就て繪畵を修め納所辨次郎氏に 就いてバイオリンを修め自から慰めて居る

▲松平唐民子夫人　は松平定安子 第四女て八百子と云ひ十二年四月入輿後 五男八女を擧げ子福長者てある夫人は漢學を 元大審院判事の昌谷千里に英學をホイトニー夫人に習ひ 頗ろ學力に富んて居る 又琴を鳥居トナミ子に學び堪能の聞えが高い

▲戸田伯爵夫人　は故岩倉具視公の長女て極子と云ひ一男三女を擧げたが男の子は 十四歳にて夭折し長女孝子は 細川侯爵に嫁し次女米子には氏秀氏を養子とし三女幸子は 松平直平子に嫁した夫人は曾て良人氏共伯と共に 歐洲にあつた丈けに獨佛兩國語を善くし 交際には巧みてある伯爵が式部官て交際場裡の人てあるから 夫人も交際に忙しく菊の花の開く頃から 櫻の花の盛り頃までは外國使臣 夫妻との往復頻繁て三臺の馬車と五頭の馬は殆んど毎日休む 暇もないほどてある

文部大臣の招待

小松原文部大臣は去る十九日午後五時其官邸に現代の文學者を招待した、招待された文士は多く評論家の側て、以前西園寺侯の時のやうに作家は多く交つてゐない、此度の招待は或は文藝院設立の下ごしらへだとも云ひ、或は風紀取締の打合せの爲だとも云ひ、諸説區々であつたが要するに其等何れの事もあつたらしい、而して此會合が只晩餐を共にして歡を交したと云ふに止まらず、將來何か意味ある結果が見られるだらうと云ふことは信じられさうだ、當日の出席者は左の如し

△文學者　芳賀矢一、幸田成友(露伴)、夏目金之助(漱石)、島村瀧太郎(抱月)、上田万年上田敏、巖谷季雄(小波)、森林太郎(鷗外)、塚原靖(澁柿園)

△官僚　平田内相、岡田文部次官、一木内務次官、床次地方局長、福原專門學務局長、松村普通學務局長、赤司秘書官

○文壇愛嬌錄

△小說家生田葵山君は目下病を相州鎌倉なる新夫人の實家に養ふて居るが夫人の里は謂ゆる富裕家ださうだ、其舅父に當る人が葵山君に向ひ小說などを作つて居ると一ヶ月若干の收入になるものかと聞いた、君先づ百五六十圓てせうと答へた、舅父は只たそれ位か、小說家もつまらないものじやれと言つたので葵山君聊か恐縮したと云ふ風の便りがあつた、それからぬか此頃君の作を暫く見ない▲岩野泡鳴君のお父樣は下宿屋を營んで居たが昨年亡くなられたので泡鳴君が當分其代りをして居ると何しろ世に聞えた文士と云ふので下宿人達も普通の下宿屋の主人とは同視せず、顏でも合すと叮重にお辭儀すると云ふ話だ▲若い人達に其名を知られてゐる鮫島大浪君は大の猫好で寸時も猫を放したことはない、聞く處に依ると二十四位なら家に養ふて置いても關はないと云ふ事だ、君或る時腹を病んで何かて暖めやうとしたが蒟蒻も臆劫だし幸ひ手近の猫を取つて三匹ばかり腹の上へ乘せて寢ると病氣は全然治癒つたさうだ▲醉ふと氣焔と罵倒で持切るが、醒めると善人となる兒玉花外氏、近頃も去る友人の家で大いに飲んで其處を出たのは夜の十二時過ぎてあつた、辻待の車に飛乘つたまでは好いが、それからさきは前後不覺、未だ飲む積りて友人の家を片端から叩き起したものと見える、夜明の四時頃まで東京市中を車て乘廻し、何處も起きてくれぬので漸く自分の家を發見して歸つた頃は、醉も少しは醒めて居たらしい、車代三圓を請求せられてウン持つて行けと渡して遣つたが、後になつて考へて見ると隨分馬鹿らしいので、友人に向ふたび僕はもう禁酒する

記者より

本誌増刊 **新美文** は着々と編輯を進行させ豫定の如く今や半月の後ちに諸嬢の机上に具へられる運びとなりました、美文は非常に多數に參りましたから揭載される數も多くなりました、小說詩歌にもなか〳〵傑作があります、年一年と諸嬢の文學の進み工合を見るには此の増刊を讀むに限ります。皆之れ最近の努力、新しい粧ひです、幸ひに發行の日を待つて愛讀なたまへ

餘興課題　隣

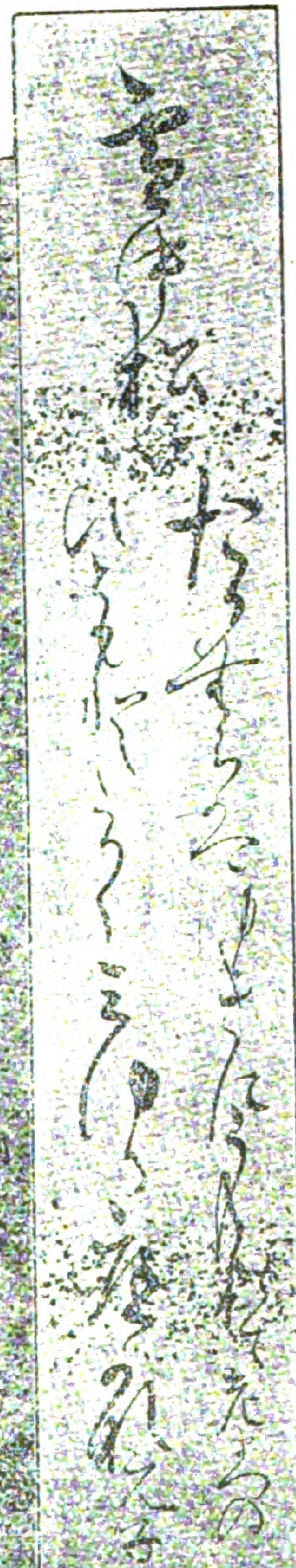
次の餘興の課題は隣りのことを書くのです、少しばかり解題を試みると

▲隣とは向ふ三軒兩隣りのことも含む必ずしも兩隣りと限らぬ▲隣までは一里半もあると云ふやうな山中の一つ家なら矢張其隣りの遠いことや又は隣りの無いことも書く▲隣りの家庭、職業、人物何てもよし、但し成るべく面白い興味のある處を捉えること別に一々例を擧げません只隣のことてさへあればよろしいのです▲原稿は十六字詰十行内外▲「餘興」の二字を書添えること▲しめきり本月十五日

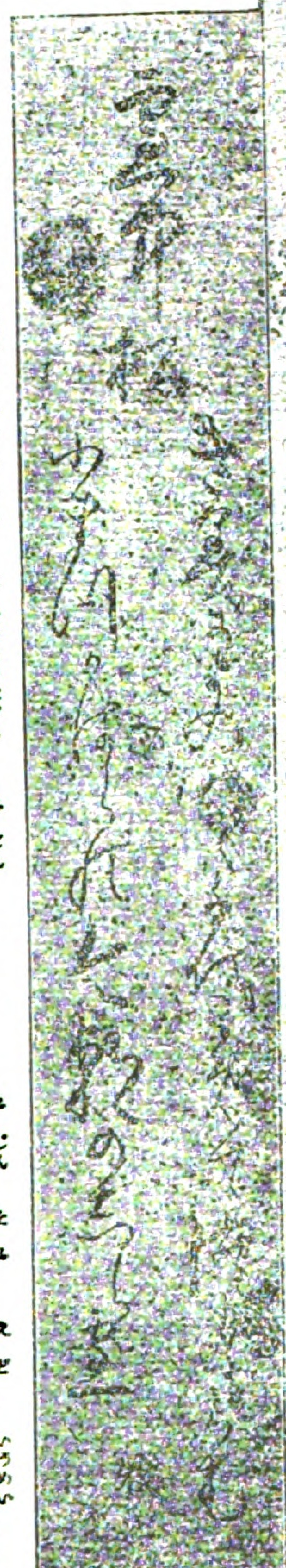
柴田元子

（略歴）

柴田元子嬢は小石川區小日向臺町藥學博士柴田承桂氏の次女て今年廿三歳の春を迎へられました、華族女學校卒業後學習院女學部にて國語を專修し昨年三月卒業になりましたが敷島の道は幼少より好きて下田歌子女史に學ばれたさうてす、父兄一門皆學界に貢献する方てあつて猶傍ら同じく斯道にも御熱心て一昨年は父承桂氏が預選の榮を荷はれたのてあります。



柴田元子筆蹟



江崎牧子筆蹟

江崎牧子

（略歴）

江崎牧子氏は宮内省御料局技師江崎政忠氏の夫人てあります、夫人の祖父は江戸て有名だつた昌平黌教授て幕末名高かつた乙骨耐軒と云ふ方て明治初年の英語學者として知られた父乙骨太郎乙翁は猶健在てす、夫人は此人々の系統を承けて明治三年に生れお茶の水女學校を卒業の後故中島歌子女史に和歌を學ばれたさうてす此方の弟妹も學者又は學者の夫人てあります。

新刊

○回想記

小杉天外著

小杉天外氏は長篇小說の作が多くて短篇ものは少いやうに思ふて居ましたが、それでも集めてみると一册になつて居ます、「校長の二子」と云ふのが比較的長く其他回想記、ひな歌、晴小袖など七篇ばかり集めてあります、小說としては校長の二子が面白いやうですし、著者を知るは回想記など興味があるやうです、天外びいきの讀者には見逃すことの出來ない書物です（定價一圓、讀賣新聞社發行）

○響

水野葉舟著

水野葉舟氏の作を見ると、氏は多感多情の人で見る處、觸るゝ處のものに感じるやうです、今の作家の中で感じと云ふことを能く表はす人はと云へば水野君など其主なるものでせう、感じ易く動き易いのは青春の人の毎で、段々人は刺戟に馴致されますが君は純乎たる詩人肌の人ですから、謂はゞ「響」のやうな小品も出來るのでせう、響の中の「霰」を讀むと獨歩の武藏野を嗜いたこと思ひ出す、何か然う云ふ聯想が起ります、勿論ものは違ひます、色も香もずつと現代風ですけれど態度が似てゐるのでせう、兎に角「響」は散文のむきな人にも、詩の好きな人にも乾度ポケット（婦人なら袂でせう）から離すことの出來ない小册子でせう（定價三十五錢、飯田町新潮社發行）

○半生

中村星湖著

「親」以下十一篇の短篇小說を收む、君も未だ半生の峠を越えたばかりださうですから前途ある作家たることは云ふまでもありませんが、元來時流を趁はず、超然たる作風で、一寸人の眼を聳たゝしめるやうな點には行きませんが、何れも之れもしんみりとした用意の深い作だと云ふとは分ります（定價五十錢、早稻田文學社發行）

○チエホフ傑作集

瀬沼夏葉譯

チエホフと云ふのは露西亞の作家です、諷刺的な、皮肉な作が多いやうです、滑稽めいたものもあります、滑稽にせよ諷刺にせよ日本人のやうに輕はずみな事はない、實に鋭い針で刺されるやうなきつい處があります、女史の譯筆も實にうまいものです、本誌にも屢々出ましたから諸君は御存知のことゝ思ひます、今傑作十三篇を集め美くしい四六版の本になつて世に出ました（定價九十錢、獅子吼書房發行）

○春

島崎藤村著

今更「春」を批評するでもありますまい、破戒に次いで氏の傑作として文壇に重きを爲したは勿論、其評判も天下に遍きものです、茲に一本を寄贈された著者の厚意を謝して擱きます（定價九十錢、上田屋發行）

○俗曲評釋

佐々醒雪著

佐々醒雪氏は德川文學の通人で、殊に歌曲に通曉してゐるだけに此種の評釋家としては一寸外に類が少いのです、一册は箏唄の卷で、一册は江戸長唄の卷です、箏唄の注釋書などは明治になつてから殆んど見ませんでしたが甚だ重寶だと思ひます、箏唄の卷は古曲の裏組、表組、新曲、及び長唄に部分し江戸長唄の卷は三番叟、道成寺、石橋など能く行はれる長唄數十曲を收めてあります、假令は箏を習ひ、長唄を稽古するにしても其詞は無意味に繰返されて居る方が多いやうに思ひます、此等の書物に據りて歌の意味を知り、出所がわきまへて居て歌うたなら一層其味の深い事だらうと思ひます、繪入美本二册（定價各六十錢、神田小川町忠文舍發行）

○お伽十二時

巖谷小波著

お伽十二時は十二種のお伽噺が集めてあるから然う云ふのです、何れも面白いお話ばかりです、別に附錄としてお伽口演極樂鳥、石牡丹の二つが添えてあります、四角な形の本で、繪は久保田米僊、林幾の好い本です（定價八十五錢、佐久良書房發行）

寫眞懸請

諸友諸嬢にお望みいたします、本誌**愛讀者の面影**を紙上で紹介致したいと思ひますから、從來の如く盛んに御寫眞の寄送を願ひます、お一人の寫眞に限りません、愛讀者の方々が時々催される**小集の紀念**に撮つた寫眞など最興味があらうと存じます、或は二三人連れでお友達同士お寫しになつたのも歡迎致します、女子の雜誌ですから**家族の寫眞**も家族でも女子の方が多く寫つて居るのを希望しますが、結構です、なほ**お子様達**の寫眞も好いのです、又可愛らしい人物以外には各地の**名所**、**風景又は風俗**寫眞も勿論掲載致します、風景などは成べく餘り世間に紹介されて居ない新しい場所が好いのです、以上凡て『**乞返送**』と書添えて下さいますれば、用濟次第直ぐ御返し致します、何卒貸與を懇請します、且人物風俗其他何れの寫眞にても、奇拔にして餘り世間に類の無い好い寫眞でしたら**相當の報酬**を差上ろるをになつて居りますから、其邊の所も御承知置きを願ひます。

▲投稿締切日　凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇投稿各種 懸賞定額（四十二年一月より改正）

▲特別賞金五圓（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲甲種（短篇小說、美文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謠、敎への庭、少女文壇 圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◎各種とも金壹圓以上の價格の當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◎賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲毎月一回（一月定期發行）
- 一冊（一回分）定價金拾五錢：郵税一錢五厘：計金拾六錢五厘
- 三冊（三月分）同前金四拾三錢五厘：同四錢五厘：計金四拾八錢
- 六冊（半年分）同前金八拾四錢：同九錢：計金九拾三錢
- 十二冊（壹年分）同前金壹圓五拾六錢：同拾八錢：計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）
- 一冊（一回分）定價金貳拾錢：郵税一錢五厘：計金貳拾一錢五厘
- 二冊（半年分）同前金三拾八錢：同三錢：計金四拾壹錢
- 四冊（壹年分）同前金七拾貳錢：同六錢：計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部　▲十六回
- 四冊（三月分）定價金六拾三錢五厘：郵税六錢：計金六拾九錢五厘
- 八冊（半年分）同前金壹圓二拾二錢：同拾貳錢：計金壹圓三拾四錢
- 十六冊（壹年分）同前金貳圓三拾八錢：同二拾四錢：計金貳圓六拾二錢

▼申込注意
振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料増すと、郵便爲替は本材木町局、郵便切手代用は必ず壹割増（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

明治四十二年一月廿九日印刷
明治四十二年二月一日發行

改正定價 金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

最新式月經帶　月の帶

効用

◎月經時に使用すれば如何程强い月經も漏出する事なく又各種の生殖器病を豫防し往來、運動起居等婦人の動作を快活ならしむるを以て貴婦人令孃教員事務員女學生看護婦女藝人等には缺く可らざる品也

◎赤白帶下の强き人、子宮病を惱める人等には最も妙也

◎初めて月經になりし令孃に頗る適當

◎俗に冷え性と唱へる婦人常に用ゐて腰を温め子宮病を豫防するの効があります

◎殊に月の帶は其製造の親切なるを以て極めて堅牢なれば長く使用し得らるべし

改正定價（特製品金一圓五十錢、甲種金一圓（附屬品添）乙種金七十五錢送料各八錢）一ダース以上は特に勉强すべし

△送金は郵便爲替郵券代用は必ず一割增

發賣　醫療藥品器械勉强店　東京神田猿樂町二丁目　資生堂藥局

村井弦齋先生曰く有名の山田逸子が歐羅巴に行き幾多月經帶を調査し日本婦人に適する樣改良を施し新に製造したる『月の帶』は私共の家族が用ゐて居ますが至極輕く腰の工合も自由で大層都合が良いです云々

元大阪府立病院産科婦人科醫長**伊庭醫學士**は、本品の婦人衛生に適し且必要なることを婦人世界に汎く紹介され

報知新聞曰く『月の帶』は産婆山田逸子が西洋婦人の用ゆる月經帶を我邦婦人に適する樣改良を施したるものにて日常之を用れば各種の生殖器病を豫防する故月經時の活動に最適當也

婦人世界雜報は殆んど毎號其記事欄婦人衛生問答欄及各通信欄内に於て本品の衛生經濟に大稗益あることを賞贊し汎く紹介せられたり

其他明治の家庭、女子文壇等に於て頗る好評を博し**宮中、御殿**各貴顯紳士の家庭は勿論殊に近時**各女學校**に採用され多くの**御用命**を蒙るの**名譽**を得たり